

914.45-Sa66a7  
1200500757590

914.45  
SA66a  
2



始





84  
七

914.45  
SA66a



野佐  
徒然  
草新講





655-75

序

私は前に——昭和七年「徒然草講義」といふものを出しました。これは上下二巻より成り、二巻を合せると紙数は千五百頁を越えるものであります。これまで世に出た徒然草の講義の中では、恐らく最も大きく、又最もくはしいものであらうと思ひます。お読み下さつた方々からは、之に對し、いろ／＼御鄭重な感謝や稱讚のお言葉をいただきましたが、しかし又一方には、是非買ひたいと思ふけれども、少し大き過ぎるから、今少し内容を簡略にし、一冊として、定價も安くして貰へまいかといふ御希望も耳にしました。發行者の藤井君も、元來儲けるよりは寧ろ世の中の爲になることを第一と考へる男ですから、さういふ希望者の爲、今一種小さいものをこしらへてくれといひます。そこで前の「講義」の中から、面倒な考證や語句の使用例などを省き、主要な部分だけを抜集めたのが、即ちこの「新講」であります。

最初發行者は、内容を「講義」の三分の一くらゐに減じてくれといひましたが、やつて見ると、なか／＼さうは行きません。嘗て或學者は、本屋に原稿を渡す際に、「もうこれ以上は引延ばせんがな」といつたといふ話を聞きましたが、私はちやうどそれとは反對で、「これ以上は縮ら

序

一



ない」と申しました。で、已むを得ませんから、活字を小さくし、出来るだけ多くの字數をつめ込んで、紙數をへらすことにしました。随つて、本文講義の部分だけでは、六百頁くらゐですが、それでも、從來世に出た、どの徒然草註釋書よりもくはしからうと思ひます。

それから一つお断りしておきたい事があります。本書の中には、從來の説とは違つたものが随分あります。違つて居るのは、すべて自分の言ふ所が正しいのだとは申しませんが、しかし從來の説と違つて居るから間違だらうといふ風に早合點をされても困ります。若しこの書の説明だけで、合點の行かない場合には、どうか、御苦勞でも、一度講義の方を御覽願ひたいと思ひます。さうすれば、從來の徒然草註釋書といふものが、案外無責任、無價値なものであるといふ事もお分りになりませう。

昭和九年五月

著者誌

## 凡例

一、本書の本文は、古來最も廣く行はれた徒然草文段抄によりました。但し假名遣は、中古以前の所謂歴史的假名遣によつて改め、漢字における送假名も、大體今日普通に行はれて居る例によつて補ひました。又餘り假名ばかりが続いて讀みにくい處は、その幾分を適當と思はれる漢字に書變へました。なほ本による語句の異同については、参考の爲、語釋の中に書いておきました。

二、本文中の漢字に附けた振假名は、大體文段抄によつたのですが、中には著者の意見によつて改めたものもあります。しかしさういふ場合には、大抵語釋の中に、その理由を述べ、讀み方一つにしても輕々しくはしませんでした。

三、本書は、序文に書いた通り、前に出した徒然草講義の中から、主要な部分を抜集めたものではありませんが、しかし、漫然と字を消して行つただけのものではありません。何分前には、時間に餘裕が無かつた爲に、うっかりして書きそこなつた所や、又校正の際見落した所などもありましたが、さういふ點は、今度出来るだけ修正しました。

四、語釋の中に「正徹本」とか「壽命院抄」とか書いてあるのは、徒然草に關する本の名前ですが、それについては、解題の中に説明がありますから、それを御覽下さい。

五、卷末に附した索引は、語釋中の語句について作つたものです。



野佐 徒然草 新講



退屈なのに  
まかせて、終日筆  
を執つて、それか  
らそれと心に浮ん  
で来るつまらぬ事  
を、これといふあ  
てもなく書きつけ  
て行くと、何だか  
どうも狂氣(キチ  
ガヒ)じみたやう  
な気がする。

あつたわけではなく、たゞ隠遁生活の暇つぶしに、次々と心に浮んで来るよしなしごとを書いたに過ぎないといふことを、劈頭先づ斷つて居るのである。

【つれづれなるまゝに】「つれづれ」は、「徒然」の字をあてる語で、これといふ仕事もなく、暇で退屈なことをいふ。「まゝに」は、事のなりゆく通りにまかせるといふ意で、「なるに任せて」「につれて」「によつて」といつたやうな意味を表はす。つまりこれといふ仕事もなく、極暇で、何となく物寂しいやうな気がするもので、つい筆を執つてといふ事になる。源氏物語(須磨)に「つれづれなるまゝに、いろ／＼の紙をつぎつゝ手習をしたまふ。」「日ぐらし硯にむかひて」「日ぐらし」は、終日。硯にむかひては、「筆を執りて」といふと同意。風雅集(巻)に、「いづとなく硯にむかふ手習よ人にいふべき思ひならねば」といふ歌がある。【心にうつりゆく】それからそれと次々に心に浮んで来るといふ意で、この「うつる」は「移る」である。「映る」ではない。【よしなしごと】「よし」は理由、

【序】 つれづれなるまゝに



由來、由緒などの意。随つてこれは何のわけもない事、即ち無意義な事。今の俗語でいへば、つまらぬ事、くだらぬ事。「そこはかとなく」何といふきまつた事もなく。即ちどういふ事を書かうと別にきまつた考もなくの意である。そこ「か」となくの使ひ方は、左の例によつて見れば分るであらう。源氏物語(帯木)に「風涼しくて、そこはかとなき風の聲々聞え、螢繁く飛びまがひてをかしき程なり。」新古今集(冬)に「神無月風に紅葉の散る時はそこはかとなく物ぞ悲しき。」【書きつくれば】書いて行くとの意。【あやしうこそものぐるほしけれ】「あやしう」は、變に。自分ながら、何だか變に思はれるといふ意。「ものぐるほし」は、狂氣じみて居る。變てこな事はかり書いて行くので、自分ながらどうも變に狂氣じみて居るやうな氣がするといふので、これは勿論壽命院抄にいへる通り、謙退の辭である。

この一段は前にも言ふ通り、徒然草全體の序ともいふべきものであるが、元來は「序」とも「序段」とも書いてなかつたのである。この序とか何段とかいふ事は後の學者が便宜上附けたのである。随つて段の分け方、數へ方も本によつて多少違つて居る。さて徒然草の先輩ともいふべき枕草子は、いきなり「春は曙」と始めて、序文めいたものなどは全くなく、最後に至つて、漸く「物ぐらうなりて、文字も書かれずなりたり。筆も使ひはてて、これを書きはてばや。この草子は、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなく人のため、便なきいひすじなどしつべき所々もあれば、ようかくしたりと思ふを、心よ、外にこそもり出でにけれ云々」として、大體其の書の成り立ちを書いて居る。いかにも率直な書き方で、實際その人に就つたものでも、江戸時代の花月草紙などは、先づ最初に花と月との事を書き、最後に花月の遊を書いて、而もそれに教訓を含めて居る、いかにもわざとらしい書き方である。この徒然草は勿論それほどではないが、その天真爛漫な點に於ては、到底枕草子とは比較にならない。それは、これからだん／＼言ふ所によつても分らうと思ふが、とにかくも或型を作つて、それにあてはめようとする所が確にある。この最初の書出なども、やはりそれで、先づ最初に「つれづれなるまゝに」といつたやうな事を書いて、それによつて筆を起し、之に續いて平生自分の頭に

ある人事に關する問題などを書いたのであらう。この序段を最初に書いたものとしては、「書きつくれば、ものぐるほし」といふ意味がはつきり分らず、随つて沼波瓊香氏(徒然草講話)などのやうに、それを書いた「時」を問題として、「暫く書いて行つて見て、その書了つた所を顧みて、自ら評した」言葉などといふ説も出るのであるが、古人はさう嚴密に物を考へるものではない。近頃の人はとかく入學試験の問題を解釋するやうな心持で古人の書いたものを見るが、總べてをさういふ風に見れば、書いた本人にも分らない事が出来るであらう。

いでや、この世に生れては、ねがはしかるべき事こそおほかめれ。みかどの御位は、いともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞ、やんごとなき。一の人の御有様はさらなり、なご人も、舍人などたまはるきはは、ゆゝしと見ゆ。其の子、うまごまでは、はぶれにたれど、猶なまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつ、時にあひ、したりがほなるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

最初にある「いでや……おほかめれ」は、この一段の序と見るべきもの、さうして一面には勅の序。よいよ本文に入る移り變りの所として、「いでや」を以て兩者の間の關係がすかにつながれて居る。では、吾人の願はしいものとして先づ高位高官を擧げたのであるが、その中帝の御位と皇族の御位、殊なものであるから、別問題として、人臣として望み得べき範圍の中では、攝政・關白が第一、次

【1】「いでや」の世に生れては

さてこの世に人間と生れて來ては、あゝもありたい、かうもありたい、いろいろ願はしい事が澤山あるやうだが、その中、天皇の御位は、申すも誠に畏れ多いこと、又皇族方と申しても、その御末々まで、人間の種ならぬものであるから、これ亦特殊な尊いもので、人臣の望む



べき限ではない。人臣として望み得べきものの中では、攝政關白の御有様の立派なことはいふまでもない。それ以下の普通の貴族でも、朝廷から隨身などを賜はる身分は、たいしたものやうに思はれる。此等の家柄ではその子や孫の代までは、たとひおちぶれてしまつても、やはり上品で奥ゆかしい所がある。併しそれ以下の所は、その身分々々によつて時を得て出世し、得意然たる者も、本人は大變えらいものだと思つて居るかも知れないが、人から見ればつまらない。

つても、舍人などを賜はる身分はよいといふのである。しかしそれ以下の身分になつては、もうを得て威張つて居ても、要するに自分だけの得意であつて、人から見れば、つまらない。とこゝろや「舍人などたまはるきは」といふのも、實は、當時にあつては一種の特殊階級で、普通人間から、要するに官位を望むは愚であるといふことになる。

【いでや】この語は普通「いやもう」と譯して居るが、此所は、それほど強い意味ではなく、要するに言葉を改めて説き起すに用ゐたもので、大體「さて」又は「さて」といふに同じであらう。但し此所では多少威張つて居るものと見てよからう。【おがはしかるべき事】あゝもありたい、かうもありたいと、願ひ思ふこと。【おほかめれ】澤山あるやうである。【いとまかしこし】甚だ畏れ多い。申すも誠に勿體ない次第である。【竹の園生】皇族のこと。史記、梁孝王世家に「於是孝王築東苑三百餘里。」此所に多くの竹を植ゑたので、時人が之を梁孝王の竹園といつたといふ。この故事から出たのであるが、つまり孝王は前漢孝文帝の子であるから、「竹園」といふ語を以て天子の子孫といふ意味に使つたのである。さうして我が國では此の「竹園」を譯して「竹の園」又「竹の園生」といつたのである。「傳へきて世々に變らぬ竹の園身にうきふしを残さずもがな」(新千載集、雜、二品法親王承賢)。「末葉」子孫といふ意。此所は勿論「竹」の縁でいつたのである。「人間の種ならぬぞやん」といふ意。和漢朗詠集「親王」と題する所に、「此花非人間種。瓊樹枝頭第二花。」(後江相公)。「此花非人間種。再養平臺一片霞。」(菅三品)とある句によつたのである。【一人の人】攝政・關白たる人をいふ。攝關たる人は、官次によらず、常に一座の上に着くからである。官職知要に云ふ「攝政・關白をば大職と申すなり。かならず一座の官行とて、第一に着き給ふべきよし宣下ある故に、一人の人と申すなり。同字ながらも、一人と申す時は、天子の御事なり。【御有様はさらなり】「御有様」は、その服装・態度は勿論、平生の生活、護衛の有様、其の他當るべきこと、権力のあること等、總べての事をひらくめていつたので、必ずしも目で見た様子だけではない。「さうならぬ」は、いふまでもないの意。【たゞ人】「たゞうど」は、「たゞびと」の音便。此所では攝關の家柄を除いた普通の貴族を

いふ。この語は場合によつていろ／＼に使はれて居る。凡人といふ意のあるのは勿論のこと、やゝ特殊な使ひ方のものでは、落窪物語に「三の君の藏人少將、かの中の君を聞え給ふを、いとよき人ぞ、たゞ人とおぼえば、これを取りたまへ、見るやうありと、常に申し給ふ。これは皇族に對して、皇族以外の臣下をいふのである。しかし此の段のは、「一人の人」に對していふので、攝關の家柄を除いて他の貴族をいつたのである。尤も「たゞ人」といつたところで、此所にいふのは、總べて身分のある者で、今日の所謂平民では勿論ない。「舍人などたまはるきは」「きは」は、身分、分際。朝廷から舍人などをたまはる程度は身分の者といふ意。「舍人」は、所謂近衛の舍人で、左右近衛府に屬する官吏の、高貴の人に隨ひ、その護衛の任に當るもの。之を「隨身」又は「兵仗」といふ。「たまはる」とは、特に天子の許可を得て具すべきものであるからである。さて隨身の人数については、弘安禮節に云ふ「上天皇十四人。將曹二人、府生二人、番長二人、(以上騎馬)、近衛八人(歩)。攝政・關白十人。府生二人、番長二人(以上騎馬)、近衛六人。大將・大臣八人。納言・參議六人。中將四人。少將二人。諸衛督四人。佑二人。」【ゆしと見ゆ】「ゆしし」は、たいしたとかすばらしいとかいふやうな意。たいしたものだと思はれる。「その子うまごまでは」「うまご」は、孫。ずつと後裔などは勿論別で、子や孫の代ぐらゐまでの所はの意である。【はぶれにたれど】「はぶる」(自、下二)は、さすらふとかおちぶれるとかの意、此所は勿論後者である。おちぶれて居ても。【猶なまめかし】「猶」は、それでもやはり。「なまめかし」は、上品で奥ゆかしい所のあるをいふ。【それより下つたか】「それ」は、「舍人などたまはるきは」を指し、それ以下の身分の者をいふ。【ほどにつけつゝ】「ほど」は、その身分、分際。此所の「つゝ」は、英語で I am going などいふ場合の going の意味ではなく、今日の口語でいへば「て」と同じこと。但し「そのほど」につけて「といふ風に、幾つかあるものが同じやうな風になる意を表はしたものである。【時にあひ】時を得て出世すること、運が向いて出世すること。【したりがほ】得意顔。得意らしい顔をして居ること。【みづからはいみじと思ふらめど】本人は大變なえらいものになつたと思つて居るかも知れないが、人から見れば、つまらない。上に「自らは」とあるから、此所は「他人の目から見れば」といふ意になる。



法師くらの義ましくないものがあるまい。世間の人には木の端か何かのやうに思はれる」と、清少納言が書いて居るのも、全く尤もな事である。大變な勢でわめき散らして居るにつけても、別に对ひいとは見えぬ、増賀上人の言つたとかいふやうに、さういふのは寧ろ名譽慾に囚はれ、佛の御教に背くだらうと思はれる。しかしさういふ坊主連とは違つて、僧としての身分などはなくとも、全く心から浮世を思ひ捨ててしまつたやうな人は、却つて慕はしい所もあらう。

法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。人には木のはしのやうに思はるゝよ」と、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢まうにのゝしりたるにつけて、いみじとは見えぬ、増賀ひじりのいひけむやうに、名聞ぐるしく、佛の御教にたがふらむとぞおぼゆる。ひたぶるの世捨人は、なか／＼あらまほしき方もありなむ。

第一に高位高官の人の事を書き、此所には第二として高僧を挙げたのである。それは當時僧侶といふものが世間に尊ばれ、中には随分高い地位を得て居た者もあつたので、その僧侶について書いたのである。さうして世間的に有名な、えちい坊主が、いくら威張つてみたところで、到底駄目だ。そんなのは、増賀上人の所謂名聞ぐるしきもので、實はくだらない事である。しかしそんな世間でえらいと思はれるやうな坊主でなく、世間とは没交渉で行ひすまして居るやうな人は、寧ろ慕はしいものだといふのである。

【人】には木のはしのやうに思はるゝよ。【木のはし】は、木の切端で、人の棄てて置かぬ意にいふ。枕草子に、思はむ子を法師になしたらむこそは、いと心ぐるしけれ。さるはいとたのもしきわざを、たゞ木のはしなどのやうに思ひたらむこそ、いとほしけれ。云々。但しこれは、坊主はくだらないものだとなしたのではなく、坊主になるといふことは、誠に有り難く頼もしい事ではあるが、世間の人には、僧侶をばたゞ木の端か何かのやうに思つて居り、彼等がまづい物を食ひ、難行苦行をして居ても、とんと同情も尊敬もしないといふのである。兼好はそれを幾分意味を變へてこゝに用ひたのである。【清少納言が書けるも】、清少納言は、清原元輔の女。一條天皇の時、皇后(藤原道隆の女定子)に仕へ、當時中宮(藤原道長の女彰子)に仕へて居た紫式部と共に才名一世を歴したこと、は誰も知る所、枕草子の著者たることは言ふまでもない。【げにさることぞかし】、全く尤もな事である。【さる】は、然る。然あるべき事といふ意で、今日の言葉に直せば、尤もな事といふ意味になる。【勢まうに】、【まう】は「猛」。

この語は漢字の音のまゝであるが、平安時代より使ひ、落窪物語にも「いとまうにきら／＼しき法事」などいふ句があり、稍下つては宇治拾遺物語に「世のおぼえも威勢もまうなり」など見えて居る。勢盛んなことをいふ。【のしりたるにつけて】、【のゝしる】は、大きな聲で言ひさわぐ(罵倒の意ではない)。即ちえらい坊主が威張らして居る様を譬喩的にさういつたのである。【つけて】は、つけても、又とこゝろでなどの意。【いみじとは見えぬ】これも本人は得意かも知れないが、物のわかつた者の目には、格別えらいとも見えないといふのである。【増賀ひじり】、【増賀】は、參議橋恒平の子。幽惠の弟子。後、多武峯に住し、長保五年寂、年八十七。なほ「ひじり」については、第七六段「ひじり法師」の項を見よ。【いひけむやうに】、言つたやうに。「いひしやうに」といふを幾分圓滑にいつたのである。近頃の人は、かういふ所を「言つたらうやうに」などと書くが、そんな變な言ひ方があるまい。【名聞ぐるしく】、【名聞】は、世間のほまれ。名譽を得ようとして、その爲に心身を苦しめるといふことで、つまり名譽慾に囚はれ、その爲常に氣をつかふこと。【佛の御教にたがふらむ】、【佛の御教】は、釋迦の教。佛の教の教ふる所に背くであらう。【ひたぶるの世捨人】、他に何の希望も期待もなく、全く心から浮世を思ひ捨てて佛道に精進して居る人。【なか／＼】、却りて。【あらまほしき方もありなむ】、【あらまほし】は、望ましい、即ちさういふ風にありたいと思ふをいふ。【方】は所、點、節などの意。世間では認められないが、さういふ人の方が却つて慕はしい所もあらうといふのである。

増賀については、撰集抄に云ふ「昔増賀上人と云ふ人いまぞかりける。幼なかりけるより道心深くて、天台山の根本中堂に、千夜籠りて、道心を深く祈り給ひけれ共、猶實の心や付きかねて侍りけむ、或時根本中堂よりの示現に、伊勢太神宮へ參籠し祈念せよと有りければ、則ち只一人伊勢太神宮へ詣でて、祈請し給ひけるに、夢見給ふ様、道心發さんと思はば、此身を身とな思ひそと、示現を蒙り給ひけり。打驚きておぼす様、名利を捨てよとこそ侍るなれ。さらば捨てよとて、着給ひける小袖・衣など、皆乞食どもに脱ぎくれて、「重なる物をだに、身にかけ給はず、赤はだかにて下向し給ひけり。云々。道々物を云ひつゝ、四日と云ふには山へ登り、もと住み給ひける慈惠大師の御室に入り給ひければ、宰相公(増賀の事也)の物ぐるふとて、見る間も有り、又かは成して見ぬ



人も侍りけるとかや。師匠の大師はひそかに招き入れて、名利を捨て露骨を恐とは(捨給ふとはイ)知り侍りぬ。但しかくまでの振舞侍らずとも、只威儀を正しく、心に名利を離れ給へかしと、諫め給ひけれども、名利を永く捨て果てなん後は、さもこそ侍るべけれども(てイ)あらたのしの身や、おほくとして、走り出で給ひければ、大師も門の外に出で給ひて、遙々見送り侍りて、すゝろに涙を流し給へり。云々。

人はかたち有様のすぐれたらむこそ、あらまほしかるべけれ。物うちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて詞多からぬこそ、あかすむかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらる、本性見えむこそ、くちをしかるべけれ。品かたちこそ生れつきたらめ、心はなか賢きより賢きにもうつさばうつらざらむ。かたち心さまよき人も、才なくなりぬれば、品くたり顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけすけお、こそ、本意なきわざなれ。可なり

第三に、人品・容貌のすぐれて居るといふことは世人の望む所である。實際、上品で愛敬があり、口数の少ない人は、何となく奥ゆかしく懐かしいものであるが、しかし容貌風采だけでは駄目、人はどうしても學問・藝能がなければ、駄目だといふのである。

【かたち有様】容貌風采。但し「形」が容貌で、「有様」が風采ときまつて居るわけではない。今の言葉でいへば、大體こんな語に當るといふに過ぎない。なほ第二三八段「すがたにほひ」の項参照。【あらまほしかるべけれ】望ましい事であらう。【物うちいひたる聞きにくからず】ちよつと物を言つても、それが聞くに聞きにくくはないといふ意。【愛敬ありて】容貌・態度にかはゆい所があつて。【あかすむかはまほしけれ】「あかす」は「厭かず」で、何時までたつても、厭きが来ないこと。【見れどあかぬ吉野の川の常流の結ゆることなくまたかへり見む】(萬

660  
30  
195

いふのは實に苦々しいものである。容貌風采こそは生れつきのものであらうが、心はどうして賢い上にも更に賢いやうに、變へれば變へられなことがあらうや。たとひ容貌や氣だてのよい人でも、學問藝能がなくて、自分よりも、身分も低く、顔も醜い人たちの中にあつて、それらの人にすらわけもなく壓倒されるのは、どうも遺憾な事である。

葉集、一)など、萬葉集によく出て来る「あかぬ」と同じである。「むかはまほし」は、對坐して居りたいといふ意。【めでたしと見る人の】立派な人だと思つて見て居た人が。(人の心)とつゞくのではない。【心おとりせらる本性】「心おとり」は、思つて居たよりもつまらないと思はれること、即ちこれまでは立派な人だと思つて居たのが、案外さうでなかつたので、つまらない人だなどと心に感ずるやうなことをいふ。「せらる」の「る」は「思はる」の「る」と同じで、自然にさうなる意を表はすもの。「本性」は、本来の性質。但し此所のは、俗語の「地金を出す」といふ場合の「地金」にあつて居る。なほ第二四〇段「人も心おとりせられ」の項参照。【見えむこそ】「見え」といふ語は、「物思ふ」と人に見えむ下細の下ゆ懸ふるに月ぞ懸にける(萬葉集、一五)など、「見えむ」といふ意味になる場合がある。此所のは即ちそれで、あらはれるといふ意味になる。(かういふ人は「あかすむはまほしき」の反對である)。「くちをし」物足らぬ氣がして歎かほしいといふ意であるが、此所はそれが少し強く、苦々しいといふやうな意味になるであらう。【品かたち】「品」は、所謂「人品」の「品」であるが、これは「品がよい」「品が悪い」といふ場合の「品」と同じく、主として外貌についていふのであるが、必ずしも外貌ばかりをいふのではない。「かたち」の方は、單なる外貌であるが、「品」はその本質に立入つた言葉で、その人の身分・種性から、それによつて自然に生じて来る人柄の上下、さういふものも廣く合めていつたのである。だから前の「かたち有様」と大體似た語ではあるが、その内容は必ずしも全く同一ではない。【生れつきたらめ】「生れつきてあらめ」の約。容貌などは、生れつききまつたもので、何とも仕方がないが、(「たらめ」は勿論上に「こそ」がある爲の結であるが、かういふ場合は、下へついで「けれども」の意を含むやうになる)【心はなか賢きより賢きにも云々】「なかか」は、どうして。下の「うつらざらむ」にかゝつて、結局うつすことが出来るといふ意になる。「賢きより賢きにも」は、賢い上にも更に賢くといふ意味だらうが、随分妙な言ひ方をしたものである。但し野槌に「論語學而篤に、賢し賢易し色を、カシコキヨリカシコカラントナラバ、イロヲカヘヨとむ點古來あるによりて、こゝに引用あるなり」とある。多分さうであらう。【かたち心さまよき人】容貌もよく、又氣だてもよ、【才なくなりぬれば】「才」といふ語は、場合によつていろ／＼の意味に使はれて居る。本居宣長は「中」



「ざえ」の語につき、「ざえは人の學問なり、すべて物語には學問のことを、ざえといへり(玉の小櫛)といつて居るが、しかし何時でもさうといふわけではない。此の段の「ざえ」は、大體學問の意と見てよきさうであるが、次に「ありたきこと」は、まことしき文の道、作文・和歌云々」といふのがあるから、其等の事を含めたと見て、先づ「學問藝能」といつたらよからう。「なかりぬれば」は、直譯すれば「これまであつたものがなくなると」といふ意になるが、それでは意味が變になる。思ふにこれは「才なきものは」といふことを、修辭上から「なかりぬれば」といつたものであらう。十訓抄(四)に「大方口かろきものになりぬれば、某に其の事な聞かせそ、彼の者にな見せそなどいひて、人に心をおかれへだてらるゝ、口をしかるべし」といふのがある。これも要するに「口かろき者は」の意である。同じやうな例と見てよい。「品くどり」「品」は、前の「品かたち」の「品」と同じであるが、こゝは主として身分・種姓をいふ。自分よりも身分の低い者である。「品にくさげなる人」「かたちありさまのすぐれたる」の反對で、下品な醜い顔をした人といふこと、必ずしも恐しげな顔といふわけではない。「立ちまじりて」たゞさういふ人々の間にあつてといふくらゐの意味。實際の意ではない。「かけず」文段抄に「かけくらべられずの心なり」とある。これは今日まで大抵の註釋書に用ゐられた説で、今も大抵は「かく」を比較の意に解してあるが、これはやはり、「胸板かけず射通し」(保元物語)などいふ場合の「かけず」で、さはず、滑らずの意から来たものではあるまいか。さうしてこの意味から、此所では、「わけもなく」「もろく」の意味となつたのであらう。「けおさるゝ」「け」は接頭語で、特別の意味はない。おされる、即ち壓倒される。「本意なきわざなれ」遺憾な事だ。情ない事だ。「わざ」は「こと」といふくらゐの意。

ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、又有職に公事の方、人の鏡ならむこそ、いみじかるべけれ。手などつたなからず走りがき、聲をかしくて拍子とり、いたましようするものから、げこならぬこそ、をのこはよけれ。

望ましい事は、正式の學問、詩文を作る事、和歌に音楽、それから所謂有職・公事の方面に於ても、

人の手本となるといふやうなことは、實に結構な事である。其の他字なども相當にうまくすらすらと書き、聲面白く拍子を取つて歌ひ、人から酒をすゝめられるやうな場合には、痛み入るやうにして辭退はするものの、下戸(ダコ)でない方が男はよい。

前から段々と擧げて来た官位・法師・容貌風采、其等のものは結局つまらないと言ひ、さうして最後にたとひ「かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば云々」と言つたのを承け、吾人の願はしいと思ふ事は、先づ「まことしき文の道」だといひ、それについて、詩文・和歌・音楽を擧げ、それから有職故實に關する素養も必要だといひ、なほ附け加へて、手跡のこと、遊藝の事、更に酒もちよつとくらゐは行ける方が男としてはよいといふのである。

【ありたき事】願はしいこと、望ましいこと。【まことしき文の道】正式の學問、本式の學問といふ意で、儒漢詩漢文を作ることである。【管絃の道】音楽のこと。「管」は笛の類、「絃」は琴・琵琶の類。「道」は、上の「作文」「和歌」にもかゝるのである。【有職に公事の方】有職や公事の方面での意。「有職」は、もとモノシリの意で、「有職」と書くべきが變つたのだといふ伊勢貞丈の説が正しからう。官職その他公家の故實をいふ。(後には「武家故實」といふものもあるが、此所にいふのは公家に關するものだけである)。「公事」は、朝廷の政務及び儀式。【人の鏡】「鏡」は、手本といふ意。「鏡ならむ」は、「鏡たらしむ」といふと同じである。この語は、「文の道」以下すべてにかかるとした註釋書がある。なるほどさうも見られるやうだが、「ありたきこと」は、いみじかるべしをかしい。筆者の頭ではやはり「管絃の道」で一度切り、それから又言つたものと見る方がよからう。「いみじかるべけれ」非常に結構な事であらう。【手などつたなからず走りがき】「手」は、手跡のこと。「つたなからず」は、まづぐなく、即ち相當にうまく。「走り書く」は、すらすらと速者に書くこと、早く書く意ではない。「聲をかしくて拍子とり」聲面白く歌を歌つて、拍子を取る。言換へれば、上手に拍子を取つて、面白く歌を歌ふといふこと。【いたましようするものから】酒をすゝめられて、痛み入り辭退はしながらもといふ意。【げこならぬこそ】いくら酒を飲む方がの意。「げこ」は、酒ぎらひのこと、普通「下戸」の字を書き、之に對して酒飲みを「上戸」といふ。語原については、古來いろ／＼の説があるが、どれも信じられない。(酒の事はなほ第一七五段にもある)。

右に言つた通り、兼好は先づ高位高官といふものもつまらないと言つて居るが、しかしそれは「それより下の方」といふ方だけで、攝關のみならず、朝廷から舍人を賜はるくらゐの身分の者は、つまらないとは言つて居ない。



これについては「その子らまごまでは、はぶれにたれど、猶なまめかし」とほめて居るのである。それでは、つと高い所なら望ましいといふのであるか、其所が甚だ曖昧である。そこで近頃の註釋家は皆此所に理窟を附けて、舍人を賜はる際から上は、たとひ人臣でも、それは皆門閥で、普通のものにはなれないから、あきらめて居るのだといふ。なるほど一應尤もだが、しかし自分等には、なれないからといふので、それをむやみにほめたてて、あきらめの腹いせにするといふのは、此の場合として甚だかしい。思ふにこれは、なれる、なれぬは別問題で、實際えらいものだと思つて居た爲であらう。彼は一面に於て、僧侶・權貴の門に媚びるやうなことを講つて居るが（第七六段）、しかし又一面には、貴人のお供をして女の所へ行つたこと（第三二段等、たとひ假設の話としても）などを平氣で書いて居る。此等はずまり彼が身分の高い人に對しては、心から尊敬して居た證據であつて、これは必ずしも世におもねるといふやうな悪い意味からではなく、此の時代の人としては、實際さう信じて居たのであらう。さうしてかうした心持は、一面に又朝廷に於ける儀式・典禮に對する崇拜となり、此所にも既に「有職に公事の方云々」といふ文句が見え、故實に關する事は此の後度々出て來るのである。

二

いにしへの聖の御代の政をも忘れ、民の愁、國のそこなはるゝをも知らず、よろづにきよらをつくして、いみじと思ひ、ところせき様したる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。衣冠より馬・車にいたるまで、有るにしたがひて用ゐよ。美麗をもとむる事なかれ」とぞ、九條殿の遺誠にも侍る。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも、「おほやけの奉り物は、おろそかな

昔の聖天子の御代の立派な政をも忘れ、民が愁へ歎かうが、或は國が衰頹しようが、さういふ事にはおかまひなく、何事につけても、

るをもてよしとす」とこそ侍れ。

高位高官の人などが、人民の困窮や國家の損失を顧みず、出来るだけ贅澤をして、一人得意になつて威張り散らして居るのを、甚だ思慮のない遣方だと思ふと言ひ、それにつけて、藤原師輔の遺誠や順徳院の禁秘鈔の文句を挙げ、贅澤のよくないことを知らせたのである。

【いにしへの聖の御代の政】「聖」は、聖帝、即ち徳のすぐれた天子といふ意。しかし何天皇と特に指して申し上げて居るのではない。支那では大抵つと古い時代の堯舜や周の文王・武王などをいふが、我が國では、古い所で仁徳天皇、やゝ下つては醍醐天皇・村上天皇などを申し上げ奉る場合が多いやうである。（近頃では明治天皇を指して申し上げ奉る場合が多い）。けれども此所は勿論どの御代を指して言つたといふわけではなく、たゞ漠然と言つたに過ぎない。のみならず筆者の頭には、寧ろ漢籍から來た知識で、主として支那の所謂聖代が浮んで居たのかも知れない。【民の愁】この「うれへ」は、名詞とも動詞とも見られるが、文章上から見れば、下の「國のそこなはるゝ」に對し、これも動詞と見た方がよい。しかし書く時には、恐らく最初に「民の愁」といふ一つの熟語が浮んで書きつけたので、この「愁」は名詞となり、次の方は「そこなはるゝ」と動詞になつたのであらう。【よろづ】萬事。衣食住のすべてにわたつていふ。【きよら】美麗。華美。「きよらをつくして」は、出来るだけ華美贅澤にするをいふ。【いみじと思ひ】すぐれた事と思ひ。即ちえらいと思ふといふ意。【ところせき様したる】あたり狭しと仰山らしい様子をして居るといふ意。即ちおしひろがつたやうにして威張り散らして居る様子をいふ。【うたて思ふ所なく見ゆれ】「うたて」は、餘りひどいといふやうな意を表はす語で、今日の俗語でいへば、どうもはやといふやうなのに當るであらう。「思ふ所なく」は、考がない、思慮がない。【衣冠より云々】意味は上欄記載の通り。但し「馬車」はベンヤではない、馬と車で、車は牛車。【九條殿の遺誠】「九條殿」は、藤原師輔のこと。國白忠平の子。天慶五年大納言、天曆元年右大臣。天徳四年薨、年五十三。書家として有名な佐理は、この人の兄實頼の孫である（第二三八段参照）。「遺誠」は、子孫に書遺した訓誡で、その中程の所に「始自衣冠及牛車馬、國有

出来るだけの華美贅澤をして、それをもて自分がえらいと思ひ、あたりも狭しと威張り散らして居るやうな人こそ、實際どうも思慮のない人間だと思はれる。衣冠を始として、馬や車に至るまで、わざ／＼立派なものを作らず、有合せのものをもそのまま使へ。好んで華麗な物を使ふやうな事があつてはならぬ」と、九條殿の遺誠にもある。又順徳院が宮中の事をいろ／＼お書きになつて居るものの中にも「天子の御召物は粗末なのがよい」と書いてある。

いにしへの聖の御代の政をも忘れ



用之、勿<sup>レ</sup>求<sup>レ</sup>美麗。不<sup>レ</sup>量<sup>レ</sup>己身(カ)好<sup>レ</sup>美物。則必招<sup>レ</sup>暗欲之<sup>レ</sup>訪。』とある。【順徳院の禁中の事ども書かせ給へる】  
 「順徳院」は、後鳥羽天皇の第三皇子。承元四年土御門天皇について御即位、承久三年位を仲恭天皇に譲つて、後鳥羽院と共に、關東討伐の事を謀られたが、官軍利あらず、遂に關東方の勝となつて、後鳥羽院は隠岐に、土御門院は土佐に、順徳院は佐渡に遷され給うた。これが所謂承久の亂である。かくて順徳院は仁治三年遂に佐渡に於て崩御、御年六十四。「禁中の事ども書かせ給へる」は「給へるもの」の意で、所謂禁秘鈔をいふ。【おほやけの奉り物】  
 「おほやけ」は、天子。「奉り物」は、御召物、即ち御裝束。これは禁秘鈔卷上「御裝束事」といふ條に見えるもので、本文は「但天位着御物。以<sup>レ</sup>疎爲<sup>レ</sup>美。」とある。「たてまつる」は、「まゐる」といふ語と同じやうに、廣く食ふこと、飲むこと、着ることなどに用ゐる敬語で、場合によつては舟に乗ることなどにも用ゐる。隨つて「たてまつりもの」は、着物といふ意になるのである。【おろそかなるをもてよしとすとこそ侍れ】「おろそか」は、疎略。華美贅澤の反對で、簡素な物を用ゐるのがよいと書いてあるの意。

而も

三

【すべて】 すべてにすぐれて居ても、戀の趣の分らないやうな男は、誠に物足りないもので、ちやうど玉の卮(サカヅキ)に當(ソコ)のないうやうな氣がするだらう。夜露に濡

萬にいみじくとも、色好まざらむ男は、いとさうくしく、玉の卮の當なきこ、ちぞすべき。露霜にしほたれて、所さだめすまどひありき、親のいさめ世のそしりをつ、むに心のいとまなく、あふさざるさに思ひみだれ、さるは獨寝がらに、まどろむ夜なきこそ、をかしかれ。さりとて、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれむこそ、あらまほしかるべきわさなれ。

れて何處といふきまつたあてどもなくさまよひ歩き、親のいましめとか世間の非難とかに氣をなすので、心のどかに居る時もなく、とかく思ふやうにならない事が多くて、その爲にいろ／＼と思ひ亂れる。而も獨寝の場合が多く、る／＼眠る暇もない。かういふ戀こそ、實に面白いのだ。さうかといつて、たゞ一途に女に耽り溺れるといふやうな風ではなく、寧ろ女にこ

これは兼好の戀愛觀で、先づいくらえらい男でも、戀愛の味が分らないやうな者はだめだといひ、次に戀愛の情趣といふものは、決して自由な圓滿な所に存するものではなく、却つて思ふやうにならぬ所に存するものだといひ、更に最後に附け加へて、その戀も一面には男らしい所がなければならぬ、いくら戀に浮身をやつすといつても、女に馬鹿にされるやうな戀では、これ亦だめだといふのである。【萬にいみじくとも】 すべてにすぐれて居ても。【色好まざらむ】 色を好まないやうな意。但し戀の趣を解しないといふこと。尤も戀といつても、此所は男を主としていつたのである。(正徹本には「色このみならざらむ」とある)。「さうくしく」「さびしく(寂々)し」の音便。寂しく物足らぬ心地のするをいふ。【玉の卮の當なきこちぞすべき】 「玉の卮」は、非常に立派な物といふたとへ。立派な卮でも肝心の當がなければ、酒が入らないから、いくら立派なものでも、肝心の所が缺けて居ては、役に立たないといふ意になる。「こちぞすべき」は、さういふ心地がするであらうといふ意で、本人は何とも思はなくとも、外から見れば、そんな氣がするだらうといふのである。さてこの「玉の卮云々」は文選、左思の「三都賦序」に「且夫玉卮無<sup>レ</sup>當。雖<sup>レ</sup>實非<sup>レ</sup>用」などあるによつたのであらうが、或は當時かういふ言ひ方が我が國でも普通に用ゐられて居たのかも知れない。【露霜】 これはツユシモとよむか、又ツユジモとよむか、先づ讀方からして考へなければならぬが、一體この語は、古くから歌にはよく使はれるもので、萬葉集だけにでも二十四五ある。さうして萬葉集のは、本居宣長も言つて居る通り(玉かつま・古今集遺鏡)、どうも露の事らしいが、さればとて、たゞ萬葉集の用例だけによつて、この書の「露霜」をきめてしまふわけには行かない。思ふに、これは筆者が始終古歌を讀んで居る爲、かうした言葉がいつい何氣なく出て来たので、果して露ばかりをいつたものかどうか、それは恐らく作者自身と雖も、改つて聞かれては、答へかねるくらゐであらう。しかし古今集(秋)の「萩が花ちるらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも」の「露霜」もやはり露と見てよく、その他も大抵同じやうであるから、この段の「さびしく」もやはり露の意と解してよからう。讀方はツユジモであらうと私は思ふ。【しほたれて】 「潮垂」で、袖などが潮にぬれて染れる意より、歌では多く涙に袖のぬれるをいふ。此所は夜露の爲に着物のぬれることをいつたのである。【所さだめすまどひありき】 何處と一つきまつた日



あての場所がなく、あちこちとさまよひ歩くをいふ。【親のいさめ世のそしり】親のいましめや世間の非難。【つゝむに】「つゝむ」は、憚る、氣兼ねをする。親がやかましく言つて注意するとか、世間の人が非難するとかするので、それらを憚り氣兼ねをする爲にの意。【心のいとまなく】「心のいとま」は、「心のひま」といふに同じく、何の物思もなく、心の長閑な時。始終氣兼ねばかりをして居るので、のんきな時はさつぱり無いといふのである。【あふさきるさに思ひみだれ】あふさきてもうまきは行かず、かうしても都合が悪く、いろ／＼と思ひ亂れて。古今集（俳諧歌）に「そへにととすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに」といふ歌がある。源氏物語（番水）にも「とあればかゝり、あふさきるさにて、なめにもありぬべき人の少きを云々。」サは「往くさまさ」「歸るさ」などいふ場合のサで、時の意。アは合、違、キルハ離、來などの説がある。宣長は右に擧げた古今集の歌を譯して、「どうしたかよからうか、かうしたかよからうかとれうけんの定めにくいことを、いろ／＼に思案して見て、よいれうけんを一つ思ひついて、さうぢやと定めて、其通りにすれば、又一方にさしつかへがあり、又思案をかへして見れば、又一方にさしつかへることがあり、とかく世の中の事は、あゝどうもならぬものぢや、一方がよければ一方がわるうて。」（遠鏡）といひ、源氏の方の譯については、岷江入楚に「さやうにして善からむと思へば違ふ、又かやうにやせむとすれば、又違ふことあるなり」とある。【さるは】この語、字で書けば、「然るは」で、さうであるのは（沼波氏の「講話」には、こゝを「さういふ人は」としてある）といふ意になるべき筈であるが、普通の使ひ方は寧ろ反對で、「さうではあるが」、「しかも」といつたやうな意になる場合が多い。此所の「さるは」も、「しかも」といふやうな意と見ればよい。【獨衰がちに】女の所へ行つて一緒に寝ることもないではないが、大部分は一人で寝るといふのである。【まどろむ】とろ／＼と眠る。眠ることは眠るが、よく眠れないをいふ。【をかしけれ】戀をするなら、さういふ戀が面白、といふのである。【さりとて】然ありとて。さうかといつて。そんなに女の爲に苦勞をするからといつての意。【ひたすらたはれたる方にはあらで】「ひたすら」は、偏に、「一途に」。【たはる】は、耽り溺れる、うつつをぬかす。女の爲に苦勞をするからといつても、身も魂も全然女の爲に奪はれるといふやうな風ではなくの意。【たはる】は、「淫」の字をよむ爲に、たはける、ふざける意のやうに思ふ人がある

此の世の事は、考へないで、來世の事も常に忘れず、佛の道にうと／＼しくないのは、奥ゆかしいものである。

が、ふざけたり淫猥な事をしたリする意ではなく、右に言ふ通り耽り溺れる意である。【女にたやすからず思はれむこそ】「たやすからず」は、「たやすくあらず」。「たやすく思はれる」とは、興し易い奴だと思はれる、即ち所謂なめられることで、即ちどうでも自分の思ふやうにしてやる事が出来ると、女の方に思はれるをいふ。【あらまほしかるべきわざなれ】さうありたいと思ふこと、即ち望ましいことであるの意。「わざ」は、「しわざ」でなく、ただ「事」といふ意である。

この一段は徒然草中でも、古來最も有名な所であるが、此所を讀むには、どうしても第一三七段の「男女の情も、ひとへに逢見るをばいふものかは云々」の條、及び第二四〇段の「しのぶの浦の養のみるめもところせく云々」の條を併せ見なければならぬ。此等の段を通じて見れば、筆者の理想とする戀愛がどんなものであつたかは略分るであらう。漢學か然らざれば佛敎かで鍛はれて居た江戸時代の人々には、かういふ思想はどうも分らなかつたと見え、註釋書類に見える評は、どれも甚だ不徹底だが、年々隨筆に、これと源氏物語とを比較して、「あふは順なり、あひがたきは逆なり。順は戀の本情、逆は戀の風致なり」と言つて居るのは、稍趣を解したものでいつてよからう。今の人には、却つて筆者の心持が分るであらう。

四

後の世の事心にわすれず、佛の道うとからぬ、こゝろにくし。

前段には戀愛の事を書いた。筆者はそれでちよつと筆をおいたのではないかと思ふ。此所には全く方面を變へて、佛道信仰の事を書いて居る。この問題は、この書において最も重要な役を勤めるものであるが、而も此所には極あつさり、ただ「うとからぬ、心にくし」ですませて居る。勿論これはわざとした事ではあるまいけれども、

【四】 後の世の事心にわすれず



却つて妙味がある。

【後の世の事心にわすれず】「後の世」は、後世、來世。現世の事ばかりを考へず、死後の事も始終心に持つて忘れない。【佛の道うとからぬ】佛の道にうとくはないのはの意。これは佛敎に關する知識では勿論ない。佛敎上の信仰を持ち、常に經を誦するとか寺參りをするとか、佛道に親しきを持つて居ることをいふ。【こゝろにくし】奥ゆかしい。

五

不幸に愁にしづめる人の、頭おろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明かし暮したる、さる方にあらまほし。顯基中納言のいひけむ、配所の月罪なくて見む事、さもおぼえぬべし。

【不幸に】たとひ不幸にあつて、世を遣れるにしても、たゞ一時の感激などで、びつくりしたやうな遣方をせず、こつそりと頭をまるめて、さうして何の願ひ待つ所もなく、たゞこつそりと獨り暮して居る、さういふ風でありたいといふのである。さうしてそれにつけて顯基中納言の言つたといふ、罪なくして配所の月を見たいといふ言葉を擧げて、「なるほど、うまい事言つたものだ。さういふ氣持がするに違ひない」と、これに對して同感の意を表して居るのである。

【不幸に】不幸によりての意。つまり何か不幸な目にあつての意。【頭おろしなど】「頭おろす」は、髪を剃り佛門に入ること。「おろしなど」は、今の言葉でいへば、「おろしたりなどするやうに」の意。前掲の連用形に「など」を附けた例は、源氏物語（帚木）に、「唯うはべばかりの情に、手走り書き、折節のいらへ心得て、うちしなどばか

不幸な目にあつて悲歎にくれて居る人が、俄に頭を剃つて佛門に入るといふやうに、深い考もなく輕率に決心したやうなのではなく、居るか居らぬか分らぬくらゐに、こつそりと門を閉ぢて、何の期待もなく靜かに暮して居る、さういふ風でありたいものだ。顯基中納言は「配所の月を罪なくし

て見たいと言つたといふが、なるほどそんな感じもするであらう。

りは、随分よろしきも多かりと見給ふれど。」この書にも度々出て来る。【ふつゝかに思ひとりたるにはあらで】「思ひとり」は、考へなす。さて「ふつゝかに」は、ちよつと分らない言葉なので、古來いろ／＼の説がある。先づ壽命院抄には、「ふつゝかに——いやしき心也」とあり、文段抄には「いやしく浮世を思ひとりたる也」。福藏抄には「何の味もなく、いやしく浮世をおもひとりたる也」とある。沼波氏の「講話」には「不細工に。早速剃髮して了ふなどといふやうな、そんな拙陋な悟り方をしないで。」内海氏の「詳解」には「ふつゝかには、いやしげにといふほどの意。この世をいやしげなもの、つまらないものと思ひ取る意。」この内海氏の説は、「ふつゝかに」といふ副詞の意味を取違へたのである。これはその思ひ取り方がフツ、カだと見なければならぬ。さて「フツ、カ」は、今でも「ふつゝかな者」など、仕附のよくない意味に使ふが、さればとて「不細工」でも思はしくない。つまりこの語の意味は、上品、高尚、優美などの反對で、行届かない、洗練されてないなどの意である。そこでこの場合は、教養の足りない人間が、何か不幸にでも遇ふと、忽ちびつくりして、殆ど前後の考もなく、人の止めるのも聽かずに、頭を剃つて出家をする、さういふ遣方をいつたのであらうと思ふ。つまり深い思慮分別もなく、たゞ一時の感激で出家しようとするのをいつたのであらうと思ふ。【あるかなきかに】居るか居ないか分らないくらゐにこつそりと、（愁にしづめる人の）から句を隔てて此所へつゞくのである。【門さしこめて】門の戸を鎖し固める。門を閉ぢて、家の中に引籠り、外部との交渉を絶つをいふ。【待つこともなく】特に何か期待するといつたやうな心持もなくの意。【待つ】は、あてにする、期待するといふ意であるが、しかし何を指していつて居るのか、それは明かでない。要するに何かよひ事はないかとあてにして待つ心もなくの意。【明かし暮したる】「明かし暮す」は、夜を明かし日を暮すで、要するに日々を過すといふこと。【暮したる】は、其所で文が切れず、直次の「さる方」に續く。さうして「さる方」は、初から此所までの句の意味全體を承けるのである。【さる方にあらまほし】「さる方に」は、「然る方に。」さういふ風での意。即ちかうしてあるかなきかに待つこともなく暮して居る、さういふ風でありたいものだといふのである。「一體「さる方に」といふ語の使ひ方は、それ相應にといふのが普通であるが、此所の使ひ方は右に言ふ通りである。【顯基中納言】源顯基。長元二年參議、同八年十月權中納言、翌年四月出家、

【五】不幸に愁にしづめる人の



永承二年癸、年四十八。【配所の月罪なくて見む事】「配所」は、罪人の流された場所。罪を犯して流されたのは、心中程かでない。しかし犯した罪なくして心静かに配所の月が見たいといふのである。つまり文段抄に「閑なる所にて月を見たいなり、隠遁を好める道心より願へるなるべし」と言つて居るやうな意味で、要するに罪があつては氣がとがめるが、罪も何もない身の、ゆつたりとした心持で、荒涼たる配所に一人静かに月を眺めるといふ、その閑寂な氣持が味つてみたいといふのである。【さもおぼえぬべし】そんな氣もしさうな事だ。願基中納言がさういふ風に思つたのも、なるほど尤もな事だといふ意。これは勿論願基中納言の言つた事に同感しての言であるが、それは前に言つた「あるかなきかに門さしこめて待つこともなく明かし暮す」閑寂な境界と、この「罪なくして配所の月を見る」といふ境界とに共通した所があるからである。

六

我が身のやんごとなからむにも、まして數ならざらむにも、子といふものなくてありなむ。前中書王・九條太政大臣・花園左大臣、皆ぞう絶えむ事をねがひ給へり。染殿大臣も「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるは、わろき事なり」とぞ、世繼の翁の物語にはいへる。聖德太子の御墓をかねてつかせ給ひける時も、「こゝをされ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなり」と侍りけるとかや。

人間といふものは、その身分の高下を問はず、總べて子孫のない方がよいといふのである。さうして此の主義

【たとひ自分の身が尊い身分であつても、子といふものはない方がよい。ましてつまらぬ身分であつたらぬ身分であつたらば、猶更である。前中書王や九條太政大臣や花園左大臣等は皆子孫の絶えることを願はれた。染殿大臣

も「子孫のおありにならないのがよい。子孫が劣つて居られるのは、よくない事だ」と、大鏡には書いてある。聖德太子が生前にその御墓を豫めお造りになつた時にも、「此所を切れ、彼所を斷て。自分は子孫を持たないやうにしようと思ふのだ」と言はれたとかいふことである。

に適合した例として前中書王其の他の人を挙げたのである。

【やんごとなからむにも】「やんごとなし」は、身分が高いとか尊いとかいふ意。「にも」は、次の「數ならざらむにも」の「にも」と對し、共に「子といふものなくてありなむ」にかゝるのである。【まして】尊い身分の者でもさうであるから、ましてつまらぬ身分の者は猶更といふ意になる。【數ならざらむにも】「數ならず」は、數へ立てるだけの價値がないといふ意で、身分の賤しいこと。【子といふものなくてありなむ】子といふものではなくてある方がよい、即ちない方がよいといふのである。「ありなむ」の「なむ」は、助動詞「ぬ」の將然形に助動詞「む」の附いたもので、此の形は例へば「散りなむ後は懸しかるべき」などの如く、未來の意を稍強く表はす時に用ゐられるものであるが、此所の「なくてありなむ」のやうな形になると、一轉して稍軽い願望の意を表はすのである。【前中書王】兼明親王のこと。醍醐天皇の皇子で、初め源姓を賜はつたが、後親王となる（貞元二年四月）。一品に敘し、中務卿に任ぜられた。「中書王」といふのは、中務の唐名を中書といひ、それが親王であるからである。村上天皇の皇子具平親王も同じく中務卿に任じて、才學亦匹敵したので、前の兼明親王を「前中書王」といひ、後の具平親王を「後中書王」といふやうになつた。永延元年薨、年七十四。子には伊勢・伊行の二人があつた。しかしこの伊勢は馬鹿であつた。又關白兼通に邪魔されて、思ふやうにならなかつた。さういふ事から、或は厭世的になつて遂に子孫の絶えむことを願ふやうにもなられたのかも知れないが、此の事については何に書いてあるか、私はまだ出所を知らない。或は後に引く今鏡の文によつて、後中書王と混同したのではあるまいか。【九條太政大臣】藤原伊通。宗通の子。永暦元年太政大臣となる。當時綱紀漸く弛み、舊章が日に廢るので、憲法十七條に擬して意見を上つたが、總べてよく時弊にあつて居たといふ。永萬元年薨、年七十三。世に大宮大相國、又九條相國といひ、頗る重きをなした人であるが、しかし此の人も一時稍不遇で、師頼等四人と共に權中納言になる筈の所を、自分一人が洩れたので、多少自棄的行動に出たこともあつた。けれどもそれはたゞ一時的の事であつて、一生を通じては事る成功の人である。又雜談好きで、折々皮肉を言つたことは、今鏡や平治物語などに出て居る。又無名抄・大鏡・人記除目鈔等の著述もある。子は爲通・伊實二人共、相當の地位に上つて居るし、女の皇子は近衛天皇の后と

【六】我が身のやんごとなからむにも



なつて居る。尤も伊實は力が強く、相撲が好きで、少しも學問に身を入れないので、伊通が困つたといふ話は古今著聞集に出て居るけれども、兼明親王の場合とは事情が違つて居る。これも子孫の絶えることを願つたといふ話は、何にあるか分らない。若しそんな事を言つたとすれば、或は例の雜談ではないかと思ふ。【花園左大臣】源有仁のこと。輔仁親王の子。白河院の孫にあたり、院には非常に愛せられた。初め鳥羽天皇に皇嗣のなかつた時には、此の人をそれにしようといふやうな御心もあつたが、やがて崇徳天皇がお生れになつたので、源姓を賜うて臣下の籍に入つたのだといふ。此の時十七歳、從三位に敘し、右近衛權中將に任じた。爾後内大臣・右大臣等を経て、保延二年左大臣となつたが、病身のため、久安三年遂に職を辭して華髮し、成覺といつたが、間もなく薨じた。年四十五。此の人には女の子はあるが、男はなかつた。今鏡(八)に云ふ、「このおとこの御子のおはせぬぞくちをしけれど、かへりてはあはれなる方もありて、なごりをしく侍りて、我ものたまはせけるは、いともしもなき子などのあらむは、いとほいなるべし。村上のみかどの末、中務の宮(後中書王の事)のうまごといふ人々見るに、させることなき人々どもこそ多く見ゆれ。我が子などありとも、かひなかるべしなどぞありける。負惜しきか何か知らぬが、とにかくか書いてある。【ぞら】「族」の字をよむ。「ぞく」の音便である。此所は子孫といふ意。【正徹本には「御ぞら」とある。】【染殿大臣】藤原良房のこと。冬嗣の第二子。淳和・仁明・文徳・清和の四朝に歴仕し、太政大臣となる。天安十四年九月薨、年六十九。天皇爲に三日間廢朝せられ、正一位を贈り、美濃公に封じ、忠仁と諡せられた。染殿大臣といふは、その邸宅(京都正親町の南、京極の西、今の清和院門内の南、仙洞御所の北部)を染殿といつて居たからである。妻は嵯峨天皇の皇女潔姫、この腹に明子(染殿の后といふ)が出来、後入内して文徳天皇の后となり、清和天皇を生み奉つた。しかしこれも男の子はなく、兄長良の子基經を養子とした。【子孫おはせぬぞよく侍る云々】「末」は子孫。子孫のないのがよい。子孫が先祖よりも劣つて居るのはよくないことだの意。【世繼の翁の物語】大鏡のこと。世繼の翁といふものの談話を筆記した體にしてあるので、一名を「世繼物語」ともいつて居る。但し大鏡には、此所にいふ「子孫おはせぬぞ云々」の語はない。卷二「太政大臣良房」の條には、「かくいみじきさいはひ人の、子のおはしまさぬこそ口惜しけれ。御このかみの長良の中納言殊の外に越えら

れ給ひけむ折(弟の方が出世したことをいふ)、いかばかり幸うおぼされけむ、又餘人も殊の外に思ひ申しけめど、その御末こそ今に榮えおはしますれば、行末は殊の外にまさり給へりけるものを」とあるだけである。思ふに、子のなかつたといふ事と、前に擧げた有仁の言葉とをこつちやにして、よくも調はず、ついそのまゝに書いたのであらう。【聖德太子】用明天皇の御長子。推古天皇の皇太子となられた。憲法十七條を制定せられたこと、佛教の興隆に盡されたことなどは、わざ／＼此所に書くまでもない事であらう。推古天皇二十九年二月薨、御年四十九。「聖德太子の」は「聖德太子が」の意である。【御墓】太子自身の墓である。【かねてつかせ給ひける時】「かねて」は、豫め、即ち生前の意。「つく」は、築く。墓を造ること。但し「つかせ」は、使役でなく、敬相である。【正徹本には「給ひけるにも」とある。】【こゝをきれかしこをたて云々】これは聖德太子傳、推古天皇二十六年(太子四十七歳)の條に「冬十二月。太子命、習科長墓處、覽造墓者。直入墓内。四望謂左右曰。此處必斷。彼處必切。欲令應絶子孫之後」とあるを引いたのである。但しこの「墓を切る」といふ意味はよく分らない。右に擧げた太子傳は、世に平氏太子傳と稱するものだが、野槌に引いたものには「教墓工曰。汝斷三四路云々」とある。元來この平氏太子傳なるものが、史料としてはたいした價値のあるものではなく、野槌所引のやうな異本が實際あつたものかどうか、少くとも私はまだ見たことはないが、とにかく季吟も言つて居る通り、兼好の見たのは、今日普通に通ずる傳に違ひない。たゞ野槌所引のものやうに、「斷三四路」なら、意味ははつきりするから、後の註釋書は大抵この方を用ゐる。「墓に詣づる道を斷つ」意とし、明治以後のものも、大抵これによつて居る。しかし今の註釋家の言ふやうに、自分は子孫をこしらへないから、自然後世自分の墓に參詣する者もない筈である。だから彼處の道も此處の道も斷ち切れと言つたと見るのはどうであらうか。若し子孫がなくして參詣する者がないからといふのならば、道の事を考へるよりも、先づ墓の事を考へさうなものである。第一、墓などを造る必要がないではないか。又一切道を作るなといへばとにかく、一筋でも道があれば、それによつて人は參詣する。況んや現に子供のある太子が(それは次にいふ)、自分は子孫をこしらへないから、參詣の道を造るに及ばないなど、そんなしらじらしい事は言へまい。これはやはり墓そのものの諸所を斷ち切り、所謂墓相を變へる事に違ひない。私はまだ墓相



なるものについては、何等の知識を持たないが、此所の記事はどうしても墓の構造によつて子孫の断絶を計つたものと見るのが至當ではないかと思ふ。この段の本文だけを讀むと、太子には子供がなかつたやうであるが、さうではない。法王帝説にいふ、「聖徳法王聖三諸部加多夫古臣女子名善岐岐美郎女。生三兒春米女子。次長谷王。次久波太女王。次波止利女王。次三枝王。次伊止志古王。次麻呂王。次馬屋古女王（已上八人）。又聖王娶蘇我馬古叔尼大臣女子名負古郎女。生三兒山代大兄王。次財王。次日置王。次片岡女王（已上四人）。又聖王娶尾治王子位奈都橋王。生三兒白髮部王、次手鳥女王。合聖王兒十四王子也。」

七

人々をうらむ

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立去らでのみ住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからむ。世はさだめなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべを待ち、夏のせみの春秋を知らぬもあるぞかし。つく／＼と一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。あかすをしと思はば、千年を過すとも、一夜の夢のこ、ちこそせめ。すみはてぬ世に、みにくすがたを待ちえて何かはせむ。いのちながければ、恥おほし。ながくとも四十にたらぬほどにて死なむこそ、めやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人にいでまじらはむ事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さかゆ

あだし野の露が直消え失せてしまふやうに、消え失せてしまふ時なく、又鳥部山の煙が直立去つてしまふやうに、此の世を立去つてしまふ事なく、人といふものが若し永久に此の世に住みおほせる習ひのものであつたならば、どんなに物の情趣

く末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世をむさばる心のみふかく、物のあはれも知らずなりゆくなむ、あさましき。

不老不死といふ事は、昔から多くの人の願ふ事であるが、若し假に人間といふものが不老不死であつたならば、人生は單調平凡なものであつて、何の面白みもあるまい。やはり世の中は無常なのがよい。人生を短いもののやうにいふが、世には好癖や夏の蟬のやうなものもあるのだ。要するに氣持一つである。ゆつたりとした氣持で暮せば、たとひ一年でも長い。死ぬのが厭だ／＼と思つて暮せば、たとひ千年生きても、一夜のやうな氣がするであらう。どうせ遂には死なねばならぬ人の身である。年とつて醜くなつて生きて居たところで仕方がない。まあ四十にならぬくらゐの所で死ぬのがよからうといふのである。

【あだし野】山城國嵯峨野の奥、愛宕山の麓（今は京都市内）で、墓地のあつた所だといふが、はつきりした場所にはわからない。とにかく「あだし」は、はかないといふ意の語であるから、歌にはよく詠まれて居る。此所もたゞ歌に詠む地名をそのまま持つて来たので、實は何處にある地名でも構はないのである。【消ゆる時なく】「露」といつたから「消ゆ」といふ。人の死ぬことを含めていつたのである。さうして「消ゆることなく」は、永久に死なないことをいふ。【鳥部山】これも京都の地名。阿彌陀峯附近をいふ。山の下は鳥部野といつたらしく、この邊にも昔墓所・茶毘所があつたのである。【煙立去らでのみ】「煙」は、火葬の煙をいふ。「立去る」は、煙の立上つて消えて行くことに、人の死んでゆくことをかけて言つた語。「のみ」は、少しも消ゆる時なくとか、全く立去らずとかいふ風に、上の句の意義を強める爲においたのである。【住みはつる】住みおほせる。徹頭徹尾住みとほす、即ち永遠に不老不死であること。源平盛衰記（一八）に「住みはつまじき世を厭ひて」とあるは、丁度これと反對の言ひ方で、無常の現世をいふ。【ならひ】ならはし。即ち人間が誰も皆さういふものときまつて居るといふ意を表はす。【いかに物のあはれもなからむ】どんなに物のあはれもないことであらう。「物のあはれ」は、簡単にいへば、

【七】あだし野の露消ゆる時なく

のないことであらう。やはり人の世は、無常變易、定めのないがよいのである。生命のあるものについて見るのに、人ほど長生きするものはない。世には、朝に生れて夕には死ぬ好癖のやうなものもあれば、春も秋も知らない夏の蟬のやうなものもあるのである。ゆつたりとした心持で暮せば、たとひ一年を暮すだけの間でも、非常にのんびりとした氣持のするものである。何時まで生きても不足に思ひ、死ぬのを惜しいと思つたならば、たとひ千年を過しても、一夜の夢のや



うな気がするであらう。どうせ永遠に住みおほせることの出来ない此の世に、老いて醜い姿となるまで生き伸びて居たところで、何の益があらう。古人も言つた通り、長生きすれば恥が多い。たとひ長生きしても、四十に足らぬくらゐの所で死ぬのが最も見苦しくないであらう。其の年配を過ぎると、醜い容貌を恥ぢる心もなく、人中へ出しゃばらうと思ひ、餘命幾何もない身で以て、子孫の事を心にかけて、其等の榮えて行く後々までも生きて居らうと思ひ、一途に浮世の名利を

情趣といふやうな事であるが、この「もの」は人事・事物・事件等廣くひつくるめていひ、殆ど無意味に近いほど軽い意味、あはれは勿論悲哀だけではなく、嬉しいこと、悲しいこと、面白いことなど、すべて人の感情を動かすものをいふのであつて、「物のあはれ」といへば、大體しみじみと人を感じしめる世慮人情といふやうな事になる。【世はさだめなきこそいみじけれ】この世は無常であるのが面白いのだといふ意。【人ばかり】人ほど。人くらゐ。【かげろふのゆふべを待ち】「かげろふ」は、所謂蜉蝣の事。蜻蛉に似て小さい蟲。夏の夕方など、水邊に群飛するもの。その幼蟲は水中に在つて、兩三年を経過して、やつと成蟲となるが、一旦成蟲となれば、數時間で死んでしまふ。よつて昔から、はかないものの例に擧げられて居る。「ゆふべを待ち」は、文段抄に「一日を一期とするころ也」とあり、どの註釋書も皆この意味で、沼波氏の「講話」などにも、「夕を待ちつけて死ぬ、朝生れて夕にはもう死ぬを云ふ」と、はつきり書いてある。これでも勿論意味はわかるが、夕方になれば死ぬといふことを、「夕を待ち」といふであらうか。思ふに筆者の心では、下の「知らぬ」の「ぬ」といふ打消をば、この「待ち」までかけて書いたので、はつきりと書直せば「かげろふの夕を待たず、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし」とあるべき所であらう。【夏のせみの春秋を知らぬもあるぞかし】夏鳴いて居る蟬は、たゞ夏の間だけの命で、春も秋も知らぬといふだけの意。たゞ人間に比して極めて短い生命のものもあるといつただけの事である。莊子逍遙遊篇に「朝菌不<sub>レ</sub>知晦朔、蟪蛄不<sub>レ</sub>知春秋。」とあり、註に「蟪蛄寒蟬也。春生夏死。夏生秋死」とある。【つくぐと一年をくらすほどだにも】「つくぐと」は、ゆつたりとした氣持で、即ち何時までこれだけの仕事をしなればなればならぬといとか、うつかりして寝過しては時刻に後れるとか、そんなせか／＼した氣持は少しもなくの意。「ほど」は、間。【だにも】は「だけでも」といふやうな意で、五年十年の長い間ではなく、僅か一年の間だけでも、つくぐと暮せば云々といふ意になるのである。【こよなうのどけしや】「こよなう」は「こよなく」の音便。この上なく、非常に。「のどけしや」の「や」は、「よ」と同じやうな心持を表はす助詞であるから、のどかであるよといふやうな意味になる。「のどか」は、ゆつたりとした氣持で、少しも差迫つた感じのしないこと。【あかすをしと思はば】「あかす」は、飽かず。いくら長生きをしても、それで十分と思はず、何時までたつても、命が惜しいと思つたら。【千年を

貪る心ばかりが深く、物の情趣も何も分らずなつて行くのは、實に情ない事である。

過すとも】「千年」は、たゞ非常に長い年月といふだけのこと。たとひ千年も長生きしても。【一夜の夢】單に意味の上からいへば、これはたゞ「一夜」といつてもよい所であるが、夢といふものは、殊にはかない感をも與へるのであるから、極短といふ意を表はすためには、夢を持つて来るのが普通である。【すみはてぬ世に】永久に住みおほせることの出来ない世に。どうせ死なねばならぬ世に。【みにくきすがたを待ちえて】「待ち得」は、「待ちつく」と同じく、待つて居てそれに會ふことの出来るをいふ。年が寄れば醜い姿となることはきまつて居る、その醜い姿になるまで生きながらへて居ての意。【何かはせむ】どうしようか、どうにもしやうがない。即ち何の益があらうか、何の益もないといふ意。【いのちながければ恥多し】莊子にある語。同書天地篇にいふ「堯曰。多男子則多<sub>レ</sub>懼。富則多<sub>レ</sub>事。壽則多<sub>レ</sub>辱。是三者。非<sub>レ</sub>所以<sub>レ</sub>美<sub>レ</sub>徳也。故辭。」【めやすかるべけれ】「めやすし」は、見苦しくない。但し容姿についていふのではない。無難だといふくらゐの意。【そのほど】「ほど」は、頃、時分。此所では年配といふやうな意。前を承けて、四十歳頃をいふ。【かたちを恥づる心】「かたち」は、容貌。年取つて醜くなつた容貌を恥づかしいと思ふ心。【人にいであまじらはむことを思ひ】「人にいであまじらはむ」は、「世に出で交はらむ」といふに同じく、世間に出て人に交はる意であるが、要するに、とかく出しやばつて世間の事に關係しようとするをいふ。【夕の陽に子孫を愛し】「夕の陽」は、次に擧げる白樂天の詩句なる「夕陽」の語を直譯して、老年の意に使つたのである。餘命いくばくもないやうな老いばれの身で以て、子供の事などを氣にかけるといふ意。白氏文集卷二、秦中吟の中、「不致仕」と題する詩中にある句。「七十而致仕。禮法有<sub>レ</sub>明文。何乃貪<sub>レ</sub>榮者。斯言如<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>聞。可<sub>レ</sub>憐八九十。齒墮雙眸昏。朝露食<sub>レ</sub>名利。夕陽憂<sub>レ</sub>子孫云々。」但し兼好は例の漠然たる記憶のまゝに「憂」を「愛」としたのであらう。尤もさうしたからとて、誤といふわけではない。【さかゆく末を見むまでの命をあらまし】「さかゆく末」は、その子孫の榮えてゆく後々といふこと。「あらまし」は「あらます」といふ動詞。豫期するといふ意であるが、此所は軽い願望の意を含めて用ゐたのである。即ち自分の子や孫が榮えて行くのを見る後々までも長生きして居りたいと思ふをいふ。【ひたすら世をむさばる】「ひたすら」は、「一途に」。「世をむさばる」は、金持になること、地位を得ること、長生きすること等、さうしたいろ／＼の浮世の慾を逞しうすること。必ずしも餘は

【七】 あだし野の露消ゆる時なく



かりについていふのではない。【あさまし】情ない。

八

世の人の心まどはす事色欲にはしかず。人の心はおろかなる物かな。にほひなどは、かりの物なるに、しばらく衣裳に薰物すと知りながら、えならぬにほひには、必ず心ときめきするものなり。久米の仙人の物あらふ女の脛の白きを見て、通をうしなひけむは、まことに手足・はだへなどのきよらに肥えあぶらづきたらむは、外の色ならねば、さもあらむかし。

人間といふものは馬鹿なもので、よくいろ／＼のものに迷はされるが、その中一番人を迷はすものは何かといふと、色慾である。昔久米の仙人が洗濯する女の白い脛を見て、通力を失つて落ちたといふ話があるが、肥え脂がついた美しい女の肌を見ては、なるほどそんな事にもならうといふのである。

又「如かず」それは及ぶものはないの意。つまり色慾が第一だといふのである。【色欲にはしかず】「しからず」は、「若かず」「にほひ」は、物の香をいふ。「假の物」は、本来その物に附いて居るものではなく、たゞちよつと一時的に附いて居る物といふ意。(正徹本には「かりの物ぞかし」とある)。「しばらく衣裳に薰物す」昔は今日のやうに香水といふものがなかつたので、香をたいて、その薫を着物にしみ込ませた。さうすることをいふ。さて「しばらく」は、その香のついて居る間をいふ。つまり香をたいて、衣裳をにほはせる、その薫はたゞ暫くついて居るだけのものであるのといふ意である。(文字の上では、香をたく間が暫くであるやうに見えるが、實際の意味は右に言ふ通りである)。

美しく肥えて、つやつやとして居るのは、外の色でなく、肉體その物の色であるから、成程それも尤もな事である。

ある)。「えならぬにほひ」何とも言へないよいにほひ。【心ときめきする】「ときめきす」は、「ときめく」といふと同じで、胸さわぎがする、胸がわく／＼するなどの意。ひそかに戀して居る人に、突然道で遇つた時などの心持はそれである。枕草子に、「心ときめきするもの。雀の子がひ、兒遊ばする所の前渡りたる、よきたき物たきて、ひとり臥したる、唐の鏡の少しくらき見たる、よき男の車とてめて、物いひ案内せさせたる、頭洗ひけさうじて、香にしみたる衣着たる云々。」此所は、これなどが本となつて居るのであらう。【久米の仙人】「仙人」は、文段抄にヤマトとよみ、大成には、センニン・ヤマト兩方によんで居る。どちらでもよいわけだが、センニンとよんでよからう。【物洗ふ女のはき】洗濯をして居る女の脛。【通をうしなひけむ】「通」は、通力、神通力。何事をも爲し得る超自然的な能力。此所は空中を飛行する能力で、その能力が無くなつたことをいふ。【手足はだへなどの】「手足はだへ」は、手足の皮膚でなく、手足及び皮膚の意である。妙な言ひ方であるが、漠然といつたものと思へばよい。【きよらに肥えあぶらづきたらむは】「きよら」は、綺麗。「あぶらづく」は、脂肪の多い皮膚の滑らかにつやつやして居ること。【外の色ならねば】化粧などの外から假りた色でなく、生れつきの肉體そのものの色であるからといふ意であらう。(上の「假のもの」に對していふ)。「さもあらむかし」なるほど、さうもあらう。なるほど、そんな事もあつたらう。尤もな事だの意。

久米の仙人については、今昔物語(一一)に「今昔、大和國吉野郡龍門寺と云寺有り。寺に二人の人籠り居て、仙の法を行ひけり。其仙人の名をば一人を、あづみと云ふ、一人をば久米と云ふ。然るにあづみは前に行ひ得て、既に仙に成りて、飛びて空に昇りにけり。後に久米も既に仙に成りて、空に昇りて飛びて渡る間、吉野河の邊に若き女衣を洗ひて立てり。衣を洗ふとて、女の胸(胸)脛まで擡上げたるに、胸の白かりけるを見て、久米心穢れて其女の前に落ちぬ。其後其女を妻として有り。其仙を行ひたる形ち、今龍門寺に其形を扉に北野の御文に作りて書し給へり。其れ不レ消して于レ今有り。其久米の仙只人に成りにけるに、馬を賣りける渡し文に、前の仙久米とぞ書きて渡しける云々。」

【八】世の人の心まどはす事



女といふものは、髪の見事なのが、特に人の注意を引くやうである。人柄や氣質などは、ちよつと物を言つて居る様子によつて、障子や几帳を隔てて居ても、よく分るものである。ところが何彼(ナニカ)につけて、たいかりその様の様子によつても、男の心を迷はし、すべて女がうちくつるいでよく眠りもせず、つらい日にあつても體を惜しいとも思はず、又普通ならばとても堪へられないうやうな事にも、

九

女は髪のためでたからむこそ、人の目だつべかめれ。人のほど、心ばへなどは、ものうちいひたるけはひにこそ、ものごしにも知らるれ。ことにふれて、うちあるさまにも、人の心をまどはし、すべて女の、うちとけたるいも寝ず、身ををしとも思ひたらず、たふべくもあらぬわざにもよくたへしのぶは、たゞ色をおもふがゆるなり。まことに愛着の道、その根ふかく、源とはし。六塵の樂欲おほしといへども、皆厭離しつべし。其の中にたゞかのまどひのひとつやめがたきのみぞ、老いたるもわかきも、智あるも愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる。されば女の髪すちをよれる綱には、大象もよくつながら、女のはけるあしだにて作れる笛には、秋の鹿かならずよるとぞいひ傳へ侍る。みづからいまして、おそるべくつゝしむべきは、此のまどひなり。

この段は壽命院抄以前段とは別のものとして取扱つて居るが、正徹本では前段に續けて書き、後のものだが、弘賢本なども前段に書續けて居る。同一段として見るには、多少工合の悪いやうな所もあるが、兩段とも結局色慾の恐るべき事を書いたので、筆者自身は同一段のつもりで書いたのではないかと思ふ。前段には、色慾の人を恐は

よく堪へ忍ぶのは、只管男の愛を失ふまいと思ふからだ。全く戀愛といふものは、人間の根本性から出て居るものであるから、その根源は極めて深く、何ともしやうのないものである。元來人間には、耳目その他につぎいろの欲望が澤山あつて、佛教では之を人間の眞性を汚すものだといつて居るが、其等はたとひ澤山あつても、皆離脱することが出来よう。ところがその中にたゞかの色慾の迷といふもの一つだけは、どうしても止めることが出来ないのは、老いたるもの

す恐しい力を書き、女の肌の魅力には仙人も通を失つたといふ話を書いたが、此所には先づその肌をまけないものは女の愛だと言ひ、それから物の言ひぶりなど、女が男の氣を引くいろの事を書いて、さて何といつても、この恋だけはどうとも仕方がない、女には心なき獸さへ迷はされるのだからと言つて、色慾の慣むべきことを言つたのである。

【髪のためでたからむこそ】いろ／＼男の注意を引く事があるが、就中髪の見事なのはといふ意。【人の目だつべかめれ】「目だつ」は、今日の「著しく目につく」といふ意(この場合は自四)ではなく、目をつける、注目する(この場合は自下二)といふ意である。さうして上の「人の」は「人が」といふ意で、人がそれに注意するといふ意になる。「女は髪は立派なのこそ、殊に人が注意するやうである」といふので、「女は……人が……」といふ言ひ方は、少しをかしいやうであるが、國文としては別に間違つた書き方ではない。但し上欄の口語譯では、今日の我々にわかりよい爲、言ひ方を變へておいた。【人のほど心ばへなどは】「人のほど」は、人柄。「心ばへ」は、氣だて、性情。【ものうちいひたるけはひにこそ】「うち」といふ接頭語は、大抵の場合「ちよつと」といふくらの意味を添加する。此所もそれであるが、次の「うちあるさま」の場合もそれである。何かちよつと物を言つた様子によつての意。「けはひにこそ」は、「けはひによりてこそ」の意である。(正徹本・光廣本・弘賢本等には、「ものいひたるけはひに」とある。【ものごしにも知らるれ】「ものごし」は、障子とか几帳とか、何かを間に隔てて居ること。直接その顔色や様子を見なくても、物の言ひぶりなどを聞けば、それだけで、人のほどや心ばへは分るといふのである。【ことにふれて】「折にふれて」(第二段「をりにふれば」参照)と同じやうな意味の言葉で、何か事のあるに當つての意。【うちあるさまにも】文段抄に「つゐる體也」とある通りで、ちよつとある様子、即ち特に細を呈する様子をするといふやうな場合でなく、たゞ何の氣もなく居るやうな場合の様子によつてもこの意。【人の心をまどはし】「人」は、男をいふ。男の心を迷はす。【うちとけたるいも寝ず】「い」(名詞)は寝ること。「うまい」(熟睡)「あさい」(朝寝)などいふ場合の「い」はこれである。但し「いも寝ず」は「寝ても睡られぬ」といふ意ではなく、たゞ寝られない、寝入ることが出来ないといふ意を強く言ふだけのもの。「いぬ」といふ言葉も要するにこの

【九】 女は髪のためでたからむこそ



も、若いものも、又智あるものも思なるものも、何等變る所がないやうである。だから人間ばかりでなく、女の髪筋でよつた綱には、大象でもよくつながら、女のはいて居る足駄で作つた鹿笛には、秋の鹿が必ず寄つて来ると言傳へて居る。自ら戒めて、恐るべく慎むべきものはこの色慾の迷である。

「S」と「ぬ」とを重ねたものである。で、此所の意は、うちとけた心持でゆつくりと寝ることもせずといふ事である。【身ををしとも思ひたらず】女が自分の身を、どんなひどい目にあはせても、少しも惜しいとは思はないといふ意。「思ひたらず」は、「思ひてあらず」で、結局思はないといふ意である。【たふべくもあらぬわざにも】とて我慢が出来ないやうなつらい事にも堪へるといふ意。これも女がさうするのである。【色をおもふがゆゑ】この「色」といふ語は、意味が甚だ漠然として居る。「容色」といふ意に見ても、大體わからない事はないが、それでは内海氏の説の通り、「身を惜しとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬわざにもよく堪へし」のつゞきがをかしい。これはつまり「色氣」といふ場合の「色」である。今日の言葉でいへば、内海氏の説の通り、戀をつよく思ふといふ意味に取つてよからう。換言すれば、男の愛を失ふまいと力める意である。【愛着の道】両性の互に相愛し執着すること。「道」は、たゞ「事」といふくらゐの極軽い意味。【その根ふかく源とほし】「根」と「源」とは要するに同じ事を意味するので、その根源が深い、即ち両性の愛といふものは、その天性に出て居るのであるから、たゞちよつと表面的に一時起つたやうなものとは違ふといふのである。【六塵の樂欲】「六塵」は、佛經の語。佛敎では人間の慾を生ずる根源として、眼・耳・鼻・舌・身・意の六種を挙げ、之を「六根」といつて居るが、この六根の對象となり、心を汚すものとして、色（眼）聲（耳）香（鼻）味（舌）觸（身）法（意）の六種を挙げ、之を「六塵」といつて居る。「塵」は、けがれの意である。「樂欲」の「樂」はコノム、又ネガフといふ意で、この時は香メウ（漢音はガウ）。「樂欲」の二字で、好み願ふ、又は願ひ欲するといふ意になる。（第二四二段参照）。【厭離しつべし】「厭離」は佛語、いとひはなれること。よく厭ひ離れることが出来るであらうの意。【かのまどひ】色慾の迷を指す。【女の愛すぢをよれる綱には云々】力の強い大象でも、女の愛で作つた綱でつなげば、自由に動くことが出来ないといふので、女色の力の如何に強いものであるかを表はしたもので、多分當時の俚諺であらう。但し佛經から出た比喩であらうとは思はれるが、確かな出所は分らない。五苦章句經に「佛言。有三大白象。力壯移山。壞地成洞。拔樹碎石。象力無雙。有三人以髮絆繫其脚。象爲之覺。不能復動云々。」これは女の愛すぢでよつた綱ではないが、或はかういふものが本になつて出来た我が國の俚諺かも知れない。【女のはけるあしだにて作れる笛に

は云々】「笛」は、所謂鹿笛で、獵師が鹿を誘ひ出す爲に吹く笛。それを女のはいた足駄で作ると、鹿がよく寄るといふのである。これも當時の俚諺であらう。

住まひの工合が、何もかもよく調和して、好ましく出来て居るのは、どうせ假の宿りだとは思つても、誠に面白みのあるものである。身分もありよく物のわかつた人が、ゆつたりとした氣持で、物靜かに住んで居る所は、その家の中へ差込んだ月の光も餘所（ヨソ）よりは一層心にしむやうに感ぜられるものである。當世風で、華麗な所はないが、

家居のつきんくしく、あらまほしきこそ、かりのやどりとはい思へど、興あるものなれ。よき人のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひときはしみんと見ゆるぞかし。今めかしく、きらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度もむかしおぼえて、やすらかなること、心にくしと見ゆれ。おほくのたくみの心をつくしてみがきたて、唐の大和の、めづらしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見る目もくるしく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき。又時の間の煙ともなりなむとぞ、うち見るよりもおもはる。

此所は住まひについての好みを述べて居るのである。先づ住まひの工合がよいといふことは、たとひそれが所謂假の宿りであるにしても、實によいものだといひ、次に自分の理想とする住まひの様を述べて居るのであるが、それは當世風で、けばくしたものでなく、木立ものふり、庭なども強ひて手入をせず、自然の趣を失はないやうにし、簀子や垣の造り工合もちよつと氣がきく、道具類などにしても、珍奇なものや高價なものは却つてよくない



邸内の木立も時代がつき、特に手入などせず、自然のままに生えて居る庭の草も、いかにも趣深く見え、簀子や透垣の造り工合も面白く、ちよつと其所に置いてある手まはりの道具類も、古雅な所があつて、わざとらしいものでないのは、いかにも奥ゆかしく思はれるものである。多くの大工どもがよつて、一所懸命に磨きたて、支那のものだの日本ものものだの、いろ／＼珍しく何ともいへない立派な道具類を置並べ、庭の植込の草木まで、不自然に人手を加へて作つてあるのは、

い、古雅で穩當なのがよいといふのである。

【家居のつき／＼しくあらまほしき】「家居の」は、住まひが。「つき／＼し」は、似つかはし、ふさはし。枕草子に「人の家につき／＼しきもの、厨<sup>くしやう</sup>侍の曹司、箒のあたらしき、懸<sup>かか</sup>簾、童女、はしたもの、御立障子云々」といふのがある。これは人の家にあつて、いかにも其所に似つかはしく趣あるやうに感ぜられるものといふ意であるが、此所の「つき／＼し」は、家居そのものがつき／＼しいといふのである。つまり餘り奇抜な建方をしたとか、華美な裝飾を施したとかいふやうな事もなく、又屋根の形は西洋風で、下の方は寺院のやうな所があるといふやうな變な不調和な所もない、さういふ事をいふのであらう。「あらまほし」は、さうありたい。望ましいといふ意であるが、つまり誰が見ても、好ましいといふ感じのすることをいつたのである。なほ此所は「つき／＼しくあらまほし」と續けて讀むべきものではなく、「つき／＼しくあり、又あらまほしくもある」のである。【かりのやどり】ただ一時的の住まひといふ意。この語は、現世そのものをもいふが、此所は家の事であるから、文字通り、たゞ一時的、即ちこの世にある間だけちよつと住んで居る宿といふ意味である。【興ある】面白みのある、趣のある。【よき人】身分もあり、よく物の趣のわかつた上品な人。【のどやかに】ゆつたりと物靜かに。【住みなしたる所】住まひして居る所といふだけの意。源氏物語(夕顔)に「なべての所に似ず、いとどかに心にくゝ住みなしたる所なり。【さし入りたる月の色】その家の中へ差込んだ月の光。【ひとときは】一段。一段。月光の美は、如何なる處でも感ぜられるものであるが、しかしかういふ處では一層云々といふ意になる。【しみ／＼と見ゆ】しみみりと心の奥深くしみ込むやうに感ぜられるといふ意。【今めかしききら／＼かならねど】「今めかし」は、當世風。今日の「ハイカラ」「モダン」などの語は、大體これに似た意味であるが、多少行過ぎたやうな感じもする。【きら／＼か】は、華麗。現代でいへば、風變りな文化住宅などの類である。【木だちものふりて】「木だち」は、立並んで生えて居る木。此所は邸内の木立である。「ものふる」は、何となくふるびて居ること、時代がついて居ること。即ち近頃植えたといふのではなく、既に年數を経て、何處となく重々しく深みのある感じのするをいふ。【わざとならぬ庭の草】特に植ゑつけたとか、手入をしたとかいふのではなく、自然の趣を失はぬ庭の草。【心あるさまに】いかにも

見ても愉快な感じがせず、誠に厭なものである。そんなにしたところ、どうして何時までも生きながらへて、此所に住んで居ることが出来るやう。これ亦瞬時の中に焼けてしまふのだらうと、ちよつと見てさへ、そんな感じがする。

趣の深い様子であり。【簀子透垣のたよりをかしく】「簀子」は、「簀子縁」ともいふ。狭い板を多少隙間をあけて敷並べた縁である。「すいがい」は、スキガキ(透垣)の音便。木又は竹で隙間をあけて造つた垣をいふ。「たよりをかしく」は、其等のものの造り工合が、いかにも趣の深いをいふ。【うちある調度】「うちある」は、前段にあつた「うちある」と同じ意味で、わざ／＼としたのではなく、たゞちよつとあるといふ意。此所は、わざ／＼飾りつけたやうなものではなく、たゞかりそめに置いてある手まはりの道具類といふ意である。【調度】は、今日の辭書は皆テウドと書いてあるが、古くはデウドといつて居たものらしい。【むかしおぼえて】昔の事が思ひ出されるといふ意より轉じて、古風な感じ、又古雅な感じのするをいふ。つまり「今めかし」の反對である。【やすらかなこそ】「やすらか」は、穩當なといふ意。奇抜だとか珍奇だとか或は又華麗だとか高價だとかいふ、さうしたわざとらしい特殊なものでないこと。【心にくしと見ゆれ】いかにもおくゆかしいやうに思はれる。【おほくのたくみの】多くの大工が。但しこの語は、「みがきたて」までかゝるのである。【心をつくして】一所懸命に。【みがきたて】家を立派に造るをいふ。但しこの「たて」は家を建てるの「たて」ではなく、磨いて立派に仕上げるといふ意である。【唐の大和の】支那のや日本のや。源氏物語(常夏)に「からのやまとのませ、いとなつかしくゆひなして。」「えならぬ】何とも言へないほど立派な。【前栽】庭の植込。【心のまゝならず作りなせる】草木の自然のまゝならず、即ち不自然に人工を加へてあること。【心のまゝ】は、人の心でなく、草木の自然といふ意である。【見る目もくるしく】見ても快い感じがしないといふ意。【わびし】面白くない。いやな感じがする。【さてもやはながらへ住むべき】「さても」は、「さて」を強めた語で、「さて」は、さうしての意。即ちさういふ風に華美贅澤な住まひをして居るの意。「やは」は、反語。「ながらへ住むべき」は、生きながらへて久しく住むことが出来るやうや。全體の意は、そんなにして居たところで、何時までも其所に住んで居ることが出来るやうか、到底出来ない。【また時の間の煙ともなりなむ】「時の間」は、忽ちのうちといふこと。「時の間の煙となる」は、瞬く間に焼失してしまふ。これも亦瞬く間に焼失してしまふのであらう。但し「また」は、或は又と、上の句に對立させた氣持でいふのではなく、上の句は、人について、この句は住宅そのものについていふのである。【うち見るよりもおもはるゝ】「うち見る」は、

【一〇】 家居のつき／＼しくあらまほしきこそ



ちよつと見る。ちよつと見れば、直もうそんな感じがするといふ意。(正徹本には「うち見るよりまづおぼゆる」とある。)

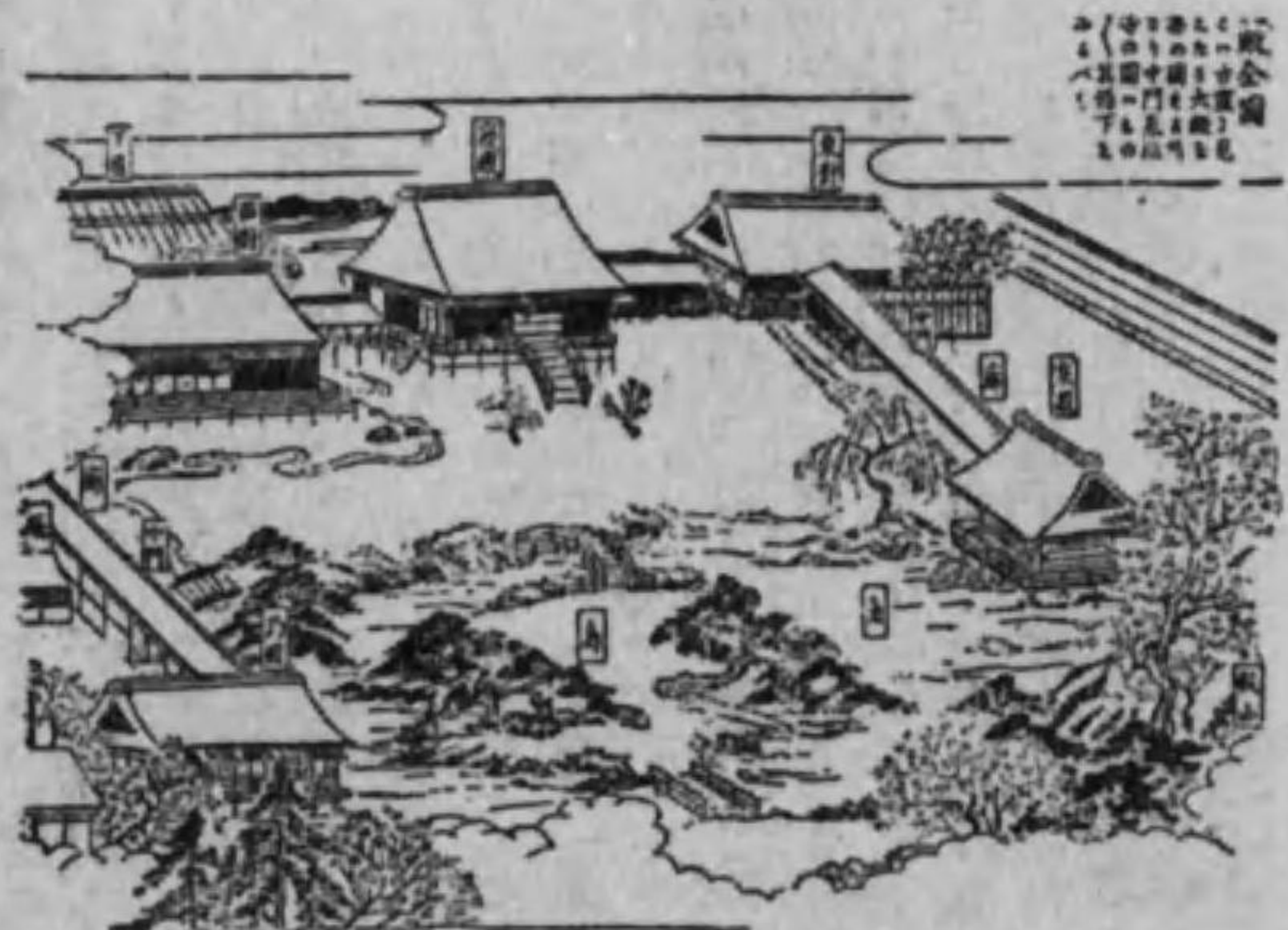
大方は**家居**にこそ、ことざまはおしはからるれ。後徳大寺大臣の、**寢殿**に**鷹**をさせじとて、**繩**をはられたりけるを、**西行**が見て、「**鷹**のむたらむ、何かは苦しかるべき。此の殿の御心さばかりにこそ」とて、その後はまゐらざりけると聞き侍るに、**綾小路宮**のおはします**小坂殿**の棟に、いつぞや**繩**をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや「**鳥**のむれゐて、池のかへるをとりければ、御覽じかなしませ給ひてなむ」と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。徳大寺にも、いかなるゆるか侍りけむ。

【前】 前の所で、自分の好みに合ふ造りざまと、さうでないものとの二つについて書いたので、その結論といったやうな形で、先づその住まひの様子を見れば、大體はその主人の様子や心持もわかるといひ、それから、その例として二つの事實を挙げたのである。

【大方は】 大體。總括的にいつたのである。(正徹本には「は」なし)。「家居にこそ」「にこそ」は、によりてこそその意。住まひの様子によつて。【ことざま】 事の様。様子。但し此所は、その家の主人の平生の様子とか心持とかをいふ。【後徳大寺大臣】 藤原實定(サネサダ)であらうが、普通はジツテイといつて居る。公能の子。壽永二年内大臣、文治二年右大臣、やがて同五年轉じて左大臣となつたが、建久元年官を辭し、翌年薨、名を如圖といつた。この年薨去、年五十三。非常な藏書家で、和漢の書萬餘卷を蔵したといふ。又和歌を好み、常に歌人を招い

大體その住まひの様子によつて、その家の主人の心持・心持などは推量の出来るものである。後徳大寺の大臣が、その寢殿に鷹を居させないやうにといふので、屋根の上に繩を張られて居るのを、西行が見て、「鷹が居たからとて、それがどうして差支があらう。この殿の御心は、そのくらの所だな」といつて、それから再びその邸へは行かなかつたといふことを聞いて居たが、綾小路宮の居られる小坂殿の棟に何時

であつたか、繩が引張つてあつたので、かの西行の例が思ひ出されたが、ほんにこれは、「鳥が澤山居て、池の蛙を捕つたので、それを宮様が御覽になつて、かはいさうだと思ひ召され、かういふ風にされたのです」と、或人が話したので、さういふわけであつたとすると、それは誠に結構な事だと思つた。これから考へると、徳大寺の方にも、何か理由があつたのかも知れない。



(考雜屋家) 圖の造殿寢

て、共に諷詠を楽しんだといふ。百人一首にある「ほととぎす鳴きつる方を眺むれば」といふ歌はこの人の作である。【寢殿】 正殿といふこと。貴族の家のおもやにあたる建物である。これを中心として造つた邸宅の構造を「寢殿造」といひ、大體上圖のやうな形式のものであつたといふ。池のある方が南で、建物はすべて南向の構造となつて居る。(尤も必ずさうとはきまつて居ない)。「鷹をさせじ」これは寢殿の屋根に鷹を止らせないやうにしようといふのである。【西行】 西行法師。俗名佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷九世の孫。父は左衛門尉康清といふ。代々武を以て家を立て、義清亦勇敢で射を善くし、又和歌の道にすぐれて居た。鳥羽院に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉に任ぜられ、院にも愛されたが、元來名利を喜ばず、厭離の志のあつた彼は、二十三歳の時、遂に意を決して世を捨て、西行又は圓位といつた。その後は殆ど行脚に日を送り、興至れば和歌を詠んで、全然出世間の生活をなし、建久元年二月十六日、七十三歳を以て京都に寂した。此所にある話は古令著聞集(一五)に見えて居る。曰く、「西行法師出家よりさきは、徳大寺左大臣の家人にて侍りけり。多年修行の後、都へ歸りて、年比の主君にておはしますむつまじきに、後徳大寺左大臣の御もとにたどり参りて、先づ門外より内を見入れければ、寢殿のむねに繩をはりけり。あやしう思ひて、人に尋ねければ、あれは鷹をすゑじとて、はられたると答へけるを聞きて、鷹のある、何か苦しきとて、怒みて歸りぬ。」こゝに徳大寺左大臣といふのは、實

【一〇】 家居のつきまじくあらまほしきこそ



定の祖父實能の事をいふ。この人は保元元年左大臣となり、翌年正月從一位に進んだが、その年致仕朝妻、やがて六十二歳を以て薨じた（この時實定は非參議左中將で十九歳）。この實能が衣笠岡に徳大寺を建てた事から、この家を徳大寺といひ、子孫相繼いで明治に至り、今日も侯爵として存して居る。さて西行の死んだ年を、後成家集によつて、建久元年二月十六日とし、出家したのを保延六年二十三歳の時とすれば、この保延六年は實能四十五歳の時で、彼が權大納言の時代である。さうしてこの時、實定は僅かに二歳、まだ左大臣どころの騒ぎではない。保元二年實能薨去の年にやつと十九歳になつて居るのである（この年西行は四十歳）。だから西行が出家前に仕へて居たのは、いふまでもなく實能の事であるが、實定は實能の孫として徳大寺家をついだからして、西行も後には之を主君として訪ねて行つたのであらう。ところで實定を特に後徳大寺といふのは、同じ徳大寺で、祖父の實能も孫の實定も同じ左大臣であるから、それを區別する爲に、實能は「徳大寺」といひ、實定は「後徳大寺」（ノチノトクダイジ）といつたのである。【高のむらむ何かは苦しかるべき】「むらむは」となつて居る本もある。「は」はなくてもよさうだが、意味は「は」のあるものとして見ればわかり易い。高が居たからとて、何の差支があらうといふ意。【この殿の御心さばかりにこそ】「この殿」は、實定を指す。「さばかりにこそ」は、それくらゐにこそあれ、即ち大抵その程度の心の人なんだらう、くだらないといふ意になる。【綾小路宮】性惠法親王。龜山院の皇子。本朝皇胤相運録に「性惠法親王、無品、妙法院、上野綾小路、母内大臣公親公女。」又諸門跡譜、妙法院の項に「無品、龜山院皇子、後嵯峨院孫、道教僧正資。」とある。つまり妙法院の道教の弟子となつた人で、上野宮又は綾小路宮といつた人であるが、一代要記に弘安八年親王宣下のおつたことが書いてある外、くはしい事はわからない。【小坂殿】山城名勝志（一四）に云ふ「按、妙法院門跡系譜に、尊性法親王、性惠法親王二代を小坂殿と記せり。小坂は綾小路の末に當れり、故に綾小路宮とも申すにや。今の妙法院御所の内に、小坂殿といふ有り、此御所の遺名なるにや。又妙法院の白河殿も是と同所乎。」【いつぞや】今日の口語に「いふ」と同じ意味。【思ひ出でられ侍りしに】ふと兼好の心に思ひ出したのである。この「ちる」も、自然にさうなるといふ意のものである。【まことや】文段抄にこ

の語を釋して、「人の語りし事をいひ出るとて、まことにやあらんと少し疑ふやうの時、書出る詞なり、源氏に多き文體なり」とあるが、此所は「まことにや」の意ではなく、「本當にまあ」といふやうな意で、その下の句全體にかゝるのである。つまり聞いて見ると、なるほどさうだといふやうな意味を表はすのである。【鳥のむれむれ】「むれむれ」は、群り居て。澤山の鳥が居て。【御覽じかなしませ給ひてなむ】それを御覽になつて、かはいさうだと思し召されての意。「なむ」は、例の下に何か語の省かれて居るもの。【人のかたりしこそ】「人の」は、或人がの意。「かたりしこそ」は、「語りしにこそ」で、語りしによりての意。さうしてこの「こそ」に對する結は「おぼえしか」の「しか」である。【さてはいみじくこそ】「さては」は、それでは。さういふわけであつたとすればの意。「いみじくこそ」は、實に結構な事だ。（意味からいへば、「いみじ」は、殊勝とか奇特とかいふに當るが、身分の上の人について言ふのであるから、さういふ語は少し工合が悪いかも知れない。【徳大寺にも】前には「後徳大寺」とあつたが、畢竟同じ家であることは、前の説明でわかるであらう。

一一

十月頃のこと、栗栖野といふ所を過ぎて、さる山里にたづねて入（へ）つて行つた事があつた。すると其所に、昔の生えた細い道がすうつと遠く續いて、その奥に、見るか

神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遙かなる昔の細道をふみわけて、心ばそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもる、笈のしづくならでは、つゆおとなふものなし。關伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしくかこひたりしこそ、すこしことごとめて、この木なからまし

「一一」神無月の比



かばとおぼえしか。

前段には、住まひの工合を見れば、其所に住んで居る主人の心もわかるといふ意味の事が書いてあつたが、それに多少關聯した實例として、嘗て自分の経験した事柄(何處までが本當の事だか、それは分らないが)を述べたのである。或時、所用があつて、或山里へ行つた時の事、まるで人里を遠く離れた山の中に、いかにも閑寂らしい一つの庵があつたので、いゝ所だなあと思つて、しみじみと感じつゝその邊を見廻して居た。そこまでは誠によかつたのだが、ふと見ると、向うに大きな柑子の木があり、それに澤山な實がなつて居る。ところがその木の周圍には嚴重な垣を作つて、人の近づけないやうにしてある。あゝこの閑寂の境に、これは又何たる俗な仕方だと思ふと、忽ち興がさめたといふのである。

【神無月】 カミナヅキともカンナヅキともいふ。十月のこと。但し今でいへば、舊曆の十月であるから、大體今の十一月にあたるのである。【栗栖野】「栗栖」といふ地名は諸國にあり、大日本地名辭書を見ても、九箇所擧つて居るが、此所に見えるのは、どうしても京都附近に違ひないから、山城のものであらう。但し地名辭書には、宇治郡の條に、「名跡志云、花山の巳午の間二町許、醍醐路の邊を云。古より栗栖野に就て異説あり云々」とある。文段抄にも「山城國醍醐の邊也、歌にもよめる名所也」とあるが、伴蒿溪の閑田耕筆を見ると、「栗栖野、山城に二所人皆しれり。契沖阿闍梨和名抄を引きて、愛宕郡栗野久留須、又宇治郡小栗(乎久留須)、所の名、凡二字なれば、栗野は栖字を略してクルスト、野の字は加へながらよまざるなり。但し假名村の乃字落たるにや、小栗は小栗栖なるを、これも栖字を略きてよみ付けたるなり。くるすの小野と歌にみゆるは、皆愛宕郡なるをよむ。唯新撰六帖に、光俊、ふる雨にくるすの小野の小鷹狩ぬれしぞ家の始なりける、とよめるは宇治郡なり(是は故事によればなり)云々。【遙かなる苔の細道をふみわけて】「遙かなる」は、その道のずろつと長く續いて見えること。「苔の細道」は、苔の生えた細い道。「ふみわけて」については、内海氏の説が妥當である。自分の思ふ所と同じであるから、それをそのまま拜借しておく。「苔のついた細道が長くつゞいてゐるのを踏みわけてといふのである。ところで、こゝには修

ら心細さうな様子で人の住んで居る庵があつた。まるで人里離れた所で、落葉の下に埋れた筈から落ちる水の音以外には、何一つ聲を立てて訪ねて来るものもない。しかし閑寂の網に菊や紅葉を折り散らしてあるのは、さすがに住む人があるからだらう。まあ、こんなにしても住んで居られるのだと、しみじみと感じ入つて見て居る中に、向うの庭に大きな柑子の木の、枝もたわむほど澤山に實のなつたのが見える。ところがよく見ると、その周圍を嚴重に圍つてあるので、少々興が

さめて、あゝ若しこの木がなかつたならば、どんなによからうに思つた。

辭的のあらはし方がしてあるのだ。つまり作者自身と庵の主人公の氣分とをこつたにして書いた修辭である。作者の方からいへば、遙かな苔の細道を踏みわけていくと、そこに草の庵があるのである。庵の主人公の方からいへば、遙かな苔の細道を踏みわけてきて、こゝに草の庵を結んだのである。それを作者はその庵の前に立つ時、それがその、自分の平生理想に描いてゐた閑居のいゝ趣であつたので、ふと自分みづから、遙かな苔の細道を踏みわけてきて、こゝに草の庵を結びなしたといふやうな氣分になつて、その氣分をそのままあらはす爲に、わざとからして、それをこつたにして書いたのだ。その修辭がいかに面白味はれるのである。【心ばそく住みなしたる庵あり】「心細く」は、見た者の感じを、そのまま其所に住んで居る人の感じにしてしまつて書いたのだ。理窟通りにいへば「心細げに」である。「住みなす」は、前段にもある(三四頁)それと同じで、たゞ住まひをして居るといふだけのこと。「庵」はイハとよんでもイホリとよんでもよい(このホはオと發音する)。假住まひの粗末な家といふこと。【木の葉にうづもるゝ寛】「寛」は「懸繩」で、地上に架設して水を通すやうにしたとひ。山の中で、秋は落葉が多い上に、誰も掃除する者がいないから、寛の上に木の葉が落ち重つて、殆どその存在も見えないやうになつて居るのをいつたのである。【しづくならでは】「しづく」は、寛からしたゞり落ちる水をいふ。その水の音でなくてはの意。(しづくの音ならでは)といふべき所であるが、直下に「おとなふ」が来るので、「音」をそれにきかせて、上には省いたのである。【つゆおとなふものなし】「つゆ」は、少しも。「おとなふ」は、おとづれる。即ち人の訪問して来るをいふ。【閑伽湖】「閑伽」は、「阿伽」とも書く。梵語 Arghya をうつした語で、水の意。但し佛教關係では、特に佛に奉る水をいふ。「閑伽湖」は、佛に供へる水や花などを置く爲に設けた湖。【菊紅葉など折りちらしたる】「折りちらしたる」は、「折り散らしたる」の意。佛に供へる菊や紅葉が、折り取つて湖に置いてあるのであるが、それがきちんと整理して置いてあるのでなく、亂れた形で置いてあるのをいつたのである。(正徹本には「折りちらしたるは」とある)。「さすがに」さうはいふものといふ意。こんな寂しい所で、人などは住んで居さうもないのだが、さうはいふものやはり。「かくてもあられるよ」。「かくても」は、こんなにしてでも、即ちかういふ人里離れた所に、訪ねて来る人もなく、寛の音を友として一人住んで居るといふこと。こんな



してでも住んで居られるのぢやはいといふやうな意。【あはれに見るほどに】しみんと心に深く感じながら眺めて居るうちに。【かなたの庭】今、兼好の立つて居るのは、入口の所か何かわからないが、とにかくその立つて居る所から少し離れた所に庭のあるのが見えたのである。【柑子の木】「柑子」は、本草和名に「柑子、和名加牟之。」倭名類聚抄にも「和名加無之」とあるから、古くは「かんじ」といつて居たのが、後に音便で「かうじ」といふやうになつたのであらう。和漢三才圖會には「和名加無之、俗云加牟之」とある。今いふミカンの事であらう。【枝もたわむになりたるが】「たわむ」は、たわむほどにの意。實が澤山なつて居る様をいふ。但しこの「なりたる」の「なる」は、「あゝなつた、かうなつた」といふやうな場合の「なる」とも見られ、實がなるといふ意味の「なる」とも見られ、どちらの意味に取つても、解釋はつくが、此所の「なる」は、やはり「實がなる」といふ意に見た方が適當であらう。次に此所の「が」は、「けれども」の意に近い。「が」でもなく、又所有を示す「の」と同意のものでもなく、これは「實のなつて居るのが」といふ意味である。但しわかり易く口語でいへば、「實のなつて居るのがあつて、そのまはり」といふ事になるであらう。【かこひたりし】周圍に垣か何かをこしらへてあつたのをいふ。【ことざめて】興ざめて。今まで面白いと思つて居た感が消えたこと。上の「かこひたりしこそ」は、「ことざむ」の原因になるのであるから、「かこひたりしによりて」の意と見るべきである。【この木なからましかばとおぼえしか】もしもこの木がなかつたら、よからうにと思つたといふ意。「ましかば」は、實際はあるけれども、もし假になかつたとしたらといふ意で、この下に「よからまし」などの語が略されて居ると見ればよい。

一一一

おなじ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしき事も世のはかなき事も、うらなくいひなぐさまむこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、露たがはざらむとむかひ居たらむは、

【よく氣のあふ人と、しんみりと話しあつて、面

ひとりあるこゝちやせむ。たがひにいひむほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いささかたがふ所もあらむ人こそ、我はさやは思ふなど、あらずひにくみ、さるからさぞとも、うちかたらはば、つれなくさまめとおもへど、げには少しかこつたかたも、我とひとしからざらむ人は、大方のよしなしごとといはむほどこそあらめ、まめやかな心の友には、遙かにへだたる所のありぬべきぞわびしきや。

白い事でも、或は又世間のつまらぬ事でも、互に覆藏なく言ひあつて、心を慰めることが出来れば、嬉しいに違ひないが、かういふ人があるまいから、少しでも相手の心に違はないやうにしようと思ひながら對ひあつて居たらば、まるで一人ぼつちで居るやうな氣持がするであらう。互に言ふ事をば、なるほど尤もだ、一理はあると聞くだけの價値は認めながらも、其所に多少違つた點もあるやうな人こそ、自分はいさうは思はない、などと言争ひ、又「さういふわけだから、

【これは友人といふものについての感想を書いたのである。先づ第一節は、自分とよく氣の合つた人間があつて、

どんな話にしろ、それと心の底から話しあつたら、まぞ喜ばしいだらうといふのである。ところがさういふ人間は減多にあるまい。そこで意見や趣味の違つた相手と話しながら、仕方がないから、強ひて自分をおさへて相手の言ふ所を聞く。こんなのでは、人と相對して居ながらも、實は心中ではまるで一人ぼつちで居るやうなものであらうといふのである。これが第二節。しかし合ふ合はぬといふのも程度問題で、大體は似た傾向を持つて居るが、多少違ふ所はある。かういふ人は、場合によつては意見の相違で、多少議論などもするが、元來似た傾向のものであるから、喧嘩になるわけでもなく、又強ひて自分を抑へて聞かねばならぬといふ必要もない。だからかういふ相手と話せば、いかにも生々とした氣持がして愉快だらうといふのである。これが第三節。けれども今少し深く考へて見ると、結局これも駄目である。本當に心の底からしみんと語りあふには、やはり第一節に言つた通りの相手でないければ仕方がない。これが第四節である。かう見て来ると、結局本當の友といふものは得られないといふことになる。

【おなじ心ならむ人】自分と趣味・嗜好・意見等のよく合つて居る人。【しめやかに物語して】しんみりと話しあつて。【をかしき事】これも次の「はかなき事」と同様、「世の」といふ語を冠してもよい。世間の面白い事。

一一二 おなじ心ならむ人と



さうなんだ」などと言つて話しあつたならば、退屈もまぎれるだらうと思ふが、しかし實際ちよつとわび言をいふくらゐの點でも、自分と同じくないやうな人は、たゞ一通りのつまらない事を言ふうちにはよからうけれども、本當に心の底から氣がよく合ひ、信じあつた友人として見るには、なほずつと遠く隔たつた所があるに違ひない、これはどうも困つた事だ。

【世のはかなき事】世間のつまらない事柄。(世の中の無常な事といふ意ではない)。「うらなくいひなぐさまむこそ」。「うらなく」は、隔てなく、覆藏なく。「いひなぐさまむ」は、互に話し合つて、心を慰めること。(この「こそ」に對する結は、下が「かるべきに」となつた爲に消失したのである)。「さる人あるまじければ」さういふ人はあるまいから。【露たがはざらむと】「露」は、借字、少しもの意。少しも相手の心に違はないやうにと思つて。「と」は「とて」の意。【むかひ居たらむは】對ひ居るのはの意。尤も口語では、對ひあつて居てはといつてよからう。【ひとりあるこちやせむ】人と對坐して居ながらも、まるで一人ぼつちで居るやうな氣がするだらうといふ意。(正徹本には、この上に「たゞ」とある)。「互にいはむほどの事をば」。「ほど」は、程度及び範圍を表はす。「いはむ」は「互」の兩方にかけていふのであるが、分りよくいへば、「お互にその相手の言ふ事をば」である。【げにと聞かひあるものから】「げにと」は、なるほど尤もだと。「聞くかひ」は、聞くだけの價值。なるほどそれも一理はあると、相手の言ふ所に對し、聞くだけの價值があるとは互に思ふものといふ意。【いさゝかたがふ所もあらむ人】大體は同意をするが、しかし少しは意見の違つた所もある人。【我はさやは思ふ】「さ」は然、即ちさうといふこと、「やは」は反語。自分は、さう思はうや、さうは思はないの意。【あらそひにくみ】「にくみ」は、極端く、殆ど只附けただけで、言争ふ、論じあふといふくらゐの意。【さるからさぞともうかたらはば】「さる」は、然る、即ちさうである。「さぞ」は、さうであるぞ。「かたらふ」は、語りあふ。さういふわけであるから、さうなんだといふ風にも語りあつたならば。【つれづれなぐさまめ】無聊を慰める、即ち退屈もまぎれるだらうの意。第七五段に「つれづれわぶる人は、いかなる心ならむ。まぎるゝ方なく、たゞ一人あるのみこそよけれ」とある。一方にさういふ事を書いて居る筆者が、何故こんな事を書くかといふ疑問が起らうから、一言する。これは戀愛觀や飲酒觀におけると同じく、同じ物を兩面から觀たのと、今一つは、多少誇張的な言ひ方をした爲、ちよつと矛盾したやうに見えるまでの事である。【げには】「げにも」「げにや」と同じく、「げに」といふ副詞に感動の助詞「は」のついたもの。随つて意味は「げに」といふと同じで、それが少し強い意味に使はれて居ると思へばよい。【少しかこつたも云々】この「かこつ」は、ちよつと分りにくい語である。先づ壽命院抄には「カコツは、とやかくと互に云ひあ

らそふ心なるべし。是隔心ならぬ故也」とあり、以下の註略ど皆之と同じで、「いひ争ふ」意にとつてある。近頃のものでは、沼波氏の「不平をいふ」、内海氏の「いひたてにする」、即ち意見を異にする、塚本氏の「世の中に對して歎きかこつ」などの説があるが、その中沼波氏の「かたも」で文を切り、「この下にアルと云ふ語を省けり」といふやうな見方や、藤田氏の「かこつ方の人も」と見るといふやうな説は、それが既に誤ではないかと私は思ふ。ところで「かこつ」とは何かといふに、これはやはり、普通の辭書にある通り、「歎きいふ、わびごとをいふ、怨言をいふ」といふ意で(この外にカコツケルといふ意もあるが)、これを外にしてさう變つた意味はあるまい。然らば此所の意味はどうか。此所はやはり「わびごとをいふ」といふ意に見てよからうと私は思ふ。塚本氏は、かういふ風に見ると、少しでも自分と意見の違つた人はといふ事になり、文全體がこた／＼になつてしまふと言つて居られるが、假に塚本氏の言はれるやうに、「世をかこつ」と見たところで、さういふ點でも一致しないといふのは、結局少しでも自分と意見の一致しないといふ事になる。つまり此所の意は、話相手としては、少々議論などをするくらゐの方が都合がありさうにも思はれるが、しかし本當の心の友とするには、やはりちよつと怨言をいふといふやうな方面でも、自分と同じくないやうな人、即ち少しでも自分と傾向の違つたものでは駄目だといふのである。【大方のよしなしごといはむほどこそあらめ】世間普通のつまらない事を言つて居る間は、それでもよからうがの意。【まめやかな心の友には】「まめやかな」は、眞實の。心底からよく氣の合つた友人として見るにはの意。【遙かにへだたる所のありぬべきぞ】非常に距離がある、即ちたゞそれだけの相違であるが、それでも眞實の心友たる事は到底出来ないをいふ。【わびしきや】困つた事だ、何ともしやうのない事だなどの意。「や」は「よ」に似た助詞。

一三

ひとり燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよなうなぐさむわさなれ。文

【一三】ひとり燈のもとに文をひろげて



は文選のあはれなる巻々、白氏文集・老子のこと、南華の篇。此の國の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなる事おほかり。

前段では、友といふものは、とても得られないものだと言つたに對し、此所では人間の友の代りに、書物を友とするのが、實に愉快だといつたのである。即ちたゞ一人燈火の下で古人の書いた書物を繕き、見ぬ世の人を友とするのは實に愉快なものだといひ、それから自分の好きだと思ふ本の名前を挙げたのである。但し我が國のものを書くには、特に古のものはよいといふのであるから、今のは面白くないといふ意味が言外に含まれて居る。

【燈のもとに】正徹本には「もとにて」とある。【文をひろげて】「文」は、書物。書物を開いて。【見ぬ世の人】自分の見たことのない世、即ち古代の人間。それを友とするとは、その人の書いた書物を讀むことをいふ。【こよなうなぐさむわざなれ】この上なく心の慰む事である。「慰む」は、氣がまぎれる。正徹本には「友とする……わざなれ」とあり、光廣本・野槌等には「友とするぞ……わざなれ」とある。【文選のあはれなる巻々】「文選」は、支那古代の詩文集。梁の武帝の子、昭明太子の編する所。内容を詩賦・騷等の三十七類に分ち、卷數すべて六十。あはれなる巻々」は、言葉の上から見ると、文選中の情趣深き巻々といふことになりさうであるが、これは修辭上特にさういつたので、本當の意味は、情趣深き文選といふ事である。【白氏文集】正しくは「白氏長慶集」といふが、普通には「白氏文集」といつて居る。唐の詩人白樂天の詩文集。「長慶」は穆宗の朝の年號である。【老子のことば】所謂「老子」の事。支那周時代の人老聃の著。「老子經」とも「老子道德經」ともいつて居る。【老子乃著書上下篇。言道德之意五千餘言而去】（史記）などあるより、自然「ことば」といつたのであらうが、要するにたゞ書物といふ意で、次の「篇」に對して書いたものと見ればよからう。【南華の篇】所謂「莊子」の事。支那周時代の人莊子の著。唐の玄宗、天寶元年莊周に「南華真人」の號を追贈し、著書の「莊子」を「南華真經」と呼ぶ事にした。此所にはこれによつて特に「南華の篇」といつたのである。【篇」は、書物の意。【此の國の博士どもの書ける物】「博士」は、たゞ學者といふ意。日本の學者の書いた書物。【いにしへのは】古の書物は。【あはれ

なる事おほかり】情趣あるものが多い。面白いものが多い。

枕草子に「文は文集、文選、博士の申文」と書いた所がある。この段は、大體これの受賣に過ぎない。たゞ枕草子では、文集・文選を擧げて居るだけであるのに、此所には老子や莊子を擧げて居るのが違つて居る。勿論これは兼好が老莊を好んだからの事ではあるが、しかし彼一人の趣味ではない。やはり時代の好尚である。つまり枕草子の時代には、主として文集や文選が喜ばれたが、兼好の時代になつては更に老莊が之に加つたことを示して居るものである。次に「此の國の博士」といふのも、枕草子の「博士の申文」から一種のヒントを受けて居るのであらうと思ふが、特に「いにしへのは」とことわつた所に、これ亦兼好の趣味や時代の傾向があらはれて居る。

一四

漢詩文も面白いが、何といつても和歌はやはり面白いものである。賤しい者や樵夫（キコリ）のやうな者のする事でも、それを歌として詠み出せば、面白く、恐しい猪（キノシ、）でも、臥猪の床といふ言葉を用ゐると、やさしくなつてしま

和歌こそなほをかしき物なれ。あやしのしづ山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪のし、も、ふす猪の床といへば、やさしくなりぬ。此の比の歌は、一ふしをかしにいひかなへたりと見ゆるはあれど、ふるき歌どものやうに、いかにぞや、言葉の外に、あはれにけしきおぼゆるはなし。貫之が「絲による物ならなくに」といへるは、古今集の中の歌くづとかやいひ傳へたれど、今の世の人のよみぬべきことがらとは見えす。其の世の歌には姿・言葉この類のみおほし。此の歌に限りて、かくいひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には、「ものとはなしに」とぞかける。新古今には「のこ松さへ嶺にさびしき」といへる歌をぞいふ

【一四】和歌こそなほをかしき物なれ



なるは、まことに少しくだけたるすがたにもや見ゆらむ。されどこの歌も、衆議判の時よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰せ下されけるよし、家長が日記には書けり。歌の道のみにしへに變らぬなどいふ事もあれど、いさや今もよみあへるおなじ詞・歌枕も、むかしの人のよめるは、更におなじものにあらず。やすくすなほにして、すがたもきよげに、あはれもふかく見ゆ。梁塵秘抄の郢曲のことばこそ、又あはれなる事はおほかめれ。昔の人は、たゞいかにいひ捨てたることぐさも、皆いみじく聞ゆるにや。

【先づ最初に和歌の面白いものだといふ所以を述べ、それから當時の和歌の、昔に比しては、どうしても劣るを言ひ、例として古今の「絲によるものならなくに」といふ歌と、新古今の「残る松さへ嶺にさびしき」といふ二首を挙げて、此等は集中の歌所といはれて居るものであるが、しかしさすがは古人の作だけあつて、今人の及び難い所がある。歌の道だけは、昔に變らぬなどいふが、今の人の詠んだのは、同じ言葉を使ひ、同じ名所を詠んだものでも、やはり古人に及ばない、古人のは何處となくよい所がある。和歌ではないが、梁塵秘抄の郢曲といふものは實に面白いものである。これから考へても、昔の人はちよつと言捨てた言葉でさへも、皆立派に聞えるのかも知れない——と、すべて古代のすぐれて居ることを述べたのである。】

【和歌こそなほをかしきものなれ】前に漢詩文の事をいつたについて、今度は和歌の事を特に言はうとするので、先づ「和歌こそ」といつたのである。さうしてこの「なほ」は、やはり、即ち漢詩文は面白いといつても、やはり和歌といふものは面白いものだといふ意になる。枕草子に、「主殿司こそ、なほをかしきものなれ。下女のきは、さばかり羨ましきものはなし。よき人にせさせまほしきわざなり云々」といふ所がある。此の段の書出しは、

源氏物語にも引いてあるが、それは「ものとはなしに」と書いてある。新古今では、「このころ松さへ嶺にさびしき」といふ歌を歌所だといつて居るが、これはどうも少々調子が整はないやうに見えるかも知れない。しかしこの歌も、衆議判の際には、相當よいといふ評判があつて、後にも院が特に感心の旨仰せ出されたといふことが、家長の日記には書いてある。歌の道だけは昔に變らぬなどいふこともあるが、さあどうだらうか、今の人の詠む歌の言葉や名所などにくら

【四】和歌こそなほをかしき物なれ

無意識的に之に做つたものであらうが、枕草子の方は、その前に、主殿司に對立すべきものについて書いたのではない。随つてこれは、金子元臣氏の言はれる通り（枕草子評釋）、「下衆とはいへど、尙をかし意なるべし」と見る外ないが、此の段のは、右に述べたやうな意味に見てよからう。野槌に「なほの二字なき異本あり」といひ、句解にも「猶の字なき本も有りいかゞ。おとりて覺え侍る」といつて居る。弘賢本には前段と續けて書いてあるが、段は別の方がよからう。「なほ」もあつた方がよからう。【あやしのしづ山がつ】「あやしの」は、「あやしき」と同意、さうして「あやし」は賤しいといふこと。「しづ」は、賤しい者といふ意で、「しづのめ」などの語もある。但しこれは名詞であるから、賤しいといふ形容詞的の使ひ方で、下の「山がつ」にかゝるのではない。【山賤】は、樵夫など、山中に住む賤しいもの。「しづ山賤」で、要するに賤しい者といふ意になるのである。【いひ出づれば】歌として詠み出せばの意。【ふす猪の床といへばやさしくなりぬ】「あやし」といふと、何だか恐ろしいものやうだが、そのあやしの事でも、「ふす猪の床」といふやうな言ひ方になると、如何にもやさしく聞えるといふ意。文の表面では猪即臥猪の床といふことになり、「床」と、「猪」とが同じものやうにあるが、これはたゞ「臥猪の床」といふ「猪」に關係のある歌の用語を提出して、かういふ言ひ方にすれば、あやしもやさしくなると言つたまでの事である。但し「臥猪の床」とは、猪が茅などの枯草を集め敷いて寝て居る所だといふ。さうしてこの枯草の事を、「かるも」といひ、和歌にはよくそれが詠まれて居る。「かるもかき臥猪の床のいやすみさこそ寝ざらめかゝらずもがな」（後拾遺集、戀）。なほ此所に書いてある事の出所は八雲御抄であらう。同書卷六、用意部に云ふ「寂蓮法師がひけるは、歌の縁にいみじきものなし。あやしなどいふおそろしき物も、ふすのゆゆるはあれど」「一ふし」は一箇所、一部分などの意。「をかし」は、面白く。【いひかなふ】は、その題意などにうまく合ふやうにしてあるといふこと。つまりその歌全體として非常にすぐれて居るといふわけではないが、何處か一つ面白い所があるといふのである。【ふるき歌ども】八代集あたりの歌を指していつたのであらう。【いかにぞや】どういふわけだか。文は「ふるき歌どものやうに、言葉の外に云々」とつゞき、この句はその間にちよつ



べてみると、やはりどうも昔の人の詠んだのは全く撰を異にして居り、昔のは、用語にせよ、格調にせよ、すべて平明穩健で、其の風體もすらしとして美しく、情趣も豊かなやうに見える。同じく昔のものでいへば、梁塵秘抄にある那曲の言葉こそは、實に情趣の深いものが多いやうである。昔の人は、どんなに言捨てた言葉でも、皆立派に聞えるのであらうか。

と括弧をして挿んだものと思へばよい。「……けしきおぼゆるはなし、これ如何なる故ならむ」といふやうな意味になるのであるが、しかしこの「いかにぞや」は極軽く、殆ど疑問といふ程でないくらゐに使つたのである。「言葉の外にはあれにけしきおぼゆる」歌の文字に表はされた意味以外に、しみじみと情趣を感じるといふ意。つまり言外に餘情の溢れて居ることをいふ。「貫之」紀貫之。歌人。望行の子。御書所預・大内記・土佐守・支番頭・木工權頭等に歴任、天慶九年卒。古今和歌集は、彼が紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑と共に勅を奉じて撰んだもの、我が國歌撰和歌集の嚆矢である。なほ紀行として土佐日記の著がある。「絲によるものならぬに」古今集撰旅の部にある歌、「絲によるものならぬに別れ路の心ほそくもおもほゆるかな」(東へまかりける時道にてよめる)。「ならぬに」は、ならぬに、即ちでもないのにの意。絲によるものなら、細いものをより合せて太くするのであるから、分れば細くなるのは當然であるが、絲によるものでもないのに、別れ路が心細く思はれるといふので、全く屁理窟から成立つた歌である。「歌くづ」歌の中の最も劣つたものといふ意。「今の世の人のよみぬべきことがらとは見えぬ」「よみぬべき」は、「よむべき」、即ち詠むことの出來るといふ意。この歌をまづいといふけれども、しかし近頃の人には、とても詠めさうもないものだといふ意。「ことがら」は言柄、即ち言葉の姿、言葉つき。「その世の歌には委言葉云々」「その世」は、當時即ち古今集の時代。「すがた」は歌の調子。「ことば」は歌の用語。その世即ち貫之時代の歌には、かういふ委や調の歌が非常に多かつたといふのである。「類のみ多し」は、殊にさういふ種類のものが多いといふ意で、そんなものだけがなくて、外のは少いといふのではない。(正徹本には「そのころの歌には」とし、「このたぐひ」の「この」なし)。「この歌に限りて云々」古今時代の歌には、外にもこれに似た委調のものが非常に多いのに、たゞこの歌だけが歌層だといひ立てられたのは、どういふわけかわからない。「源氏物語」紫式部の著。この物語は著作年代がはつきりしないが、假に寛弘頃に出來たとすれば、古今集の撰が完成して奏上した延喜五年より百年ばかり後の事になる。「ものとはなしにとぞかける」源氏物語、總角の巻の初所に、「ものとはなしにとか、貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋にひきかけけむをなど、實に故事ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出で給ふ」とあるもの。古今集には「ものならぬに」とあるが、それを源氏物語

には、「ものとはなしに」と書いて居るといふのである。「新古今」後鳥羽院の院宣により、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經等の撰する所、元久二年三月に一旦出來上つたが、その後更に取捨選擇したものらしい。「このころ松さへ嶺にさびしき」新古今集、冬の部に「冬の來て山もあらはに木の葉ふり残る松さへ嶺にさびしき」(祝部成茂)とあるもの。「歌をぞいふなるは」「冬の來て云々」といふ歌をば歌層といつて居るのはの意。「少しくだけたるすがたにもや見ゆらむ」「くだけたるすがた」は、歌の調子の整はず、何處かに缺陷があつて、すたりとした感じのしないをいふ。何處か調子のよく整はない所があるやうに見えるからだらうの意。「衆議判」幾人かの歌人を左右に分ち、その作を兩々相對せしめ、その優劣を判定し勝負を決する事を「歌合」といふ。その判定はもと判者と稱するものがあつて、これに當つたのであるが、これだけでは物足らず、左右の双方が互に褒貶論議することがある。これを「衆議判」といひ、衆議の決しない時は、やはり判者が最後の判断を下すのである。「よろしきよし沙汰ありて」「よろし」は、可なりよいといふ意。「沙汰」は、評判。衆議判の席では、この歌は相當によいといふ評判であつたといふのである。「後にも殊更に感じ仰せ下されける」衆議判の時にも、よいといふ評判であつたが、その後又後鳥羽院が特に感心して、よい歌だと、おほめの言葉を下さつたといふのである。「家長が日記には書けり」「家長」は、源家長。時長の子。從四位上但馬守。後鳥羽院に仕へ、和歌所の開闢(和歌所の事務を總理する役)となつた。「家長が」は「家長の」の意。日記にいふ、「其次の年の冬の比、春日の社の歌合とて侍りき。このつがひはおなじ程のよみくちと、よの人のつがひなどおもへるをえりあはせられたりしかば、いつよりも此たびはまけじはやなど、たれも〜思ひあへり。此歌合によみくちと聞ゆる人々せう〜歌めされ侍。祝部成茂と申すもの、はじめ歌めされぬ。成中がまご、政中が子也。重代のくら人にて、よみくちと人々申しあへり。よみて奉りしうち、落葉といふ題の歌。冬の來て山も顯はに木の葉降り残る松さへ嶺に淋しき、此歌、和歌所にて衆議判ありしに、この歌をよみあげたるを、たび〜詠せさせ給ひて、よろしくよめるよしの御けしき也。つぎのあしたに、よべの御歌合めしよせて御らんずるに、なりもちがうた、かんじおぼしめすよし、御教書をおほせ下さる。」

【歌の道のみにしへに變らぬ】何事も古代はすぐれ、後ほど悪くなるのが常であるが、只歌道だけは古に變らぬ



といふ意。【いふこともあれど】世間では、歌の道だけは昔に變らぬなどと言つても居るがの意。【いさや】「いさ」といふ感動詞に、「や」といふ感動の助詞のついたもの。單に「いさ」といふのと大體同じと見てよい。「いさ」は「いざ」とは別で、必ず下に打消の語が来る。此所は、「さあ、どうだか」といふやうな意味を表はし、句を隔てて「物にあらず」に呼應する。【今もよみあへるおなじ詞歌枕も】「よみあふ」の「あふ」は、二人の人が相對して詠むといふやうな場合の「あふ」ではなく、多くの人が皆さうするといふ意のもので、此所では、今日でも人が皆詠んで居るといふ意。「おなじ」は、古人の詠んだのと同様のといふこと。「詞」は、歌の用語。「歌枕」は、歌に詠み込む名所。【むかしの人のよめるは更におなじものにあらず】「更におなじものにあらず」は、決して同じものではないの意。即ち同じ詞を用ゐ、又同じ名所を詠んでも、古人のは「やすく、すなほにして、すがたもきよげに、あはれもふかく見ゆ」といふのである。【やすくすなほにして】用語並に表現法の平易穩當なこと。強ひて奇を弄したり巧を街つたりすることのないをいふ。【すがたもきよげに】歌の調子のすなりとして美しいこと。【あはれも深く見ゆ】情趣も深いやうに見える。【梁塵秘抄】後白河天皇の御撰で、平安時代末期に行はれた諸物（今様・法文歌・神歌等）を集めたもの。この書は夙く湮滅して、名のみ傳はつて居たのであるが、近頃になつて漸くその一部が世に出た。「梁塵」は、魯人庚公といふ者があり、非常に聲がよかつたので、歌ふと、梁上の塵が動いたといふ故事による。【鄆曲】催馬樂・朗詠・今様等、當時行はれた節をつけて讀ふものの總稱。「鄆曲」は、文選、宋玉の對楚王問の中に見える「客有歌於鄆中者。其始曰下里也。國中屬而和者數千人云々」の故事により流行の事をいふ。「鄆」は、楚の都。「いかにいひすてたることぐさ」「いひすつ」は、無造作に言ふ、不用意に言ふの意。「ことぐさ」は、言葉。（大成には、この上の「たゞ」が無いが、これは落ちたのであらう。【いみじく聞ゆるにや】「いみじく」は、すぐれて、非常に立派に聞えるのであらうか。

一五

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めざむるこゝちすれ。そのわたり、こゝかしこ見ありき、みなかびたる所、山里などは、いと目なれぬ事のみぞおほかる。都へたよりもとめて文やる、その事、かの事、便宜にわするななどいひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺・社などに忍びてこもりたるもをかし。

【一五】旅の興について書いたのである。兼好自身は相當旅行の経験があり、又時代としてもこの時代は、平安時代なとに比すれば、全體にずつと旅行が多くなつて居たのであるが、今日とは勿論比較にならない。今日の我々——少くとも私には、旅行に出ても、こんな改つた感じは全然しないが、それでも小さい子供などが、始めてちよつと旅にでも出れば、恐らくこれと同じ感じがするであらう。兼好自身について言つても、これは彼自身の経験よりは、寧ろ平安時代、下つては鎌倉時代あたりに出来た物語・日記・隨筆などを讀んだ時の感じが主となつて居るのではないかと思ふ。

【いづくにもあれ】何處にもせよ。特に名所などといふ所でなくともこの意。【旅だちたる】「旅だつ」は、旅行に出發するといふ意に「いふ」が、今日は普通であるが、此所のは旅にあるといふ意。【めざむるこゝち】目ざめるやうな心地。すべての物が目新しいから、何だか目ざめるやうな、生々とした氣がするといふのである。【そのわたり】そのあたり。旅して行つた所の近邊。【みなかびたる所山里など】田舎めいた所や山中の村落など。【目なれぬ事のみぞ多かる】「目なれぬ事」は、見馴れない事。「のみぞ多かる」は、さういふものが、非常に多いといふ意。【都へたよりもとめて文やる】京都への郵便があるのを、さがしたづねて、京都へ手紙をやるといふ意。此所は「たよりもとめて都へ文やる」と書いても同じ事のやうであるが、實は「都へたよりもとめて（而して都へ）」

【一五】いづくにもあれしばし旅だちたるこそ

【一五】何處にもせよ、暫く旅に出るといふ事は、全く目のさめるやうな心地のするものである。その邊を彼方此方と見物して廻るに、田舎めいた所や山里などは、見馴れない珍しい事が非常に多い。さういふ所に居て、京都への郵便を求め手紙をやる。さうしてその中に「その事も、あの事も、それを爲すべき機会には、忘れないやうに、ちやんと處置しておけ」などと、言つてやるのは、實に面白い。さういふ所でこそ、何彼につけて氣をつかふやうになるものである。持つて



居る手道具類まで、よいものは一層よく見え、藝能ある人も容貌のよい人も、平生よりは、ずつとすぐれて見えるものである。

文やる」である。随つて「都へたよりもとめて」は、「都への幸便をもとめて」である。さうして上に「都へ」がある爲、下は省いても、その意味がわかるのである。【その事かの事便宜にむするな】「その事かの事」は、「あの事この事」といつても同じく、いろ／＼の事柄がある、それを一々擧げていつたのである。本當の手紙には具體的にそれが書いてあることは言ふまでもない。但し何と指さずにいふ場合には、かういふ言ひ方をするので、源氏（梅枝）にも「その事かの事となく聞え合せたまひて。」「便宜」は、機會、よき折。「忘るな」は、忘れずに處置して扱けといふ意。即ちあの事もこの事も皆、それを爲すべき機會には、忘れないやうにしておくと、家の者に注意するのである。【いひやるこそをかしけれ】正徹本には「いひやりたるこそをかしけれ」とある。【さやうの所にてこそ】さういふ所でこそ。旅して行つて居る所をいふ。當時の人が京都から旅して行けば、行つた先は、大抵田舎と見てよからう。必ずしもひどい山の中などでなくても。【よろづに心づかひせらるれ】萬事につけ、いろ／＼と氣をつかふやうになるといふ意。この「心づかひ」は、どういふ事をいつて居るのか、はつきりしないが、文段抄には「古郷にては、わが心づかぬ所は、わきより氣をつけたすくる友も有り。又明暮馴れたる人には、たとひ聊か心づかひを忘れても、ゆるす事もあるに、田舎などの馴れぬ所にては、我心づかひ一入せらるゝ事也」とある。「その事かの事便宜に忘るな」といふ所は、全く實用的な事で、さういふ事から推して考へると、この「心づかひ」も、うっかりすると、泥棒に取られやしないかといふやうな意味にもとれるが、しかしかの「便宜に忘るな」といふのも、つまり「家を出て旅にある時の、何となく改つた心持から、ふと思ひ浮ぶ用事をいふので、子供が始めて外で泊つて、家の事を思ふやうな、何だか改つた、さうしてうぶな子供らしい氣持から出たものであらう。さうしてこの「心づかひ」も、うっかりしてはいけなといふやうな意味ばかりではなく、旅に出れば、自然感じも鋭敏になり、物事に注意深くなるのをいつたのである。さう見ると、直次の「もてる調度まで云々」にも、意味がついて来る。【もてる調度】旅行先へ持つて行つて居る道具類。今日は、何も持たずにでも旅行は出来るが、當時は今日のやうに全くの手ぶらでは旅行は出来なかつた。それを考へて此所を見なければならぬ。【よきはよく】よい物は一層よく見える。即ち家にあつては、つい見馴れて居るので、別にたいした物とも思はなかつたのが、旅に持つて行

くと、殊に田舎の家に泊つた場合などには、今更特別よい物のやうに見えるといふのである。【能ある人かたちよき人も云々】「能ある人」は、藝能ある人、「かたちよき人」は、容貌の立派な人。「をかしと見ゆ」は、すぐれて見ゆ、立派に見ゆといふこと。「をかし」といふ語は、普通趣あるとか、興あるとか、或は情趣が深いとかいふものだから、此所でも、その通りとして、「興あるものに見える」「特に人の感興を引く」などとした註釋書があるが、これは「をかし」といふ語の眞義をよく解しない爲であつて、それでは能ある人や、親よき人が、まるで藝人や飯盛女と同様な取扱を受けることになる。【寺社などに云々】寺や社などに、人知れず、こつそりと籠つて居るのも、趣のあるものだといふので、これは旅行の事を書いたついでに、ちよつと書添へたのである。但し「旅」といつても、古くは何處かであつて一晩泊るだけの事にもいつたので、今日の人が考へるやうに、相當遠い所へ行くことのみをいふのではない。

一六

神樂こそなまめかしく、おもしろけれ。大かたものの音には笛・箏、つねに聞きたきは琵琶・和琴。

音楽についての筆者の趣味を述べたもの。

【神樂】神前で舞ふ舞樂。神樂の起原といふのは、かの天岩戸の故事で、天鈿女命が岩戸の前で舞ひ歌つた時の故事に基づくといふのが定説のやうになつて居る。次に普通神樂といつて居るものの中には、宮中で行はれるもの、伊勢・石清水・賀茂等の大社で行はれるもの、其の他後世には里神樂・大神樂・大々神樂などいふものもあるが、此の段にいつて居るのは、所謂内侍所の御神樂であらう。これもずつと古い時代の事はよくわからないが、奈

【一六】神樂こそなまめかしく

神樂こそは實に優雅で、趣の深いものである。凡そ樂器では、笛と箏がよい。但しふだんに何時でも聞きたいと思ふのは、琵琶と和琴である。



良朝以来は豊樂院の中の清暑堂で、臨時神宴の催される時に行はれたものである。ところがその後、一條院の時代となつて、禁中内侍所の庭上で、隔年十二月に行はれるやうになり、それが又白河院の承保以後は、毎年行はれるやうになつたのである。これに用ゐる樂器は笛・箏・笙及び和琴である。歌は本歌と末歌とに分れ、歌ひ手も本方・末方の二つに分れて席に着く。その式の次第については、小中村氏、歌舞音楽略史に云ふ「人長と稱して、冠袍を着け、裾を曳き、太刀を帯びたる者（必ず近衛府の官人を所役とす）出で、鳴高し、御火白く獻れなどいひて、自己の姓名を稱し（これを名對面と云ふ）、琴・笛・箏・笙の召人、並に歌人等を各別に召出で、其能を試み了へて、取物の神樂を始む。神了りて、人長起ちて舞ふ。酒一巡の後、才男を召され、了りて狹居張歌をばじむ。其駒了りて、人長起ちて舞ふ。了りて人長及び召人に祿を賜ふ。當夜は主上温明殿に渡御ありて御拜あり。」「なまめかしく」優雅といふ言葉があたるであらう。【大方】大體。凡そ。神樂の事をいつたついでに、以下一般の樂器について、自分の好みを述べたのである。【もの音には笛・箏・笙】「もの音」は、樂器の音。凡そ樂器の音の中では、笛の音と箏の音とが最もよいといふのである。但し此所にいふ「笛」は、所謂神樂笛をいふのであらう。これは六孔の横笛で、我が國固有のものであるが、外國音樂輸入の結果、多少改良されたものだといふ。「箏」はもと外國から入つて来たものである。【つねに開きたきは云々】ふだん何時でも聞きたいと思ふものは、琵琶と和琴だといふ意。この「常に」について、大成に大全の説を引いて「笛・箏・笙は、管絃を奏する時はよし、琵琶と和琴は一器にても面白き心也」と書いてあるので、今の註釋書も大抵これに據り、笛と箏とは合奏の場合の面白さだと書いてあるが、さうではあるまい。此所はやはり神樂の事を言つた所であるから、一見一般的に言つたやうでも、實は神樂といふ事を胸に持つて書いて居るので、さういふ神聖な場合に用ゐられる笛と箏を擧げたのである。随つて合奏かどうかは此所の問題ではない。【和琴】ワゴンとよむ。字は多く「倭琴」と書く。これは外國傳來のゴトに對



和琴

して、我が國固有のものをいふので、ヤマトゴト又はアヅマゴト（略して單にアヅマとも）ともいふ。但し固有といつても、今日あるものは本當に太古のまゝといふのではない。前の神樂笛におけると同じく、やはり外國樂器の影響を受けたもので、外形は新羅琴に倣ひ、絃の張り方なども、専ら之を模したといふ事であるが、絃の数は、太古のまゝの六本が普通である。（新羅琴は十二本）。

一七

山寺にかきこもりて、佛につかうまつるこそ、つれづれもなく、心のにこりもきよまること、ちすれ。

【山寺】 暫く俗世間を離れ、山寺に籠つて、佛に仕へて居れば、退屈な事もなく、心の底からきれいになるやうな氣がするといふのである。

【山寺】 特に山寺といつたのは、さういふ所でない、本當に此所にいふやうな氣持にはなれないからである。（延徳本には「山里」とある。）【かきこもりて】「かき」は接頭語で、殆ど意味なし。「こもり」は、幾日かの間、社や寺に滞在して神佛に祈願すること。【佛につかうまつる】「つかうまつる」は、「つかへまつる」の音便。花を供へ經を誦するなど。【つれづれもなく】退屈な事もなくの意。家に居て、是非せねばならぬといふやうな用事のない時、頭が何となく散漫になり、さて何かやつてみようとしても、やる氣になれず、何だか一種の倦怠をおぼえるやうな事があるものである。此所にいふのは、山寺に籠つて、佛に仕へて居れば、さういふ氣持になることはないといふのである。それは必ずしも専念佛に仕へて居るからばかりではない。一つは勿論念佛誦經に多くの時間を取られるからであるが、又一つには、前にあつたやうに、旅をして氣分が新しくなるからである。（第一五段参照）

【一七】 山寺にかきこもりて

【山寺に籠つて、佛に仕へるといふことは、實によいもので、さうして居れば、退屈な事もなく、又心の穢もすつかりなくなるやうな氣がする。



【心のこりもきよまるこちすれ】「心のこり」は、心の穢、所謂煩惱である。それがきれいに無くなつてしまふやうな気がするといふのである。

一八

人はおのれをつゞまやかにし、おごりを退けて、財をもたず、世をむさばらざらむぞ、いみじかるべき。昔より、かしこき人の富めるは稀なり。もろこしに許由といひつる人は、更に身にしたがへるたくはへもなく、水をも手してさゝげて、飲みけるを見て、なりひさごといふ物を人の得させたりければ、ある時木の枝にかけたりければ、風にふかれてなりけるを、かしましとて捨てつ。又手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけむ。孫農は冬の月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれにふし、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、しるしとゞめて世にも傳へけめ。これらの人はかたりも傳ふべからず。

先づ人間といふものは、儉約をして、奢らず、慾な事を考へないのがよいといひ、次にその例として支那の許由と孫農とを挙げ、この二人の生活が筆者の理想に近いことを知らしめた上、支那人は此等の人物をえらい人だと

人は自分の身を持つるに儉約を以てし、驕奢を排し、財寶を持たず、浮世の名利を貪らぬ様にするのが、最もよからう。昔から賢い人の富んで居たといふ例は、めつたにない。支那に許由といふ人があつたが、この人は少しも自分の身についた貯もなく、水を飲むにも、手ですくひ上げて飲んで居たのを見て、或人が藁束を興へたので、或時それを

思つたからこそ、本にも書留めておいたのであるが、日本では駄目だ、たとひそんな人があつたところで、語り傳へることはしないだらうといふのである。季吟も言つて居る通り、前段に心のこりも清まるといふ事を書いたので、それを承けて、かういふ問題に及んだのであらう。

【おのれをつゞまやかにし】「つゞまやか」は、「儉」の字又「約」の字をよむ。「おごり」に對し、儉約することはいふ。自分の身を持つるに儉約を以てすること。【おごりを退けて財をもたず】「退く」(他動)は、遠ざけて用ゐない。驕奢を排斥して質素な生活をし、無用な財寶を所有しないといふこと。但し此所には財寶を貯蓄して金持になれといふ思想は勿論ない。随つて「おごりを退ける」と「財をもたず」とは、撞着するものではない。【世をむさばらざらむぞいみじかるべき】「世をむさばる」は、俗世間の名利を貪ること、即ち金持になりたいとか、立派な地位が得たいとか、さういふ慾心を抱くこと。(二七頁「世をむさばる」参照)。慾な事を考へないのが大によからうの意。【賢き人】「聖人・賢人」などいふ場合の「賢人」をいふ。智慧のある人といふ意ではない。【もろこしに】「もろこし」は、普通「唐土」の字をよむ。支那のこと。「もろこしに許由といひつる人」は、妙な書き方であるが、この書は他にも「仁和寺にある法師」など書いた所もあり、此所も「もろこしにありし許由といふ人は」即ち言換へれば、「もろこしに許由といふ人あり、その人は」の意である。【許由】支那の隱士。箕山に隠れて居たがその賢を聞いて、帝堯が天下を譲らうとしたけれども、絶対に承諾せず、そんな話は耳の汚だと言つて、潁川で耳を洗つたといふ有名な話がある。どうせ傳説中の人物であらう。蒙求(上)に云ふ「逸士傳。許由隱箕山。無蓋器。以手捧水飲之。人遺一瓢。得以操飲。飲訖掛於木上。風吹漚々有聲。由以爲煩。遂去之。」【更に身に】したがへるたくはへもなく、【更に】は、少しも、全く、下の「なくて」にかゝる。「身にしたがへるたくはへ」は、その身についた貯蔵品。「たくはへ」は、金銭についていふばかりでなく、米穀でも普通の物品でも、たくはへであるものをすべていふ。【手してさゝげて】「手して」は、手にて、手を以て。「さゝぐ」は、「さしあげ」の約で、上へ持上げることをいふのであるが、此所は手ですくひ上げることをつたつたのである。(蒙求の文参照)【なりひさごと】【藁束のこと。昔は之を二つに切つて、水を汲むに用ゐる、我が國でも古くはやはり之を用ゐて居た。倭名抄に

【一八】人はおのれをつゞまやかにし

木の枝に掛けておいたところが、風に吹かれて鳴つたので、やかましいといつて、取捨つて、再び前のやうに手ですくつて水も飲んだ。かういふ人は、どんなに心の中がせい／＼して居たことであらう。又孫農は、冬季に夜具がなく、藁一束だけがあつたが、晩はそれに寝て、朝になると、取り片附けた。支那の人は、これをえらいと思つたからこそ、書留めて、後の世にも傳へたのであらうが、日本の人なら、たとひこんな事があつても、決して後世に語り傳へもしないであらう。



「風。奈利比佐古。狐也。狐也。可レ爲「飲器」者也。」木でこしらへた水を汲む器を「ひさく」又は「ひしやく」といふのも、つまりこの「ひさく」といふ語から轉じたのである。「人の得させければ」人がくれたので。「木の枝にかけたりければ」正徹本・光廣本・弘賢本等には「かけたりけるが」とある。この方がよきさうである。「かしがましとてすてつ」やかましいと云つて取捨つた。この「つ」は極めて軽く、殆ど「て」と同じと見てよからう。「いかばかり心のうち涼しかりけむ」「すゞし」は今日の「せい／＼する」といふ語にあたる。どんなに心の中がせい／＼したことだらうといふ意。但しこの「涼し」を水の縁語と見るが如きは（塚本氏、解釋）、あまりに考へ過ぎた説で、かうした散文としては、別にさう考へる必要もないであらう。たゞかういふ言葉は、多く歌から来たもので、歌に於ては次の例でもわかる通り、「風」「みそぎ」の縁語となつて居るから、散文に於ても、偶然さういふ風に見えるのである。「さゞ浪や志賀の浦風いかり心のうち涼しかるらむ」（拾遺集、哀傷）、「千代をいのる心の涼しきは絶えぬ家の風にぞありける」（後拾遺集、賀）、「戀しさを身そげど神のうけねばや心の涼しげもなき」（濱松中納言物語）。「孫長」蒙求（下）に云ふ「三輔決錄。孫長字元公。家貧織席爲業。明詩書。爲三京兆功曹。冬月無被。有寒一東。暮臥朝收。」「冬月」冬季といふだけの意。文段抄には「冬月」と書いて、フユノツキとよみ、「つれ／＼草にては冬月に金なくて寒ひとつかねとよむべし」と書いてあるが、「参考」には、音でトウゲツとよむ方が口調がよいといつて居る。又増補織集では、蒙求では冬三月の意だから、トウゲツとよむべきだが、徒然草ではフユノツキとよむ方がよいといつて居る。古い本では皆「冬月」と書いてあるが、正徹本と延徳本だけは「冬の月」と、わざ／＼「の」が入れてある。冬季の事を「冬の月」といふのはをかしいが、「冬月」の直譯として、此所はやはりフユノツキとよむのではないかと思ふ。「金なくて寒一東ありける」「寒」は、夜具。「一東」は、一たび。「をさめけり」取り片附けた。「こねをいみじと思へばこそ」「これ」は、許山と孫長のした事を指す。「いみじ」は、すぐれて居る、えらいといふやうな意。「しるしとめて」書物に書きとめて。「世にもつたへけめ」この「世」を大抵の註釋書は、世間の意味に取り、世間に傳へひろめる意としてあるが、これは後世の意である。随つて次の「語りつたふ」も、後世に語り傳へる事である。「これらの人はかたりも傳ふべからず」

「これらの人」は、「こゝの人」といふと同じく、我が國の人、即ち日本人。（第一七五段「これらになき人ごと」參照）。我が國の人ならば、たとひさういふ行があつても、決して語り傳へもしないだらうの意。

一九

折節せせつのうつりかはるこそ、物ごとにあはれなれ。もののはあはれは秋こそまされ」と人ごとにいふめれど、それもさる物にて、今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根かきねの草もえ出づる比よより、や、春深く、霞あせみわたたりて、花もやう／＼けしきだつほどこそあれ、折しも雨風あめかぜうちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉あおはになりゆくまで、よろづにたゞ心のみぞなやます。花橘はなたちばなは名にこそおへれ、なほ梅のにはひにぞ、いにしへの事も立ちかへり戀こしう思ひいでらる。山吹やまぶきのきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすてがたき事おほし。

先づ四季の變化がそれ／＼その季節に特有な興趣を添へるものであることを述べ、それから四季の順序で、一その季節についた興趣を敘述して行かうとする。さうして此所には垣根の草が萌出る初春の頃から、花が散つて青葉となり、橘・山吹・藤などの咲く晩春頃の景色までを書いたのである。

【折節のうつりかはるこそ】「折節」は、時節とか季節とかの意。春が夏になり、夏が秋になるなど、四季の變

季節の移り變ることは、何事につけても實に趣の深いものである。物の情趣は四季の中でも秋が最も深いとは、誰も言ふ事のやうである。なるほどそれもさうだが、今一層心もうき／＼として面白くものは、春の景色であらう。鳥の聲なども特別春らしくなつて、物静かにゆつたりとした日の光によつて、垣根の草が芽を出す頃から、漸く春もた



け、霞も四方にたなびいて、花もだんだんと咲きさうになつて來るといふ時も時、ちやうどかういふ時に、雨や風が續いて、忙しげに散つてしまふ。かうして春は若草の萌出る頃から、花が散つて青葉になるまで、何彼(ナニカ)につけて、たゞもう氣苦勞ばかりをす。花橋は昔から懐舊の情をそよるものとして知られて居るが、しかし何といつてもやはり梅の匂には、過ぎし日の事も思ひ出されて懐かしい感じがする。それから山吹の花の綺麗なこと、藤の花の心もとない様子

化するをいふ。【物ごとにあはれなれ】「物ごと」は、何事につけても。即ち自然現象も社會現象も、總べてを含めていふ。「あはれ」は、情趣深しの意。【物のあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど】物の情趣は四季の中、秋が最もまさつて居ると誰も彼もいふやうであるが、此所に「人毎」と書いたのは、少し大袈裟に言つたのである。源氏物語(薄雲)に、「唐土には春の花の錦に若くものなしといひ侍るめり。やまと言の葉には、秋のあはれを取り立てて思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目うつりて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へ侍らね。狭き垣の内なりとも、その折々の心見知るばかり、春の花の木をも植渡し、秋の草をも掘移して、徒らなる野への蟲をもすませて云々。」又同じ物語の野分の巻には、「春秋の争に、昔より秋に心よする人は數まさりけるを云々。」なほ「参考」を見よ。【それもさるものにて】「それもさるものなれど」即ちそれもさうだがの意と見ればよい。つまり世間の人は多く、物のあはれは秋がまさるといつて居り、なるほどそれも尤もだと思ふけれどもといふ意である。【今一きは】秋に比すれば今一層といふ意。文字の上では、秋も心が浮立つが、もつと心の浮立つのは春だといふことになつてまづいが、かういふ事は、不用意な古人の文には仕方がない。「今一きは物のあはれ深く、心も浮立つものは」と解すればよい。【春のけしきこそあめれ】「あめれ」は、「あるめれ」が音便で「あんめれ」になつたのである。「ん」はないが、古人はかういふ際には多く「ん」を省いて書いたのであるから、讀む時にはアンメレとよんでよいのである。なほ「めり」の意味は、「やうだ」とか「らしい」とかいふやうな言葉に當るが、國語では「なり」とはつきり言ふべき所を、わざとばかして「めり」といふ場合が多い。隨つてかういふ書き方は大體「こそあれ」に似たものと思へばよい。【この外に春めきて】特別に春らしくなつて。(その聲を聞くと、あゝなるほど春になつたなといふ感が出るのである。【のどやがなる日影に】「のどやか」は、「のどか」と同じく、物靜かにゆつたりとしたこと。「日影」は、日光によつて出來た陰ではなく、日光そのものをいふ。「に」は、によりての意。【垣根の草】「垣根」は、たゞ「垣」といふこと。「ね」には意味なし。垣の根本の草といふ意味ではなく、たゞ垣の邊の草といふだけである。【もえ出づ】萌え出づ。芽を出すこと。【やゝ春深く】「やゝ」は、漸く。「春深く」は、春がたける、即ち春になつてから、大分日數を経たことをいふ。但しこの「深く」は、文の調子の上から、自然下の「霞みわた

をして居ることなど、すべて春には忘れ難い事が多い。

り)にかゝるやうになつて居る。かういふのは無意識でさうなつて居るのである。【花もけしきだつほどこそあれ】「けしきだつ」は、様子にあらはれる。即ち花の咲きさうになつて來ることをいふ。「ほど」は、頃といふ意であるが、「ほどこそあれ」と強めてすぐ下の「折しも」に續くので、時も時、ちやうどさういふ時にの意となる。【心あわたしく散りすぎぬ】「心あわたしく」は、「しづこゝろなく」と同じく、花の散る様を、いかにも忙しげに落着かないといつたので、勿論見る人の心ではない。「散りすぎぬ」は、散つてしまふといふ意。今の口語の「散つてしまつた」といふのとは違ふ。【青葉になりゆくまで】「青葉」は、花の散つた後に出来る若葉で、青葉が出来る、もう夏の時に入らるわけである。此所は、「垣根の草もえ出づるころより——青葉になりゆくまで」で、これで春の間全體をいふことになる。【よろづにたゞ心のみぞなやまず】何彼につけて、たゞもう氣苦勞ばかりするといふ意。つまり花が咲くまでは、早く咲けばよいと思ひ、又咲かぬ前にひどい風でも吹いてはならぬと思ひ、さて咲いて見れば、雨や風の心配が一層甚だしい。かうして春はたゞ花の爲に心を悩ます。在原業平の歌に「世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」(古今集、春)これはこの心を一層強く言つたのである。【花橋は名にこそおへれ】「花橋」は、「花樓」などいふと同じく、花を賞する上から橋を呼ぶ名で、花の咲いて居る橋、又は橋の花をいふ。但し橋は今いふ蜜柑の一種には違ひないが、全く同じものではない。和漢三才圖會などには、ミカンとタチバナとカウジは同じもののやうに書いてあるが、それは概括的にいつたので、くはしくいへば、昔別であらう。此所にいふタチバナは今日のミカンのやうに食料に供する美味なものではないやうである。さてこの橋の花の香は、人に懐舊の情を起させるものだといはれて居る。例へば、「五月待つ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今集、夏)「昔をば花橋のなかりせば何につけてか思ひ出でまし」(後拾遺集、夏)など。「名におふ」は、名として負ひ持つて居るといふ意が本で、その名によつて世に知られて居るといふ意になり、それが更に轉じて、非常に有名な(この時は多く「名にしおふ」といつて居る)といふ意味にもなる。此所は、懐舊の情を起させるといふ事において世に知られて居るがの意。(正徹本には「名こそおへれ」とあるが、これは「に」が落ちたのであらう。【なほ梅のにほひにぞ】何といつてもやはり梅の香によつての意。此所の「にほひ」は、香である。【いにしへのこ

【一九】折節のうつりかはるこそ



とも立ちかへり戀しう云々】「いにしへ」は、たゞ過去といふくらゐの意。必ずしもずつと古い時代の事をいふのではない。「立ちかへり」は、もとに立ちかへつて、即ちその事のあつた過去の時に立ちもどつての意。此所の續きは、「梅のほひにぞ、いにしへの事も戀しう思ひいでらるる」で、その懐舊の情が、いかにも新しく、ちやうどその當時のやうな氣のするを「立ちかへり」といつたのである。【山吹のきよげに】「きよげなり」は、「きよくあるやうだ」の意ではなく、此所などは「きよし」と同意に使つたので、山吹の花の美しいをいふ。但しかういふ場合の「きよし」は、濁りなき、汚れなきといふ意味ではなく、「年若く親おきなきよげ」などいふ場合におけると同じく、綺麗な事である。【藤のおぼつかなきさましたる】この「おぼつかなき」は、意味がはつきりしない。句解に「見ても猶おぼつかなきは春の夜の霞のうちに咲ける藤浪（和泉式部）といふ歌を擧げて、「おぼつかなきとは花の色のおぼるなるをいふか」と言ひ、この説は今も大抵註釋家の用ゐる所である。しかし此所はどうしても形と見るべきものであらうと私は思ふ。尤も藤の花は、少し離れて見ると、薄紫の小さな花が幾つも連続して居る様が、多少ぼんやりした感じを興へるから、色に於ても、ぼうつとしたものでないとは言へないけれども、此所の「おぼつかなきさましたる」といふ言表はしは、やはり形についていふのであらう。（和泉式部の歌も、春の夜の霞んだ中にあるればこそ、おぼつかなきといつたのであらう。形について考へると、外の花は大抵皆枝に殆ど密着したやうになつて咲いて居るが、藤は可なり深山の花が一團となつて、それが上から下まで、少し風でも吹くと、ふら／＼と動いて、今にも落ちはしまいかといふやうな感を興へる。この不安さうに見える様を「おぼつかなきさま」といつたので、「おぼつかなし」は、心もとなしの意ではあるまいか。「さま」といふ語から考へても、色でなくて形をいつたものであらうと私は思ふ。たゞかう見ると、山吹の方は美しい色をいつたに對して、藤がぶら下つた不安さうな形では、文としての面白みがないと言ふ人があるかも知れない。しかしそれは何とも仕方がない。悪ければ、書いた兼好が悪いのである。尤も兼好の頭には右に擧げた和泉式部の歌などがあつて、自分でも色だか形だか、はつきり分らず、殆ど無意識に近い態度で筆を下したかも知れないが、それにしても、この文章の上から見れば、「心もとなげなる花の形」をいつたものと見るべきである。【すべて思ひすてがたきことおほし】「すべて」は、以上列擧したも

の總べてを總括していふ。「思ひすてがたき」は、忘れてしまふことの出来ない。

花の事を書くのに、「花もやう／＼けしきだつ」より一轉して直ちに「あわたゞしく散りすぎぬ」とし、人の喜ぶ眞盛の美しい光景を全然省いたのは、この文を讀む者の、誰でも直ちに氣の附くことで、之については文段抄にも、「こゝに花のさかりをかゝざる事は、兼好の例の筆法也。奥にも咲きぬべきほどの情、ちりしをれたる庭などこそ見所おほけれとかき、又萬の事始め終りこそをかしけれともいへり云々」といひ、多くの人もさういふ風に見て居るやうだが、しかし是を以て直ちに「眞盛をば愛好せぬ兼好の癖からである」とするのは、少し早計ではあるまいか。若し其等の人の言ふやうに、眞盛を愛せぬならば、何もよろづに心を悩ます必要はないであらう。これは、咲くを待ち、散るを惜しむ心の悩ましさだけを敘して、その眞盛の美は言外にきかせたのである。花盛の光景などをくゞ／＼しく書きたてるのは、いかにも月並である。さういふものを、あつさり省いて、而も却つて花を愛する強い情をよく表はし得た所にその非凡な手腕がある。次に秋をよしとする事について、今少し此所に書加へておく。一體春秋の優劣を論評するといふことは、我が國に於ても可なり古くからあつたことで、古事記に春山の霞（霞壯夫）と秋山の下來壯夫兄弟の争の語が出て居るのにもわかるが、文學上に明かに見えて居るのは、萬葉集卷一にある「天皇（天智）詔内大臣藤原朝臣（鎌足）。競三隣春山萬花之艶。秋山千葉之彩一時。額田王以歌判之歌」と題するものである。平安時代となつては、拾遺集（雜）に、「ある所に春秋いづれかまさると問はせ給ひけるによみて奉りける」と題する貫之の歌がある。それは「春秋におもひ亂れてわきかねつ時につけつゝうつる心は」といふので、優劣を判定しかねて居る。ところが其の次には「元良のみこ承香殿のとし子に春秋いづれかまさると問ひ侍りければ、秋もをかしう侍りといひければ、おもしろき櫻を、これはいかゞといひて侍りければ、大方の秋に心はよせしかど花みる時はいづれともなし」と、又同じ人の歌がある。これは歌の上だけで見ると、いかにも秋が好きやうだが、「秋もをかしう侍り」といふ書き方は、少くとも優劣を決しかねた態度である。更にその次に今一首「題しらず」とした讀人知らずの歌があるが、それは「春はたゞ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる」といふのである。この歌などは、秋が勝つて居るといふ理由が見出せないものであるから、強ひてこんな屁理窟を言つ



たもので、その點は頼田王のも同じである。上に擧げた源氏の「春秋の争云々」といふのも、たゞあれだけを見ると、いかにも秋に賛成したやうであるが、實はこの文句のあるのは、野分の巻の最初であつて、秋の庭の美しさをいふと書き、「つくり渡せる野べの色を見るには、また春の山も忘れられて、涼しうおもしろく、心もあくがるゝやうなり」とあり、「……秋に心よする人は數まきりけるを、名だたる春の御前の花園に心よせし人々、またひきかへしうつろふ氣色、世の有様に似たり」とある。紫式部にしても、決して秋がよいと斷定して居るわけではない。又よく註釋書に引かれる劉禹錫の詩の「自古逢秋悲寂寥。我言秋夕勝三春朝。」といふ句も、ちやうど増鏡にある「秋は夕と何思ひけむ」の歌と同じく、強ひて世人の考と違ふ方面に美を求めようとしたものである。要するに春秋の争といふものは、どちらがよいときまつたものではない。兼好が「人毎に」といふ語を使つたのも、たゞちよつと源氏などを頭に思ひ浮べた事から起つた思ひつきに過ぎないだらう。

灌佛の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされと、人のおほせられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふく比、早苗とる比、水鶏のたたくなど、心ばそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月被またをかし。

夏的情趣を書いたのである。但し夏といつても、舊曆でいふ夏は四・五・六の三箇月（尤も今日新曆でいふ四・五・六とは時候が違ふが）で、先づ四月には佛生會、五月に入つては端午の節供、早苗を栽ることなどを書き、六月では夕顔の花、蚊遣火など、それから六月被の事も附け加へてある。さうして此所でも、若葉や水鶏などについて、その折々の感じがちよつと書添へてある。

夏に入つては先づ四月の佛生會（アツシヤウエ）の頃、賀茂祭の頃、木々の梢の若葉が涼しさうに茂つて行く頃、この時分は、世の中のしみんと寂しいことも、人の戀しさも、一段とまさるものだと、或人が仰せられたが、實際その通りであ

る。次に五月は、菖蒲茸く端午（タシゴ）の節供（セツク）の頃、早苗を栽る頃、かういふ時分は水鶏のたたく音などを耳にするが、いかにも心細い感じのするものである。それから六月時分になると、みすばらしい家に夕顔の花が白く咲いて、蚊遣火をくすべて居るのも、しんみりとして情趣の深いものである。この月には又六月被（ミナブキバラ）といふものがあるが、これ亦趣あるものである。

【灌佛の比】「灌佛」は、「佛生會」ともいひ、四月八日（今も東京などでは新曆の四月八日に行ふ）釋迦の誕生日を記念して供養を行ふ。「比」は、その日前後を指し、「灌佛の比こそをかしけれ」の意。以下皆それ。「かういふ風に」をかしけれ」が附いたものと思へばよい。【祭の比】「祭」は、賀茂祭のこと。四月第二の酉の日に居れることになつて居た。（今は五月の十五日）。ついでにいふ、賀茂神社は言ふまでもなく京都にあるが、兩社あり、下鴨の方は、賀茂御祖神社といひ、賀茂別雷命の御母玉依姫、及びその外祖父賀茂建角見命を祀り、上賀茂の方は、賀茂別雷神社といひ、賀茂別雷命を祀る。上下はたゞその地勢によつて區別していふに過ぎない。今は共に官幣大社である。祭も同日に行はれるが、諸社の祭の祭の最も盛大に行はれたので、以前京都で單に「まつり」といへば、この祭の事となつて居た。又この祭の日には、すべての物に葵を飾るので、一名葵祭ともいふ。（なほ第四一段・第一三七段・第二二一段等参照）【茂りゆくほど】「ほど」は、頃の意。「世のあはれも人の戀しさもまされ」これもはつきりしない句である。文段抄に「花に見し梢のかはりゆきて、其花のたよりにとひ來し人もおとづれぬより、盛者必衰の理りも思ひしられ、人も戀しきとの心也。古今に朝恒、我宿の花見がてらにくる人は散りなむ後や戀しからまし」と書いてあるが、これで大體はよからうと思ふ。「あはれ」を、物寂しいとか、物悲しいとかいふ意味にしましとして、塚本氏は「世の中に對するしみ」とした精意と書いて居られるが、それでは何の事だか分らないやうである。これはやはり一種の寂しさであらう。普通に考へれば、大體花の散つた後の寂しい心持と見てよからう。さうしてさういふ寂しさの爲、人を戀しく思ふ情も一層強くなるであらう。但しこの「人」が特定の或人か、或はたゞ漠然と人なつかしく思ふをいつたものかは、いづれともきめられない。かういふ事は、その人及びその場合による事である。しかしこれも普通に考へれば特定の人と見る方が分りよからう。【人のおほせられし】「人」は、誰だかわからないが、誰であつてもかまはない。これも筆者自身の主觀を人に託して言つたと見られぬでもないが、強ひてさう見る必要もない。ところでこの「おほせられし」は、何所からを指していつたものか、甚だ曖昧だが、大體「若葉の梢」以下と見てよからう。しかし「灌佛の比」も「祭の比」も「若葉の比」も、さう時に違ひはないから、筆者自身もさうはつきりとは意識しないで書いて居るのであらう。【げにさるものなれ】「さる」は、然る。

【一九】折節のちつりかはること



實際その通りである。【五月あやめふく比】この「五月」は次の「早苗とる比」にもかゝり、結局「心ぼそからぬかは」まで意味が續いて居ると見てよい。「あやめ」は萬葉のこと、「ふく」は、それを軒端に挿すこと。これは五月五日の所謂端午の節供にする事で、今日も行はれて居る。【早苗とる比】「早苗」は、稻の苗。それを苗代から取つて田に移し植ゑるを「早苗をとる」といふのである。【水鶏のたゞく】「水鶏」はその鳴聲がやうど戸をたゞくやうに聞えるといふので、この鳥に限り「鳴く」といはずに「たゞく」といふことになつて居る。「たゞくとて宿の妻戸をあけたれば人もこず糸の水鶏なりけり」(拾遺集、戀)「横の戸をしひてもたゞく水鶏かな月の光のさすを見る」(風雅集、夏)。尤も「鳴く」といつたものもある。「水鶏なく森一むらは木ぐらくて月に晴れたる野べの遠方」(同)。但し水鶏の鳴聲が戸をたゞくやうに聞えるといふのは、古人の觀察が誤つたので、若しトーン、或はボンボンと鳴くの音を水鶏と思つて居たのなら、それはタマシギの聲を水鶏と思つたのだと川口孫次郎氏の話である。【心ぼそからぬかは】心細くなからうや、心細くあるといふ意。「かは」は、反語。【あやしき家】みすばらしい家。粗末な家。源氏物語(夕顔)に「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲き侍りける。」「ふすぶる」くすぶる(他動詞)。【あはれなり】趣が深い。一種の寂しみを帯びた、おちつきのある情景をいつたのである。【六月賦】六月晦日に行ふ大祓の事。「なごしの賦」ともいふ。公事根源に云ふ「大ばらへといふは、百官ことごとく朱雀門に集りて、祓をなし侍るなり。六月・十二月二たびあり。天武天皇の御時より始る。云々、この大祓は百官一同に集りて祓をするなり。」

【七夕まつる】七夕まつるこそ、なまめかしけれ。やうく夜寒になるほど、雁なきて來るころ、萩の下葉色づくほど、わさ田かりほすなど、とりあつめたる事は秋のみぞおほかる。又野分のあしたこそ、をかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などに、ことふりにたれど、おなじ

【七夕まつる】秋の行事では七夕祭がある。これは實に優美なものだ。さてその中にだんく〜と夜寒になる、雁が鳴

事、又今さらにはじともあらず。おぼしき事はぬは、腹ふくる、わさなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきさびにて、かいやりすつべき物なれば、人の見るべきにもあらず。

【七夕まつる】七月七日の夕に牽牛・織女二星を祭ること。一名「ほしまつり」、これは星を祭るよりの名、又「乞巧奠」ともいふ。これは女子が、星を祭つて技藝の上達を願ふよりの名。この風習はもと支那のものである。公事根源によれば、我が國で始めて乞巧奠が行はれたのは孝謙天皇七年(續紀には見えない)だとある。文學に於ては既に懷風藻に七夕を題としたものがあり、萬葉集にも卷八の山上憶良の「七夕歌十二首」を始としていくらもある。(正徹本には「七夕まつりこそ」とある)。「なまめかし」優雅とか優美とかいふ意。祭の様子から考へても、それは推測されるであらう。【やうく夜寒になるほど】「夜寒」は、秋が稍深くなつて、晝の間は暖いが、夜になると、幾分寒さを感じるをいふ。だんく〜と夜寒になる頃の意。古今集(秋)に「夜を寒みころもかりがね鳴くなべに萩の下葉もうつろひにけり。」「萩の下葉色づくほど」「下葉」は、下の方にある葉。「色づく」は、枯れて黄色くなつてゆくこと。萩は下の方の葉からだんく〜枯れて行くものである。「ほど」は、頃。【わさ田かりほす】「わさ田」は、早稲田。即ち早稲の作つてある田圃。「かりほす」は、その早稲を刈取つて干すをいふ。勿論田を干すのではない。【とりあつめたる事は秋のみぞおほかる】「とりあつめたる」は、何やかやいろ〜の事が一緒になること(人為的に取集めるといふのではない)。「秋のみぞおほかる」の「のみ」は、たゞ強く言つただけで、秋は特に多いといふだけの意。【野分のあした】野分の風の吹いた翌朝。「あした」は、單に朝といふ意でなく、夜中に暴風が

いて來る、萩の下葉が色づいて來る。その時分になると、早稲田も刈取つて乾す。かうしていろ〜の事が一緒になるのは秋が殊に多い。又野分の吹いた翌朝は實に面白いものである。かういふ風に一々言ひつけると、皆源氏物語や枕草子などに言ひふるされた事であるが、さればとて古人の言つたと同じ事を、今又言つて悪いといふ事もあるまい。心に思つて居る事を言はないのは、腹のふくれる事であるから、筆にまかせて勝手な事を書きつゞけた、くだらないなぐさみ書

【七夕まつる】折節のうつりかはるこそ



きで、固より破り棄ててしまふべきものであるから、人の見る筈もないものである。

吹いて、その翌朝をいふ。枕草子に「野分のまたの日こそ、いみじうあはれにおぼゆれ云々。」なほこの「野分」についてはよく誤解するやうであるから、ちよつと附け加へて言つておく。今の辭書や註釋書類を見ると、どれも皆「晩秋の暴風」といふ風に書いてあるが、これは昔の人のいつた秋を今日いふ秋と混同したから起つたのである。枕草子や源氏物語などによつて見ると、野分の吹く頃には、萩や女郎花が盛りである。殊に源氏物語には、「八月」と月を示した所がある。この八月といふのは、今の九月にあたり、今日でも大體九月の上旬から中旬にかけて、二十日又は二十日といふ暴風の来る時期がある。古書に所謂野分は即ち之をいつたのである。春や夏にも暴風はこの時分には、生ひ茂つて居た夏草が漸う枯れようとして、野にはいろ／＼美しい秋の花が咲きつゝ居る。かういふ時節に、特にひどい風が来るから、野分といふ名も起つたのである。又さういふ野を吹き荒すから、その翌朝の襟を面白いともいつたのである。(正徹本には「野分のあしたこそおもしろけれ」とある)。「いひつゞくれば」かうして秋にはいろ／＼の事がある。それを一々擧げて言ふとの意。「みな源氏物語枕草子などにことふりにたれど」  
「ことふる」は、「事舊る」、即ち古臭くある、陳腐であるといふ意。いろ／＼と言つてみたところで、其等の事は皆既に源氏物語や枕草子などに書かれて、陳腐になつてしまつて居るが。「おなじ事また今さらにはじとにもあらざ」  
「同じ事」は、源氏などに書いてあるのと同じ事。「また今さらには」は、今又事新しく。源氏物語や枕草子に書いてあると同じ事を今又新しく言つて悪いといふ事もあるまいの意。この「いはじとにもあらざ」は、今の口語に直譯すると、「いふまいといふわけでもない」といふやうな事になる。そこで今の註釋書には「いふまいと思ふ譯でもない」「言ふまいときまつたものでもない」などと書いてあり、「イハジのジは自分の確定意志を表はす」などと説明してあるが、それは要するに所謂受驗本位の國語の譯し方ではあるまいか。内海氏が「しかし同じことを今更にうてわるいわけもあるまい」といつて居られるのは、所謂受驗國語からへば間違であるが、極自然な態度で讀心にあるだけ、この方が却つて筆者の本意に近いのではないかと私は思ふ。「おぼしき事はぬは腹ふくるゝわざ」と心に思つて居る事を言はずにおくと、それがたまつて腹がふくるといふ意。「わざ」はたゞ「こと」といふこと、こ

れは大鏡の序に「おぼしき事はぬは、げにぞ腹ふくるゝ心地しける。かゝればこそ、昔の人は物言はまほしくなれば、穴を掘りては言入れ侍りけめ」とあるによつたのであらう。【筆にまかせつゝ】筆の動くに任せの意で、「口から出まかせに」といふと同じぐ、筆の進むに隨つて自然に書けて行つたといふ意。但し此處は「筆にまかせつゝ書きたるあぢきなきすさびにて」又は「筆にまかせつゝ書きしものにて、あぢきなきすさびなれば」といつたやうなつゞき工合になるのである。【あぢきなきすさび】つゞまらない筆すさび。くだらないなぐさみ書き。【かいやりすつ】「かい」は、「かき」の音便、字をあてれば「無」であるが、接頭語で、特殊の意味はない。「やり」は破り。破り棄ててしまふといふ意。【人の見るべきにもあらず】「人の」は、「人が」の意。人が見る筈もない。どうせ破つてしまふもので、人が見る筈もないものであるから、古人が書いて居らうが居るまいが、そんな事にはお構ひなく、自分で書きたいと思ふ事を書かうといふのである。

さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさ／＼劣るまじけれ。汀の草に紅葉のちりとゞまりて、霜いとしらうおけるあした、やり水より煙のたつこそをかしけれ。年の暮ればてて、人ごとに急ぎあへる比ぞ、またなくあはれなる。すさまじき物にして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ばそき物なれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねてもよほし行はるゝさまぞいみじきや。追儂より四方拜につゞくこそおもしろけれ。

此所は冬。紅葉の散る初冬から始つて、歳末に及び、さて歳末最後の行事たる追儂から直翌年の四方拜に續く

〔一九〕折節のうつりかはること

さて冬枯の景色こそは、秋にも殆ど劣らないだらう。汀の草に、散つた紅葉が止まつて居り、霜が白くおいて居る朝、遺水から煙の立上つて居るのは、實に趣のあるものである。年が暮れてしまつて、世間の人が誰も彼も皆忙しさをうして居る



時分は、殊に感深いものである。又昔から時節外れで面白くないものとして、見る人もない冬の月が寒さうに澄んで居る二十日過ぎの空は、實に心細いものである。御佛名の式があるとか、荷前の使が立つとか、かういふ事も亦感深く尊い事だ。此の外十二月にはいろいろの行事が度々あり、其等の事が新春の用意に取重ねて催される様子は實にたいしたものである。それから追儼より直翌年の四方拜に續くのは面白い。

ことを書いたのである。「冬枯のけしきこそ秋にはをさく劣るまじけれ」といひながら、繼に小さい庭園の景を描いて、それ以上には出られないのは、恐らく古典文學にその模範がないからだらう。  
【さて】前節の終は辯解になつて、「人の見るべきにもあらず」で筆を止めたので、今度は「さて」といつて、又新しく文を起したのである。【冬枯】冬季草木の枯れて眺の寂しいこと。【をさく劣るまじけれ】「をさく」は、殆ど、あまりなどの意で、下に必ず打消の語が来る。但し場合によつては、殆ど「決して」と同じくらの強さで使はれることもある。その興趣は殆ど秋にも劣らないだらうといふ意。【汀】水際。此所は直次に「遣水」といふ語があるから、庭にある池の汀をいつたのであらう。【紅葉のちりとままりて】散つた紅葉の葉が草の上にひつかまつて居るをいふ。【ヤリ水より煙のたつ】「ヤリ水」は「遣水」、庭の中へ堰入れた細い流。「煙」は、その流から立上る水蒸気が寒氣の爲に冷却して、白い煙のやうに見えるをいふ。【年の暮れはてて】年末になつたこと。必ずしも大晦日のみをいふのではない。「人ごと」に「急ぎあふ」は、誰も彼も。「急ぎあふ」は、誰も彼もが皆急いで居るといふ意。即ち世間の人達が皆忙しうにして居るをいふ。【またなくあはれなる】「またなく」は、この上なく。「あはれ」は、内海氏の「詳解」などに「殊に興のあるものだ」と書いてあるが、此所は興趣の深い意味ではなく、寧ろ「感慨深き」といふ方である。即ち年の暮のあわただしい世間の様子などを見ると、不安・焦躁・寂寥などの感を感じみく味ふ。さういふ事をいつたのである。【すさまじきものにして見る人もなき月】「すさまじ」は、興なし、面白みなしといふこと。但し此所は文段抄に「時過ぎて、つきなき心也」といつてあるのがあつて居る。即ち時節はづれて面白くないといふこと。枕草子に「すさまじきもの、晝はゆる大、春の細代、三四月の紅梅のきぬ、云々。」又源氏物語(總角)には「世の人のすさまじきことにいふなる十二月の月夜の曇なくさし出でたるを、簾まきあげて見給へば云々。」發好は多分之以つたのであらう。時節外れで面白くないものとして賞玩する人もない月の意。【寒けく澄める二十日あまりの空】二十日あまりの月が寒さうに澄んで居る空。二十日あまりの月では、時刻からいつても大分おそく、月そのものも、もう餘程減つて居るから、一入心細く感ずるのである。【御佛名】十二月十九日より三日間宮中で行はれる佛事。公事根源に云ふ「今日(十九日)より二

十一日まで三ヶ日なり。或は一夜も例あり。仁壽殿の御本尊を移して、御帳の中にかけて、南の帳の間に、又南北に机をたてて、佛像塔形を置く、云々。此の佛名といふは、三世諸佛の名號を唱へて、六根の罪を滅する心なり。誠に佛名經に説かるゝ所の功德は量りなきにや。寶龜五年十二月より始る。【荷前の使たつ】「荷前の使」は、諸國から奉つた貢の初穂を帝陵及び外戚の墓へ獻られる使。「たつ」は出發をいふ。但し出發は吉日を選んでするので、きまつた日はない。公事根源に云ふ「まづ十三日につかき」を豫て定めらる。使は公卿のも殿上人のもあり。次官副ひたり。云々。【あはれにやんごとなき】「あはれに」は、「あはれなり」を中止にした形。あはれにもあり、又やんごとなくもあるの意。「あはれ」は、これも「興趣深き」の意ではなく、しみんと有難さを感じるといふ意で、殆ど次の「やんごとなし」と同意に使つたのであらう。「やんごとなし」は、尊い。【公事どもしげく】「公事」は、朝廷で行はれる儀式其他の行事、十二月は朝廷の行事が特に多いをいふ。【春のいそぎにとりかさねて】「春のいそぎ」は、新春の用意。「とりかさねて」は、その上に加へての意。十二月にはいろいろの行事があるのに、その上正月の仕度まであるをいふ。(言葉の上では正月の仕度の上にいる)の公事が深山あるといふ事になる。【いみじきや】たいしたものだ。大變だなどの意。「や」は「よ」と同じやうな意味をなす助詞である。【追儼】十二月晦日疫鬼を追拂ふ爲に宮中で行はれる鬼やらひの儀式。公事根源に云ふ「今日(三十日)は儼やらふ夜なれば、大舍人寮鬼をつとめ、陰陽寮祭文をもて、南殿の邊につきて讀む。上卿以下これを追ふ。殿上人ども御殿の方に立ちて、桃の弓、葦の矢して射る。仙華門より入りて、東庭を経て、瀧口の戸に出づ。今宵御前に燈を多くともす。東庭・朝餉・臺盤所の前の砌に燈臺を置なく立ててともすなり。追儼といふ事は、年中の疫氣を拂ふことなり。【四方拜】正月元日、寅の刻(午前四時)に天皇清涼殿の東階の前庭に出御まし、天地・四方・山陵を拜し、年災を拂ひ、五穀の豊穰、寶祚の長久を祈り給ふ儀式。【くこそおもしろけれ】大晦日の晩に追儼が行はれ、それがすむと、間もなく四方拜の儀式に移るわけであるから、年を異にする二つの儀式でありながら、それが直に引續いて行はれるのは面白いといふのである。



つごもりの夜いたうくらきに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たゝき走りありき  
 て、何事にかあらむ、ことごとくしくの、しりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音  
 なくなりぬるこそ、年のなごりも心ばそけれ。なき人のくる夜とて、たままつるわざは、此の  
 ころ都にはなきを、あづまのかたには、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか。かくて  
 明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしきこゝちぞする。大  
 路のさま、松たてわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

前に一旦追備より四方拜までを書いたが、此所に再び晦日の事にもどつて、大晦日の夜の騒々しい様から、そ  
 れが新年に移ると共に静かになる情景を書き、又記憶を呼び起して、嘗て見た東國の魂祭の事なども書いて、さて翌  
 朝即ち新年の朝のめでたい光景に及んだのである。

【つごもり】「月」の略だといふ。月の最終の日。即ち所謂三十日であるが、此所は特に十二月の晦日、即ち  
 所謂大晦日（東京では大三十日）をいつたのである。（正徹本には「つごもりの夜は」とある。）「いたうくらきに」  
 「いたう」は、「いたく」の音便。「くらきに」は、暗いがその中の意。「松どもともして」松明をともしして。この  
 時代にはまだ松明を持つて歩いて居たのである。「夜半すぐるまで」夜なみかまで。「よは」(ヨハ)は、たゞ夜と  
 いふ意味にも使ふが、此所などは所謂夜なみかである。「夜半」は、句解や大成などにはヨハとよんで居るので、こ  
 の本でもさう假名を附けておいたが、正徹本には假名で「よなな」とある。「夜半」と書いても、ヨナカとよむ方が  
 よいとも知れない。「人の門たゝき」戸をしめて居る人の家へ行つて門をたゝき、戸をあけさせようとするをい  
 ふ。【ことごとくしくの、しりて】「ことごとくしく」は、たいさうらしく、仰山さうに。「の、しる」は、大きな聲で

大晦日(オホミソカ)の夜は  
 眞暗であるが、そ  
 の中で松明(タイ  
 マツ)をとぼし  
 て、夜半(ヨナカ)  
 過まで人の門をた  
 たいて走り歩き、  
 何事か知らぬが、  
 たいさうらしくわ  
 めき散らして、足  
 も地につかない程  
 忙しきうに方々走  
 り廻つて居るが、  
 明方からは、さす  
 がにしんと静まつ  
 てしまふ。もうこ  
 れで今年もお別れ  
 かと思ふと、何だ  
 か名残をしく心細  
 く、しんみりとし  
 た氣持になる。死  
 んだ人が来る夜だ  
 といつて魂祭(タ  
 マツリ)をする  
 ことは、此の頃は  
 もう京都にはない

が、關東地方では  
 今もなほ行ふ事  
 で、嘗てその様を  
 見た時には、しみ  
 じみと深く感じ  
 た。さてかうして  
 いよ／＼元且とな  
 り、明けて行く空  
 の様子は、別に昨  
 日と變つたとも見  
 えなけれど、も  
 さすがに今日は打  
 つて變つて何だか  
 物珍しいやうな氣  
 がする。大通(オ  
 ホドホリ)の様子  
 を見ると、どの家  
 も／＼皆つと門  
 松を立て連ねて、  
 花やかに嬉しさう  
 であるが、これ亦  
 實に趣が深い。

わめくこと(罵倒する意味ではない)。これは何の爲であるか、確には分らないが、句解に「是皆今の俗に十二月晦  
 日にかけてふとて人々のありくをいふと見えたり」とある通り、所謂掛取ではないかと思ふ。【足を空にまどふが】  
 「足を空に」は、足が地につかぬといふ意で、非常に急いで歩くさまをいふ。「まどふ」は、迷ふとかまごつくとか  
 いふ意であるが、此所は彼方彼方へ走り廻つて居る様をさういつたのである。但し「まどふが」は、「まどつて居る  
 のが」の意。【曉がたより】正徹本には「あか月より」として「がた」がない。【さすがに】さうはいふものや  
 はり。【年のなごりも心細けれ】「なごり」は、餘波の意が本であるが、それから轉じて別れを惜しむ心、又最後と  
 か別れとかいふ意にもなる。新古今集(雜)に「馴れ／＼て見しはなごりの春ぞともなどしら川の花の下蔭」とあ  
 る。「なごりの春」は、その花に別れる春の最後といふ意であるが、此所の「年のなごり」もそれと同じ使ひ方で、  
 その年と別れる最後をいふ。但し「なごり」といふ語の中には、所謂名残を惜しむ心持も籠つて居ると見てよい。  
 世間の騒がしい間は、それほどにも思はないが、さてしんと静まつてしまふと、何となく寂しい心持となり、これ  
 が最後で、今年ともう別れてしまふのかと思ふと、さすがに心細い氣がするのである。【なき人のくる夜とて】死  
 んだ人の魂が歸つて来る夜だといふので。【たままつるわざ】死者の靈を祭ること。所謂魂祭。平安時代に魂祭が  
 十二月に行はれたことは、後撰集(哀傷)に「妻のみまかりての年のしはすのつごもりの日ふることといひ侍りける  
 に、亡き人の共にしかへる年ならば暮れゆく今日は嬉しからまし」(兼輔)。後拾遺集(哀傷)に「十二月のつごも  
 りの夜よみ侍りける、亡き人のくる夜ときけど君もなし我が住む宿や魂無きの里」(和泉式部)。枕草子にも「木は」  
 の所に、「ゆづり葉のいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青うきよげなるに云々、なべての月頃は、つゆも見  
 えぬものの、しはすの晦日にしも時めきて、亡き人の食物にも敷くやとあはれなるに云々。」ところが四季物語七月  
 の條には、「なき玉まつる事は、一年にあまたたび有るものから、わきて此の月のまつりは年の終りもいやそひて  
 悲しう思ひなざるに云々。」十二月の魂祭が漸くおろそかになつて、七月の方が盛んになる程路を示して居る。【此  
 の比都にはなきを云々】「此の比」は、兼好の當時。その頃には京都にはもう十二月晦日に魂祭をするといふこと  
 はなくなつて居たのである。しかし關東地方には昔の風俗がまだ残つて、それが行はれて居たのである。「なほする



ことにてありしこそは、甚だまづい曖昧な書き方であるが、思ふにこれは嘗て彼自身が關東に行つた時實見したことを思ひ出して、不用意にかういふ書き方をしたのであらう。【ひきかへ】昨日とは打つて變つての意。【大路のさま】都の大通の有様。【松たてわたして】この「松」は、今いふ門松のこと。「たてわたす」は、どの家もくずらうと遠くまで門松を立て續けて居ること。【またあはれなれ】句解に「此あはれは面白き義也」とある通り。

二〇

なにがしとかやいひし世すて人の、「この世のほだしもたらぬ身に、たゞ空のなごりのまをせしき」といひしこそ、誠にさもおぼえぬべけれ。

【何とかいつた世捨人がこの世の東緯は何も持たない身にも、ただ四季の風物の移り變りに對してだけは名残惜しい氣がする」といつたが、なるほど、さう思はれさうな事である。

この浮世には何の拘束も執着もない身にも、四季の風物の移り變りに對してだけは、さすがに一種の名残惜しさがあると言つた或世捨人の言を擧げて、なるほどさう感じるのも尤もだと同感の意を表したのである。但し前段に四季の興趣を述べたについての餘論のやうなものであつて、内海氏の言はれる通り、或は筆者自身の感想を人に託したものかも知れない。しかし必ずさうときめてしまふにも及ばない事である。

【なにがしとかやいひし世すて人】「世すて人」は、俗世間との關係を絶つて隱遁的生活をして居る人。但し我が國でいふ「世捨人」は、總べて世を通れると共に佛門に入つたものである。【この世のほだし】「ほだし」は、自分の身を拘束するもの、即ち妻子・財寶の類をいふ。【もたらぬ】「もちてあらぬ」の約。持つて居ない。【空の名残】實に含蓄のある面白い言葉で、説明しては、うまみがなくなりさうであるが、一々いふと、「空」は四季の風物をいひ、「なごり」は前段にあつたと同じく「別れ」といふやうな意。即ち四季の變化につれて、花鳥風月の趣も

次第に移り變つてゆく、それに対する惜別の情である。【さもおぼえぬべけれ】なるほど、さうも感ずることであらう。さう感ずるのも尤もな事である。(第五段にも「さもおぼえぬべし」といふ句があつた)。

二一

よろづの事は、月見るにこそ慰む物なれ。ある人の「月ばかりおもしろき物はあらじ」といひしに、又ひとり、「露こそあはれなれ」とあらそひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらむ。月花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩にくだけて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかすめでたけれ。沉湘日夜東に流れ去る、愁人の爲にとゞまることしばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も「山澤にあそびて魚鳥を見れば、心たのしむ」といへり。人とはく水草きよき所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむことはあらじ。

【何事も皆月を見る事によつて氣の晴れるものである。或人が「月ほど面白いものはあるまい」と言つたところが、又他の一人が「露こそ一番趣が深い」と言つて、論じあつたのは、實に面白い事である。その場合に當れば、何だつて人心に感興を起させないものはなからう。月や花は言ふまでもないが、風といふものが又殊に人の心を動かすものやう

前段には、浮世は捨てても自然に對する愛着は到底捨ててしまふことが出来ないものだといふ意味の事を書いたが、その續きとして、此所には、月にせよ、露にせよ、將風にせよ、水にせよ、自然界の風物はすべて深い感興を我々人間に與へるものだといふ事を書いたのである。正徹本には前段とこの段とを同一段としてあるやうだが、これが寧ろ本の姿ではないかと思ふ。

【二一】よろづの事は月見るにこそ慰む物なれ

五十七(四)



である。又岩に碎けて清く流れる水の様子、四時とも常によいものである。沈湘日夜東に流れ去る。愁人の爲にとどまること、しばらくもせず」といふ詩を見た事があるが、全くしみ／＼と深く感じた。昔康も「山澤に遊びて魚鳥を見れば心樂しむ」といつて居る。人里遠く、水草の清い所を逍遙するほどの心の慰むことはあるまじ。

【よろづの事は月見るにこそ慰むものなれ】「よろづの事」は、總べての事。「月見るにこそ」は、月を見ることによつて。「慰む」は、氣がまぎれる、心がはれやかになる。【月ばかりおもしろきものはあらじ】月ほど面白いものはあるまい。【露こそあはれなれ】この「あはれ」も、前の「おもしろし」も、次の「をかし」も、結局皆同じ意味で、趣が深いといふこと。【あらしひこそ】どちらがすぐれて居るかについて論じあつたこと。【折にふれば】和歌の題に「折にふれて」とある「折にふる」で、時に應ずるとか場合にあたるとかの意。何かその場合にあつれば。【何かはあはれならざらむ】「かは」は反語。「あはれ」は、人の感興を惹くこと。人をしてしみ／＼と感ぜしめること。總べての物が皆趣深いものだの意。【月花は更なり】「更なり」は、いふまでもない、勿論のこと。月や花が「人に心をつくる」は勿論のことであるの意。【風のみこそ人に心はつくめれ】この「のみ」は、昔通使ふ「だけ」の意でなく、特にそれを力強くいふ爲に使つたもので、「殊に風こそは」といふやうな意。「人に心をつく」は、人の心を動かす、換言すれば、人をしてしみ／＼と感ぜしめるといふ意。新古今集(秋)に「おしなべて物をおもはぬ人にさへ心をつくる秋の初風(西行)といふ歌がある。或はこれなどから暗示を得て書いたものかも知れない。【水のけしき】水の様子。(八七頁に「森のけしき」といふ語がある。【時をもわかずめでたけれ】春がよいとか夏がよいとか、特に何時といふ時の差別もなく、何時でもよい、結構である。【沈湘日夜東に流れ去る云々】三體詩(一)にある戴叔倫の「湘南即事」と題する詩。「盧橋花開風葉衰。出門何處望京師。沈湘日夜東流去。不爲愁人住少時。」(盧橋)は枇杷、「沈湘」は共に川の名。「愁人」は京都を懐うて愁に沈める人、即ち戴叔倫自身をいふ。(正徹本には「とどまることしばらくもあらず」とある)。「昔康」字は叔夜、晉の人、所謂竹林七賢の一人である。【山澤にあそびて魚鳥を見れば心たのしむ】「山澤」は、山と澤、但し山や水のはもとといふくらゐの意味。「たのしむ」は「たのしむ」と同語。(正徹本には「たのしむ」とある)これは文選にある「與山互源(絶交書)」と題する昔康の長い文の中にある句で、「又聞三道士遺言。餌三木實精。令三人久壽。意甚信之。遊山澤。觀魚鳥。心甚樂之。一行作史。此事便廢。安能舍其所樂。而從其所不樂哉。」とあるものを指したのである。【人とほく水草きよき所】「人とほく」は、俗世間から遠く離れたこと。「水草」は、水中に生えて居る草。古

今著聞集(五)に「嵯峨天皇玄賓上人の徳をたふとび給ひて、僧都になし給ひけるを、玄賓位記を木の枝にさしはさみて、和歌をかきつけて失せにけり、外國は水草きよしことしげき天の下にはすまぬまされり。」(「外國」は、畿内以外の諸國をいふ)。

三三

【何事でも昔古い時代が懐かしい。當世風はどれも全く下品になつて行くやうである。かの指物師(サシモノシ)の作つた美しい器物も、昔の物の細工振は、實に趣があるやうに見える。手紙の文句なども、昔の反古は實に立派なものである。平生口にする言葉も、だん／＼と情ないものになつて行く様である。昔は「車もたげよ」

何事も、ふるき世のみぞしたはしき。今やうは無下にいやしくこそなりゆくめれ。かの木の道のたくみの作れるうつくしきうつは物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。文のことばなどぞ、昔の反古どもはいみじき。たゞいふ詞も、くちをしようこそなりもてゆくなれ。いにしへは「車もたげよ」「火かゝげよ」とこそいひしを、今やうの人は「もてあげよ」「かきあげよ」といふ。主殿寮の「人数だて」といふべきを「たちあかししろくせよ」といひ、最勝講の御聽聞所なるをば、「御かうのろ」とこそいふを、「かうろ」といふ、くちをしとぞ、ふるき人は仰せられし。

【何でも古いものがよい、當世風のものはずべて下品だといふので、先づよい方の例として道具類を挙げ、手紙の文句を挙げ、それから當時實際行はれて居た言葉を挙げて、それを前代のものに比し、いかに下品になつたかを示したのである。但し「古は」より「口惜し」までは、或老人の言として挙げたのであるが、實は悉く筆者自身の言であらう。

【古き世のみぞしたはしき】古い時代がなつかしい。「のみ」は、意味を強める爲に置いた語。【今は無下にい



「火かまげよ」と言つたのを、當世の人は、「もてあげよ」「かきあげよ」といふ。又主殿寮の「人数だて」といふべき所を、「たちあかししろくせよ」といひ、最勝講の御聽聞所である所は、「御講の廬」といふべきであるのに、單に「講廬」といふ、情ない事だと、或老人が話された。

やしくこそなりゆくめれ】當世風は、全くどうも下品になつて行くやうだ。「無下に」は、一向に、全くなどの意。【かの木の道のたくみ】「たくみ」は、工。木工、即ち大工。指物師の類。「かの」といつたのは、筆者の心中に漠然と指しただけで、表面に現れては、特に指して居るものはない。【うつは物】器物。この語から見れば、前の「木の道のたくみ」は、指物師と見てよからう。【古代の姿】「姿」は、細工振。「古代」は、「今様」に對していふ語で、たゞ昔といふだけの意味。【文のことば】手紙の文句。【昔の反古】「反古」は、「反故」とも書き、ホゴ、ホウゴ、ホグ、ホウグなど、いろ／＼に読んで居る。これは勿論反古だけがよいといふのではない。昔の手紙であるから、今は反古となつて居るのを見るのが多いので、そんな反古でもといふ意になるわけである。【いみじき】實に立派なものであるといふ意。【たゞいふ言葉】上の「文のことば」に對し、平生談話に使ふ言葉をいふ。【くちをしろこそなりもてゆくめれ】「くちをし」は、物足らぬ感じのすること。つまらない、情ないの意。「なりもてゆくめれ」の「もて」は、殆ど意味がない。だん／＼なつて行くといふやうな意味である。【車もたげよ】「車」は牛車。「もたげよ」は、モチアゲヨの約。【火かまげよ】「かまぐ」は、カキアゲ（敷上）の約。油火の燈心を敷上げて火を明るくするをいふ。【今やうの人】當世の人、近頃の人。【もてあげよかきあげよ】昔の人は、「もてあげよ」「かきあげよ」といつたのに、近頃は簡略にして「もたげよ」「かまげよ」といふが、それは下品だといふのならば、次の「講廬」の場合とも一致して、趣意は通る。しかし此所は語そのものについてのよしあしは問題外で、たゞ古人の言ひ方は正しく上品であり、今人のはいふやうなといふ一種の主觀から來た論に過ぎない。【主殿寮】トノモリノツカサ・トノモゾカサ・トノモンレウなどともいふ。宮内省に屬し、天皇の輿・蓋笠・帷帳・湯沐等に關する事、及び殿庭の酒掃、燈燭・松柴・炭燎等の事を掌る。【人数だて】「人数」をニンジュとよんだのは大成による。「たて」の讀方については兩説がある。文段抄や大成はダテとよみ、文段抄には説明として、「節會御神樂などに、主上別殿に行幸させ給ふ時、殿上人脂燭を執りて供奉し、主殿寮二人立明をとりて供奉せり。是を人数だてといふべし」といつて居るが、句解は特に「人数たてとは、主殿寮の人数に座をたちて火をともせよといふ義也。タの字すみてよむべし。濁りて義理心得るは、あやまじなり」と書いて居る。近頃橋本一氏は、「主殿寮の人数立て、全體が

號令の語、立テは命令形故清みて讀む」といふ新説を出された。橋本の説は、古い時代における公事の號令は、殆どすべてが動詞の命令形で終つて居る事から類推して考へると、これも多分動詞の命令形であらうといふのである。命令形とすればダテは清むべきであらう。しかし後世にも「人数だて」といふ語があり、澤山の人を排列するとか手分するとかいふ意味に使はれた事から考へると、これも強ち命令形とも考へられない。もし命令形でないとしたら、ダテと濁るべきであらう。いづれにしても、公事の際に於ては、「たちあかし白くせよ」と同じく、「火をともせ」の意であらう。【たちあかししろくせよ】「たちあかし」は、「立明」と書き、「たてあかし」ともいふ。松明の類。「しろくせよ」は、明白にせよといふ意で、明るくせよといふことである。但し「しろくせよ」といふのであるから、前から持つて居る松明をもつと明るくせよといふ風に聞えるが、これはさうではなく、松明に火をつけて御供せよといふ事であらう。【最勝講】五月中の吉日を選んで、五日の間清凉殿で最勝王經を講ずる法會。【御聽聞所なるをば】「御聽聞所」は、天皇の御聽聞なされる所といふこと。「なるをば」は、「なる所をば」の意。【御かうのろ】御講の廬。最勝講の論議を御聽聞になる所といふ意。但し「廬」はイホで、場所といふ義に用ゐたのであらう。禁中で攝關・大臣・大納言などの宿直又は休息する所を「直廬」といふが、この「廬」も同じ意味のものであらう。【かうろといふ】「御講の廬」を略して單に「講廬」といふのである。【ふるき人】老人。年とつて古い事などをよく知つて居る人をいふ。

【何事もふるき世のみぞしたはしき】と自ら書いて居る通り、兼好には可なり強い尙古癖があつた。尤もこれも兼好だけがさうだといふのではない。その時代全體がさういふ傾向であつたのである。この段なども、それが現れたものであるが、冷静に考へて見れば、殆ど無意義に近い事を憤慨してゐるのである。「御講の廬」といふべきを、「御」を略し、「の」を略して、單に「講廬」といふなどは、鄭重にいふべき言葉を餘りに簡略にし、殊にコロロでは、意味もはつきりしないやうな氣がするから、かういふのは、くちをしと言つてもよいかも知れない。しかし「車もたげよ」の「もたげよ」は、「もちあげよ」の約であるから、「もてあげよ」といつた方が却つて略した言葉でなくなる。「火かまげよ」も同じことで、「かまげよ」は「かきあげよ」の約であるから、「かきあげよ」といつた



方が、寧ろ正しいわけである。これは要するに、耳遠い言葉の方が何となく上品に聞えるといふ一種の感じに過ぎないのである。

二三

【世だとはいつても、やはり禁中の神々しい有様は、俗世間の風(フウ)には染まず、實に結構なものである。露臺・朝餉・何殿・何門などといふのは、外の所にはないものであるから、ちよつと聞いても、いかに結構なものか、うに思はれる。しかし賤しい者の所にもありさうな小葎・小板敷・高遣戸などでも、禁中のものだと思ふ

おとろへたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世づかず、めでたきものなれ。露臺・朝餉・何殿・何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき小葎・小板敷・高遣戸なども、めでたくこそきこゆれ。陣に夜の設せよといふこそいみじけれ。夜御殿のをば、「かいともし、とうよ」などいふ、又めでたし。上卿の陣にて事行へるさまは更なり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこに睡り居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なる物なり」とぞ、徳大寺の太政大臣は仰せられける。

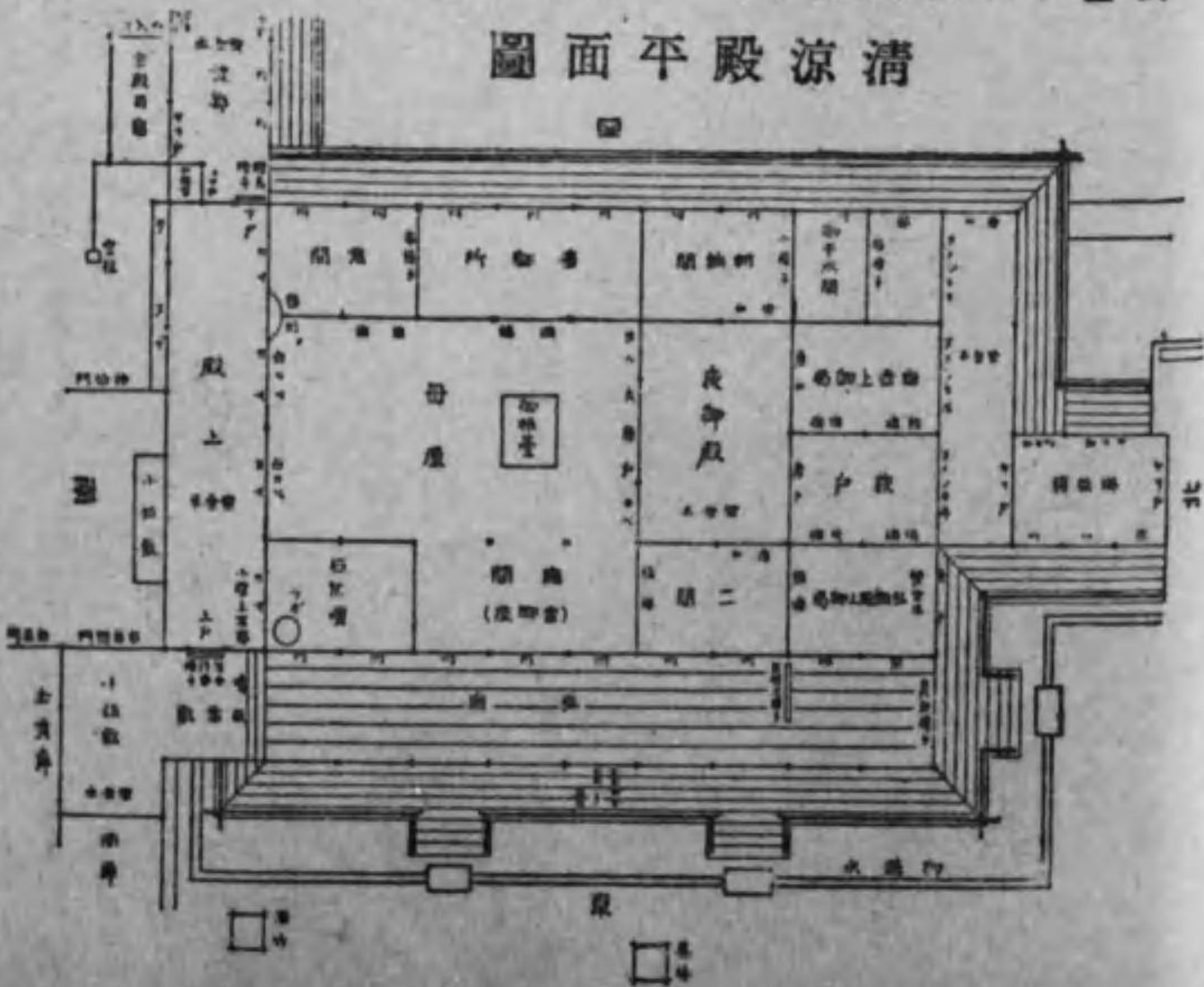
【前段に、昔の事は何でも上品で趣があるといつたについて、此所にはその上品で趣深い事の代表ともいふべき宮中の事を書いたのである。最後に書いた「内侍所の鈴の音」だけは徳大寺太政大臣の話としたのは、かういふ身分の高い人の言葉を引いて、一層強い感銘を興へようとしたのである。

【おとろへたる末の世】王道の衰微、世道人心の頹廢、さういふいろ／＼の意味からいつた語であるが、儒教、

と、實に結構なもの、のやうに聞える。それから「陣に夜の設せよ」といふのは、實によいものである。同じ意味の事でも、夜の御殿のをば、「かいともし、とうよ」などといふ。これ亦實によいものである。上卿が陣の座で事をとり行つて居るのは言ふまでもなく、役所々々の下級役人たちが得意げに、物馴れた風をして居るのも面白い。此等の人達が、あんなに寒い晩に、夜通しあつちやつちに眠つて居たのも面白い。内侍所の御鈴の音は、實に結構な上品なものだ」と徳大寺

【二三】 おとろへたる末の世とはいへど

清涼殿平面圖





の太政大臣は仰せられた。

ものを概括していふ。【何門】これも朱雀門・建禮門等、「門」の字のついたものを概括していつたのである。【いみじとも聞ゆべし】何殿だの何門だのといふと、さういふものは大内裏以外にはないのであるから、その名を聞いただけでも、いかにも立派らしく思はれるだらうといふ意。【あやし所にありぬべき】「あやし」は、「あやしき」に同じ。「あやし」は、賤しい。内裏のやうな特殊な所ではなく、賤しい者の住んで居る所にもありさうなといふ意。【小薙】「薙」は、細い木を縦横に組んで格子とし、その一面に板を張つたもの。(紙をはつても同じく「薙」といふ)。風雨や日光を遮る爲に設けるもので、格子と共にある場合には、格子の外を掩ふやうになつて居る。(つまり後世の建物における雨戸に相當するものである)。「小薙」は、小形の薙であるが、此所にいふのは、清涼殿にある特殊のもので、石灰壇の南壁の上部にある小窓である。なほ第五段「薙の間」参照。【小板敷】小さい板敷、即ち板の縁といふ事であるが、これも清涼殿にあるもの。【高遣戸】「遣戸」は、左右に引いてあけるやうになつた戸。「高遣戸」は、高く造つた遣戸であるが、これも此所にいふのは特殊のもので、清涼殿の中、西南渡殿の南側にあるものである。【めでたくこそ聞ゆれ】「めでたく」は、前の「いみじく」と同意に使つたもの。かういふものは内裏以外の普通の邸宅にでもありさうなものであるが、それでも内裏のものだと思ふと、いかにも結構なものらしく聞えるといふのである。【陣】「陣の座」ともいふ。朝廷で神事・節會等公事の行はれる時、諸卿の坐する所をいふ。軍陣の事ではない。【夜の設せよ】夜の設、即ち夜の用意をせよといふ事で、燈火の用意をせよといふ意味になる。【いみじけれ】實によいものだといふやうな意。結局次の「めでたし」も、同意に使つたものである。【夜御殿のをば】「夜御殿」は、ヨルノオトとともいふが、普通は音便でヨシノオトといつて居る。陛下の御寢所。これも清涼殿の内。「のをば」は「の燈をば」の意。【かいともしとらよ】「かいともし」は、カキトモシの音便で、蓋上げる燈火、即ち油火の燈をいふ。「とらよ」はトクヨの音便で、疾くよの意。同じ燈火の事でも、陣の座では「夜の設せよ」といひ、夜の御殿の方では、「かいともしとらよ」といふ、さういふ言ひ方、殊に「かいともしとらよ」といふ、一種の調子を持つた、さうして又外ではちよつと聞くこともなさうな言ひ方が、筆者の感興を引いたのであらう。【上朝】シャウケイとよむ。公事の時、大臣・大中納言の中で、臨時にその奉行と定められたもの。此所は「上朝

の陣」と續かず、「の」は「が」の意味の助詞である。【事行へる】自分の勤むべき用事をして居るをいふ。【さらなり】いふまでもない。但し下の「をかし」にかゝつて、いふまでもなくをかし(透深し)の意となるのである。【諸司の下人】「諸司」は、いろ／＼の役所を總稱していふ。「下人」は、下級の役人。【したり顔になれたる】「したり顔に」は、得意げに。「なれたる」は、禁中の事によく馴れて居る。つまり禁中の事によく馴れて、別に憶したやうな様子もなく、いかにも得意らしく振舞つて居ることをいふ。【さばかり寒き夜もすがら】「さばかり」は、そんなに、あんなに。但し此所では、前に之に對する語が何もないから、大體非常にといふくらゐの意味に軽く使つたとも見られるが、次項に言ふ通り、自然かういふ書き方になつたのであらう。「よもすがら」は、終夜。【睡り居たるこそをかしけれ】此所の主語も、「諸司の下人」で、それらの連中が、もう馴れきつて居るので、寒さも忘れて坐睡つて居ることをいつたのである。この「睡り居たる」といふくらゐの意味に使つたとも見られるが、これは筆者が嘗て目撃したことを思ひ出して書いたのに違ひない。随つて此所は「さばかり」も「居たる」も、自然過去の形の語となつたのであらう。(七四頁「あはれなりしか」及び次頁「覚えしか」参照)。【内侍所の御鈴の音】「内侍所」は、賢所(カシコドコロ又ケンショといふ)ともいひ、宮中温明殿にあつて、神鏡を奉安する所。此所で御神樂が行はれる。「鈴の音」は、その神樂の鈴の音である。【めでたく優なる】結構で上品な。【徳大寺太政大臣】これは壽命院抄に「實基公也」と書いて以來、今日までそれで通つて来て居るが、誤であらうと思ふ。何となれば實基は文永二年(六十四歳)に薨じた人で、兼好の生れた時には、既にこの世に居なかつたからである。此所にいふのは恐らく實基の子の公孝だらう。公孝ならば、乾元元年十一月太政大臣となり、嘉元二年三月上表、翌年七月八日に出家して、その十二月五十三歳を以て薨じた。すると兼好二十二歳の時であるから、何かの機会に話を聞いたのであらうと思ふ。なほ尊卑分限には、實基を「徳大寺」とし、公孝の方は「徳大寺」であつて、それが尤もらしくもあるが、公卿輔任に於ては、公孝をも「徳大寺」とある。これは或は誤かとも思はれるが、兼好の當時に於ては、これで通つて居たかも知れない。とにかくこの「徳大寺太政大臣」は、公孝と見るのが至當であらう。



二四

齋宮の野宮におはしますありさまこそ、やさしく面白きことのかぎりとは覚えしか。經・佛などいみて、なかご・染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ捨てがたく、なまめかしき物なれや。ものふりたる森のけしきもたぐならぬに、玉垣しわたして、櫛にゆふかけたるなど、いみじからぬかは。殊にかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴船・吉田・大原野・松尾・梅宮。

前段に禁中の事を書いて、何もかも世づかずめでたい感じのするものだと言つたについて、ふと齋宮の事を思ひ浮べたのであらう。さうして此所にはその齋宮の事を書いたのであるが、この段は自然二節に分れ、第一節はその齋宮の事、第二節は、その齋宮の野宮の事から聯想して、一般に神社といふものの優雅にして神々しいものなる事と言つたのである。

【齋宮】 歴代の天皇御一代毎に伊勢大神宮に差遣し奉侍の任に當らしめられる皇女又は女王。總べて未婚者より卜定する事になつて居るが、年齢は場合によつて必ずしも一定せず、時には二三歳の人もあれば、又三十歳位の人もあつた。卜定の後、先づ宮城内便宜の場所に居を移し、之を「初齋院」といひ、其の後城外に地を下して新宮を造り、翌年八月初齋院から此所に移る。之を「野宮」といふ。さて此所で齋齋三年、其の九月始めて伊勢に遷られるのである。(光廣本・嵯峨本・野垣等には「齋王」とある)【野宮】 場所は一定しなかつた(初齋院も同様)。例へば天武天皇の時には泊瀬に、光仁天皇の時には春日に、文徳天皇以後は大坂皇城の北野に設けられた。【やさし

齋宮が野宮に居られる時の有様こそは、實に優雅にして趣深いものだと思はれた。此所では、「經」とか「佛」とかいふやうな語を嫌つて、「中子」とか「染紙」とか言つて居るのも面白い。一般に神社といふものは、何となく人の感興を惹く、優雅なものである。年經た森の様子も、普通の所とは違つて、何となく神々しく見えるがそれに又社の周囲には玉垣を造りめぐらして、櫛に木綿(ユフ)を懸けた様など、實に森

嚴莊重なものである。殊にさういふ感じのするのは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴船・吉田・大原野・松尾・梅宮の諸社である。

く面白きことのかぎり】 優雅にして趣深いことの至極だといふ意。【覚えしか】 普通の書き方としては、「おぼゆれ」としてよい所である。この書には往々かういふ書き方があるが、此等は多分嘗て自分の経験したことを記憶のまゝに書くので、自然かういふ書き方になつたのであらう。【經佛などいみて】 「いみて」は、思ひて。嫌ひ避ける意。本地垂迹の思想は早くよりあり、大神宮で佛敎を忌むといふのをかしのをかしが、さすがに表面的には佛敎を排斥して、佛敎關係の事は口に出すのも憚り、他の言葉で以て言表はすやうになつて居た。此所に言ふのは即ちそれで、之を「齋宮の忌詞」といふ。延喜式(五)に「凡忌詞。内七言。佛稱中子。經稱染紙。塔稱阿良良岐。寺稱瓦葺。僧稱嬰長。尼稱女嬰長。齋稱片膳。外七言。死稱奈保留。病稱夜須美。哭稱豐垂。血稱阿世。打稱撫。突稱廣。墓稱墳。又別忌詞。堂稱香燃。優婆塞稱角管。【なかご】 佛をいふ。織田氏佛敎大辭典に「中尊の意に取るなり」とあるが、もとは内部に在るといふ意味から來たのであらう。【染紙】 佛經をいふ。黄色に染めた紙を用ゐるからである。【をかし】 この「をかし」などは、興味があるといふ意味で、趣が深いといふのと少し違ふ。【捨てがたく】 何となく人の感興を惹くをいふ。【なまめかしきものなれや】 「なまめかし」は、優雅。「ものなれや」は、上に「こそ」がある爲に「なり」が「なれ」となり、それに「よ」と同じ感歎の助詞「や」が附いたのである。【ものふりたる】 何となく古びて莊嚴な感じのするをいふ。【森のけしき】 森の様子。(七八頁に「水のけしき」といふ語がある)【たぐならぬに】 「たぐならぬ」は、普通でない、即ち他の所では見られぬ一種の森嚴な所があるをいふ。【に】 は、その上に又の意を表はす。【玉垣しわたして】 「玉垣」は、神社の周圍に造つた垣。「しわたす」は、周圍にすうつと造りめぐらすをいふ。【ゆふ】 「木綿」と書く。櫛(梶とも書く、桑科楮屬)の纖維で作つた布。これを櫛の枝々に掛ける。之を「ゆふしで」(木綿垂、木綿四手)といふ。今日は細く切つた白紙を附けるが、これはこの木綿垂の變つたのである。【いみじからぬかは】 「いみじ」は、優雅であり神々しくあるをいふ。「かは」は、例の反語。【殊にかしきは】 「殊に」は、前に「すべて神の社は」と言つたに對し、その中でも次に擧げるものは特にといふ意。「をかし」は、上の「いみじ」と同じく、優雅にして神々しい感じのすることをいふ。簡単にいへば、趣深いといつてよからう。【伊勢】 伊勢の皇大神宮。【賀茂】 京都にある上下賀茂神社。六七頁「祭の比」參照。

【二四】 齋宮の野宮におはしますありさまこそ



【春日】奈良春日神社。祭神は建甕槌命・經津主命・天兒屋根命及び同社の比賣神。この内天兒屋根命は、藤原氏の祖先であるといふ關係から、平安時代以來この神社は藤原氏の氏神として崇敬され、特に隆昌を致した。今は官幣大社で、祭日は三月十三日。【平野】京都の平野神社。今木・久度・古開・相殿比咩神四神を祀る。今は官幣大社、祭日は四月十一日。【住吉】大阪市住吉神社。表筒男命・中筒男命・底筒男命及び息長帶姫命（神功皇后）を祀る。現今官幣大社、祭日は六月三十日。【三輪】奈良縣磯城郡三輪山にある大神神社。祭神は大物主神で、これに少彦名命を配祀したものであるが、この神社は拜殿だけで、神殿がなく、山そのものが神社とせられて居る。現今官幣大社、祭日は四月九日。【貴船】京都府愛宕郡鞍馬村にある貴船神社。祭神は開闢神。現今官幣中社、祭日は六月一日。【吉田】京都市吉田神社。祭神は奈良の春日神社と同じく、もとは京都における藤原氏の氏神とせられて居たものである。現今官幣中社、祭日は四月十八日。【大原野】京都府葛野郡大原野神社。これも祭神は春日神社と同じ。現今官幣中社、祭日は四月八日。【松尾】京都府葛野郡松尾神社。祭神は大山咋命・市杵島姫命。現今官幣大社、祭日は四月二日。【梅宮】京都府葛野郡梅津村梅宮神社。祭神は酒解神・酒解子神・大若子神・小若子神。橘氏の氏神とせられたもの。現今官幣中社、祭日は四月三日。

この後半は、文段抄に「枕草子の文法を以て何となく書きつらねたり」と言へる通り、枕草子よりヒントを得たことは確である。たゞ枕草子は、同じ「をかし」といふ語を使つても、その「をかし」が要するに興味本位で、神社として、見た所の神々しきとか、靈驗のあらたかさとかいふ事を主眼とせず、その名前とか、或はそれに關する古歌とか傳説とかを中心として書き、いかにも面白くてたまらないといふやうな所が見えるが、徒然草のは、ただ眞面目くさつて、有名な神社を列挙したに過ぎない。随つてその「をかし」さの内容も、枕草子と同じものとはいへないだらう。（文段抄に「十一社を取分きかきたることあるべし、口訣有」とある、果してどんな口訣があつたか知らないが、とにかく右に言ふやうな差はあるやうに思はれる。）

二五

人の世は、古歌にも言つてある通り、飛鳥川の淵瀬常ならぬ如く、變轉きはまりないものであるから、時がたつにつれて、世の中の事も次々と移り變り、樂しみや悲しみか絶えず行き違ふやうに、交、至り、一時は花やかに榮えて居た所も、何時か人さへ住まぬ野原と變り、住家の方もとのまゝに残つて居れば、その中に住む人は變つてしまつて居る。昔立派な邸宅のあつた跡などを訪ふと、

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、たのしびかなしびゆきかひて、花やかにありしあたりも、人すまぬ野らとなり、かはらぬすみかは人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰と共に昔をかたらむ。まして見ぬいにしへのやんごとなかりけむ跡のみぞいとほかなき。京極殿・法成寺など見るこそ、志とまり事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、莊園おほく寄せられ、我が御ぞうのみ御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおさし時、いかならむ世にも、かばかりあせはてむとはおぼしてむや。大門・金堂など近くまで有りしかど、正和の比南門は焼けぬ。金堂は其の後たふれふしたるまゝに、とりたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞそのかたとして残りたる。丈六の佛九體、いとたふとくてならびおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂などもいまだ侍るめり。これも又いつまでかあらむ。かばかりの名残だになき所々は、おのづからいしづゑばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。さればよろづに見さ

（二五）飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば



らむ世までを思ひおきてむこそ、はかなかるべけれ。

此所は前段とはすつかり變つて、人の世の無常といふ事について書いたのである。尤も句解に言つて居る通り、神社の事を言つたについて、又佛閣の沙汰に移つたと見るのも、心理的推移としては必ずしも不自然な事ではない。先づこの世の常ならぬことを述べて、自分の見聞した所だけによつても、随分變化の多いものであるから、まして見ぬ古の盛んであつた跡のすつかり荒れはてて居るのを見ると、殊にはかない氣がすると言ひ、その例として京極殿・法成寺を挙げたのである。初の方に「飛鳥川の瀨瀨」といひ、「桃李ものいはねば」といひ、古來人口に膾炙して居る詩歌を引いた所は、やはり例の尙古趣味の變形ともいふべき古典趣味から來て居ることは言ふまでもない。最後の「さればよろづに見ざらむ世までを思ひおきてむこそ、はかなかるべけれ」は、この一段の結論ともいふべく、この書には度々現れる思想である。

其所には美しい桃李の花が昔ながらに咲いて居るが、花は物を言はないから、誰と共に昔を語らう。昔の事を語りあふべき人もない。まして自分達の知らぬ昔の時代に尊く立派であつたといふ遺跡の荒れはてた所を見ると、殊にはかない心地がする。例へば、道長公の建てられた京極殿や法成寺などを見ると、子々孫々まで長く榮えるやうにと思はれた故人の志は、今もなほ留り残つて居るが、その事業はすつかり變つてしまつて、昔の面影もない。さういふ有様を見ると、實に

【飛鳥川の瀨瀨常ならぬ世にしあれば】「飛鳥川」は、大和高市郡。源を稻瀨山に發し、飛鳥村を経て磯城郡に入る。今は小さい川であるが、昔は相當大きかつたのかも知れない。古今集(戀)に「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の瀨ぞ今日は瀨になる。」此所は勿論この歌から來て、世の中の變轉極まりなきことに譬へたので、文章の上からいへば、「飛鳥川の瀨瀨」は、「常ならぬ」をいふ爲の序となつて居るのである。「世にしあれば」の「し」は、意味を強める助詞。【時うつり事さり】時がたつに連れて、世の中の事も移り變るといふ意。【たのしびかなしびゆきかひて】「たのしび」は、楽しみ、「かなしび」は、悲しみである。「ゆきかふ」は、行き違ふ。楽しみが來たかと思へば悲しみが來、悲しみが來たかと思へば又楽しみが來るといふ風に、悲喜交々、至るをいふ。この句は、古今集の序に「たとひ時うつり事去り、たのしびかなしび行きかふとも」とあるを取つたのであらう。【花やかなりしあたり】立派な邸宅などがあつて、花やかに榮えて居た所。【人すまぬ野ら】住む人もない荒野。【かはらぬすみかは人あらたまりぬ】上の句は住家の變つた方。此所は住家はもとのまゝ残つて居る場合。住家がもとのまゝ残つて居る所は、其所に住む人が變つて居るといふ意。「あらたまりぬ」は、變つてしまつてゐるといふくらゐの意。【桃李

いたましい。道長公が立派にお造り遊ばされて、莊園を澤山寄附され、我が一族の藤原氏こそは、天子の御後見役、天下の守護者として將來永く榮えるやうにと思ひおかれた當時に於ては、いつどういふ世にならうとも、こんなは荒れはてようとは、どうして思はれよう。その大門や金堂などは、つい近頃まで残つて居たが、正和の頃、南門は焼けた。金堂はそのまゝで再び建て直すこともない。今では只阿彌陀堂ばかりが、昔の盛んであつた形(カタ)として残存して居る。さ

李ものいはねば誰と共にか昔をかたらむ】昔邸宅のあつた跡、又は主人の變つた邸宅などに、桃李が今もなほ昔の通りに美しく咲いて居るが、花は元來無情のもので何も言はないから、遺跡を訪うても、之と共に昔の事を語りあふことは出来ないといふ意。これは和漢朗詠集(雜)菅原文時の「桃李不言春幾暮。煙霞無跡昔誰猶」といふ句によつたものであらう。(文時の句が、「桃李不言。下自成蹊」といふ支那の諺から出て居ることは言ふまでもない。【まして】自分がこれまで見た所でも、上述のやうな事があるのだから、まして自分の知らない昔の事はといふ意である。【見ぬいにしへの】自分の見たこともない古い時代の。「やんごとなかりけむ跡」直譯すれば、尊かつたであらう跡、即ち話などで聞くと、此所には高貴な方が住んで居られたとか、立派なお寺があつたとかいふことであるが、さういふ遺跡はの意。【のみぞ】これも「ばかり」でなく、「殊に」といふやうな意である。【はかなき】脆くして頼みがひなき意。見ぬ古のやんごとなかりけむ跡を見ると、人の世の常なる頼みがたい事を痛切に感ずるといふのである。【京極殿】藤原道長の邸。拾芥抄(中末)に云ふ「京極殿。土御門南。京極西南北二町。其南一町被入二道長家。或大入道殿家上東門院是也。後一條・後朱雀・後冷泉三代帝於此所誕生云々。【法成寺】道長が入道後に住んだ所。近衛の北、京極の東、今の寺町より東、荒神口より北に當る所にあつた。地域方二町、治安二年に成る。【志とままり事變じにけるさま】子々孫々まで永く榮えるやうにと思つた故人の志は、今もなほ留り遺つて居るが、その事業はすつかり變つて、昔の面影もないといふ意。本朝文粹(卷十四)の「樂盡哀來、志留事變」(後江相公、朱雀院四十九日御願文)といふ句などを引用したものであらう。【御堂殿】藤原道長のこと。關白兼家の第五子。官職に於ては、攝政・關白・太政大臣といふ最高の地位を得、又後一條・後朱雀・後冷泉三代の外祖父として、權威並ぶものなく、自ら「この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたる事もなしと思へば」と歌つた。萬壽三年病によりて祝慶し、四年十二月薨、年六十二。【作り磨かせ給ひて】立派に造りたてられたの意。【莊園おほく寄せられ】「莊園」は、寺社又は個人の私有地。自分の田舎に持つて居る地所を寺領として澤山寄附されたといふ意。【御ぞう】「ぞう」は、族。藤原氏の一族をいふ。【御門の御らしらみ】天子の御後見役。即ち攝政。關白たることをいふ。【世のかため】世の守護者といふ意で、大臣となり天下の政を執るをいふ。【行く末までと



うしてその中には丈六の佛が九體、いかにも尊げに竝んで居られる。行成大納言の書いた額や、兼行の書いた扉が、今もなほ昔のまゝにはつきり見えるのは、却つて感慨が深い。法華堂などもまだあるだらう。しかしこれも亦何時まで残ることであらう。此所にはまだかういふものも残つて居るが、これだけの物さへ残つて居ない所は、たま／＼建物の土臺石だけは残つて居ても、それが何の遺跡であるか、はつきり知つて居る人もない。だから自分の死後の世の事までを考

おぼしおきし時】後々までも榮えるやうにと考へおかれた時には、【いかならむ世にも】何時の世、どんな時代にならうとも。【かばかりあせはてむとは】こんな荒れ果てようとは。【あす】(サ下二)は、海河などの淺くなる、色のさめる、又衰へ荒れるなどの意。此所は京極殿や法成寺の廢類して見る影もなくなつたをいふ。【おぼしてむや】思はれたであらうか、思はれなかつたであらうの意。(上の「いかならむ」の意味がかゝつて来る)【大門金堂など近くまで有りしかど】「大門」は、惣門。「金堂」は、本堂。法成寺の惣門や本堂はつい近頃まで残つて居たといふのである。【正和の頃】花園天皇の朝。年月は不明。【南門】上に「大門」とあつたと同じもので、それが南方にあつたから、「南門」ともいつたのである。【その後たふれふしたるまゝにて云々】「その後」は、何時を指して言つて居るのか、よく分らぬが、次にいふ事實によつて考へると、正和の頃に南門は焼け、それから後に金堂は倒れたが、倒れたまゝで、再び元通りに建て直すこともしないといふ意であらう。尤も兼好が之を書いた頃には、堂の用材などがそのまゝ残つて居たとも思はれないが、とにかく倒れた跡を取片附けなどはせず、そのまゝになつて居たのかも知れない。金堂が倒れた事は、續史愚抄、文保元年八月五日の條に、「戊剋。法成寺金堂西面倒」とある。この年は七月の二十二日に地震があつて(皇代曆)、その後度々餘震があつたらしいから、弱つて居た建物は遂に倒壊したのであらう。【無量壽院】阿彌陀堂のこと。日本外来語辭典にいふ「阿彌陀婆(Amitabha)は無量光、阿彌陀由須(Amitayus)は、无量壽の義にして、阿彌陀は其略なり。阿彌陀の三字のみを用ひて下略せるは兩名に通じ巧みなる用法なり。又單に彌陀とも稱す。【そのかたとて】「その」は、法成寺を指す。「かた」は、あとかた、しるし。立派であつた法成寺の遺物として。【丈六の佛九體】「丈六」は、一丈六尺、佛像の高さを表す。「佛」は、右にいふ阿彌陀佛を指す。極樂往生の階級に、上品上生・上品中生・上品下生・中品上生・中品中生・中品下生・下品上生・下品中生・下品下生の九種ある、之を「九品」といひ、極樂淨土の事を「九品淨土」といふ。さうしてこの九品淨土にはそれ／＼阿彌陀如来が居られ、之を「九品の教主」といふ。此所の九體もこの九品の教主にかたどつたのである。【いとたふとくてならびおはします】その竝んで居られる御有様を拜すると、いかにも尊く感ぜられるといふ意。但しこの九體は、兼好の時代にも昔のまゝに残つて居たのである。【行成大納言】藤原行成。

へて處置しておくのは、實際つまらない事であらう。

右近衛少將義孝の長子、祖父伊尹の養子となる。寛仁四年權大納言、萬壽三年按察使を兼ね、翌年薨、年五十六。書法に長じ、道風・佐理と共に三蹟と稱せられた。(第二三八段参照)【兼行】源氏。延幹の子。尊卑分脈に「能書。額書。大和守、内匠頭正四下」とある。父も能書であつたが、兼行の子兼任も書博士であつた。【扉】阿彌陀堂の扉である。榮花物語(玉の臺)に、「北南の側の方、東のはし／＼の扉毎に、繪をかゝせ給へり。上に色紙形おして、詞を書かせ給へり。遙かに仰がれて、見え難し。九品蓮臺の有様なり。【あざやかに見ゆるぞあはれなる】行成の書いた額や兼行の書いた扉の字が、今もはつきり見えるが、それを見ると、實に感慨が深いといふ意。(正徹本には、この上に「猶」がある)【法華堂】法華三昧を修する佛堂。天台宗で所謂一念三千の觀心を専心に修めることを「法華三昧」といふ、それを行ふ堂である。【かばかりの名残だになき所】「名残」は、昔あつたものの一部が今もなほ残つて居ること。これくらゐの物さへ残つて居ない所。即ち法成寺には、とにかく阿彌陀堂や法華堂などが残つて居るが、かうしたものさへも残つて居ない所はの意。【おのづから】たま／＼。【いしづゑ】建物の土臺石。(正徹本には、この上に「あやしき」とある)【さだかに知れる人もなし】はつきり知つて居る人もない。少し唐突な書き方であるが、前からの關係で、土臺石だけあつたところで、それが何のあつた跡だか、はつきり知つて居る人もないといふ意になる。(正徹本には「人だにも」とある)【よろづに見ざらむ世までを】「見ざらむ世」は、自分の死後をいふ。何事によらず、死後の事までも。【思ひおきてむ】「おきてむ」は、「おきてむ」(控、タ下二)といふ動詞に助動詞の「む」の附いたもの。處置するといふ意。考へ處置しておく。【はかなかるべけれ】頼みにならぬ事であらう。つまらない事であらう。



風も吹きあへずうつろふ人の心の花になれにし年月をおもへば、あはれと聞きし言の葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、なき人のわれよりもまさりて悲しき物なれ。されば白き糸のそまむ事をかなしび、路のちまたのわかれむ事をなげく人も有りけむかし。堀川院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が垣根は荒れにけりつばなまじりの葦のみして  
さびしきけしき、さる事侍りけむ。

無常は必ずしも世の中の移り變りばかりではない。あてにならないのは人の心である。かつては互に相愛し、しみじみと嬉しく聞いたその戀人の言葉は、まだ耳に残つて居るのに、相手はもう何時の間にか自分を忘れて居る。かうした戀のはかなきは、實に死別にも増す悲しいものだといひ、堀川院百首の歌の一首を引いて、その寂しい心持を表はして居る。但し中に引いた「白き糸云々」は、愛もやがては移るふ時が来るといふ憂の心を含めたものであらうけれども、實は蛇足である。

【風も吹きあへず】「あへず」の「あへ」は、「あへて」(敢)の「あへ」と同じく、「あふ」(下二)といふ動詞で、おしきつてする、しおほせるなどの意。「涙せきあへず」などいふ場合におけると同じで、此所は風もひどく吹かないのとか、風の吹くのも持たないでとかいふやうな意である。【うつろふ】花の散るをいふ。色のあせる事にもいふが、此所は散るといつてよからう。【人の心の花】變り易い人の心を、散り易い花にたとへて言つたのである。尤も戀についていふ場合である。古今集(春)に「櫻花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ」(紀貫之)、同じく(戀)「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」(小野小町)などが原據とな

風が吹けば花の散るのは、もとより自然の事であるが、人の心といふものを花にたとへるならば、それは全く風をも待たずに散つてしまふ、實にはかないものである。而もその移ろひやすい人の心の愛といふ一時の花に馴れ親しんだ過ぎし日の事を思ふと、身にしむばかり嬉しく聞いた相手の言葉は、さながら今も忘れぬものの、何か赤の他人となつてしまふといふならはしこそ、實に死別にも増す悲しいことである。されば白き糸を見ては、やがて染むべきことを思つて

悲しみ、又一筋道を見ては、やがて岐(ワカ)れることを思つて歎いた人もあつたのであらう。堀川院の百首の歌の中に、「昔見し妹が垣根は荒れにけり茅花(ツバナ)まじりの葦のみして」といふのがあるが、いかにも寂しい景色である。なるほどさういふ事もあつたであらう。

つた語であらう。「うつろふ」は、「人」にかゝるのでなく、「人の心の花」全體にかゝるのである。【なれにし】馴れた。馴れ親しんだ。「人の心の花になれにし」で、自然花のやうに美しい戀人の心に馴れ親しんだといふ意となり、その花が移ろひ易いものだといふことが含まれて来る。【年月】幾年かの間といふ意。但し軽く「頃」といふくらゐの意に見てよい。【あはれと聞きし言の葉ごと】いかにも情のこもつたやうにしみじみと聞いた戀人の言葉の一々。「言の葉ごと」と忘れぬ」とあるから、言葉の一々について何を忘れなかつたといふやうに考へられ、随つて「忘れぬ」の補語は、その言葉を發した戀人だといふ風に考へられるが、此所の意はさうではなく、「言の葉毎に」とあつても、その言葉の一々を忘れなかつたといふ意の書き方である。【忘れぬものから】忘れぬもの。【我が世の外になりゆく】自分とは別の世界の人となつて行く。相手の熱がさめたか、それとも外の事情によつてか、とにかく相手は自分とは何の關係もない赤の他人となつてしまふといふ意。【ならひ】ならはし。世間の戀の多くがさういふ風になりがちのものであるといふ意を表はす。【なき人のわれよりもまさりて】「なき人のわれは」、死別。死別よりもつと。【されば】永久に變らぬ筈の戀でさへ、かうして何時かさめてしまふ時があるのだ。だから古人も「白き糸の染まむことを悲しび云々」即ち人の心といふものは、將來どう變つて行くか分らないものだと言つて歎じたのであらうといふ意になる。【白き糸のそまむことをかなしび云々】「そまむ」は、染まむ。「かなしび」は、悲しみ。「ちまた」は、道。道の岐れる所。但し此所は「道のちまたのわかれむこと」で、道の別れることと見てよい。これは淮南子(説林訓)に「聖人之例(例)物也。若以鏡視形。曲得(其)情。揚子見(遠)路(而)笑之。爲(其)可(以)南(可)以(北)。墨子見(練)絲(而)泣之。爲(其)可(以)黃(可)以(黑)」とあるを指したので、この本文は、達人は物を未だに察するといふ意である。勿論戀愛とは何の關係もない事であるが、移ろひ易い人の心のはかなさを悲しむ意味を述べるにつけて、例、思ひ浮んだこの句を挙げたのであらう。【堀川院の百首の歌】堀河天皇の康和年中のこと、時の歌人藤原公實以下の十六人に各百首づつの歌を奉らしめられたもの。(之を太郎百首と稱し、次の鳥羽天皇の永久四年に行はれたものを「次郎百首」といつて居る。【むかし見し妹が垣根は云々】「むかし見し」は、昔親しくして居たの意。(垣根を見たといふ意ではない)。「妹」は、男より女を親しんでいふ場合に使ふ語。今



の言葉でいへば、「妻」とか「愛人」とかいふにあたる。「茅花」は、茅の花であるが、轉じて茅のことにもいふ。此所は茅そのものと見ても、その花と見てもよからう。「蕙」は今いふスマフトリ草の事だともいひ、又紫雲英の事だともいふ。譬て相愛して居たあの戀人は、どうなつたことであらう。あの時分、よく通つて行つたあの家の所を通つて見ると、その頃には立派に手入なども出来て居た垣根が、今はすっかり荒れてしまつて、寂しい庭には、ただ茅花まじりに蕙の花が咲いて居るといふ意。これは公實の歌で、同百首「蕙菜」の所に出て居るものである。【さること侍りけむ】なるほど、そんな事もあつたであらう。(作者の心に共鳴して言つたのである)。(第五段「さもおぼえぬべし」、第八段「さもあらむかし」、第二〇段「まことにさもおぼえぬべけれ」等参照)。

二七

御國ゆづりの節會おこなはれて、劔・聖・内侍所わたし奉らるゝほどこそ、限なう心ばそけれ。新院のおりゐさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや、

殿もりのとものみやつこよそにしてはらはぬ庭に花ぞちりしく

今の世のとしげきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞさびしげなる。かゝるをりにぞ、人の心もあらはれぬべき。

今日では、天皇が崩御にならなければ、次の天皇は立たれないことになつて居るが、昔はさうではなかつた。殊に兼好の時代には、所謂兩統迭立が行はれ、その爲、自然心ならぬ御讓位といふ事も起り、上皇方と天皇方とは、

天皇が皇太子に御位をお譲りになる儀式が行はれて、三種の神器を次の天皇にお渡しになる時分といふものは、實にこの上なく心細い感じのするものである。近い頃の話をあるが、新院(花園上皇)が御位をお下りになつたそ

の春にお詠みになつたとかいふ歌に「とんのがある」とのもりのとものみやつこ外にして拂はぬ庭に花ぞ散りしくこの御歌を拜誦すると、人々が昔當代の多忙な爲に、ついその方へ心を引かれて、上皇の方は自然お留守になり、院へは参る人もないのが、いかにも寂しさうである。しかしかういふ場合にこそ、人間の本當の心持といふものは、よく現れるであらう。

どうしても圓滿に行かない。随つて天皇としては時めいて居られた方でも、一旦位を下りられると、伺候する者も殆どないといふやうな有様になつてしまふ。かういふ事は、何時の世の中にも有りがちな事ではあるが、當時にあつては、それが殊に甚だしかつたのであらう。それを痛切に感じて書いたのがこの段である。尤もこれも前段に、人の心の移ろひ易きを書いたことから、ふとかういふ方面に思想が移つて行つたのであらう。

【御國ゆづりの節會】天皇が御位を皇太子に譲られる儀式。「節會」は、朝廷で、祝日その他、定まつた儀式のある場合に行はれる集會をいふ。【劔聖内侍所】所謂三種の神器。「聖」は玉、「内侍所」は鐘をいふ。(正徹本では「内侍所」が「かしこどころ」になつて居る)。「わたし奉らるゝほど」次の天皇へお傳へになる折。但し「ほど」は、「時」といふ意であるが、此所は必ずしもその時間だけを指していふのではなく、廣くその前後の事を含めていつたのである。【限なう心ばそけれ】この上なく心細い感じのするものである。【新院】新に上皇となられた方。此所は花園上皇を指して申したのである。【おりゐさせ給ひての春】御讓位になつたその春。花園天皇の御讓位は文保二年二月であつた。【よませ給ひけるとかや】上皇がお詠みになつたとかいふことであるの意。【殿もりのとものみやつこ】主殿寮の下級官吏をいふ。(主殿寮については、八〇頁を見よ)。主殿寮の職員は、頭一人、助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、殿部四十人、使部二十人、直丁二人、驅使丁八十人(合義解)。この「とものもりの」は、「主殿寮の」といふこと、「とものみやつこ」は、この殿部をいふので、松明をともすと、庭の掃除をするとかは、此等の人の役である。さてこの「とものみやつこ」といふ語について、探本氏の「解釋」に「トモノミヤツコは、伴の御奴で、云々、伴といふのは、もと伴氏の者が此の役につく定めであつたからの稱」とあるのは、多分文段抄や大成に引いたものを、そのまま寫したものであらうが、誤である。これについては既に袖中抄にも「顯昭云、とものもりのとものみやつことは、主殿寮の下部なり。或人、かの下部は、伴氏なれば、とものみやつこといふことあれど、いかゞときこゆ、さしもなきにや云々」とある。【よそにして】よそ事として顧みないといふ意。【はらはぬ庭に花ぞちりしく】掃除をしない庭の面には散つた花が一面にちらばつて居るといふ意。この歌は、拾遺集(雜)に「とものもりのとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝きよめすな」(延喜の御時南殿にちりつみて侍りける花を

【二七】御國ゆづりの節會おこなはれて



見て、源公忠」を本歌としたものであるが、彼は落花に興を感じたもの、此は落花に寄せて悲哀寂寥の感を歌つたものである。【今の世のことしげきにまぎれて】「今の世」は、新帝の御代を指す。「ことしげき」は、用事が多い、忙しい。「まぎる」は、他の事に心を引かれる。【院】上皇の御所。【さびしげなる】正徹本には「わびしげなる」とある。【人の心もあらはれぬべき】人々の眞意も現れるであらう。即ち前の天皇の爲、本當に心の底から盡さうと思つて居た人ならば、たとひ上皇となられても、院へ度々お伺ひする筈である。だから、かういふ場合になると、人々の本當の心持が、よく分つて来るのだといふのである。

二二八

諒闇の年ばかり哀なる事はあらじ。倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、葦の御簾をかけて、布のもかうあらしく、御調度どもおろそかに、皆人のさうぞく、太刀・平緒まで、ことやうなるぞゆゝしん。

【諒闇】天子が父母の喪に服し給ふ一箇年間をいふ。(尤も父母といつても、史實について見れば、場合によつて多少の異同がある)。「諒闇」の語は、もと支那のもので、その意義については、「マコトニモダス」とする説と、「闇」は賦すで「マコトニモダス」とする説とある。字は「亮陰」とも「諒陰」とも書くことがある。廣澤蘆菔抄には「天子の御忌を諒闇と云ふは何ぞ。國主の崩に限りて、諒闇とも諒陰とも云ふ也。諒陰をばマコトニモダスと讀む也。諒ニ陰スとは、天子は日々に萬民の訴を斷ち給ふべきを、一向に黙して不聞食故也。【ばかり】ほど。【哀なる

【諒闇の年ばかり】諒闇の年ほど、しみじみと悲哀寂寥の感に打たれることはあるまい。喪中の假御所の有様を見ても、板敷を低く下げ、御簾も葦の御簾を掛け、帽額(モカウ)も布の帽額の粗末なもので、御道具類なども疎略に、出仕の人々の装束、太刀・平緒まで、何もかも皆

平生と違つて居るのが、いかにも不吉な事のやうに感ぜられる。

こと】しみじみと悲哀寂寥の感に打たれるをいふ。【倚廬の御所】諒闇中、天子の居られる假御所。「倚廬」の語も、もと支那から来たもので、もとは必ずしも天子にのみいふ語ではない。しかし我が國では天子にのみいふ事になつて居る。【板敷をさげ】板の間の造り方を普通よりも低くするのである。なるべく土に近くするといふ意味であらう。【葦の御簾】葦で作つた御簾。普通の御簾は、竹を細く割いたもので作るものであるが、諒闇中は、葦で作つた粗末なものを掛けるのである。【布のもかう】「もかう」は、帽額。御簾の上部の外側に一幅の帛を横に張つて飾としたもの。普通は萌黄色の地に粟の紋を黒く染めたものを用ゐるが、諒闇の間は鈍色の布を用ゐるのである。【あらしく】粗末なこと。【おろそか】「あらしく」と同じく、粗末で簡略なこと。(正徹本には「御調度ども」とある)。「皆人のさうぞく」「さうぞく」は、装束。この語も意味の上では、「ことやうなるぞ云々」につづく。助無智秘抄に、「天皇御服之時事(天下諒闇是也)。殿上侍臣、四位、五位、六位、皆様の袍。但し表袴・下重鈍色なり。宿装束は差貫・袴等皆鈍色。但し袴は黄色花田皆交へ着る也。【太刀】着る物のみならず、太刀も普通のものには佩かない。鈔抄に云ふ「黒漆。諒闇帯之。金具等拔替吉服御具也。裝束無文紫。或重革云々。御柄白佐女如常。重服同黒鞘。金物黒漆。白革裝束。柄黒佐女云々。【平緒】東帯附屬の裝飾具で、袴の上に乗れるもの。もとは太刀の帯で、平たい粗緒であつたものが、後に獨立の裝飾具となつたのである。下に垂れた部分をタレといふ。普通はいろ／＼美しい地を用ゐる、それに桐・竹・風凰などの模様を附けるが、これも諒闇の時鈍色を用ゐる。【ことやう】異様。平生と様子の違つて居ること。【ゆゝしん】不吉で忌むべきやうに感ぜられるといふ意。

二二九

しづかに思へば、よろづ過ぎにし方の戀しさのみぞせむかたなき。人しづまりて後、長き夜の

【二九】 しづかに思へばよろづ過ぎにし方の



すさびに、何となき具足とりした、め、残しおかじと思ふ反古などやりすつる中に、なき人の手ならび、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、只その折のこゝちすれ。此の比ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくて、かはらず久しき、いとかなし。

追懐といふものの、しみんとした心持を書いたのである。死んだ人の書いたものなどを見出した折の感じはいふまでもなく、今現に生きて居る人の手紙などでも、それがずつと以前のものであると、やはしみんと懐かしい感じがするといふのである。

【よろづ】 何事につけても意。(正徹本・光廣本・野穂等には「よろづに」とある)。「過ぎにし方の戀しさのみぞ」「過ぎにし方」の「方」は、時間を表はすものであるが、要するに過去に起つた事柄といふ意。「のみ」は、外の事は何とかなるが、それだけは、どうも仕方がないといふ意を表はすので、要するに「こそ」と似た使ひ方になつて居るのである。【せむかたなき】 何ともしやうがない。止めようとしても止められない意。【人しづまりて後】 人が寝静まつてから。下に「夜」とあるから、夜が更けて、人が寝静まつた後をいふのである。【長き夜のすさび】 「長き夜」は、大方秋の夜をいつたのであらう。「すさび」は、手なぐさみ。何となくそんな事がしてみたくなつてすることをいふ。「何となき具足」「何となき」は、これとしまつたことがなく、其邊にあつた物をいふ。「具足」は、道具類。甲冑ではない。「とりした、め」とりかたづけ。整理すること。【残しおかじと思ふ反古など】 後に残して置くまいと思ふ反古の類。つまらぬから棄てるのもあらうし、人に見られては困るから棄てるのもあらう。【やりすつる】 「やる」は、破る。破り棄てる。【なき人の】 今もこの世に居ない人の。「の」は「が」の意。【手ならび】 字を書きちらすこと。むだ書きをすることをいふので、必ずしも字を書くことを練習するをいふ

てみると、總べて過去の戀しさばかりは、何ともしやうのないものである。夜が更けて人の寝静まつてから、長い夜の手慰みに、何といふきまりもなく、手當り次第に、そこらにある道具類を取片付け、残しては置くまいと思ふ反古などを破り棄てる中に、今はもうこの世に居ない人が、警て書散らした字や、興にまかせて書いた繪などを見出した時には、全くそれらのものを書いた當時のやうな氣持がするものである。今現に生きて居る人の手紙でも、それを貰つたのが、ず

つと以前の事で、どういふ折であつたらうとか、何時の年であつたらうとか思ふと、しみじみと感深いものである。自分の持馴れて居る道具類のやうなもので、それが無心にして長い間變らずに残つて居る、きういふ物に對しては、實にかはゆい感じがする。

のではない。なほ此所は動詞のまゝであつて、「手ならび」といふ名詞になつて居るのではない。【繪かきすさびたる】 この「すさぶ」も、前の「すさび」と同じく、何といふことはない、筆にまかせて繪をかくをいふ。「すさびたる」は、「すさびたる、それを」といふ意。【その折のこゝち】 それを見ると、その字や繪をかけた當時のやうな氣持がするをいふ。【此の比ある人の文】 「ある人」は、「在る人」で、「或人」ではない。今生きて居る人の手紙。【久しくなりて】 その手紙を貰つてから長い時がたつて。【あはれなるぞかし】 しみんと感深いものである。この「あはれ」は、必ずしも悲しい意味ではないが、又單に感興が湧いて面白といふのでもない。場合によつて、悲しいと思ふこともあらうし、懐かしいと思ふこともあらうし、又面白いと思ふこともあらう、それらいろいろの感じをすべていつたのである。【手馴れし具足なども】 「手馴る」はタナルともテナルともよむが、こゝはテナレンでよからう。久しく持馴れて居た道具類のやうなものでも。但しその持主については古來兩説があり、文段抄には「我が久しくもなれたる諸道具也」とし、盤斎抄や句解などは「亡き人」のものとして居る。單に文字の上のみより見れば、上に「何となき具足とりした、め」とあつて、こゝに又「手なれし具足なども」とあるだけであるから、之を他人の手馴れたと見るのは、却つて考へすぎであらう。しかし萬葉集にある「こととはぬ木にもありとも我がせがが手馴の御琴つちにおかめやも」を始として、和歌にはこの語を他人の上に使つて居るものが多い。且此所は「なき人の手ならび云々」「此の比ある人の文だに久しくなりて云々」と續けて来た上から、筆者の頭には、「いなき人」又は警て親しかつた人といふやうな意味が作用して書かれたのではないかとも思はれる。けれども此所はやはり、すなはち「自分の手馴れた」と見る方がよからう。但し「手馴れし」とはあるが、之を以前自分が手馴れた物を、久しぶりで見出した事としては、文の意に違ふであらう。やはり今も持馴れて居る物であらうと思ふ。(正徹本には「具足などの」とある)。「心もなくて」 道具類は全く無心無情である。「心もなくて久しき」とした所に、却つて深い意味がある。【かはらず久しき】 久しい間には、持主たる自分の身にも、いろ／＼の變遷があつたであらう。それにもかゝらず、かうして昔のまゝに残つて居る物を見ると、一種の親しさ懐かしさを感じるのである。【いとかなし】 この「かなし」は、可憐の意であらう。

【二九】 しづかに思へばよろづ過ぎにし方の



【一】人の死んだあとほど悲しいものはない。所謂中陰の間、山里の寺などに移つて、不便な、狭苦しい所に澤山な人が寄り集つて、死後の法事などをする、その間は實に心忙しい者で、日の早くたつて行くことは、たとへば、かゝる最後の日は、全く何の愛想もなく、お互に言ふこともなく、めい／＼自分勝手な、持つて来た物などを取片付け、皆ちり／＼に行き別れてしまふ。さて自分のものと住

三〇

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく、せばき所にあまたあひ居て、後のわざどもいとなみあへる、心あわたゞし。日數のはやく過ぐるほどぞ、物にも似ぬ。はての日は、いと情なう、互にいふ事もなく、我かしこげに物ひきした、め、ちり／＼に行きあがれぬ。もとのすみかにかへりてぞ、更に悲しき事はおほかるべき。しかじかの事は、あなかしこ、跡のため思むなる事ぞ。などいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心は猶うたておぼゆれ。年月経ても、露忘るゝにはあらねど、去る者は日々に疎しといへることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覚えぬにや、よしなしごとといひて、うちも笑ひぬ。からは、けうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかりまうでつゝ見れば、程なく卒都婆も苦むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。思ひ出でて、忍ぶ人あらむ程こそあらめ、そも又ほどなくうせて、聞傳ふるばかりの末々は、哀とやは思ふ。さるはあととふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみ

ぞ、心あらむ人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、干とせを待たで薪にくたかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞかなしき。

【二】前段に「亡き人の事云々」と言つた所から、ふと考が人の死後の事に移つて書いたのであらう。死んだ當座こそ、人も悲しんでくれるが、去る者は日々に疎しで、だん／＼と忘れて行かれ、その中には折々思ひ出してくれた人さへ此の世を去つて、後を弔ふ人も絶え、果は墓の跡形さへもなくなつてしまふといふので、人生のはかない事を書いたのである。文章もよい。しかし後の方に出て来る佛道信仰の問題などには少しも觸れて居ない。書いて行く中にだん／＼思想が變つて行つたとも見られないではないが、要するにこの筆者には、信仰は信仰、戀愛は戀愛、それらの事、皆場合によつて、それに對する態度が違ふのである。信仰だけについていへば、沙石集の著者の態度と似て居るけれども、すべての場合に同一態度で進まうといふのではない。此所などは無常を悲しむ、たゞそれだけで、一步進んで信仰の問題に入らうとはしないのである。

【三】人のなきあとばかり【四】人の死んだあとほど【五】中陰のほど【六】人の死後四十九日の間をいふ。「ほど」は、間の意。【山里などにうつろひて】「山里などに」は、必ずしも山里ばかりへ行くとは限らないからいふ。「うつろふ」は、移る。追善のため、山里の寺などへ行つて籠るをいふ。【便あしくせばき所】「便あしく」は、不便。「せばき」は、「せまき」に同じ。【便】は、文段抄の擬假名に従つてタヨリとよんだが、正徹本には假名で「びんあしく」とある。【あまたあひ居て】澤山な人が一緒に集つて居るをいふ。【後のわざどもいとなみあへる】「後のわざ」は、死者の冥福を祈る法事。「いとなみあへる心」は、皆でしあふといふ意。この下に「は」又は「それは」といふやうな語を補へばよく分る。「いとなみあへる心」と讀くのではない。【心あわたゞし】氣忙しい。氣の落ちつかぬをいふ。【日かずのはやく過ぐるほどぞものにも似ぬ】さうして山寺などに籠つて居る間は、日のたつことが實に早いといふ意。「ほど」は、程度を表はす。「ものにも似ぬ」は、たとふるものなしの意。つまりこの間は、所謂後のわざ

【三〇】人のなきあとばかり悲しきはなし

家へ歸つては、又今更のやうに悲しい事が多いであらう。かく／＼の事は、決してしてはならぬ。後の爲に忌む事だ。などと言つて居るのを聞くこともあるが、こんなはかない世の中に、何もそんなくだらない事は言はなくてもよからうにと、今更ながら人の心が厭になる。死後年月がたつても、決してその人の事を忘れるといふわけではないが、古語にも「去る者は日々に疎し」と言つてある通り、さうはいふものの、死んだ當座のやうには感じないのであらうか、つまらない事



などを言つて笑ふやうな事もある。死骸は人氣（ヒトダ）離れた山の中に葬つて、命日などに當る日だけ参つて見ると、間もなく卒都婆も若が生え、散り落ちた木の葉の中に埋もつて、夕の嵐や夜の月の外には訪ねてくれるものもなくなる。それでもまだ折々は思ひ出して、懐かしく思ふ人のある間は、間もなく死んで、只開巻へに、昔こんな人があつたさうだといふやうな子孫の時代となつては、あはれと思ふ者さへなくなると。かうして跡を弔ふことさへ絶え

などいろ／＼の事があつて、毎日それは／＼として暮すので、何時の間にか日がたつてしまふのである。【はての日】最後の日、即ち四十九日目の日をいふ。【情なう】何の愛想もなく。（普通にいふ情ない氣持がしてではない。）【互にいふ事もなく】次にいふ「我かしこげにもひきしたゝめる」様子を形容したのである。めい／＼皆自分の事ばかり考へて、荷物などを取片附けて居るので、自然その方に氣を取られ、つい話などはしないのである。（正徹本には「事もなくて」とある。）【我かしこげにもひきしたゝめ】「我かしこげに」は、めい／＼自分勝手に。「ものひきしたゝめ」は、持つて来た着物や道具類などを取片附けるをいふ。前段の「とりしたゝめ」（一〇〇頁）参照。【ちり／＼に行きあがれぬ】「ちり／＼に」は、方々へ別れ／＼に。「行きあがれぬ」は、行別れてしまふ。續後日記に「その日過ぎぬれば、皆おのがじし行きあがれぬ。【もとのすみか】もとから自分の住んで居た家。但し特にかういつたのは、死人の家族についていふので、ちり／＼に行別れたそれら總べての人についていつたのではあるまい。【かへりてぞ】正徹本には「立ちかへりてぞ」とある。【更に】又事新しくの意。即ち一時はごた／＼して居た爲に悲しみも自然薄らいで居たが、さて家に歸つて、静かになつて見ると、今更又悲しみが湧いて来るといふのである。【しか／＼の事】これ／＼の事。かやう／＼の事。【あなかしこ】多くの註釋書に之を「おま怖や」とか「あゝ恐ろし」とか書いてあるが、これはさういふ意味ではない。「慎むべし」とか「秘すべし」とかいふ意味の場合に使ふ言葉で、「決して」「必ず」などいふに近い。【あとのため忌むなる事ぞ】後に残つて居る人々の爲に忌むべき事であるぞの意。「忌む」は、嫌ひ避ける。これは迷信から来た事で、今日でも行はれて居る例でいへば、葬式をするには友引の日を避ける。もしこの日にすれば、又死人が出来るといふの類である。（この下の「などいへるこそ、正徹本には「などいひあへるこそ」とある。）【かばかりの中に何かは】かういふはかない中に、何もそんなくだらない事は言ふに及ばないの意。「何かは」は、「何かはさる事を言はむ」の意である。【なほうたておぼゆれ】「なほ」は、人の心はそんなものとは知つて居るが、それでもやはりの意。「うたておぼゆ」は、いやな氣がする、情なく思はれるなどの意。【露忘るゝにはあらねど】少しも忘れるわけではないが、【去るものは日々／＼ととしといへることなれば】「去るものは日々／＼ととし」は、文選古詩十九首中の一首に「去者日以疎。生者日以親。出

てしまふと、もう何處の何といふ人の墓だか、名さへも分らず、たゞ年の春の草ばかりが徒らに繁つて行くのを、心ある人はあはれと見るであらうが、しまひには、其の墳のほとりに立つて、風吹く毎に寂しい音を立てて居た松も、千年の壽命を待つこともなく、空しく碎かれて薪となり、古い墳は鏽かれて田圃となつてしまふ。かうしてその跡形（アトカタ）さへもなくなつてしまふのは、實に悲しい事である。

郭門直視。但見丘與墳。古墓葬爲田。松栢掃爲薪。白楊多悲風。蕭々愁殺人。思還故里園。欲歸歸無因。とある中の句。「いへることなれば」は、古語にも、しか／＼と言つてあるやうなわけであるからの意。【さはい／＼ど】さうはいふものの。年を経ても決して忘れぬとはいふものの。【そのきはばかりは覺えぬにや】「そのきは」は、死んだ當座。「ばかり」は、程。死んだ當座ほどには感じないのであらうか。【よしなしこと】つまらない事。たわいもない事。【うちも笑ひぬ】「うちも」の「も」は、例の意味を強める助詞で、特に意味のあるものではない。「笑ひぬ」の「ぬ」も極軽く、笑ふやうなこともあるといふくらゐの意。（正徹本には「うちもわらひぬかし」とある。）【から】死骸。【けうとき山の中】人里離れた、寂しく物恐ろしい山の中。【をさめて】葬つて。【さるべき日ばかり】然るべき日、即ち命日などの日だけ。【まうでつゝ見れば】「まうづ」は、「まゐるゝ」の音便、即ち参るといふ意。かういふ「つゝ」は、同じ行爲の幾回も繰返されることをいふので、英語の *ing* を譯した「つゝ」とは、意味が違つて居る。【卒都婆】梵語 *śrāpā*。高顯・方墳・靈廟など譯す。略して「塔婆」ともいふ。所謂「塔」もこれと同じ語で、これは「塔婆」の更に略されたものである。しかし後世は「塔」といへば、五重の塔とか多寶塔とかの類をいひ、「塔婆」或は「卒都婆」といへば、細長い板に經文の句などを記したものをいふ。但し此所にいふ卒都婆は、「苦むし」の語から考へれば、石塔をいふのであらう。【苦むし木の葉ふりうづみて】「苦むす」は、苦が生える。「ふる」は、雨などのふるといふ場合の「ふる」。「ふりうづむ」は、澤山降積つて覆ひかくすをいふ。【夕の月のみぞ】正徹本には「のみ」なし。【こととふすが】「こととふ」は、訪問する意。「よすが」は、たより、よるべ。但し此所は、たゞ「こととふものだ」といふくらゐの意で、更に分りよくいへば、夕の嵐や夜の月の外には誰も訪ねて来てくれるものもないといふ意である。【しのぶ】なつかしく思ふ。【ほどこそあらめ】「ほど」は、間。思ひ出して懐かしいと思ふ人のある間はまだしもといふ意。【そもまた程なくうせて】それも亦、即ちさういふ風に思ひ慕ふ人も亦、間もなく死んで。【聞き傳ふるばかりの末々】その亡くなつた人の事を直接は知らず、たゞ人の話で、昔さういふ人があつたといふことを聞いて居るくらゐの子孫といふ意。（正徹本には「きまつたふばかり」とある。文法上は、その方が寧ろ正しい。）【あはれとやは思ふ】「やは」は、反語。氣の毒だとも懐かしい

〔三〇〕人のなきあそばかり悲しきはなし



とも思はない。【さるは】「さういふのは」の意であるが、此所は「かくて」の意と見てよからう。第三段（一六頁）にあつたのとは意味が違ふ。【あともふわざも絶えぬれば】法事など死者の跡を弔ふ事も絶えてしまふと。【いづれの人と名をだに知らず】どういふ人だといふ名さへも分らず。なほ次項を見よ。○正徹本には「いづれの世の人と。」次に引く白氏文集の文から見ると、この方がよいのかも知れない。【年々の春の草のみぞ】その墓場に年々春になると新しく生える草ばかりを。白氏文集（二）續古詩十首中の第二より引いた句である。「掩涙別郷里」風飄將三遠行。茫茫綠野中。春盡孤客情。驅馬上三丘。高低路不平。風吹棠梨花。啼鳥時一聲。古墓何代人。不知三姓與五名。化作三路傍土。年々春草生。感彼忽自悟。今我何營々。【心あらむ人】人情を解する人。物のあはれの分る人。【あはれと見るべきを】しみじみと感に堪へて見ることであらうが、しかし。○正徹本には「あはれとも」とある。【はては】しまひには。一時はさういふ人もあらうけれども、しまひには。【嵐にむせびし松】「嵐にむせぶ」は、嵐の吹く毎に松が寂しい音を立てるをいふ。【むせぶ】は、咽び泣きをするといふ意で、嵐が松にあつて發する聲のいかにも物寂しく悲しげなことをいふ。【千とせを待たで】自然のままに捨てておけば、千年も生きるであらうが、さういふ千年の壽命にも達しない。【薪にくだかれ】前に擧げた「松栢掃爲薪」によつた句である。【古き墳は云々】これも前に擧げた「古墓爲舊田」によつたのであらう。【そのかたに】「かた」は、あとかた、形跡。人を葬つた所だといふ形跡さへも。【なくなりぬる】「なくなつた」ではなく、「なくなつてしまふ」の意。

三三

雪のおもしろうふりたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやるとて、雪の事何ともいはず

雪の面白く

ざりし返事に、此の雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがしからむ人の、仰せらるゝ事聞入るべきかは。返すく口をしき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

【要言】これは多分前二段に、亡き人といふものについて書いた事から思ひ出したのであらうと思ふ。或人（どうも女のやうである）が、自分の風流を解しない事とがめたといふ、いはば自分の失敗談を書いたのである。とがめられても勿論腹の立つ事ではない。殊にそれが、今は亡き人であるから、一種のなつかしさを以て思ひ出したのであらう。

【人のがり】人の許へ。この「がり」元來は「妹がり」「我ががり」など、直接上の語について「某がり」となつたものらしく、中には「宮仕するがり」（枕草子）のやうな例もあるが、早くより「の」を入れても言つたと見え、同じ枕草子に「人のがりやりたる」などともある。【いふべき事ありて】何か言つてやらねばならぬ用事があつての意。【文をやるとて】手紙をやるといふので。但しこの下に「必要な用事だけは書いたが」といふやうな意味が含まれて、次の句に續くのである。だから分り易くいへば、「手紙をやるのに」の意と見てよい。【雪の事何ともいはずりし返事に】その手紙の中には、たゞ用件だけを書いて、雪の事については何とも書いてやらなかつたところが、その返事に。【この雪いかゞ見る】この雪をどう見るか。この雪を見て、どんな感じがするか、面白くとは思はないかといふやうな意味を含めた言葉である。【一筆のたまはせぬほどの】ちよつと一筆お書きにならないくらいな。「のたまはせぬ」は、おつしやらないの意。【ひがしからむ人】わけの分らない人。物の趣を解しない人。（心のねぢけた人といふのではない）。【聞入るべきかは】聞入れることが出来ませうか、出来ませぬの意。【返す返す】くれんぐも。實にどうも。【口をしき御心】情ない御心。【かばかりの事】これくらゐな事。こんなちよつとした事でもの意。

【三一】雪のおもしろうふりたりし朝

降つた或朝のこと、或人の所へ言つてやらねばならぬ用事があつて、手紙をやるのに、雪の事は何とも言はず、その返事に、「この雪をどう見るかと、一筆おつしやらないやうな、頑冥な人のおつしやる事は、どうして御引受が出来ませう。實にどうも情ない御心です」と言つてあつたのは、實に面白かつた。今はもうこの世に居ない人であるから、これくらゐの事も忘れられない。



三三

九月二十日の比、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありく事侍りしに、おぼし出づる所ありて、あないせさせて入り給ひぬ。あれたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂しめやかにうちかをりて、忍びたるけはひ、いと物あはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、なほことざまの優におぼえて、もののかくれより、しばし見わたるに、妻戸を今すこしおしあけて、月みるけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る人ありとは、いかでかしらむ。かやうの事はたゞ朝夕の心づかひによるべし。其の人程なくうせにけりと聞き侍りし。

秋の一夜、或貴人の御供をして、夜の明けるまで月を見て歩いたことがあるが、その途中のこと、その貴人が愛して居る女の所へちよつと立寄りられた。その時の女の態度がいかに優雅で奥ゆかしかつたといふのである。これは前段の風流な女の事に關聯して、又似たやうな例を思ひ出したものであらう。さうしてその人が既に故人になつたといふ事も前段と同じである。

【ある人】 或人。別に「貴人」とは書いてないが「さそはれ奉り」「おぼし出づる」などの語によつて、それがわかる。(この話の眞偽は分らぬが、折々はかういふ事も實際したのであらう)。

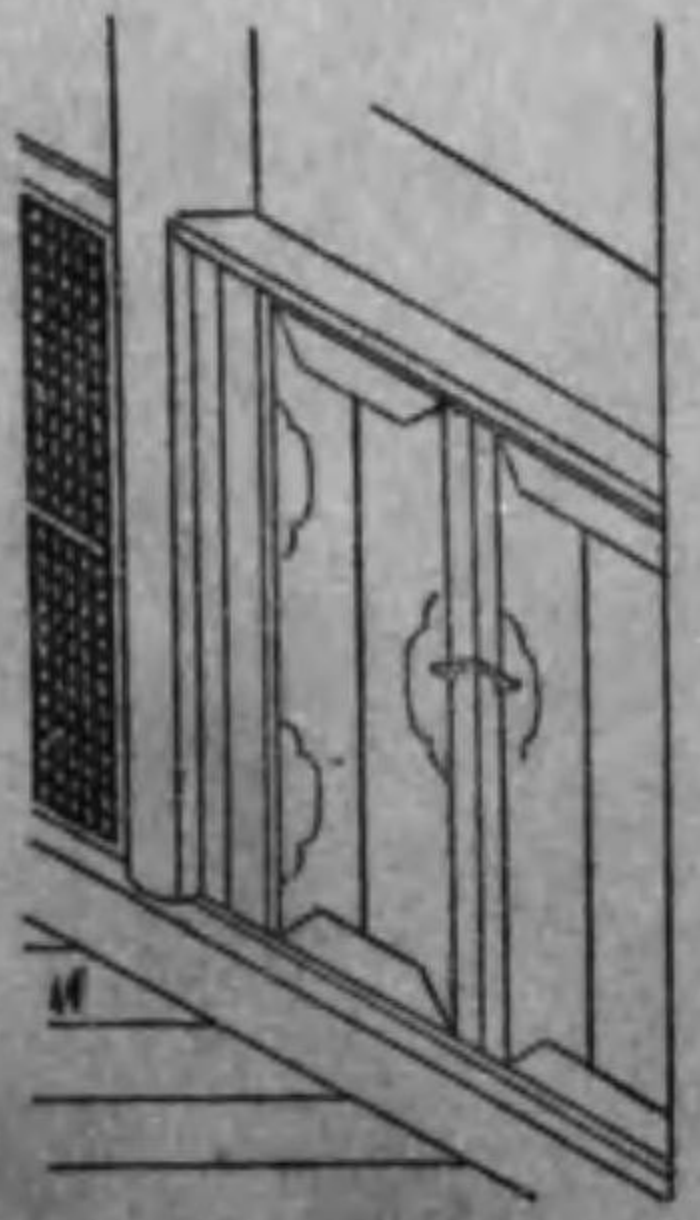
【明くるまで】 夜の明けるまで。

い。暫くして貴人は出て來られたが、物の様子がいかに優雅なやうに思はれたので、自分にはなほ物陰から暫くのぞいて居たところが見送りに來た中(ナカ)の人は、貴人の出て行つた後の妻戸を、今少し多く押開けて、月を眺めて居る様子である。若しこれが送り出すと直中へ入つて閉籠らうものなら、残念だといふ氣がしたらう。客の出でしまつたその跡までうかがつて居る者があらうなどとは、どうして知らう。かういふ事は、俄にやらうと思つたところで、出來ない事

二十日頃の月であるから、出るのが遅く、大體午後八時頃に出て、西に入らない中に夜が明ける。【おぼし出づる所ありて】 初はそのつもりでもなかつたが、歩いて居る中に、ふと思ひ出したのである。「所」は、場所、人の家といふ。立寄るべき所のあつた處とを、ふと思ひ出されたの意。【あないせさせて】 「あない」は、案内。取次を乞ふこと。「せさせ」は、使役の意。取次を乞はせて。即ちお供の人に「御免下さい」といふやうな事を言はせたのである。【あれたる庭】 荒れて草などの生ひ茂つて居る庭。「露しげき」は、その草の上に夜露が一杯に置いて居ることをいふ。【わざとならぬ匂】 わざとらしくない香のほひ、即ちわざと香をたいたと人に示すやうなやり方ではなく、ほんのりとかすかに上品な匂のして來るをいふ。【しめやかに】 おちつき物静かなさま。しんみりと。【忍びたるけはひ】 「忍ぶ」は、世をしのぶ、即ち世間から隠れ遠ざかつて居ること。世をしのんで住まつて居る様子。源氏物語の夕顔の宿などを心に持つて書いて居るのであらう。【いと物あはれなり】 いかにもしんみりとして情趣が深い。【よき程にて】 しばらくして。(その間何か話でもして居たのであらう)。

【出で給ひぬれど】 貴人は、【なほ】 貴人は出て來られたが、自分はそれでもなほ。【ことざまの優におぼえて】 「ことざま」は、事の様子。全體の様子がいかに優雅なやうに思はれたので。【もののかくれより】 物陰に隠れて(内の人に見つからないやうに)。

【妻戸】 室の出入口にある戸で、所謂舞戸になつて居るもの。家屋雜考に云ふ「妻戸は殿の四隅にありて、主客ともに出入する戸口なり。端戸の義なり。ツマはすべて物のはしをいふ名なればなり。さて其作りは、板戸を兩開にして内外共に金具あり。開く時は、外の方へ開き、其戸のあふらざる爲に掛鐵をかけてとめおく。是をサルツナギといふ。閉づる時は、又内にかけてとめおく。しめおく事なり。(妻戸の左方に見えるのは格子である)。」今少しおしあけて】 貴人が出られた時少しあけたが、それを又その女が今少し儉計



(考雜屋家) 戸妻



で、畢竟平生の心掛によるのであらう。この人はその後間もなく死んだといふことである。

にあけての意。【月みるけしきなり】女が月を見て居る様子である。【やがてかけこもらましかば】「やがて」は、そのまま直に。「かけこもる」は、戸を閉めて中に入つてしまふこと。「かけ」は、掛金をかける意であらう。【くちをしからまし】その時若しそんな事したら、自分には残念だといふ氣がしたらうがといふ意。【跡まで見る人ありとはいかで知らむ】客はもう歸つてしまつたのだから、その後の様子まで見て居る人があらうとは、どうして知らう、無論そんな事は考へもしない事であらう。【朝夕の心づかひによるべし】平素の心掛によつて出来る事なのであらうの意。

三三三

今の内裏作り出されて、有職の人々に見せられるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の日ちかく成りけるに、玄輝門院御覽じて、「閑院殿のくしがたの穴は、まろくふちもなくてぞ有りし」と仰せられる、いみじかりけり。是はえふの入りて、木にてふちをしたりければ、あやまりにて、なほされにけり。

これも例の故實趣味の一つであるが、玄輝門院が非常に物おぼえのよい方で、故實によく通じて居られた事を書いたのである。

【今の内裏】現在の内裏。但しこの「今」といふ語は、兼好がこの文を書いた當時を指して居るので、この「今」が何時を指すかを明かにすることは、とりも直さず、徒然草——少くともこの部分——の書かれた年代を明かにすることになる。これを従来の註釋書には皆「冷泉萬里小路の内裏」と書いてあるが、誤である。甚だしいのは「建武

今の内裏を御造營になつて、故實をよく辨へた人たちに見せられたところが、何處も非難すべき所はないと言つたので、最早御移轉の日も近くなつた。ところが玄輝門院が御覽になつて、「閑院殿の櫛形の穴は、圓くて、縁(フチ)もないのであつた」と仰せ

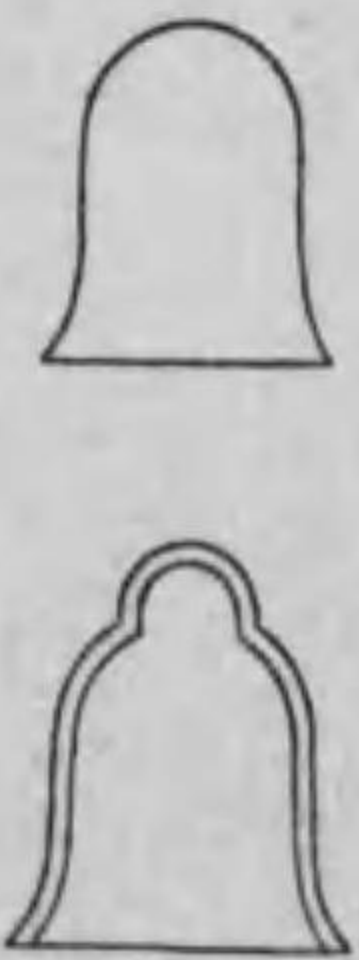
られた。これは實に恐れ入つた事である。今度の御新殿のは、葉(エフ)が入つて、木で縁(フチ)をしてあつたので、それは間違であるから、作り直された。

三年正月焼失後、新に造營された冷泉萬里小路の内裏(塚本氏)などと書いてあるが、建武三年焼失後新に造營されたものでないことは、玄輝門院の事を少し調べて見れば、直に分る。即ち玄輝門院の亡くなつたのは元徳元年の事であるから、その人が建武三年以後に出来た御殿の批評をなさる筈がないからである。然らば此所に今の内裏といふのはどの御殿を指して言ふか。「閑院殿」は、後に言ふ通り、正元元年に焼けて、その後は再び御造營にならなかつた。當時閑院殿に居られた主上(後深草)は、一先づ三條坊門院に行幸あらせられたが、二十八日又富小路殿にお通りになつた。この「富小路殿」といふのは、冷泉富小路殿ともいつたもので、もと西園寺實氏の私邸であつた所である。以前建長元年に閑院殿が焼失した時、始めて此所を皇居とされたが、其の後は西園寺家の關係から、持明院統の東宮の御所となつたり、或は皇居となつたりして居た。さうして花園天皇の時に至り、始めて此所を内裏と御定めになつたのである。ところがこの新内裏は、延元元年(建武三年)正月十日、足利尊氏の亂で、主上(後醍醐)が叡山へ行幸になつて居る間に、焼けてしまつた。此所にいふのは、この内裏である。【作り出されて】造營されて。【有職の人々】故實に通じた人々。【いづくも難なし】何處にも非難すべき所はないの意。【遷幸】天皇の御遷りになること。【玄輝門院】御名信子、左大臣藤原實雄の女。増鏡などに「東の御方」とある人である。伏見天皇の御生母。伏見天皇御即位の後、三宮に準じ、號を上つて玄輝門院といはれた。正應四年八月尼となられ、元徳元年八月薨去、御年八十四。【閑院殿】二條の南、西洞院の西にあり、もと藤原冬嗣の邸であつたが、後里内裏となつたのである。折々地震や火事の爲に破損焼亡し、その度毎に修理造營せられたが、後深草天皇建長元年二月炎上の後、二年七月造營、三年六月に至つて竣工したが、これが又正元元年五月二十二日に焼亡した。建長三年御造營より僅か九年にしかならない。なほこの御殿は、嘗て高倉天皇が始めて皇居と定められたものであつて、爾來九代九十一一年の間、火災にあふこと實に三回、今度の焼亡を最後として、再び御造營の事はなかつた。ところでこの御殿の焼亡した正元元年には、玄輝門院はまだ僅か十四歳の御年であつた。爾來文保元年までは足掛五十九年を隔てて居る。それでもなほ少女時代に見られた閑院殿の櫛形の穴の事をよくおぼえて居られたといふので、これはその非凡な注意力と記憶力とに感心して書いたのである。従来の註釋家が言ふやうに、たゞ故實に通じて居られたのを採

【三三三】今の内裏作り出されて

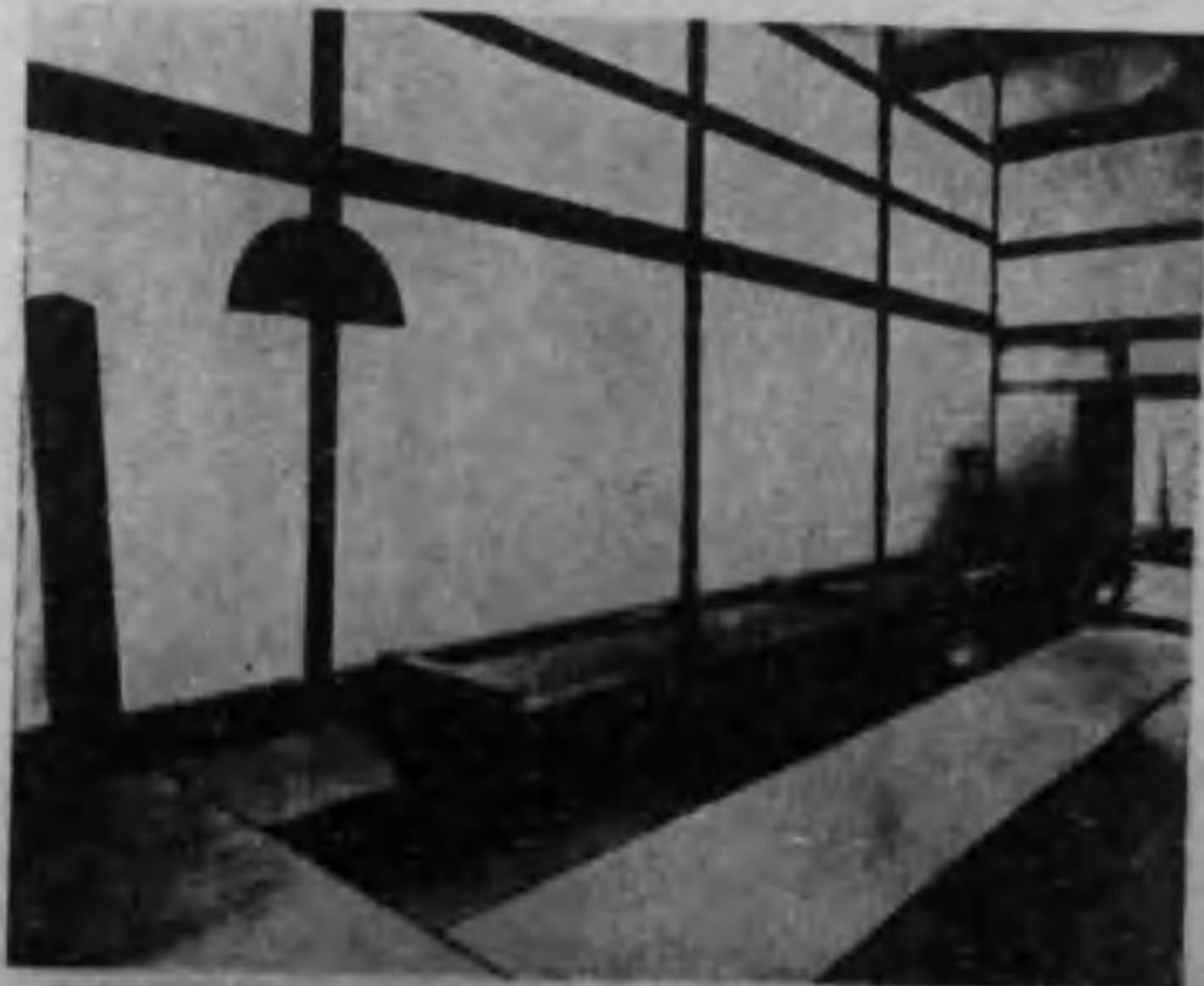


めたと見るのは、少し見當違ひであらう。



【くしがたの穴】「くしがた」は、櫛形。これも古来の註釋家の言ふ所は皆誤ではないかと思ふ。一二の例を擧げていふと、大成には「俗に火灯口と云ひて書院などに地下の家にもする事也(句)。櫛形とは櫛と云ふもの、今は横へ長きが、昔は爪櫛とて人の爪のなりしたる也。穴がうへは丸くながく有り、櫛のかたち似ればと也(盤)」とあり。此所に擧げたやうな圖が附けてある。今の新しい註釋書類は要するに之を書直した

けのもので、例へば塚本氏の「解釋」には「櫛の形に壁にあげた穴で、人の通路とし又は燈籠などを掛ける處。俗に火燈口ともいふ」とある。閑院殿や富小路殿は勿論私も見たことがないから、断定はしかねるけれども、此等の御殿にあつた櫛形は、恐らく今の清涼殿にあるものと同じであつたらうと思ふのである。此所に今の清涼殿の殿上の間の寫眞を掲げることとするが、これを見ても分る通り、櫛形の穴といふものは決して此等註釋書に説明してあるやうなものではない。尤も今の清涼殿は平安時代からそのまゝつゞいて居るものではなく、安政年間に造替されたものであるが、當時よく故實を調べて造つたものであるといふから、この櫛形なども恐らく古い例を十分調べて、それによられたものであらうと思ふ(常識で考へても、簡素にして莊嚴なる清涼殿の中に、變な形の通路、殊に其所に燈籠をぶら下げるやうな所があらうなどは考へられない)。【まるくふちもなくぞありし】閑院殿のは形が圓くて縁が附いて居なかつたといふのである。但し「圓く」とは全體が圓形といふのではなく、葉が入つたのに對して、上部が



圓い形になつて居るのをいつたのである。「縁」は、前頁に掲げた二箇の圖の下の方に見えるやうに、周圍に縁を附けたのである。「なくてぞありし」といふ所に、昔自分の見たものはこんなではなかつたといふ意がよく現れてゐる。【仰せられける】正徹本には「仰せられたりける」とある。【いみじかりけり】古い事をよくもまあおぼえて居られたものだ、感服の至りだ、恐れ入つたものだといふ意。【是】今度の新御殿の櫛形の穴を指す。【えふの入りにて】「えふ」は「葉」、「の」は「が」の意。前頁の圖に見える通り、肩の所が入り込んだ形になつて居るのをいふ。【木にて縁を】穴の周圍に木で縁を附けたのである。

この段にある玄輝門院の御逸話については、古來どの註釋家もまだその證據となる文獻を發見しなかつたやうであるが、花園院宸記に左の如き記事がある。「文保元年四月十九日。今日新造内裏(富小路西二條北)遷幸也。廿二日。今日歴覽外無他。女房局々悉見之。廿六日。玄輝門永陽門延明門並姫宮等入御。如法内々也。女房參入之由也。御覽朝餉方。抑朝餉御調度不<sub>レ</sub>得心物有<sub>レ</sub>之。玄輝門院御覽。被<sub>レ</sub>仰<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知之由。御調度置<sub>レ</sub>直給。是故深草院御在位之時令<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>二閑院<sub>一</sub>給。諸事不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>忘却<sub>一</sub>給。仍每事此間も被<sub>レ</sub>申合<sub>一</sub>也。此調度更無<sub>レ</sub>所見<sub>一</sub>之間所<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>見也。新院又無<sub>レ</sub>所見<sub>一</sub>之由被<sub>レ</sub>仰<sub>一</sub>。又仰云。昔閑院竹葉者。格子ヲハ青<sub>一</sub>漆<sub>一</sub>之。土居等ヲ如<sub>一</sub>紫檀<sub>一</sub>彩<sub>レ</sub>之云々。今度不<sub>レ</sub>然。如何云々。又御裝物所殿上有<sub>二</sub>小部<sub>一</sub>如何。閑院無<sub>レ</sub>之云々。又露臺有<sub>二</sub>長押<sub>一</sub>。是先々無<sub>レ</sub>也云々。南殿仁壽殿方御歴覽後還御。入<sub>レ</sub>夜所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得心<sub>一</sub>調度等撤却云々。抑臺盤所下長押馬形障子。廣<sub>一</sub>二<sub>一</sub>間<sub>一</sub>入<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>通。先々不<sub>レ</sub>然之由有<sub>レ</sub>仰。櫛形穴頗大也云々。是者非<sub>二</sub>今日仰<sub>一</sub>。先々仰也。これを見ると、この段にある御逸話が何時起つた事か、又新内裏の有様がどういふ風であつたかななどの事が分る。尤も櫛形の穴の事は宸記の記事とこの段とは内容が違ふけれども、この段のも恐らく當時兼好が人から聞いて書いたもので、間違つた事ではあるまい。



甲香は、ほら貝のやうなるが、小さくて、口のほどの細長にして出でたる貝のふたなり。武蔵の國金澤といふ浦に有りしを、所の者はへなたりと申し侍るとぞいひし。

【甲香】といふのは、どういふものかといふことを、嘗て自分が目撃した事によつて書いたのである。

【甲香】 註釋書類に「香をたくに用ゐるもの」と書いてあるが、誤である。これは貝が香そのものとなるので、他の材料に混じて用ゐる。海螺の蓋で、所謂附貝の事である。【ほら貝】 法螺貝。【小さくて】 法螺貝よりは小さいをいふ。【口のほどの細長にして出でたる貝のふた】 口の所が細長くなつて出たやうになつて居る貝のふた。【武蔵の國金澤】 神奈川縣久良岐郡。今も横須賀の近くにあり、あの金澤である。【浦にありしを】 浦にあつたが、それをの意。これは兼好が嘗て東國に行つた時、金澤で貨物を見たことをいつたのである。【所の者】 金澤の土地の者。【へなたりと申し侍る】 兼好に「これは何といふか」と問はれて、土地の者が答へた言葉である。

【當時は今日と違ひ、香の事は上流の人は皆心得居たのであらうが、香に用ひる甲香がかういふものであらうとは、ちよつと氣がつかないから、此所にわざ／＼書いたのである。

甲香は法螺貝（ホラガヒ）のやうなものもつと小さくて、口の所が細長くなつて出で居る一種の貝の蓋（フタ）である。武蔵の國の金澤といふ所の海邊にあつたが、土地の者はそれを「へなたり」と申します」といつた。

三五

手のわるき人の、はゞからず文かきちらすはよし。見ぐるしとて、ひとにかゝするは、うるさし。

【字がまづいからとて、人に代筆させるのは、よくない。まづくても自分で書くがよいといふのである。

【字のまづい人が、遠慮せず、どし／＼と手紙を書くのはよい。まづくてもよい。いとて、人に書か

せるのは、厭味なものである。

【手のわるき人】 「手」は、手跡の意。字のまづい人をいふ。「人の」は、人が。【はゞからず文かきちらす】 「はゞからず」は、遠慮せず。「文」は、手紙。「かきちらす」は、筆にまかせてどん／＼と書いてゆくこと。【うるさし】 わづらはしく厭はし。厭味なものの意。

【第一段の終の所に「手など拙からず走り書き」とあり、又第一二二段には「手かくこと、旨とするのではなくとも、之を習ふべし、學問にたよりあらむ爲なり」とある。兼好は決して字がまづくてもよいと思つて居たのではない。此所はやはり例の自然であれ、氣取るなどいふ思想の一つのあらはれと見るべきである。

三六

久しくおとづれぬ比、いかばかりうらむらむと、我がおこたりおもひしられて、言葉なきこゝちするに、女のかたより「仕丁やある、ひとり」など、いひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと人の申し侍りし、さもあるべき事なり。

【とかく怨みがましいのは女の常で、さういふのが悪いことは言ふまでもないが、これは又ちやうどそれとは反對の珍しい女の話——しばらく訪はないので、恐らく此方の薄情を怨んで居るだらうと思つて居ると、意外にもそんな様子は少しもなく、極めて虚心坦懐に「下部を一人、あるならちよつと貸して下さい」などと言つておこした優しい女、さうした心ざまをほめたのである。但し人の話のやうに書いてあるが、恐らく筆者その人の経験であらう。

【久しくおとづれぬ比】 少し唐突な書き方ではあるが、次の所を讀めば、自分が久しく女の所へ訪ねて行かな

【三六】 久しくおとづれぬ比

親しくして居る女の所へ、久しく訪ねて行かなかつた時分のこと、先方では、自分をどんなに怨んで居ることだらうと、自分の無沙汰がすまないやうに思はれて、申譯もないやうな氣がして居ると、思ひがけなく、女の方から「あなたの所に下部はございませ



んか。ございまして、ちよつと一人お貸し下さい」などと云つて来たのは、實際珍しく嬉しい氣持のするものである。女といふものは、とかく人を怒むものだが、かういふ氣立の人はよいと、或人が自分に話したことがあるが、誠に尤もな事である。

平生何の隔てもなく馴々しくして居る人が、どうかいふ場合に、自分に對し、何だか氣がねをして、改つた風に見えるやうな事があると、「今更何もさう他人がましくする

かつたことであることがわかる。「いかばかりうらむらむ」どんなに自分を怒んで居るだらう。相手の女とは戀愛關係があることは勿論である。「おこたりおもひしられて」「おこたり」は、怠慢、無沙汰。自分の怠慢が惡かつたと氣がついての意。「言葉なきこちす」申譯がないやうな氣がする。「仕丁やある」「仕丁」は、役所で雜務に驅使せられる者であるが、家々に使はれる小使風の者をもさういつたのであらう。仕丁があまりすかしの意。「ひとり頼みたい事があるから、ちよつと一人貸して下さいの意。「いひおこせたる」勿論使者に手紙を持たせて、その事を言つて来たのである。「ありがたく」世にも珍しいの意。感謝すべきの意ではない。「さる心ざましたる人」「さる」は、然る、即ちさういふ。さういふ氣立をした人。「人の申し侍りし」「人の」は、人が。「或人が申しましたが、それは」といふ意になる。「さもあるべき事なり」さうなくてはならぬ事だ、尤もな事だ。即ちそれを言つた人に對して同感の意を表したのである。

三七

朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくりへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人も有りぬべけれど、なほげに／＼しくよき人かなとぞおぼゆる。うとさ人の、うちとけたる事などいひたる、又よしと思ひつきぬべし。

前段の女の話から、ふと思ひついて書いたのであらう。平生極親しくして居る人が、どうかいふ場合に、何だか改つたやうな態度をする。さういふ事を、世間の人は厭がるやうだが、しかし自分はさうは思はない。馴々しいやうな間にも、何處かにきちんとした所があるのはよい。又それとは反對で、疎々しいやうな人が、時に打解けた

る事もあるまい」などと云ふ人もあらうけれども、自分はやはり、篤實な、よい人だと思ふのである。又平生はあまり親しくしない人が、時に打解けた話などをした場合には、これ亦よい人だと考へるやうになるであらう。

事などと言つたのも、亦よいものだといふのである。【朝夕へだてなくなれたる人】「朝夕」は、平生といふに同じ。平生極めて親密な間柄の人。「人の」は、人が。【ともある時】ひよつとした時。どうかいふ場合に。【我に心おき】自分に對して氣がねをする。【ひきつくりへるさま】態度を改め餘所行きな風をすること。改つた風をすること。【今更かくやは】「今更かくやはある」で、平生は極親々しくして居るのに、今更かう他人がましく改つた態度をすることもあるまいの意。【なほげに／＼しくよき人かなとぞおぼゆる】「なほ」は、それでもやはり。「げに／＼しく」は、尤もらしい、篤實らしい。即ち篤實らしく思はれるとか、著實らしく思はれるとかの意。「よき人」は、立派な人。【うちとさ人】親密でない人。平生あまり心安くない人。此所も「人の」は、人がの意。【うちとけたる事などいひたる】ちよつと雜談などをいふことをいふ。【又よしと思ひつきぬべし】「又」は、かういふ人も亦の意。「よしと」は、立派な人だと。「思ひつく」は、慕はしく思ふといふ意もあるが、此所は上に、「覺ゆる」とあるに對した語であるから、さう重い意味に見ず、たゞ考へるやうになるだらうといふ意味に見てよからう。

三八

名利につかはれて、しづかなるいとまなく、一生をくるしむるこそおろかなれ。財おほければ、身を守るにまどし。害をかひ、わづらひをまねくなかだちなり。身の後には、金をして北斗をさふとも、人のためにぞわづらはるべき。おろかなる人の目をよろこばしむるたのしび、またあぢきなし。大きな車、肥えたる馬、金玉のかざりも、こゝろあらむ人は、うたて

【三八】名利につかはれて

浮世の名聞利慾に驅使されて、心静かな暇もなく、一生を離離として苦しみ送るのは實に馬鹿なことである。財寶が多ければ、ちよつ



と見たところでは、富んで幸福なやうであるが、我が身を護り保つ上からいへば、却つて貧しいわけで、その爲に心身を苦しめるといふ缺陷が出来る。即ち財寶が多いことは危害を招き苦勞を招く謀である。たとひ死後に、天まで届く程の黄金を遺したところで、畢竟たゞ人から厄介視されるに違ひない。愚人の目を喜ばせる所の樂しみも亦つまらない。大きな車とか肥えた馬とか金玉の飾とかいふものも、物のわかつた人の目にはきつと、ああいやな、馬鹿げた事だと見えるに

【名利】名聞利達。名譽と利益。【つかはれて】驅使されて。名利の爲に本心を奪はれ、たゞ醒眼として暮すをいふ。【しづかなるいとまなく】常に心がせか／＼として追使はれて居るやうな氣持で居ること。【一生をくらしむる】「一生苦しむ」といふに同じ。【財】財寶。財産。【身を守るにまどし】「まどし」は、「まづし」(貧)に同じ。乏し、缺けたりなどの意。身を護り保つて行く上に於ては缺くる所がある、即ちうまく行かないといふ意。但し「財多ければ」に對し、わざと「まどし」といふ語を使つたのである。【書をかひ】この「かふ」は、「借を買ふ」などいふ場合の「買ふ」で、危害を招く意。【わづらひ】面倒、迷惑、苦勞。【身の後】死後。次に引く白氏文集の「身後」を直譯したものである。【金をして北斗をさゝふとも】「金をして」の「して」は、「にて」「を以て」の意とすれば、かういふ場合には「金して」と書くべきである。此所は多分「金をして北斗をさゝへしむとも」とすべき所なのであらう。さてこの句は、黄金を澤山積重ねて天まで届き北斗星をさゝへる程にしたところの意。白氏文集(二一)「勸酒」と題する詩中の句による。「勸君一杯君莫辭。勸君兩杯君莫疑。勸君三杯君始知。面上今日老昨日。心中醉時勝醒時。天地迢遙自長久。白兔赤烏相趁走。身後堆金柱北斗。不如此前一樽酒。君不見春明門外天欲明。喧々歌哭半死生。遊人駐馬出不得。白與素車爭路行。歸去來頭既白。典錢得用買酒喫。】「人のためにぞわづらはるべき」「わづらふ」は、處置に困る、もてあつかふ。厄介視されるといふ意。(正徹本には「わらはるべき」とある)。「たのしび」「たのしみ」に同じ。【またあぢきなし】それも亦つまらない。

違ひない。黄金は山に棄て、玉は淵に投げてしまふがよい。利益に迷ふのは、此の上もない馬鹿な人である。

【大きな車肥えたる馬】大きくて立派な車とか、よく肥えた立派な馬とか、何れも「金玉の飾」同様、愚人の目を喜ばせる寶である。范魯公の詩に「舉世賤清素。奉身好華侈。肥馬衣輕裘。揚袂過閭里。雖得市家儻。還爲二議者歸。】「こゝろあらむ人」物のわかつた人。【うたておろかなりとぞ見るべき】「うたて」は、あゝいやなといふやうな意。(正徹本には「うたておろかにぞみるべき。】「金は山にすて玉は淵になぐべし」くだらない財寶は皆棄ててしまへ。班固の東都賦(文選、一)の中に「女修織紉。男務耕耘。器用陶匏。服尚素玄。恥二顯美。而不服。賤二奇麗。而不珍。捐二金於山。沈二珠於淵。云々」とある。これによつたのであらう。【すぐれて】この上なく。特に。

うづもれぬ名を、ながき世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚につたなき人も、家に生れ時にあへば、高き位にのぼり、おごりをきはむるもあり、いみじかりし賢人・聖人、みづからいやしき位にをり、時にはずしてやみぬる、またおほし。ひとへにたかきつかさ位をのぞむも、次におろかなり。

【前節には名利の利について言つたので、此所にはその名の方について言つたのである。高位高官に登るといふことは、いかに名譽らしいけれども、これもよく考へてみれば、やはり富と同じ事で、つまらない。だから、さういふ事を望むのも、結局馬鹿な事だといふのである。

【うづもれぬ名】不朽の美名。白氏文集(二一)「題故元少尹集後二首」の中に「遺文三十軸。軸々金玉聲。龍門原上土。埋骨不埋名。】「ながき世に残さむ」後の世に長く残さうの意。【あらまほしかるべけれ】「願はしい事であらう。(正徹本には「あらまほしかるべき」とある)。「位高くやんごとなきをしも」「やんごとなき」

【三八】名利につかはれて

【不朽の美名を長く後世に遺すといふことは、實に願はしい事であらう。しかしこれもよく考へてみれば、位高く尊い人ばかりが必ず立派な人だといふことが出来ようか、さうとはきまるまい。愚劣な人でも、名門に生れ、運がよければ、高い位にのぼり、おごりを極める者もある。之に反して、



立派な賢人・聖人でも、我が身は低い地位に居り、不運のまま、遂に一生を終つたやうな例も多い。かう考へると、一途に高位高官を望むといふことも、利を求めめるに次いで馬鹿な事である。

は、尊い。此所は「やんごとなき人をしも」の意。「しも」は、意味を強める助詞。位が高く尊い人ばかりをの意。【すぐれたる人とやはいふべき】「やは」は、反語であるから、「やはいふべき」は、いはうや、いはないの意となる。(正徹本には「人とや」とある)。「愚につたなき人」「つたなき」は、劣つて居ること。愚劣な人。「愚に」は、愚でさうしての意。【家に生れ】「家」は名門、即ち門閥の家に生れること。【時にあへば】運がよければ。【いみじかりし賢人聖人】立派な賢人や聖人でも。(正徹本には「聖人も」とある)。「みづからいやしき位にをり」これはかの番康の「與三山巨源絶交書」の中に「老子莊周吾之師也。親居二賤職。柳下惠東方朔達人也。安乎卑位。」とある句などがふと頭に浮んで書いたものであらう。さて「親ら」は、非常にえらい人で、後世にまで名を知られて居るやうな人でも、自分自身はの意。【時にあはずして】運が悪くて。【やみぬる】終つた。そのまゝ一生を終つてしまふ意。但し「やみぬる」は、「やみぬるもの」の意。【ひとへに】一途に。【たかきつかさ位をのぞむも】「つかさ」は、官職(くはしくはしくいふと、官と職にも區別があるが)。高位高官に上らうと望み願ふことも。【次におろかなり】「次に」は、利を求めめるに次いでの意。

【智恵と精神】こそは、特に優れて居るといふ名譽を後世に遺したい事であるが、しかしよく考へてみると、名譽を愛するといふのは、畢竟世間の評判のよいことを喜ぶのである。ところが褒める人も毀る人も、共に長くこの世に生き長らへては居ないし、その話を聞傳へた人も、同じく直ちにこの世を去るのであらう。だから、誰に對して恥ぢ、誰に知られることを願はうや。元來褒められるといふことは、毀られる本(モト)である。自分の死後に名譽が残つたところで、全く何の役にも立たない。かういふ名譽を願ふといふ事も、次に馬鹿げた事である。但し無理に智恵を求めたり、賢明にならうと願ふ人の爲に言ふならば、智恵が發達して來るとその結果として世に偽といふものが

【智恵と心とこそ、世にすぐれたる譽も残さまほしきを、つらくおもへば、ほまれを愛するは、人の聞きを喜ぶなり。ほむる人、そしる人、ともに世にとゞまらず、つたへきかむ人又々すみやかに去るべし。誰をかはぢ、誰にかしられむ事をねがはむ。譽はまた毀の本なり。身の後の名残りて、さらに益なし。これをねがふも次におろかなり。たゞししひて智をもとめ賢をねがふ人のためにいはば、智恵出でては偽あり、才能は煩惱の増長せるなり。】

【要】 同じく名譽ではあるが、前節に擧げた富貴は、やはり利慾と縁のあるものである。しかしこゝに擧げた智徳の

すぐれて居るといふ譽は、全然精神的のもので、利慾とは關係のなきさうなものである。そこで最後に之を持つて來たのであるが、併しこれ亦考へてみると、名譽を願ふ心といふのも、結局は世間の評判を喜ぶのである。褒める人も誹る人も、共にやがては死んでしまふ。殊に一方に褒められれば、又他方には誹られるものであるから、死後に名が残つたところで、何の役にも立たない。だから、かういふ名譽を願ふのも、同じく馬鹿な事だといひ、さうして最後に、強ひて智徳の譽を求めようとする人の爲にいへば、智恵出でては偽あり、才能は煩惱の發達したものと警句を吐いて居るのである。

【智恵と心】「智恵」は、才智、知識。「心」は、精神。賢明な事。前には人爵のつまらない事を言ひ、此所には精神的なる方面について言つたのである。【世にすぐれたる譽も】「世に」は、「特に」とか「誠に」とかの意。此所は「すぐれたる譽も世にのこさまほし」ではない。「譽も」は、「譽をも」の意。【残さまほしきを】後世に残したいものであるが。【つらくおもへば】よく考へてみれば。【ほまれを愛するは人の聞きを喜ぶなり】名譽を喜ぶのは、世間の評判がよい事を喜ぶのである。【世にとゞまらず】死んでしまふをいふ。【つたへきかむ人】その褒めることや誹ることを人から傳へ聞く人。【又々すみやかに去るべし】さういふ人も亦直に死んでしまふであらう。【誰をか恥ぢ】誰に對して恥づることがあらうの意となる。【誰にか知られむことを願はむ】自分のすぐれて居るといふことを誰に知られたいと思ふことがあらう、そんな事は考へなくてもよいの意。(正徹本には「たれに知られむことをかねがはむ」とある)。「譽はまた毀のもとなり」一方で褒められると、その反動として、必ず又他方で毀られるものだといふ意。【身の後の名】死後の名譽。「身の後」の語は、前節にもあつた。列子(楊朱)に「所好死後之名。非所取。」【更に益なし】少しも益がない、即ち全くくだらない事だの意。【これをねがふ】「これ」は、死後の名譽を指す。【次におろかなり】「次に」は、高位高官を望むに次いで。【たゞし】上文を承け、それに對して多少例外の意味を含めたことを言出すに用ゐる語。【しひて智を求め賢をねがふ】どうでもよいといふやうな態度ではなく、どうしても飽くまで知識を得むとし、賢明にならむと願ふをいふ。【智恵出でては偽あり】これは老子に「大道廣有仁義。智慧出有仁義。六親不和有三孝慈。國家昏亂有三忠臣」とあるによつた語。太古、人



生じて来るし、又才智藝能は人間の慾望苦惱の積り積つて出来たものである。

が皆自然に順つて生活して居た時代には、偽といふものはなかつた。ところが後世智慧といふものが生じていろいろ物の穿鑿などをするから、その結果偽といふやうなものが生じて来たといふのである。(善妙院抄・諺解・弘賢本等には「智慧ひいでては」とある)。「才能は煩惱の増長せるなり」「才能」は、才智藝能。「煩惱」は、情欲・願望・願望等の心身を苦しめ悩ますこと。「増長」は、次第に甚だしくなる。前の句は老子を引いたものであるが、この句は多分出所はなく、たゞ老子にまねて、老子風の奇抜な言表はしをしたものであらうと思ふ。で「智慧出でては偽あり」と同じ形式の言ひ方にすれば、「煩惱増長して才智あり」となるべきで、その意味は、つまり、我々人間には愛とか、怒とか、怨とか、その他或は財を得ようとする心とか、或は名を得ようとする心とか、さういふいろいろのものがあつて、その爲人間は常に不安と焦燥とに驅られて居る。さうして如何にして懸を成就しよう、金持とならう、名を成さうと苦心し煩悶し努力する、さういふ所からだん／＼と人間の才智といふものが長じて来る。さういふ事をいつたものであらう。

つたへて聞き、學びてしるは、まことの智にあらす。いかなるをか智といふべき。不可は一條なり。いかなるをか善といふ。眞の人は智もなく徳もなく功もなく名もなし。誰かしり誰か傳へむ。是徳をかくし、愚をまもるにはあらず。本より賢愚得失のさかひにをらざればなり。まよひの心をもちて名利の要をもとむるに、かくのごとし。萬事は皆非なり。いふにたらず、願ふにたらず。

前節を承けて世にいふ「智」とか「善」とかは何れも相對的のもので、眞の智、眞の善ではない。だから達人

人から傳へられて始めて聞き知り、人から教へられて始めて分るといふやうなのは、眞の智ではない。それでは、どんなものを眞の智といふべきであらうか、實はさういふものは世に無いのである。又世間でいふ可とか不可と

はそんな智もなく徳もなく功もなく名もない。といつて、それは決して強ひてそんな顔をして居るのではない。區區たる差別の境を超越して、絶對の境に住するからである。賢愚得失などにかまはつて居るやうでは駄目だといふのである。

かいふものも、よく考へてみれば、畢竟同じものである。どんなものを善といふかといふに、實はさういふものは世に無いのである。凡俗を超越した至人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もない。随つて人の目に立つやうな事がないから、誰が知り、誰が後世に言傳へよう。誰も知らねば、後世に言傳へるものも無いわけである。但しこれはわざと徳を隠し愚をよそはふのではない。かういふ人は、もとより賢愚得失の境を超越して居るからである。迷ひの心を以て名利を求め

【つたへて聞き學びてしる】 人から傳へ教へられて、始めて知り、人から學んで始めてわかるといふ意。(善通は勿論かうして知識を得るのであるが)。「まことの智にあらす」「まことの智」は、世間普通の差別相を絶した所の絶對の智慧。眞の意味における智といふべきものではないの意。【いかなるをか智といふべき】 「どういふものを智といふべきであらうか」といふ疑問であるが、その中に「智といふべきものは更になし」といふ意を含めて書いたのである。【不可は一條なり】 「可」は善、「不可」は不善。「一條」は、一すぢといふ意で、此所は同一といふことになる。世間で善といふ、不善といふも、絶對の目より見れば畢竟同一のものだといふ意。莊子齊物論に「道隱二小成。言隱二於榮華。故有二備置之是非。以是二其所二非。而非二其所二是。欲二是二其所二非。而非二其所二是。則莫二若二以明。物無二非二彼。物無二非二非。自二彼則不見。自二知則知之。故曰。彼出二於是。是亦因二彼。彼是方生之說也。雖二然方生方死。方死方生。方可方不可。方不可方可。因二是二非。因二非二非。是以聖人不二由。而照二之于天。亦因二是也。是亦彼也。彼亦是也。彼亦一是非。此亦一是非矣。且有二彼是一乎。且無二彼是一乎哉。彼是莫二得二其偶。謂二之道樞。楓始得二其環中。以應二無窮。是亦一無窮。非亦一無窮也。故曰。莫二若二以明。」(正徵本には「可と不可とは」とある)。「いかなるをか善といふ」といふべき所を、わざと少し書き方を變へたのである。随つて此所も前の所と同じく、可も不可も結局同じもので、世の中に善といふべきものはないのだといふ意になる。【眞の人】 本當に悟りきつた人。莊子大宗師に「有二眞人。而後有二眞知。何謂二眞人。古之眞人。不二逆二毒。不二離二成。不二讓二士。若二然者過而弗二悔。當而不二自得也。若二然者登二高不二懼。入二水不二濡。入二火不二熱。云々。」などある。「眞の人」は即ちこれで、次にいふ「至人」「神人」も、つまり同じものである。【智もなく徳もなく云々】 眞人は絶對の境にあるから、智だの徳だのといふ差別を超越して居るをいふ。莊子逍遙遊に、「若夫乘二天地之正。而御二六氣之辯。以游二



ると、こんなものである。世の中の事は何もかもつまらない、かれこれいふだけの価値もなく、願ひ望むだけの価値もない。

無窮者。彼且惡乎待哉。故曰。至人無己。神人無功。聖人無名。【是徳をかくし愚をまもるにはあらず】所謂眞人は世間にも知られず、後世にも名が傳はらないが、しかしこれは、かの生悟りの人や偽善の徒が、わざとそんな風をするのとは違ひ、さういふものを超越して居るからだといつたのである。【愚を守る】の「守る」は、注意して保ち失はないやうにするといふ意で、馬鹿なやうな風を何時までもして居るをいふ。【賢愚得失のさかひにをらざればなり】「賢愚」は、智と智ならざると、「得失」は、利不利、又は利害などいふ意であるが、此所は不可と同じく、善不善の意と見てよからう。智不智、不可といふやうな差別の境界を超越して居るからであるの意。【まよひの心】差別に執着して、名利にあこがれ、眞理をつかみ得ない心。【名利の要をもとむるにかくのごとし】「名利の要をもとむる」の句について、野槌に「の要の二字衍文也。莊子盜跖篇に興名就利と云ひて下の句に非以要名譽也とあり、要の字に假名付けたるを合せて誤り來れる也」といつて居る。意味の上から見れば、この説の通りと見てよからう。しかし壽妙院抄には「名利を要として求むる」意だといひ、盤齋抄には「名利の欲を求むる」といふのであらうかといひ、鈴木弘恭氏（文段抄頭書）も「野槌の説の如くの要の二字を衍文としても聞ゆるやうなれど、本のまゝにてもよろし。名利の要とは名利の上にて肝要の所といふ意なるべし」と云つて居る。かういふ説も、強ち誤とは言へないだらう。それは兼好の頭には稍ぼんやりとした記憶として右に擧げた「要名譽」といふ句が残つて居り、さういふ事から、ふと「名利の要をもとむ」と書き、それがそのままに残つたものと見られないでもないからである。しかしこれは勿論憶説中の憶説である。さて「かくのごとし」は、少し唐突で、何を承けて言つて居るのか分らないが、これは最初から書いて來た名利を要むることの愚なる所以全體を承けて、こんなものだと云つたのである。【萬事は皆非なり】「非」は、正しからざること、くだらないこと。かう考へると、世の中の事はすべてつまらないものであるといふ意。【いふにたらず願ふにたらず】かれこれと論ずるだけの価値もなく、願ひ求める程の価値もない。

三九

或人法然上人に、「念佛の時睡にかされ、行をおこたり侍る事、いかゞして此のさばりをやめ侍らむ」と申しければ、「目のさめたらむほど、念佛し給へ」とこたへられたりける、いとたふとかりけり。又「往生は、一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり」といはれけり。これもまたふとし。又「うたがひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これもまたふとし。

或人が法然上人に「念佛をして居る時、つい睡氣（ネムケ）がさして来て、行（ギヤウ）を怠ること、如何すればこの邪魔を除くことが出来ませうか」と言つたところが、「目のさめて居る間、念佛なさい」と答へられた。これは實に尊い事である。又「極樂往生といふことは、きつと出来ると思つて居れば、きつと出来るし、又どうだかわからないと思つて居れば、

【三九】 或人法然上人に

普通の考でいふならば、眠にかされて行を怠るやうでは駄目だ、眠くなれば、頭から水を浴びても念佛せよといふべき所である。しかしそんな事を云ふのは、實は本當に悟を開かない人の事で、「目のさめたらむほど念佛したまへ」と云つた所に、法然上人の偉大な所がある。これは前段を承けて、差別などに囚はれない眞人の面影を書いたのである。【或人】誰だか分らない。要するに「或人」である。これを倭論語に佐々木高綱の事のやうに書き、それによつて近頃の註釋書にも、高綱の事としたのが誤である。倭論語が却つて徒然草によつたのである。【法然上人】源空といふ。美作の人。淨土宗の開祖。建曆二年寂。年八十。【念佛】「南無阿彌陀佛」の六字の名號を唱へて祈ること。【睡にかされ】眠たさに邪魔されて。睡氣がさして。【行をおこたり侍る】「行」は、佛道の修行。但し此所では念佛することをいふ。坐睡の爲に、ついうっかりして、南無阿彌陀佛と唱へることを怠るのである。



やはりわからないものだと言はれた。これも尊い。又「たとひ疑ひながらでも、念佛すれば往生は出来る」とも言はれた。これも亦尊いことである。

【此のさばりをやめ侍らむ】「さばり」は、さまたげ。修行の邪魔をする睡氣をいふ。(正徹本には「のぞき侍らむ」とある)【目のさめたらむほど】目のさめて居る間。【こたへられたりける】答へられたがそれはといふ意。【たふとかりけり】有難い言葉だといふ意。【往生】現世を去つて極樂浄土に往き生れる意。【一定とおもへば】「一定」は、きまつて居ること。極樂往生はきつと出来るものだと思つて居ること。極樂往生といふものは、きつと出来るものだと思つて居れば、きつと出来るものだといふ意。【不定とおもへば不定なり】極樂往生が出来るかどうかと疑つて居れば、極樂往生といふものは出来ぬかどうかわからないといふ意。一言芳談にいふ「又云(法然上人)往生は決定とおもへば定て生る。不定とおもへば不定なり。【疑ひながらも念佛すれば往生すといはれけり】念佛しても、果して極樂往生が出来るかどうかと疑ひながらも、念佛をしさへすれば、それで立派に極樂往生は出来るものだといはれたといふのである。

四〇

因幡國に何の入道とかやいふ者のむすめ、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、此のむすめ、たゞ栗をのみ食ひて、さらによねのたぐひをくはざりければ、「かゝることやうのもの、人に見ゆべきにあらず」とて、おやゆるさざりけり。

栗ばかりを食つて、穀類は全く食はなかつたといふ變つた女の事を書いたのである。文段抄に「此段の心、説あり。まづは此の後の行雅僧都の奇病の段(第四二段)とおなじく、めづらかなるくせある女の物語をかけり。師説には、かくことやうなる女なりとも、ほしきといふ人あらば、其くせある由をいひきかせ、其上にて嫁せしむ

因幡の國に何とか入道といふものがあつた。さうしてその女(ムスメ)が美人だといふので、深山の男が言寄つたけれども、この女はただ栗ばかりを食つて、少しも穀類を食はなかつたの

で、こんな變り者は結婚すべきものでない」といつて親の入道は許さなかつた。

べき事を、終にゆるさざりける親の心おろかなり。彼上人の、目のさめたらんほどといひ、うたがひながらもこのたまへる心ばへにことなる事をそしりて、彼段の次にかけりといへり。又或説には、ことやうなる女なれば、かたちよけれども、嫁をゆるさざる入道が心をほめてかけりといへり。此段を見て、のちの心づかひとせん。志ある人は、兩説のうち、このむ所にしがひて用ふべくこそ」と云つてあるが、これらは共に餘りに考へ過ぎたものである。要するにたゞちよつと變つた面白い話を書いたといふに過ぎないだらう。

【何の入道とかやいふ者】「入道」は、寺に居る所謂僧侶とは別で、俗人の佛道に入り、剃髮染衣せるもの。源氏物語に見える明石入道の類である。「何の」は「某」といふ意で、たゞ「何とか入道」といふだけの事。「因幡の國に何の入道とかや」といふ言ひ方は、「仁和寺にある法師」(第五二段)などいふ場合と同じく、一種特別な言ひ方で、「因幡國に居た何とか入道」といふやうな意味である。【かたちよしと聞きて】「かたちよし」は、器量が良い、即ち美人である。(正徹本には「きこえて」とある)【人あまた】「人」は、勿論男である。【いひわたり】言寄る、即ち結婚を申し込むこと。但し「わたる」は「思ひわたる」「待ちわたる」などの「わたる」と同じく、その動作の時間的連續を表はし、此所も懸りずまに何度も「申し込むことをいつたのである。【さらに】少しも。下の「くはざりければ」にかゝる。【よねのたぐひ】「よね」は、米。米・麥・豆などを指していつたのである。【かゝることやうのもの】「ことやう」は、異様。こんな風變りなもの。【人に見ゆ】人に逢ふ意で、結婚すること。但し女が男に逢ふ場合にいふ。【おや】親。その入道である。

四一

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雜人立ちへだてて、みえざりしかば、各お

【四一】五月五日賀茂のくらべ馬を見侍りしに

五月五日、



賀茂の競馬を見物したが、車の前に雑人たちが大勢立ち隔てて、見えなかつたので、車に乗つて来た人たちは、いづれも下りて埒(ラチ)のきはへ寄つて行つたけれども、其所は殊に人が澤山込合つて居り、押分けて入つて行きやうもない。かういふ折に、向うにある柵の木の坊主が登つて、木の腹にしがんで、見物して居るのがある。木につかまりながら、ぐつすり寝込んで、落ちさうになつては、目をさまし、又落ちさうになつては目をさまして居るのである。この様を見

りて、らちのきはによりたれど、ことに人おほくたちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かかるをりに、むかひなるあふちの木に法師ののぼりて、木のまたについゐて物みる有り。とりつきながら、いたう睡りて、おちぬべき時に、目をさます事度々なり。これを見る人あざけりあさみて、「世のしれものかな。かくあやふき枝の上にて、やすき心有りてねぶるらむよ」といふに、我が心にふと思ひしまゝに、「われらが生死の到来、たゞ今にもやあらむ。それを忘れて、もの見て目をくらす。おろかなる事はなほまさりたる物を」といひたれば、前なる人ども、「まことにさここそ候ひけれ。最もおろかに候」といひて、みなうしろを見かへりて、「ここへいらせ給へ」とて、所をさりて、よび入れ侍りにき。か程のことわり、誰かは思ひよらざらむなれども、折からおもひがけぬこゝちして、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずる事なきにあらす。

【賀茂】 何でも自然なるを尊びながら、一面には、とかく故實を禮讃する癖のある兼好は、又ちよつと皮肉な事も言つてみたい人でもあつたのであらう。これなども、その一つで、人々が、のんきな坊主を笑つて居るのを見て、その人達にちよつと皮肉を言つてみたのである。さうしてその一言が案外人々を感動せしめたことを言つたのである。

【賀茂】 京都の賀茂神社。六七頁「祭の比」を見よ。【くらべ馬】 競馬。この競馬は五月五日、上賀茂で行は

て居た人々が、その坊主を嘲り笑つて、「實に馬鹿な奴だ。あんな危い枝の上で、よくまあ安心して眠られるものだ」と言つて居るので、ふと自分の心に思ひ浮んだまゝ、「吾吾人間の死といふものは、何時やつて来るかも知れない。かうして居る今にもやつて来るかも知れない。それを忘れて、ついでに何かと見物などをして、目を暮す、その馬鹿さ加減は、あの法師よりも尙まさつて居るものを」と言ふと、前にゐた人たちが、「實際さうです。全く馬鹿な事です」と言つて、皆後をふりかへり見て、「こゝへいらつしやい」

れたもの(今は六月五日に行はれる)。「見侍りしに」正徹本には「見侍りしが」とある。【車の前】「車」は、兼好の乗つて来た牛車である。この時兼好は他の人々と一緒に乗つて来たのであらう。次に「各おりて」とある「各」は、それらの人たちを指したのである。【雑人】下賤の者、見物に来て居る群衆を指す。【立ちへだてて】競馬の方と兼好等の乗つて居る車との間に立つて、両者の間を隔てるをいふ。【みえざりしかば】兼好等の居た場所からは、競馬の有様がよく見えなかつたのである。【らちのきはによりたれど】「らち」は、埒。馬場の周囲の柵をいふ。その柵のすぐそばへ寄つて行つたのである。【ことに】埒の際は特別にの意。その邊はよく見えるわけだから、一層人が多かつたのである。【わけ入りぬべき】澤山立つて居る人の間を分けて、中の方へ入つて行くをいふ。【むかひなる】向うにある。【あふちの木】「あふち」は、棟又は柵の字を書く。俗に柵の木のいふもの(香木の柵と別)。棟科、棟属の落葉喬木。幹の高さ二三丈に及ぶ。花は淡紫色。枕草子に「木のさまぞ、にくげなれど、棟の花いとをかし。枯花に様ことに咲きて、必ず五月五日にあふちをかし。」「木のまたについゐて」木の幹が分れた所に、ちよつとしやがんでの意。但し木の上に鳥のとまつたやうにして居たのである。【物みる】勿論競馬を見て居たのである。【とりつきながら】木の枝につかまつて居ながら。【おちぬべき時に】落ちさうになるとその時にの意。【あざけりあさみて】「あさむ」は、驚きあきれれるやうな意を含む語で、場合によつて、よい方にも使ふが、こゝはあざける意。嘲笑し輕蔑して。【世のしれものかな】「世の」は「世にも」などいふ場合と同じく、特に世間のこといふ意はなく、寧ろ意味を強める爲に冠したのである。「しれもの」は、馬鹿者。【ねぶるらむよといふに】「ねぶる」は、眠る。よくもまあ眠れたものだなどの意。「いふに」は、いふので。(正徹本には「ねぶらむらむよ」とある)。「我が心」兼好の心である。【ふと思ひしまゝに】ふと思ひ浮んだに随つて。(別に前から考へて居た事ではないがの意を含む)。「生死の到来」死の來ること。「生死」の「生」は意味なくたゞ附けただけ、ちやうど「一旦緩急あれば」の「緩」の字に意味がないと同じである。死の時が來ること。【たい今にもやあらむ】今直であるかも知れない。【前なる人ども】兼好の前に立ちふさがつて居た人たちをいふ。【まことにさここそ候ひけれ】全くさやうでございますの意。【うしろを見かへりて】正徹本には「かへりみて」とある。【所をさりて】「さる」は、避

【四一】 五月五日賀茂のくらべ馬を見侍りしに



る。居た場所をよけのいて。【か程のことわり】これくらゐの道理。「我等が生死の到来云々」といつた、それを指す。【誰かは思ひよらざらむなれども】「誰かは思ひよらざらむ、然れども」といふべきを、かういつたのである。誰だつて思ひつくことだらうけれどもの意。【折からのおもひがけぬこゝちして】「折からの」は、かういふ場合として。見物以外には何も考へて居なかつた、かういふ場合としては、思ひもかけない事を聞く心地がして。【胸にあたりけるにや】「胸にあたる」は、なるほどと心に思ひあたること。皆が席を譲つたのは、なるほど、さういへばさうだと思ひあたる所があつたからであらうかといふ意。【人木石にあらねば】人間は皆喜怒哀樂の感情があり、木や石のやうな非情のものではないから。白氏文集(四)、新樂府李夫人に「人非木石皆有情」。【時にとりて】「折にふれて」と同意。何かの機会にあつての意。

四二

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて教相の人の師する僧ありけり。氣の上る病ありて、年のやう／＼たくる程に、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目・眉・額などもはれまどひて、うちおほひければ、物も見えず、二の舞の面のやうにみえけるが、たゞおそろしく鬼のかほになりて、目はいたゞきのかたにつき、額のほど鼻になりなどして、のちは坊のうちの人も見えず、こもりゐて、年ひさしくありて、なほわづらはしくなりて死ににけり。かゝる病もある事にこそありけれ。

と言つて、場所をあけて、自分を呼入れてくれた。これくらゐの道理は誰だつて思ひつかないことはなからうけれども、こんな場合としては思ひがけない心地がして、胸にこたへたのでもあらうか。人は木石ではないから、何かの場合に當つては、物に感ずることがないでもない。

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都といつて、經文教理を人に教へる僧があつた。この人はのぼせる持病があつて、だんだん年を取るうちに、鼻の中がふさがつて、呼吸もよく出来ないやうになつたので、い

世には不思議な病氣もあるものだといふので、行雅僧都といふ人の奇病について書いたのである。もとより面倒な人生觀だの教訓だのといふものが含まれて居るわけではない。

【唐橋中將】唐橋雅清。家は村上源氏で、その系統は大成に載せてある通り、「村上天皇—具平親王—師房—房—雅實—雅定—雅通—通資—雅清」であるが、この人の事は普通の人名辭書などには餘り見えないやうであるから、少しくはしく書いておく。大納言通資の二男で、雅親の同母弟である。承久三年四月參議、右中將元の如し。十一月從三位。四年正月備中權守。十月左中將、十一月正三位。翌貞應二年は之と同様、三年も同様であつたが、その十二月出家して、寛喜二年四月に薨じた。年は四十九。【行雅僧都】「僧都」は、僧綱の一で、僧正に次ぐもの。なほくはしくは二四四頁「大納言法印」の項を見よ。【行雅】の傳記はわからない。【教相の人の師する僧】教相を以て人に師たる僧。「教相」は、「觀心」に對する語で、釋迦一代の教法を自己の宗義より分類判別すること、即ち佛教を學理的に研究するをいふ。【氣の上る病】のぼせる病。こゝは「病ありて」であるから、さういふ持病があつた意である。【年のやう／＼たくるほどに】「年たく」は、年をとること。だん／＼と年をとるうちに。【鼻の中ふたがりて】「ふたがる」は、ふさがる。鼻がつまつてしまつたのである。(正徹本には「ふさがり」とある)。「息も出でがたかりければ」鼻がつまつて呼吸もうましく出来なかつたから。【さまざまにつくろひけれど】「つくろふ」は、病の手當をすること、即ち療治をすること。いろ／＼と手を盡して治療したけれども。【わづらはしくなりて】病氣がひどくなつての意。【はれまどひて】目鼻もわからぬやうに、むやみに腫上つたことをいふ。【うちおほひければ】餘り腫上つて、目が上からおほはれたやうになつたこと。【二の舞の面】これは古來の註が甚だ曖昧である。先づ古い所では、壽命院抄に「樂人の面也。色赤くしておそろしき也。安摩とて、をかしき舞あり、其次に舞ふを二ノ舞と云ふ也」とあり、文段抄などはこれをそのまま引いて居り、今の新しい註釋書も大抵は壽妙院抄の説を今の口語に書變へた程度のものであるが、安摩がをかしいから、次の二の舞の面はこはいのだらうと簡単にきめてしまふならば、それは誤である。二の舞は決して恐ろしいものではない。安摩も二の舞も共に面を附けて舞ふが、その中二の舞の方は、次頁に掲げたやうな面を附けて、二人が舞ふのである。これは男と女であつて、右

【四二】唐橋中將といふ人の子に

ろいろと治療をしたが、益々ひどくなつて、目や眉や額などもむやみやたらに覆ひかぶさつたので、目も見えず、ちやうどかの二の舞の面のやうに見えたが、全く鬼の顔のやうに恐ろしい顔となつて、目は頭のとつべんの方につき、額の邊が鼻になつたりなどして、後には同じ寺の中に居る人にも顔を會はさず、一人一間(ヒトマ)に籠つたまま、長らく居たが、しまひには更に一層ひどくなつて、死んでしまつた。こんな不思議な病氣もあるものである。





(種十古集) 面の舞の二

は男、これは笑つて居る。だから、之をエミオモテといふ。左は女、これは目の邊がすつかり腫上つて居る。だから之をハレオモテといふ。二の舞の面といへば、この兩方を指すのであるが、此所にいふのはハレオモテの方である。この面の圖を見て、行雅僧都の顔を想像するならば、なるほど兼好はうまい事を書いて居るなど思ふであらう。それからこの面の事を註釋書には「色の赤い恐しい面」などと書いてあるが、實は赤黒い色で、醜怪ではあるが、こはい顔ではない。舞そのものも決してこはいものではなく、寧ろ滑稽である。さうして安摩の舞人の眞似をして舞ふのであるが、それがなかくうまく行かない。其所に面白みがある。人の眞似をすること、又他の覆轍を踏むことを、古くから「二の舞」といふが、それはこれから出たものである。【みえけるが】目の邊がはれ上つて、兩眼の所在も分らないやうになつた様子は、ちやうど二の舞のはれおもてのやうに見えたといふのである。【たゞおそろしく鬼のかほになりて】「たゞ」は、一途にとか全くとかか意。「おそろしく」のかゝり方は少し無理だが、鬼の顔のやうに恐しくなりて」の意と見るべきである。【目はいたゞきのかたにつき】下から上の方へ腫上つたので、目が頭の上の方に附いたやうになつたのである。【顔のほど鼻になり】「ほど」は、邊。鼻も上の方へ行つて、顔の邊に鼻があるやうになつたのである。【のちは】後。はでは。【坊のうちの人も見えず】「坊」は、僧の居る所。「見えず」は、會はず。同じ僧坊の中に居る人にも顔を合はさない。【なほわづらはしくなりて】一層ひどくなつて。【死ににけり】光廣本や嵯峨本や文段抄にはかうあるが、正徹本には「死にけり」大成には「死にけり」としてシニケリとよむやうにしてある。元來助動詞の「ぬ」は、奈變の「往に」「死に」だけは連ならないといふのであるが、兼好の時代に於ては「死ににけり」と讀んで居たのではないかと思ふから、正・不正は別問題とし、此所にはとにかく文段抄に従つておいた。

四三

春のくれつかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、おくぶかく、木立ものふりて、庭にちりしをれたる花見過しがたきを、さし入りてみれば、南面のかうし皆おろして、さびしげなるに、東にむきて妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたちきよげなる男の、とし二十ばかりにて、打ちとけたれど、心にく、のどやかなるさまして、机の上かみに文をくりひろげて見むたり。いかなる人なりけむ、たづねきかまほし。

【四三】 晩春の一日、或處でいかにも趣ある上品な住まひを見た。ものふりた木立、庭に散りしをれた花、たゞさういふものを見ただけでも、春の情趣は溢れるばかりであるのに、ふと御簾の破れから見ると、その景色にふさはしい若い男が讀書して居たといふ、いかにも春らしい氣分に満ちた情景を描いたのである。

【春のくれつかた】 晩春の頃。(勿論夕方ではない)。「のどやかに艶なる空に」「のどやか」は、「のどか」に同じく、春の日の何となく静かにゆつたりとした氣持のすること。「艶なる」は、春の空の美しく氣もろくくとするをいふ。但し「空に」とあるは、さういふ空合の日にの意で、空そのものをいふのではない。(正徹本には「のどかに」とある)。「いやしからぬ家」 上品な家。(立派なといふのでは勿論ない)。「おくぶかく」 邸内が相當廣く、門の邊から見ると、さうつと奥の方へ深く見えるをいふ。但し實際の有様がさうであると共に、それを見て起る感

【四三】 春のくれつかた

【四三】 晩春の頃、静かにゆつたりとして雨も花やかな空合の或日のこと、或處を通つたところが、其所に一軒上品な家があった。邸内は相當廣く、見た所、いかにも奥深い感じがし、其所に立並んで居る木々も皆時代のついたものばかりで、こんもりと生ひ茂つて居り、庭に散りしをれた居る花の風情も、そのまゝ見過し難いので、ついでつと中の方へ入(ハヒ)つて見ると、家は南の方の



格子(カウシ)は全部下して、寂しさうだが、東の方は、妻戸がちやうど内部を見るの都合がよいくらゐりに開いて居り、其所に掛つて居る御簾の破れから見ると、美しい男の、年の頃は二十くらゐなのが、うちくつろいで居るが、何處となく上品で、ゆつたりとした様子をして、机の上に本をひろげて読んで居た。どういふ人だったのだらう、尋ね聞きたいものだと思つた。

ども、何となく上品で重々しい、さういふ感じも伴つた書き方と見てよからう。随つて單に「家の奥深く木立がある」といふ風に見てしまふわけにも行かない。【木立ものふりて】「木立」は、生ひ立てる木、即ち立木の事であるが、此所はその邸内に見える樹木をいつたのである。「ものふる」は、何となく古びて見える、即ちそれらの樹木が皆相當古いもので、これ亦右の「奥深く」と同様、上品で重々しい感じがするわけである。【庭に散りしをれたる花】沼波氏の「講話」に「これを落花を指示すると思ふべからず、枝頭の花なり」と、わざ／＼ことわつてあるが、これはやはり花の散るについていつたものであらう。玉葉集(夏)に、「四月一日頃雨ふりて、花どもの散りみだれけるを御覽じてよませ給うける」といふ詞書で、「をしやなほ櫻山吹散りしをれはるなりぬべき今日のけしきを」といふ歌があるが、この「散りみだる」は、散るに重きをおいた語であるから、この歌について見ても、「散りしをる」は、枝頭にある花ではなく、亂れ散る花をいつたものであらう。随つて此所は寧ろ庭に散り敷いた花と見るべきである。なほこの句は第一三七段の中にもあるから、其所をも参照したい。【見過しがたきを】「見過す」は、見ながらそれに留意せず、そのまゝに過ぎてしまふといふ意。そのまゝよくも見ずに通り過ぎるのが惜しくて。【さし入りて】門内へ入るをいふ。(正徴本には「さし」なし)。「南面」は、家の南面。「さし入りて」は、格子。細い四角な木を縦横に組んだ建具で、一間毎に上下二枚ある。さうして上の一枚は釣上げ、下の一枚は掛金で止めておき、開ける時は上の方だけを外方に釣上げ、下は普通そのまゝにしておくのである(出入の時は別に妻戸があるから)。此所は南に面した格子は皆下してあるから、そこからは中の方がよく見えないのである。【さびしげなるに】人のけはひもなく、四邊がしんとして、いかにも寂しさうであるがの意。【東にむきて】東の方に向つて。但しその妻戸は建物の東側にあるわけである。【妻戸のよきほどにあきたる】「妻戸」については、一〇九頁を見よ。「よきほどに」は、すつかりあいて居るのでもなく、又あまり少しあいて居るのでもなく、ちやうどよい加減にといふ意。(正徴本には「あきたるが」とある)。「御簾のやぶれ」御簾の破れた隙間をいふ。いやしからぬ住まひではあるが、貧しいわび住ひなのであらう。【見れば】御簾の破れからのぞき込んだやうであるが、實際は少し離れた所から見た形で、見ると御簾の破れた隙間から中の様子が見えたといふ意である。【かたちきよげなる

男】容貌の綺麗な男「きよげ」は、綺麗なうなでなく、綺麗なといふ意である。【打ちとけたれど】くつろいだ様ではあるがの意。即ち鹿爪らしい端坐などはせず、極めて自然な様子で居るをいふ。【心にくく】何處となく上品で奥ゆかしいことをいふ。【のどやかなるさま】ゆつたりとした様子。【机の上に文をくりひろげて】机の上に書物を開いて。(正徴本には「つくまに」とある。又延徳本には、この下の「見あたり」が「見あたりし」となつて居る)。「たづねきかまほし」それを見たのは、以前の事であるが、今もなほ尋ね聞きたいものだと思つて居るといふ意をこめた言表はしてであるが、口語でいへば、上の口譯のやうでよからう。

四四

あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の、月影にいろあひさだかならねど、つや、かなる狩衣に、こきさしぬき、いとゆるぎきたるさまにて、さ、やかなる童ひとりをぐして、遙かなる田の中のはそみちを、稲葉の露にそぼちつ、わけゆくほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞きしるべき人もあらじと思ふに、ゆかむかたしらまほしくて、見おくりつ、行けば、笛を吹きやみて、山のきはに惣門のあるうちに入りぬ。

前段には春の事を書いた事から、ふと又思ひ出して秋の事を書いたのであらう。景に配されたものは同じく若い男であるが、前段は静止して居るもの、此所は動いて行くものである。随つて今度はたゞ「たづね聞かまほし」

〔四四〕 あやしの竹のあみ戸のうちより

粗末な竹の編戸の中から、若い男が出て来た。若月明りで色の工合はつきりしないが、何でも美しい艶のある狩衣を着て、濃い紫の指貫をはき、いかにも由緒あるらしい様子で、小さい童子を一人連れて、長く續いた田圃の中の小徑(コミチ)



を稻葉の露にぬれながら踏分けて行く。さうして道々何ともいへないよ  
い聲で笛を吹き興じて居るが、こんな田舎の田圃道では、誰一人その趣を聞知ることの出来る人もあるまいと思ふと、自分は何だかその男の行先が知りたくなつて、後(アト)からそつと見送つつつ歩いて行くと、やがて笛を吹止めて、山際(ヤマギハ)の惣門のある所へ入(ハヒ)つて行つた。



(式圖東裝) 衣 狩

る人の子で、年少高官の人である。【ゆ五づきたるさま】

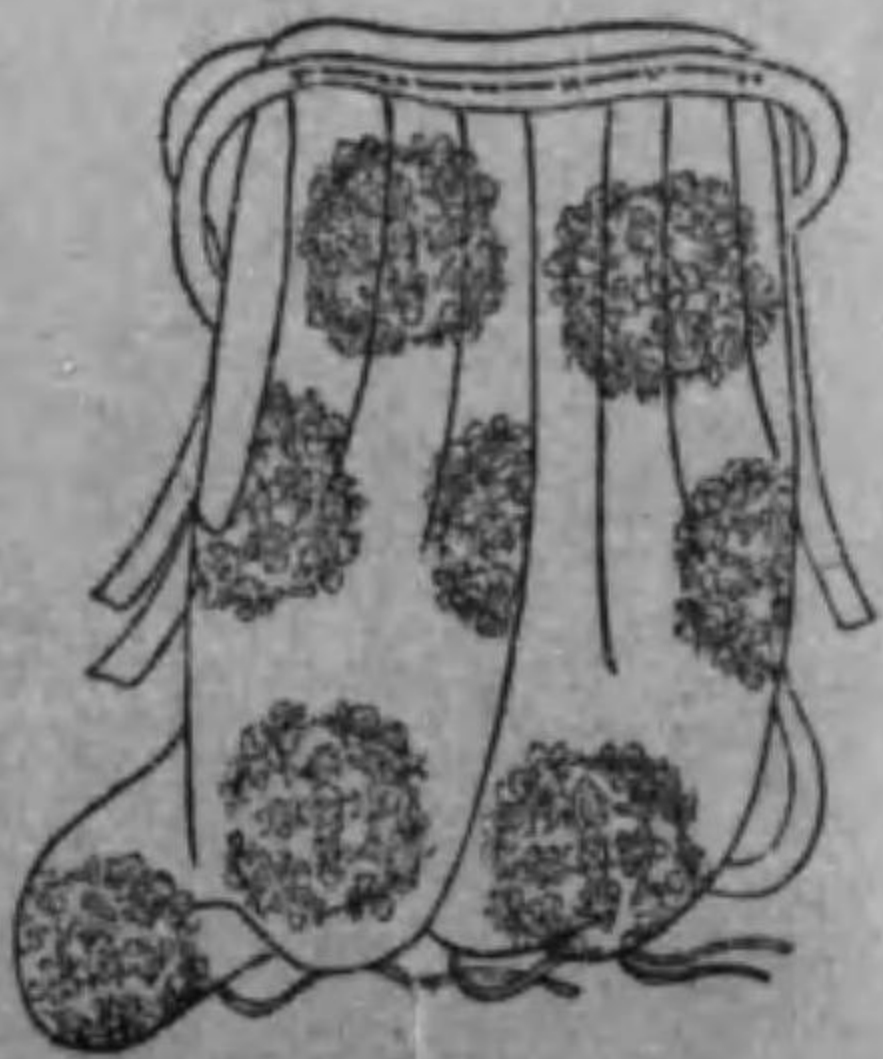
だけではすまされぬ。で更に進んで、その男の行く所へついて行かうとするのである。尤も前段にしてもこの段にしても、何處までが實際にあつた事だかわからない。  
【あやしの】粗末な(あやしの)は「あやしき」と同意である。【あみ戸】編戸。竹又は片木で編んで造つた戸。此所は勿論竹で造つたものである。【わかき男の】「の」は「が」の意の助詞。(うちより出で)の意が略されたものと見ればよい。【月影に】「月影」は、月光又は月明り。月光に照らされての意。【いろあひさだかならねど】「さだか」は、はつきり。月はあつても、何分夜の事であるから、色の工合がはつきりはわからないのである。【つややかなる】光澤があつて美しく見えるをいふ。月光に照らされたのでは、實際は光澤などは分らないが、よい物は幾分よく見えよう。但し大體はそれに對する感じである。【狩衣】もとは遊獵の時に着用し、麻布を用いたので、一名を「布衣」ともいふ。その後、貴人の常服となり、地も綾羅を用ゐるやうになつて、色や紋も身分・年齢等でいろ／＼變るやうになつた。大體の形は圖に示すやうなもので、袖に「くもり」があり、袴は指貫を用ゐるのである。【こきさしぬき】濃き指貫。【指貫】は、「奴袴」とも書く(之を普通ニバカマとよむが、さうよむのは誤だと貞丈はいつて居る。和名抄には「奴袴」と書いて「佐師奴袴乃波賀萬」とよんである)。直衣又は狩衣の時はいくもので、形は圖のやうなもの。但し裾の所は、くもりがあつて、しめるやうになつて居る。これも色や紋は身分・年齢等によつて異なる。此所にいふ「濃き」は、紫色の濃いのである。但し紫の濃い指貫をいって居るのは、身分あ由緒ありげな様子。但し身分の高い人らしいといふ意

と、その門の中には、榻に立てた車がある。かういふものは、都では別

榻

ふと見る  
と、その門の中には、榻に立てた車がある。かういふものは、都では別  
榻にたてたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心ちして、下人にとへば、「しか／＼の宮のおはします比にて、御佛事などさぶらふにや」といふ。御堂のかたに法師共まゐりたり。夜寒の風にさそはれくるそらだきものにはほひも、身にしむこゝちす。寢殿より御堂の廊にかよふ女

【四四】あやしの竹のあみ戸のうちより



(式圖東裝) 貫 指

である。【さ／＼やかなる童一人をぐして】「ぐして」は、「具して」連れての意。小さい子供を一人お供に連れて。【遙かなる田の中のほそみち】田圃の中にずうつと遠くつゞいて居る小徑。【稻葉の露にそぼちつ】「そぼつ」は、ぬれる。道が細くて、兩方の田圃の稻が寄りかゝつて來るので、その露に着物がぬれるのである。【わけゆくほど】「わけゆく」は、その稻を押分けるのである。【ほど】は、間。道すがらの意。【えならず】何ともいへない程うまく。【吹きすさびたる】人から頼まれて、已むを得ず吹くやうなでなく、自分で興に乗じて吹くこと。「吹きすさびたる」は、吹きすさんで居るが、それをといふやうな意になる。  
【あはれと聞きしるべき人もあらじと】なる程うまいなあと、その味を聞き分けることの出来る人もなからうと。  
【思ふに】「思ふ」は、その様子を見て筆者が思ふわけである。【ゆかむかたしらまほしくて】その男の行先が知りたくて。【見おくりつゝ行けば】その男の後からついて行くをいふ。【吹きやみて】吹き止めて。他動詞の「止む」は普通下二段であるが、此所は自動詞の場合同様四段としたのである。【山のきはに惣門のあるうち】「山のきは」は、山の裾、即ち山の麓の邊をいふ。「惣門」は、大門、即ち外柵の正門である。(九二頁「大門」参照)。此所の意は、山の裾の所に惣門がある、その惣門の中へ入つたといふのである。

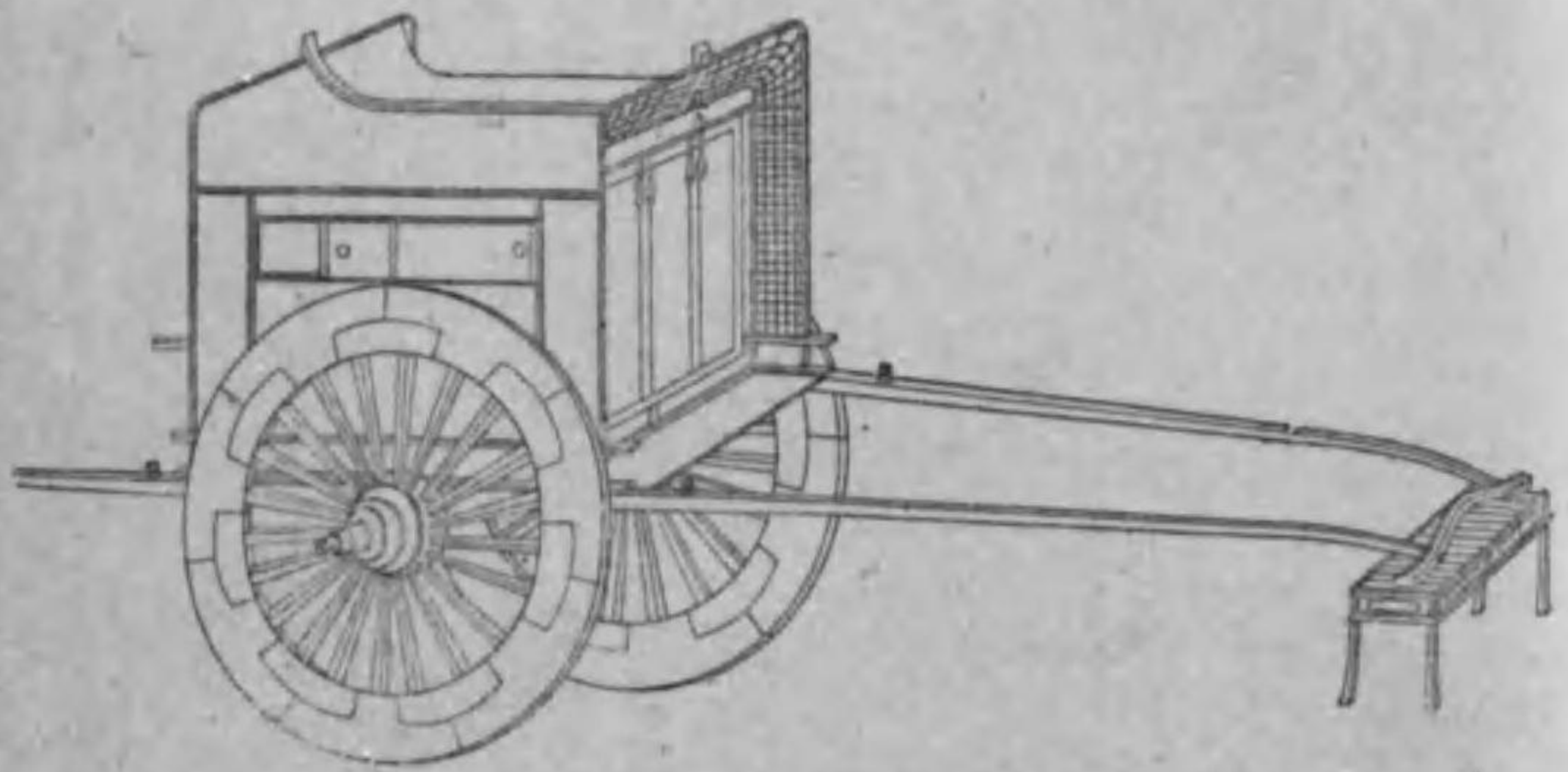


房のおひ風かぜよういなど、人めなき山里やまざとともいはず心づかひしたり。心のまゝにしげれる秋ののらは、おきあまる露つゆにうづもれて、蟲むしのね、かごとがましく、遣水つづみの音ねのどやかなり。都のそらよりは、雲うみの往來ゆきもはやきこゝちして、月つきのはれくもる事さだめがたし。

【要】 後を追うて行つたら、その男が門の中に入つてしまつたので、さてはどういふ人なのだらうなどと思ひつゝ、其邊を見廻すと、立派な車が置いてある。聞けばさる宮様が御出でになつて居るのだといふ。御堂の方には法師たちも澤山来て居る。物の香も身にしむやうだと、先づその寺内の有様を述べ、さて又徐に眼を轉じて、あたりの光景を描いたのである。

【補】 牛車の牛をはずした時、車の轅うづを置く。たゞ置けば傾くからである。次頁にある圖の右の臺がそれである。【都よりは目とまる心ちして】 「目とまる」は、それに目とまる、即ち注意を惹かれる意。都ならば、そんな車はいくらもあるが、かういふ片田舎では、いかにも珍しく、人の注意を惹くといふのである。【下人】 下部。その車の側に居たものである。【しかんくの宮】 「しかんく」は、何々又はかやう／＼といふ意で、實際は某の宮様だと、その御名前をいつたのである。【おはします比にて】 直譯すれば「お出でになつて居る時分だ」といふ意になるが、實際は「この頃此所にお出でになつて居りました」といふ事である。【御佛事などさぶらふにや】 「佛事」は、法會。必ずしも今の法事のやうなものばかりをいふのではない。もとより此所はどういふ種類の法會であるか分らないが、當時行はれた法華八講などの類をいつたものと見てよからう。「さぶらふにや」は、「さぶらふにやあらむ」で、直譯すれば、「御ありなされるのでございませうか」と疑問の意になるが、今日普通の言ひ方にすれば、「あるのでせう」といふくらの意味である。(正徹本には「御佛事などの」) 【御堂のかたに】 「御堂」は、本堂をいふ。但し住宅の方に對して寺の方をいつたのである。次の「寢殿」及び「参考」を見よ。(正徹本には「かたには」とあ

見る人もない、こんな山里であるにもかゝらず、よく注意をして居る。さて其の邊の景色を見ると、思ふまゝに草の生ひ茂つた秋の野は、夜露が置餘る程一杯に置いて、蟲の聲は咽ぶが如く、遣水はちよ／＼とどかな音を立てて居る。都の空に比べると、何だか雲の往來(ユキキ)も早いやうな氣がして、月の露つゆれたり曇つたりすること、定めがない。



(考圖車輿)圖の車牛

る。【法師共まゐりたり】 「まゐりたり」は、来て居るの意。今来たといふのではない。【夜寒の風】 秋の夜のうそ寒い風。【さそはれくる】 風につれてにほひ来るの意。【そらだきもののにほひ】 何處からともなくかをり来る香のにほひをいふ。香をたいて、それが四邊に匂ふやうにしてあるのである。【寢殿】 此所は多分一種の空想であらうから、もとより誰の別荘かわからないが、一方には住宅としての建物があり、一方には又佛をまつた建物もあるといふやうな處であらう。さうすれば、これは普通の寢殿造における寢殿と同じく、主人の居るべき處で、此所では宮の居られる所をいつたのである。さうしてこの寢殿造の方に對して、佛をまつた方を「御堂」といつたのである。【御堂の廊にかよふ】 寢殿の方と御堂とが全然離れたものとならずに、廊下を通れば寢殿の方から御堂の方へも行かれるやうになつて居る。それで寢殿の方から本堂の廊下へ渡ることをいつたのである。【女房】 貴族の家の侍女をいふ。【おひ風ようい】 追風用意。「追風」は、着物などの香を傳へ来る風、「用意」は、その薰をさせるやうにした用意で、つまりよい匂を着物にしみ込ませておくことをいつたのであらう。【人めなき山里ともいはず】 「人め」は、人目。「人目なき」は、見る人もなきの意。「山里ともいはず」は、山里であるにもかゝらず、【心づかひしたり】 注意をして居る。たしなみをして居る。【心のまゝに】 思ふまゝに。刈る人もなく自然のま

【四四】 あやしの竹のあみ戸のうちより



まにの意。【のら】野ら。「野」といふと同じである。【おきあまる露にうづもれて】「おきあまる」は、溢れこぼれる程多くの意。「うづもれて」は、野が露の中に埋れるといふ意。即ち野には夜露が置き場所もない程一杯に置いたの意である。【かごとがましく】悪言をいふやうだといふ意。蟲の音をたとへていつたのである。【遣水の音のどやか】「遣水」は、庭に引入れた流。その流の音がいかにも物静かに氣持よく聞えるといふのである。【都のそらよりは云々】かういふ山里は、京都に比べると、雲の動き方も早いやうで、随つて月も今出て居るかと思へば、直又雲に隠れるといつた風に、舞れたり曇つたりすることが定めがないといふのである。一體京都の地がさういふ傾向を持つて居るのであるが、此所では、かういふ山里は、都の中と違つて、殊に晴曇不定だといつたのである。（正徹本には「はれくもるほど」とある。）

右に書いた通り、此所は勿論誰の別荘を書いたのかわからないが、或は當時有名であつた北山の西園寺などを心に持つて書いたものではないかと思ふ。西園寺の様子は増鏡「内野の雪」の巻にあるが、こゝを讀むには、ちやうどよい参考にならうと思ふ。

四五

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、きはめてはらあしき人なりけり。坊の傍におほきなる榎の木有りければ、人「榎の木僧正」とぞいひける。此の名しかるべからずとて、かの木をさらけにけり。其の根のありければ、きりくひの僧正といひけり。いよ／＼はら立ちて、きりくひをほりすてたりければ、其の跡おほきなる堀にて有りければ、「堀池の僧正」

公世の二位の兄に良覺僧正といふ人があつたが、この人は非常に怒りつぽい人であつた。この人の居た坊の側に大きな榎の木があつた

とぞいひける。

渾名といふものは實に思ひがけない事をいふものだが、而も又實に適切な事をいふものである。これは何時の世においても同じ事であるが、渾名を附けられて怒る程、馬鹿げたこともない。これはその馬鹿げた一例である。

【公世の二位】 從二位侍從藤原公世。實俊の子。尊卑分脈（六）に「侍從從二位。爲實雄公子。正安三、四、六卒。母同公有。第一流正統」とある。「公有」は長男で、その母は「春花門院女房源定綱女」とあるから、公世の母もこの人である。【せうとに】「せうと」は、兄。此所は「公世の二位の兄に良覺僧正と聞ゆる人ありし、それは極めて腹あしき」といふやうな續き方になるのである。此所には「兄」とあるが、尊卑分脈では公世の弟になつて居る。（正徹本には「公世の二位の兄に良覺」とある。）【良覺僧正と聞えしは】良覺僧正と申した人はの意。尊卑分脈に「山、大僧正」とある。【はらあしき人】怒りつぽい人といふ意。性質の悪い人といふのではない。宇治拾遺物語（一五）に「腹あしくおはする上人なり。あしく申して打たれ申さむ。【坊の傍に】「坊」は、僧の住む所。この人の住んで居る坊のそばに。【しかるべからず】不都合なり。よろしからず。【かの木をさらけにけり】延徳本には「かのえの木を」とある。【その根のありければ】正徹本には「そのかぶのありければ。【きりくひの僧正といひけり】「きりくひ」は、切株。木を切つた跡に残つた株をいふ。（正徹本には「僧正とよびけり。延徳本には「とぞよびけり」とある。）【いよ／＼腹立ちて】正徹本には「腹をたちて。【掘りすてたりければその跡】正徹本には「ほりすてたりける跡。【堀】「ほり」は、「ほる」といふ動詞の中止形が名詞となつたもので、土地を掘つて水をためたものをいふ。後には城の周囲のものばかりをいふやうになつたが、もとはさうではない。此所などは要するに穴といふ程度のものであるが、それを大袈裟にいつたのであらう。【堀池の僧正】「堀池」は、掘開いた池といふこと。増補鐵槌などにはホリイケと假名がついて居るが、此所はホリケとよむのであらう。文段抄や大成もさうよんで居るし、正徹本や延徳本には假名で、「ほりけの僧正」とある。

【四五】 公世の二位のせうとに

ので、世間の人が「榎の木僧正」といふ渾名を附けた。僧正は之を知つて、「さういふ名は甚だ不都合だ」といつて、かの木を切つてしまはれた。ところがその根が残つて居たので、又「きりくひの僧正」といつた。そこで益、腹を立てて、そのきりくひを掘棄てたら、その跡が大さな堀になつて居たので、今度は又「堀池の僧正」といつた。



【柳原の邊に強盜法印といはれる僧があつた。度度強盜にあつた爲に、かういふ名を附けたのだといふ。】

四六

柳原の邊に強盜法印と號する僧有りけり。たび／＼強盜にあひたるゆゑに、この名をつけにけるとぞ。

【これも渾名の話。但しこれは又思ひきつて思ひがけない例である。普通に考へれば、どうしてもその法印が強盜らしいが、實はそれは反對で、法印が強盜にあつたのである。】

【柳原】 京都の地名。今も上京區に柳原といふ町名がある。その邊であらう。【強盜法印】 「法印」は、僧位の最高のものである。【號する】 稱する。此所は渾名をいふ。(正徹本には「よばる」とある)。「この名をつけにけるとぞ」世間の人がつけたといふのである。但し正徹本には「つきにける」とある。第一五〇段に「能をつかむとする人」、第一八八段に「能をもつき」などある使ひ方から推して考へると、此所も「つきにける」がよいのではないかと思ふ。

四七

或人清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「くさめ、くさめ」といひもて行きければ、「尼御前、何事をかくはの給ふぞ」と問ひけれども、いらへもせず、猶

【或人が清水へ参つたところが、ちやうど道連

いひやまざりけるを、度々とはれて、打腹立ちて、「や、はなひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、やしなひ君の比叡山に兒にておはしますすが、たゞ今もやはなひ給はむと思へば、かく申すぞかし」といひけり。有難き志なりけむかし。

【これも變つた話であるが、一面又その眞摯な所にも感じたのである。一見馬鹿げたやうに見えても、その眞摯な點、熱心な點に感じ入つて書いたものは、この外にも第六八段などがある。】

【清水】 今もある京都の清水寺、法相宗で南都興福寺に屬する。もとは北觀音寺と稱した。今の伽藍は寛永十年再建のものである。【老いたる尼の行きつれたりけるが】 「尼の」は「尼が」の意。「行きつれたりけるが」の「が」も主格に附く「が」で、此所は「行きつれたりける老いたる尼が」の意となるわけである。(道連になつた「が」ではない)。「くさめ」「くしやみ」又「くしやめ」ともいふ。但しこれは後の言葉で、古くは「はなひる」といつたものらしい。和名抄には「嚏、丁計反、噴、鼻也、和名波奈比流」とある。【いひもて行きければ】 「いひもて行く」の「もて」は、殆ど意味のない語であるが、大體「いひながら行く」といふやうな意である。【尼御前】 尼さん。こゝは「尼さん」と呼びかけたのである。「御前」は女の稱呼に添へて呼ぶ語で、尊敬の意を表はすもの。「母御前」「姫御前」などいふ。(正徹本には「尼ごせむ」とあり、大成にも「アマゴゼン」とよんであるが、アマゴゼでよからう)。「いらへもせず」「いらへ」は、こたへ。返事もしないで。【なほいひやまざりける】 相變らず「くさめ、くさめ」と言つて居たのである。(正徹本には「猶いひやまざりける」とある)。「打ち立ちて」「うち」は、接頭語。腹をたてて。【やま】 少し驚いたやうな時に發する感動詞で、「やあ／＼」といふと同じものであるが、此所は、うるさく問はれて、腹を立て、じれつたさうにいふのであるから、今の言葉ならば「エイ」などといふ所である。【はなひたる時】 「はなひる」は、くしやみをする。「かくまじなはねば」かういつて、即ち「くさめ、くさめ」といつて、まじなひをしなければ。【死ぬるなり】 くしやみをした人が死ぬをいふ。(正徹本には「死ぬると申

【四七】 或人清水へまゐりけるに

(ミチアツレ)になつた年とつた尼があつた。その尼が道々「くさめ、くさめ」と言ひながら行くので、尼さん、何事をそんなにおつしやるのですか」と問うたけれども、返事もしないで、なほも同じことを言續けて止まなかつたが、餘り度々問はれて、腹を立て、くしやみをした時、かう言つてまじなひをしなれば、死ぬものだと申しませうから、私の御養育申し上げた若君様の、比叡山に兒で居られるのが、今にもくしやみをなさうかと思ふと、氣が氣でない



から、かう申すの  
です」と言つた。  
世にも珍しい殊勝  
な志である。

せば」とある。【申せば】世間で言ふからの意。【やしなひ君】自分が乳母となつて養育した若君。【比叡山】延暦寺をいふ。【見にておはしますが】「見」は、格の高い寺院で召使ふ幼童。大抵貴族の子弟がなる。寺院に入つて高貴の僧に給事し、後その弟子となつて剃髮する者もあれば、又寺を出て仕官する者もある。「おはしますが」は、おはします方がの意。(正徹本には「ますが」の「が」なし。大成には「見にて」の三字がないが、これは落ちたのであらう。【たゞ今もや】「今にも……(であらうか)」などの意。即ち「今にもはなひ給はむか」といふ意である。【正徹本には「はなひたまふらむ」とある。【かく申すぞかしといひけり】「かく申す」は、「くさめ、くさめ」といふこと。(正徹本には「いひける」とある。【有り難き】珍しい。【なりけむかし】直譯すれば、「であつたであらうよ」の意であるが、此所は「なりけり」又は「なりかし」の意と見るべきである。「殊勝な志であつたらうよ」などといつては、何の事だかわからない。

四八

光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へめされて、供御をいだされて食はせられけり。さて食ひちらしたる衝重を御簾の中へさし入れて罷り出でにけり。女房「あなきたな。誰にとれとてか」など申しあはれければ、「有職のふるまひ、やんごとなき事なり」と、かへすゝ感せさせたまひけるとぞ。

これも例の故實趣味の一つのあらはれと見るべきものであるが、とかく因はれ易い故實といふものに因はれず、

光親卿が院の最勝講の奉行を勤めて居たところが、院が御召しになつて、御膳部を出されてこの人に食はせられた事があつた。ところが光親卿は、それを食つてから、食散

らした衝重(ツイガサネ)を、そのまま御簾の中へ差入れて、退出した。これを見た女房たちが「あらまあ、きたないこと、一體誰に食べよといふのでせう」などと言合つて居たが、院は「故實に通じた人のする事は、どうも感服の至りだ」とかへすゝ感歎されたといふことである。

よく臨機の處置をとつた光親の態度と、よく之を御理解あつた後鳥羽院の御眼識とに感服して書いたのである。

【光親卿】藤原氏。權中納言光雅の子。建暦元年權中納言に拜し、尋いで陸奥・出羽の按察使を兼ねた。後鳥羽院には特に寵遇を蒙つたが、北條氏討伐の議には反對し、いろ／＼事情を述べて、その不可なる所以を説き、諫止しようとしたけれども、院がどうしても聽かれないので、遂に巴むを得ず討伐の詔書を作つた。ところが官軍敗北の爲、捕へられて鎌倉に送られる途中、遂に駿河國加古坂に於て斬られた。時に承久三年七月十二日、光親年四十六。【院の最勝講奉行】「最勝講」については八一頁を見よ。「奉行」は、君命を奉じて事を執り行ふこと、又その人をいふ。此所は仙洞において催される最勝講の事務を執り行ふ事をいつたのである。但し仙洞最勝講は内裏とは時期が違つて居る。「奉行してさぶらひける」は、奉行をして居たの意。【御前へめされて】「御前」は上皇の御前。上皇がお召しになつたのである。上皇が御自分の召上るべき膳部を光親に下されたのである。「いだされ」は「食はせられ」共に上皇がし給うたといふ意。【さて】そこで、それからなどの意。それを食つてからといふ意を表はす。(大成には「物」とあるが、これは「扱」を「物」に誤つたものではあるまいか。【食ひちらしたる衝重】「食ひちらす」は、出て居る御馳走をどれもこれも少しづつ食つて跡始末をよくしないこと。「衝重」は、食物を載せる臺。今の三方と同じ形のものである。貞丈雜記(七)に云ふ「ツイガサネとは衝重と書きて、三方・四方・供饗の馳名也。皆ツイガサネ也。上の臺と下の足をつきかさねたる物なる故、ツイガサネと云ふ也。三方に穴をあけたるを三方といひ、四方に穴をあけたるを四方と云ひ、穴を一つもあけざるを供饗と云ふ。此三品はいづれも同じ形なり。足付きたるは衝重の部にあらす。【御簾の中】この御簾はどの邊にかゝつて居るものか分らない。文の上では何だか院の居られる前へ差出したやうにもあるが、それでは餘りに失禮なやうにもある。沼波氏の「講話」には、「食ひ覽らした衝重を、そばの御簾の中へ入れて退出した。御簾の中には女官が居た、臨機に女房達の居る御簾の中へさし入れて隠して退出したのである」と書いてあるが、この處置が果して臨機の變則なものかどうか、さう簡單にはきめられまい。野槌には「此段の心は最勝講の奉行たるより威儀をつくるふいとまなく、物くひちらしたる

【四八】光親卿院の最勝講奉行してさぶらひけるを



衝重をそのまゝさしおく事の、いそがはしき時はかく有るべし、器物をふところにして出づべきにもあらず、又奥へ入りて女房にさづくべき所にもあらず、その日は講日なれば、奉行のつとめを専する故也」と書いてある。これは却つて一考の價値があるのではあるまいか。一體かういふ場合には側に女房が控へて居るのが普通であらうし、又食つた後の衝重を渡すとすれば、女房に渡すより仕方がないのだから、それを見て、女房がこんな事をいふ筈はなからう。當時院の居られた御部屋の様子がどうなつて居たかは分らないが、これはやはり院の居られる御簾の中へ差入れたのではないかと私は思ふ。それで女房たちがあきれて「ひどい方だ。食べ残しを誰に食べよといふのだらう」とつぶやくと、院が却つて有職の振舞だと仰せられたのではあるまいか。その傳記から見ても、光親卿は決して平々凡々な人ではなかつたやうであるから、大きな役目を控へて居る際には、かういふ事もしたのではないかと思ふ。【罷り出でにけり】「罷る」は、貴人の前より退き去る。院の御前を退出したをいふ。【女房】院の女官たちである。【あなきたな誰にとれとてか】あゝきたない。誰に食べよといふので、かうして御簾の中へ差入れられたのであらうの意。(女官の所へ置いたならば、こんな事は言はないだらう)【申しあはれければ】女房達が互に言ひあつたのである。【有職のふるまひ】「有職」は、「有職家」といふに同じく、朝廷(又は武家)の儀式典故によく通じた人(一一頁参照)。故實に明るい人の仕方といふ意。【やんごとなき事】非常にすぐれた事といふ意。殊勝な事だ、感服の至りだなどの意と見てよからう。

四九

年をとつてから始めて佛道の修行をしようなどと思つて待つて居

老來りて始めて道を行せむと待つ事なかれ。ふるき頃、おほくは是少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちに此の世をさらむとする時にこそ、初めて過ぎぬるかたのあやまれる事は

るやうな事ではなからぬ。死ぬのは何も老いぼれた者ばかりではない。古い頃を見るに、その多くは年少にして死んだ人の墓である。うつかりして暮して居る中、思ひがけもなく病氣にかゝつて、忽ち此の世を去らうとするやうな場合にこそ、始めて我が過去の誤つて居たことがわかるのである。その誤といふのは外の事ではない。早くしておかなければならぬ事を、ゆつくりとうつちやつておき、又ゆつくりうつちやつておいても、差支のないやうな事を急いでして、今までやつて

しらるなれ。あやまりといふは、他の事にあらず、速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべき事をいそぎて過ぎにしことのくやしきなり。其の時悔ゆとも、かひあらむや。人はたゞ無常の身にせまりぬる事を、心にひしとかけて、つかのまもわするまじきなり。さらば、なか此の世のにこりもうすく、佛道をつとむる心もまめやかならざらむ。むかし有りけるひじりは、人來りて自他の要事をいふとき、答へて云く、「今、火急の事ありて、すでに朝夕にせまれり」とて、耳をふたぎ念佛して、つひに往生を遂げたりと禪林の十因に侍り。心戒といひける聖は、あまりに此の世のかりそめなる事を思ひて、しづかについあけることだになく、常はうづくまりてのみぞありける。

無常迅速、我々は何時死ぬかも分らない身である。若いからとて、安心してはならぬ。死の眞際に臨んで、始めて後悔しても追付かないから、平生によくその用意をしておくことが肝要であるといつて、最後にその例を挙げたのである。

【老來りて】年をとつてからの意。但しこの「おい」は、「老ゆること」といふ意の名詞である。「老來りて」といふ言ひ方は、漢語の「老來」を直譯したものだらう。【道を行せむと待つことなかれ】「道」は、佛道をいふ。年をとつたら、始めて佛道の修行をしようなどと思つて、待つて居るやうなことではいけない。若い中からその修行をしなければならぬといふ意。【ふるき頃おほくは是少年の人】古い墓をしらべて見ると、その大部分は年少にして死んだ人の墓である。さうして見ると、長生きするとはきまらないから、年をとつてから道を修めような

【四九】老來りて始めて道を行せむと待つ事なかれ



来たことが悔しいのである。さういふ場合になつて、始めて後悔しても、何の甲斐があらうや。だから、人はたい無常といふものが我が身に迫つて来て居ることを、しつかりと心に持つて、ちよつとの間も忘れてはならぬのである。さういふ風であつたならば、この浮世の名利に心を汚されることも少く、佛道に勤める心も忠實にならなう。昔の或高僧は、人が来て、お互に大切な用事を言ふ時、答へていふには、「今非常な急用があつて、もう其所

どと思つて居ては駄目だといふのである。(正徹本には「ふるきつかはおほくこれ少年の人」とある。【はからざるに病をうけて】思ひがけなく病氣にかゝつて。【過ぎぬるかたのあやまれること】過去に自分のした事が間違つて居たといふこと。【しらるなれ】知らるなれ。わかるのであるの意。「知らるなり」といふ言ひ方と「知らるなり」といふ言ひ方と二つあるから、「知らるなれ」は、文法上でない。(正徹本には「しらるれ」とある。【速にすべき事】暗に佛道の修行を指していつたのである。【過ぎにしこと】「過ぎ去つたこと」即ち「過去」といふ意ではなく、此所は「急ぎ過ぎて過ぎにし」と續く文脈で、今まで経過して来たことといふ意である。【其の時】「この世を去らむとする時」を指していつたのである。【身にせまりぬる事】身に迫つて来たといふのではなく、常に身に迫つて来て居ることである。【ひしと】「ひしと抱きつく」などの「ひしと」で、しつかりとの意。(正徹本には「ひしと心にかけて。【つかのま】東の間。極暫くの間。【さらば】さういふ風であつたならば、即ち無常の身に迫りぬることを心にかけて忘れなければである。【なか】どうか。【どうして】「ならざらむ」につづく。【此の世のこり】浮世の名利に囚はれて心の清からぬこと。【まめやかならざらむ】「まめやか」は、忠實。忠實でなからうや、忠實であらうの意。【むかし有りけるひじりは】「むかし有りける」は、昔この世に居たといふ意であるが、要するに「昔の或ひじりは」といふ意になる。「ひじり」は、高僧。【自他の要事】「自」は、己れ、「他」は、他人。お互の大切な用事。【火急の事】非常に急ぐ事。但し此所では往生の一大事をいふ。【すでに朝夕にせまれり】極めて事のさし迫つたのをいふ。(正徹本には「朝ゆふべ」と假名で書いてある。【ふたぎ】「ふさぎ」に同じ。(正徹本には「ふさぎ」とある。【往生】現世を去つて極樂浄土に往き生れる意。【禪林の十因に侍り】「禪林」は、禪林寺の永觀律師をいふ。寺は今も南禪寺の北にあつて、永觀堂といつて居る。これは永觀が中興の祖たるより起つた名で、最初は眞紹僧都(空海の弟子)の建立したものである。なほ此所はもと眞言宗であつたが、後淨土宗の時、宗旨を改めて淨土宗とし、今は淨土宗西山派の本山となつて居る。永觀は文章博士源國經の子、鳥羽天皇の天永二年(年八十)、「十因」はその著「往生十因」をいふ。同書に云ふ「傳聞有聖。念佛爲業。專情寸分。若人來謂。自他要事。聖人陳曰。今有火急事。既過於旦暮。塞耳念佛。終得往生。」(正徹本には「十因にかけり」とある。)

に差迫つて居る」といつて、耳をふさいで、念佛して、遂に極樂往生を遂げたと、禪林の十因に書いてある。又心戒といつた高僧は、この世のはかないことを考へて、ちよつとも靜かにひざまづいて居た事さへなく、何時でもしやがんでばかり居た。

應長の頃、伊勢の國から、女が鬼になつたのを連れて来たといふ話があつて、その頃二十日ばかりの間は、毎日々々京・白川の人たち

【心戒】發心集(七)に云ふ「ちかく心戒坊とて、ゐどころもさだめず、雲風にあとをまかせたる聖あり。俗性は花園殿の御末とかや。八鳥のおとど(宗盛)の子にして、宗親とて阿波守になされたりし人なるべし。【かりそめなる事】はかなきこと。【しづかについおけることだになく】前に第四一段の所にも「木のまたについてゐて」(二九頁)とあり、これは「ちよつとしやがんでゐて」と書いておいたが、此所の「ついでる」は、それは少し違つて、枕草子に「袋に入りたる弓矢、楯・鉞・太刀など、もてありくを、誰がぞと問ふに、ついでて、某殿のといひてゆくは、いとよし」などあるもので、これは所謂ひざまづいた様子をいふ。つまり「ついでる」は、ちよつと膝をついてかしまつたやうな形をしてゐる意と見るべきである。(正徹本には「ついでることだになく。【うづくまりて】前の「ついでる」が、膝をついた形とすれば、これは膝をつかず、半分立ちかけたやうな形でしやがんで居るをいつたのである。一言芳談に云ふ「心戒上人常に蹲居し給ふ。或人其故問ひければ、三界六道には心安く尻すゑてゐべき所なきゆゑなり云々。」

五〇

應長の比、伊勢の國より、女の鬼になりたるをゐてのぼりたりといふ事ありて、其の比二十日ばかり、日ごとに、京・白川の人、鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺にまゐりたりし」  
「今日は院へ参るべし」  
「たゞいまはそこ〜に」  
などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、そらごとと云ふ人もなし。上下たゞ鬼の事のみいひやます。其の比、東山より安居院

〔五〇〕 應長の比伊勢の國より



が、鬼見に行くのだといつて、あてもなくむやみと出歩いた。さうして「昨日は西園寺へ行つた」「今日は上皇の御所へ行くだらう」「今はどこそこに居る」などと互に言合つて居た。しかし實際見たといふ人もなく、又虚言(ウソ)だといふ人もない。さうして上も下もたゞ鬼の事ばかりを話して居た。その頃、自分は、東山から安居院の邊へ行つたところが、四條から上の方の人は、皆北を指して走つて行く。さうして一條室町に鬼が居るといつて人々が騒いで居る。今出川

邊へ罷り侍りしに、四條よりかみざまの人、皆北をさしてはしる。一條室町に鬼ありとの、しりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更にとほりうべうもあらずたちこみたり。はやく跡なき事にはあらざめりとて、人をやりて見するに、おほかたあへるものなし。暮るゝまでかく立ちさわぎて、はては鬮(くじ)おこりて、淺ましき事ども有りけり。その比おしなべて二三日人のわづらふ事侍りしをぞ、かの鬼のそらごとは、此のしるしをしめすなりけりと云ふ人も侍りし。

【註】これも第四〇段や四二段などと同様のもので、珍しい話の一つである。最初に先づ世間の噂話を書き、それから筆者自身の實見した所を書いて、さて結局それは虚言だといふのであるが、それも世間の人の話で、筆者自身は必ずしも虚言だとも本當だともきめて居ない。要するに見聞した所をたゞそのままに書いたのである。

【應長】花園天皇朝の年號。一九七一年たゞ一年だけであるが、くはしくいふと、延慶四年(一九七一年)四月二十八日に改元して應長といひ、その翌年三月二十日に又改元があつて正和となつたのである。但し此所は「應長の比」とあるから、必ずその年とも限らない。記憶がはつきりしないので、大體その時分の事だつたといふのである。【女の鬼になりたるを】「女の」は「女が」の意。女が鬼になつたといふ意である。大方姪か何かでなつたといふのであらう。【あてのぼり】「あて」は、連れて。(此所は恐らく見世物にでもしようといふので連れて来たといふのであらう)。「のぼる」は、地方より京都に行くこと。【京白川の人】「京」は、京都の市中をいひ、「白川」は、町の東北に當る郊外であるが、今はこれも京都市の中に入つて居る。【出でまどふ】被方へ行つたり此方へ行つたり、おてもなく出歩くをいふ。【西園寺】これは前に第四四段の「参考」にちよつと書いておいた、あの西園寺で、

の邊から望むと、院の御棧敷の邊は、とても通れさうもない程こみつて居る。で、これはもと／＼根據のない話でもないらしいと思つて、人をやつて見せたところが、一人も逢つたといふものはない。日の暮れるまで、かうして立騒いで、しまひには喧嘩が起つて、思ひもかけないひどい事などもあつた。この頃世間では一般に二三日わづらふことがあつたが、かの鬼の虚言話(ウソバナシ)はこの前兆を示したのだと言ふ人もあつた。

山城葛野郡衣笠村字北山(今は市内)にあつたもの、今の鹿苑寺、即ち金剛寺のある處はその舊址である。この鹿苑寺は西園寺家の威勢が衰へて後、應永四年足利義滿がその跡に建立したものである。【まゐりたりし】寺へ参詣したといふ意味ではなく、行つたといふ事である。【院】これもたゞ上皇の御所へ行つたといふだけの意味で、その上皇がどなたであらうと、別に問題ではないのであるが、念の爲に言ふと、この時上皇は後宇多・伏見・後伏見の第三方があり、延慶元年八月以来は伏見院によつて院政が行はれて居た。だから此所は伏見院の御所と見るのが適當であらう。さうすれば、所謂持明院で、今の光照院の地である。【そこ／＼に】今日「どこそこに」といふと同意。【いひあへり】多くの人が互にさう言ひあつて居たといふ意。【まさしく】たしかに。鬼が何所へ行つたなど見たやうな事を言つて居るが、而も確にそれを見たといふ人はない。【そらごと】うそ。實際見たといふ人もないが、又うそだと断言する人もないのである。かういふ噂の行はれる場合の有様がよく寫されて居る。【上下】社會の上下、即ち身分の高い人も下賤なものも。【いひやまず】そればかりをやかましく言つて居るといふ意。【東山】今いふ「東山」と同じもの。説明するまでもなからう。【安居院邊】舊京都市の北方。叡山の僧、安居院法印聖覺の里坊があつた邊をいふ。山城名跡巡行志(一)に「安居院。大宮通寺内邊地名舊在安居院。」(正徹本には「あご院へんへ」とある。もとはアゴケンといつて居たのであらう)。「まかり」此所はたゞ「行く」の意。【四條より上さまの人】「上さま」は、上の方といふ意。京都は北に宮城がある爲、北を上といふ。隨つて此所は四條の通から北の方の人々といふ意である。【一條室町】一條通と室町の通の交又する附近で、今も室町といふ名が残つて居る。【の／＼しりあへり】皆がやかましく言騒いで居る。【今出川】今は町名に「今出川」といふのがあつて、川はないが、昔はこの邊に北より南へ流れる川があつたのである。場所は室町の近くである。【見やれば】遠くの方を見る意。【院の御棧敷】上皇が賀茂祭を見物される爲に設けた棧敷で、常設になつて居たものらしい。【更にとほりうべうもあらず】「更に」は、全く。「とほりうべう」は、「通り得べく」の音便。全く通れさうもない程。【たちこみたり】人が群集して居る。【はやく跡なき事にあらざめり】「はやく」は、もと／＼。「跡なき事」は、根據のない事、でたらめの話。「あらざめり」は、「あらざるめり」で、ないやうであるの意。【人を



やりて見するに、兼好自身は安居院の方へ行く時、澤山の人々がどん／＼鎌室町の方へと走って行くのを見たが、自身其所へ行つて見る程の熱心も好奇心もない。しかし多少の興味はないでもないから、歸宅後召使か何かをその方面へ見にやつたのである。【かく立ちさわぎて】正徹本には「かくしなし。【おほかたあへるものなし】この「おほかた」は、「さつぱり」とか「全く」とかの意。「あへるものなし」は、使が歸つてからの報告によつて書いたもので、彌次馬は澤山殿いで居るが、實際鬼に逢つたといふものは一人もなかつたといふ意。【はては】しまひには。【聞諍おこりて】喧嘩が起つて。【あさましき事】あきれる程ひどい事。喧嘩の爲に怪我人が出来るといふやうな事をいふ。【おしなべて】一般に。世上一般に。【わづらふ】病氣になる。【正徹本には「この」とある。】。【かの鬼のそらごと】前には「そらごとと云ふ人もなし」とあつたが、此所は「そらごと」ときめて言つて居る人の言を擧げたのである。筆者自身も最初は多少好奇心もないではなかつたが、結局「そらごと」だと思つて居たのである。【此のしるしをしめすなりけり】「しるし」は、前光。

【西園寺】については、諸抄大成に文段抄を引いて「此比は西園寺殿北條家にしたしみ有りて威勢おほしける故、諸家の中にまづ書出したるべし」といひ、又「山案、當時威勢の有りしは太政大臣實兼公左大臣公衡公也」とある。確にこの通りであるが、この事實を假に應長元年の事とすると、實兼も公衡ももう現職には居なかつた。まうして年は實兼が六十三歳、公衡が四十八歳、實兼は既にその十二年前に出家し、公衡はこの年八月に出家した。こゝは別に誰の事をいつて居るといふわけではないが、参考として書添へておく。

五一

龜山殿の御池

龜山殿の御池に大井川の水をまかせられむとて、大井の土民におほせて、水車をつくらせられ

池へ、大井川の水を引かれようといふので、大井の百姓に命じて、水車を作らせられた。この時、百姓等には澤山の錢を賜ひ、四五日中に作り上げて、川に掛けたが、さつぱり廻らなかつたので、いろ／＼と直してみなければならぬ、とう／＼廻らないで、そのまゝ空しく立つて居た。そこで今度は、宇治の百姓を召して、こしらへさせられると、何の苦もなくやすやすと作つて差上げたが、今度は思ふやうにうまく廻つて、立派に水を汲上げた。何でもその道を知つて居

けり。おほくのあしを給ひて、數日にいとなみ出して、かけたりけるに、大方めぐらざりければ、とかくなほしけれども、終にまはらで、いたづらにたてりけり。さて宇治の里人をめして、こしらへさせられければ、やすらかにゆひてまゐらせたりけるが、おもふやうにめぐりて、水をくみ入るゝ事めでたかりけり。萬に其の道をしれる者は、やんごとなきものなり。

終の所にある「萬に其の道をしれる者はやんごとなきものなり」といふ思想は、他の所にも折々見えるが、これはかの故實趣味と同じ傾向のものであつて、何でもその道の者でなければ駄目だといふのである。まうして此所はその實例として水車の事を擧げたのである。

【龜山殿】山城葛野郡嵯峨にあつた。今の天龍寺はその舊址である。龜山の名は、小倉山東南の尾が龜の形に似て居るより起つたといふ。もと檀林皇后(嵯峨皇后)のお建てになつた檀林寺のあつた處であるが、その後、後醍醐院がその跡に仙洞を御造營あつて「龜山殿」といひ、龜山院亦此所を仙洞とせられたのである。増鏡(おりの雲)に後醍醐院の事を書いて、「又嵯峨の龜山の名もと、大井川の北の岸にあたりて、ゆゑしき院をぞ造らせ給へる云々」とあるは即ちこれである。【大井川の水】「大井川」とも書く。源を山城愛宕郡鞍馬山の北に發し、一旦丹波に入つて、後所謂保津川となつて再び山城に入り、嵐山の麓に至つて又大堰川の名となり、東南流して葛野郡桂村(今は市内)を経て桂川の名となり、後鴨川を合せ、攝津に入つて淀川に合するのである。この川は、龜山殿の南を通るので、其所から泉水の水を引かれたのである。【まかせられむとて】「まかす」は、水を引くをいふ。「まかせられむ」の主格は院である。但しこの「院」を従来の註釋書は「龜山殿」の名から聯想して、無造作に龜山院の事として居るが、龜山院とするには何の證據もない。此所の「院」は、恐らくは後醍醐院であらう。【大井の土民】「大井川」の事は前にも書いたが、これは川全體の名ではなく、嵯峨・松尾の邊を流れる部分



るものは尊いもの  
だ。

を特にさう呼ぶのである。随つて此所に「大井」といふのは、その川に沿うた巖あつたりの土地をいふものと見てよからう。「土民」はその地の百姓。【おほせて】おほせつけて。【水車】今日田に水を引く時に使ふやうに、水車で川の水を泉水の方へ送るのであらう。【つくらせられけり】この「られ」は敬相で、「造らしめ給ひけり」の意。【あし】鎖をいふ。今「おあし」といふは、之に「お」(御)が附いたのである。【数日にいとなみ出して】数日に「は、数日にして、即ち数日かゝつての意。いとなみ出して」は、造り上げて。(正徹本には「日かずへていとなみだして」とある)【かけたけり】その水車を、水を引く所へすまつけたのである。【大方】こゝも「少しも」の意。一五二頁参照。【とかく】いろ／＼と、さまざま／＼になどの意。【いたづらにたてりけり】「いたづらに」は、「空しく」と同じく、何の役にも立たぬ意。「たてりけり」は「立ちてありけり」の意。【さて】そこで。【宇治の里人】「宇治」は、今の宇治町附近を廣くいふ。今は茶で有名な處であるが、もとは水車で有名で、歌などにもよく詠まれて居る。「里人」は「土民」と同じく、その土地の百姓をいふ。宇治は水車で有名な處であるから、今度には特にそれをお召しになつたのである。【こしらへさせられければ】正徹本には「調ぜさせられければ」とある。【やすらかにゆひて】「やすらかに」は、やす／＼と、即ち何の苦もなく上手にの意。「ゆふ」は、組立て造る意。水車を外の物にゆはへつけるのではない。【まゐらせたりける】差上げた。但し極軽く、「ゆふ」を鄭重に言つたくらゐのもの。【おもふやうにめぐりて】「おもふやうに」は、人々のかうありたいと思ふ通りうまく。【水をくみ入るゝ事】正徹本には「水をくみているゝこと」とある。【めでたかりけり】立派であつた、見事であつたなどの意。此所は語の順序を少し變へて、「立派に水を汲入れた」といへば分り易い。【萬】萬事。何事につけても。【其の道をしれる者】其の道に通じたもの。但し「其の道」は、勿論何の道でも構はない。「やんごとなきものなり」尊いものである。

五二

仁和寺にある法師、年よるまで石清水ををがまざりければ、心うく覺えて、ある時思ひたちて、たゞひとりかちよりまうでけり。極樂寺・高良などををがみて、かばかりとこゝろえて、かへりにけり。さてかたへの人に逢ひて、「年比おもひつる事はたし侍り。聞きしにもすぎたふとくこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそほいなれとおもひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしき事なり。

此所は前段に「萬に其の道を知れる者はやんごとなきもの」だといつた後を受けて、何事も本當によく心得て居なければならぬ。よくも知らぬ者が、よい加減に考へて事をしては、とんでもない過をする。だから何事でも、よく知らない者には、指導者が必要だといふことを、仁和寺の法師の逸話を書くにつけて述べたのである。(尤もその趣意を述べる爲に、この例を挙げたといつては語弊がある。やはり話が主で、「すこしの事にも云々」は、それを述べるについての附録である)。

【仁和寺】山城葛野郡花園村、宇御室(今は京都市内)にあり、大内山仁和寺といふ、今もある眞言宗の名称である。仁和二年八月、光孝天皇の勅願によつて造營の工を起し、天皇崩御(同三年八月)の後、宇多天皇の仁和四年八月に落成した。さうして宇多天皇は御譲位の後、昌泰二年十月十五日此所で御落飾あらせられ、ついで延喜元年十二月十三日、東寺に於て傳法灌頂を僧正益信に御受けになつた。さうして同四年三月この境内に御造營の御室に移御あらせられたのである。寺の一名又は處の名を「御室」といふのはその爲である。又「法皇」といふ御稱號もこの時始めて出來たのである。【ある法師】「或法師」である。但しこゝは前からの續きで「仁和寺に居た或

仁和寺に居た或法師が、年よるまで、石清水の八幡に参拜しなかつたので、殘念に思つて、或時思ひ立つて、只ひとり徒歩で参詣した。さうして極樂寺や高良などの末社だけを拜んで、肝心の八幡様へは参らず、名高い石清水の八幡様はこれだけのものだと考へて歸つてしまつた。さて傍輩に向つて、「年來思つて居た事を成し遂げました。これまで人から聞いて居たのにも増して、實に尊い事でございます。それにしても、参詣に來た人々が、誰も彼も皆山へ登り



ましたのは、何事があつたのでせうか、實は私も行つてみたいとは思ひましたが、神様へ参るのが目的だと思つて、山までは見ませんでした」といつた。少しの事にも案内者といものはありたいものである。

法師」の意と見るべきである。(正徹本には「仁和寺なる法師」とある)。「石清水」石清水八幡宮。男山八幡宮ともいふ。山城観喜郡にあり、今官幣大社。宇佐八幡を勧請したものである。「をがまざりければ」京都の近くではあるが、當時は交通が不便であつた爲に、まだ一度も参詣したことがなかつたのである。「心うく覺えて」残念に思つて。「かちより」徒歩にて。この語、今日ならば「徒歩にて」といひさうであるが、古くは「徒歩より」といふのが普通である。「馬より行く」「船より行く」も同様の言ひ方である。「まうでけり」まゐつた。「極樂寺高良」兩所とも男山の麓にあつたもの。もとは神佛混淆であつたから、神社の境内に寺もあつた。この「極樂寺」も所謂宮寺の一であつたが、今はない。「高良」は、攝社の一で、今も高良社といひ、所謂御旅所の傍に残つて居る(極樂寺はこの傍にあつたのである)。「高良」は、今カウラと呼んで居るが、もとはカハラであつたのだから。「かばかりとこゝろえて」これだけと思つて。有名な八幡様は要するにこれだけのもので、もうこれ以外に本社があらうなどとは思はずにである。「かたへの人に逢ひて」傍輩に向つての意。「逢ひて」は、向つて。「年比」年來。但し此所は久しき以前からといふ意である。「數年この方」などと年數を短く切つては、意味が違ふ。「思ひつる事」心の中に思つて居たこと、即ち男山参詣のこと。「はたし侍りぬ」爲しとげましたの意。「聞きしにもすきてたふとく」社殿の有様を莊嚴なことは前々より何人も人に聞いて居たが、さて實際行つて見ると、どうして／＼豫想以上の莊嚴さであつたといふ意。「そも」それにしても。「参りたる人ごと」参詣に来た人が皆。「山へのぼりし」自分の参つたのは麓にある社であるから、其所から更に上の方へ上つて行くをいつたのである。「何事かありけむ」山の上にはどういふ事があつたのであらうかの意。(正徹本は、この下に「と」がある)。「ゆかしかりしかど」「ゆかし」は、まだ知らないもの見ないものに對して、何となく知りたいたいか見たいと思ふ心の情態をいふ。どういふ事があるのだらうか、實は自分も多少心が動いて、行つてみたいと思つたがの意。「ほい」本意。本来の希望。「山までは見ず」山の上までは行つて見なかつたの意。「すこしの事にも」むづかしい事をする場合などは言ふまでもないが、たとひちよつとした事にも。「先達」案内者。先に立つて導き教へてくれる人をいふ。「あらまほしき事なり」ありたい事である。



五三

これと同じく仁和寺の法師の話であるが、この寺に居た兒(チゴ)が、今度いよいよ法師にならうとする、そのお別れだといふので、平生親しくして居たものが寄り集つて、めい／＼遊び興ずることがあつたが、その集つた中の一人、だんだん酔つて、つい面白みに釣込まれ、調子に乗り過ぎて、側にあつた足舄を取上げて、頭にかぶつた。初は、つかへるやうになつて、なかなか

是も仁和寺の法師、童の法師にならむとする名残とて、各あそぶこと有りけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足舄をとりて、頭にかぶきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、かほをさし入れて、舞出でたるに、満座興に入ることかぎりなし。しばしかなで後、ぬかむとするに大かたぬかれず、酒宴ことさめて、いかゞはせむとまどひけり。とかくすれば、くびのまはりかけて血たり、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、打ちわらむとすれど、たやすくわれず、ひゞきてたへがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に、かたびらを打ちかけて、手をひき、つゑをつかせて、京なるくすしのがり、ゐて行きてけるに、道すがら人のあやしみ見る事かぎりなし。醫師のもとにさし入りて、むかひゐたりけむありさま、さこそことやうなりけめ。物をいふも、くゞもり聲にひゞきて聞えず。かゝる事は、文にも見えす、傳へたるをしへもなしといへば、又仁和寺へ歸りて、したしき者、老いたる母など、枕上によりゐて、なきかなしめども、きくらむとも覺えず。かゝるほどに、ある

〔五三〕 是も仁和寺の法師



もの云ふやう、「たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりは、なか生きざらむ。たぐちからをたててひき給へ」とて、藁のしべをまはりさし入れて、かねをへだてて、頸もちぎるばかりひきたるに、耳・鼻かけうげながら、ぬけにけり。からき命まうけて、久しくやみむたりけり。

前段の話が仁和寺の法師の事であつたので、それから思ひついて、此所に又仁和寺の法師の事を書いたのであらう。二つも仁和寺の話が出て、それが又同じ馬鹿げたやうな話なので、わざと最初に「これも仁和寺の法師」と書いたのである。恐らく筆者もこの邊は一人微笑しながら筆を執つて居たのであらう。警書抄に此の段を評して、「此段は自智を以てしそなひたるためしなり。先達のおきてをとひてしたがはぬ失をいへり」とある。なるほど前段は、何事も先達の指導に従へといふ意であるが、この段の意味はさうではない。強ひて言へば、次段と同様、あまりに興あらむとしては、却つてとんでもない結果を來すものだといふ意である。けれどもそれは強ひて言ふので、この段などは、教訓といふよりは、寧ろたゞ面白い一條の話と見るが至當であらう。

【是も仁和寺の法師】 前段の話も仁和寺の法師に關する事であつたが、これも亦同じ仁和寺の法師に關する話である。但し此所に「法師」といつたのは、罪をかぶつた法師の事である。【童】 次段にある兒と同じもの。【法師にならむとする名残】 前(一四四頁)にいふ通り、兒は後に頭を割つて法師になるが、兒の間は全く女のやうな風をして居たのである。さて此所の意味については、「参考」に「兒のはじめ得度する前の名残に日比入魂せし友達を振舞ふ事」がある、それをいふのだとあり、その「名残」といふ語の意味については、沼波氏の「講話」には、「俗體を離れる別れだといひ、内海氏の「詳解」には、「今日は兒としての最終の日だといふので、そのなごりを惜しむ酒宴を催したのである。なごりは、こゝは別を惜しむ意のものである」とある。「名残」は、やはり「別

かうまく入らなかつたが、鼻をおさへて平たくして、うまくその中へ頭を入れて、舞出たところが、その座に居た者は、皆非常に面白がつた。さて暫く舞つた後で、その罪を抜かうとしたが、さつぱり抜けない。これには一同又大弱り、酒宴の興もさめはてて、どうしたものかと當惑した。さて抜かうとして、いろ／＼とやつて居ると、頸の廻りに傷がついて、血が流れ出し、たゞもうむやみと腫れ上つて、息もつまるやうになつたので、打割らうとしたが、容易に割れず、がん

がんと響いて、たまらないので、結局割ることも出来ず、今はもうしやうがないので、三足の角の上に帷子(カダピラ)をかけて、手を引き、杖をつかせて、京都の醫者の所へ連れて行つた。ところが道々人の不思議がつて見ることは非常なものであつた。醫者の所へ入つて行つて、醫者と對ひあつて坐つて居た有様は、さぞかしへんでこなものであつたらう。物を言つても、聲が鼎の中にもつて、わんわんと響くばかりで、はつきり聞えない。醫者も「かういふ事は、本に

れであらうが、しかし自分が俗體に別れる記念として兒が友達を呼んだと見ては、此所はどうも工合が悪さうである。此所の文章から考へると、今まで兒として、いはば男の中の女のやうな氣持で見て居たものが、今度いよ／＼自分たちと同じ坊主になるといふので、そのかはいゝ兒の姿に別れる最後といふので、坊主たちが寄つて、いはば送別會のやうなものをしたのであらう。その席には無論仲間の兒も居たらうが、主人役はやはり法師で、これから法師にならうとする兒はお客であらう。【各あそぶこと有りける】 「各」は、その時集つた法師たち。勿論中には傍輩の兒もあらう。「あそぶ」は、古い使ひ方の音楽ではなく、酒など飲んで遊び楽しむ意。つまり今日の使ひ方と同じである。【酔ひて興に入るあまり】 「興に入る」は、「興に乗ず」と同意で、面白さに調子づくこと。酔つて、面白さに調子に乗りすぎての意。【足鼎】 「かなへ」は、今いふ釜の事で、それに脚の三本附いたものである。つまり脚のついた釜である。【かづきたれば】 かぶつたところが【つまる】は、つかへてうまく通らない。「する」は、此所では「ある」又は「なる」の意。耳や鼻がつかへて、うまく入らなかつたのである。【鼻をおしひらめて】 鼻が高くて邪魔になるから、それをおさへて平たくして。【舞出でたるに】 舞つて座中へ出たところが。【滿座】 その座に居合せたもの皆。【かなでて】 「かなづ」は、多く音楽を奏することにいふが、舞ふ意もあり。「舞ひかなづ」などともいふ。此所は舞ふ方の意である。【大方ぬかれず】 「大方」は、さつぱり。全く抜くことが出来ない。【ことぞめて】 面白みがなくなつて。【いかゞはせむとまどひけり】 「まどふ」は、迷ふ、まどつく、途方にくれる。どうしたものか途方にくれた。【とかくすれば】 抜かうとしていろ／＼とすると。【くびのまはりかけて】 「かく」は、肉が缺け取れる意で、傷つくこと。頸の周圍が傷ついて。【血たり】 血が垂れ。血が流れ出し。【たゞはれにはれみちて】 たゞもう一杯に腹れあがつて。【打ちわらむとすれど】 鼎が抜けないから、それをたゞきわらうとするが。【ひゞきて】 割らうとして鼎の上からたゞくので、鼎の中では、がん／＼とひゞくのである。【かなはで】 割ることが出来ないで。【三足なる角の上に】 鼎の足を「角」といふわけではないが、此所は足が上の方に向つて突出して居るので、それを角に見立てて言つたのである。【かたびら】 帷子。裏のない單の着物をいふ。特に麻草の單の夏衣をいふのは、これから轉じたのである。【手をひき杖をつかせて】 正徹本には「杖をつ



も見えないし、傳へてある教もない」といふので、仕方がない、又仁和寺へ歸つて、親しい者や老母などが枕許に寄り集つて、泣き悲しんで、當人には聞えらるゝと思へない。かうして居るうちに、或者が「たとい鼻は切れてなくなつても、命だけは助らぬことにはあるまい。たゞ力一杯引き給へ」といふので、薬のしべを頸のまはりに差入れて、鼎の金（カネ）と頸の間に幾分の隙間を作つておいて、首もちぎれるほど強く引いたところが、耳や鼻は缺け

かせ手をひきて。「京なるくすしのがり」「京」は、京都の町をいふ。當時に於ては、御室より京の町までは、相當距離があつたのである。「くすし」は、醫者。「のがり」は、の許への意。【あて行きけるに】連れて行つたところ。【正徹本には「あてゆきにけり。光廣本・野種等には「あて行きける」とある。】【道すがら】道々。寺から醫者の所へ行く途中。【さし入りて】はひり込んで。但し家の中へはひり込んで座敷へ上つての意なるは、いふまでもない。【むかひるたりけむ】醫者と對坐せるをいふ。「あたりけむありさま」は、筆者の想像を表はす。【さこそことやらなりけむ】「さこそ」は、今日「それこそ」といつて、かういふ場合に使ふと同意の語。「さぞかし」といつてもよからう。「ことやら」は、「異様。」希代な有様。【くゞり聲】こもつてはつきりしない聲。但し此所は鼎の中に聲がこもつて、わん／＼といふやうに響き、はつきり聞えないのである。【かゝる事】こんな病氣といつたやうな意。但し此所ではその病氣に對する療法をも含めた言ひ方である。【文にも見えず傳へたる教もなし】「文」は、醫書をいふ。古今の醫書は勿論十分研究して居るけれども、こんなへんてこな病氣については何も書いてあるものがない。又昔から秘法として傳へられた數々の療法もよく心得て居るが、それらの中にも、こんな病氣に對する手當方を教へたものは一つもないといふ意。【枕上によりゐて】枕もとに集り居て。【きくらむとも覺えず】頭は鼎の中にあるから、外部からはよく分らないが、見た所どうも聞いて居さうにも思はれないといふのである。【きれうすとも】切れ失すとも。引きちぎれて無くなつても。【命ばかりはなどか生きざらむ】一命だけはどうして助らないことがあらう、きつと助るだらうの意。【ちからをたててひきたまへ】力を入れて引きなさい。【正徹本には「ひきにひきたまへ」とある。】【薬のしべ】わらしべ。「わらしべ」ともいふ。薬の心である。【正徹本には「わらのすべ」とある。】【まはり】首のまはり。但し首と鼎との隙間へ入れたのである。【かねをへだてて】「かね」は金。鼎の事。「へだて」は、その蓋しで、頸と鼎との間に隔を作つての意。【頸もちぎるばかり】頸もちぎれる程ひどく。【かけうげながら】「うげ」は、穴があく。「ながら」は、「けれども」とはいふものの「な」などの意。【からき命まうけて】「からき命」は、あぶない命、即ちもう少しの事で死ぬ所であつたあぶない命である。あぶない命を拾つて。

五四

て穴になつたもの、とにかく抜けた。かうしてまあやつと危い一命を拾つて、永らくわづらつて居た。

御室にいみじき兒のありけるを、いかでさそひ出してあそばむとたくむ法師ども有りて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流の破子やうの物念比にいとなみいでて、箱ふせいの物にしたゝめ入れて、ならびの岡の便よき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけなど、おもひよらぬさまにして、御所へ参りて、兒をそゝのかしいでにけり。うれしと思ひて、こゝかしこあそびめぐりて、有りつる苔のむしろになみゐて、「いたうこそこうじにたれ。あはれ紅葉をたかむ人もがな。驗あらむ僧達ののりこゝろみられよ」などいひしろひて、埋みつる木のもとにむきて、數珠おしすり、印こと／＼しくむすび出でなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つや／＼物も見えず、所のだがひたるにやとて、ほらぬ所もなく、山をあされどもなかりけり。うづみけるを人の見おきて、御所へまわりたるまに、ぬすめるなりけり。法師どもことの葉なくて、聞きにく／＼いさかひ、はら立ちてかへりにけり。あまりに興あらむとする事は必ずあいなきものなり。

【五四】御室にいみじき兒のありけるを



とは思ひもよらぬやうにし、さて御所へ行つて、その兒を誘ひ出した。

そこで一同喜んで、あちこちと遊び廻つて、それからかか草が一面に生えた處に来て、皆が居並び、「どうも非常にくたびれた。あゝ、誰か紅葉を焼(タ)いて酒を暖めてくれるやうな風流人があればよいがなあ。どうぢや、靈驗のある坊さんたちは、一つ祈つてみられよ」などと、互に言ひあつて、埋めておいた木の下の方向いで、数珠をさらさらとおしすり、印を仰山らしく結んだりなどして、た

これは前段の要旨に書いておいた通り、餘りに興あらむとすることは必ずあいなきものなる。今一つの興味深い話である。一體わざとがましい事は、兼好はすべて嫌ひで、それはこれまでも度々現れた彼の趣味であり主張であつて、その點からいふと、この段なども、確にその思想の現れの一つと見ることが出来る。但し前段におけると同様、この段においてもやはり教訓は寧ろ附録と見てよからう。

【御室】 一五五頁「仁和寺」の項を見よ。【いみじき兒】 非常にかはらしい兒。【いかできそひ出して】 「いかで、何とかして、どうぞして。(正徹本には「さそひいでて」とある)。「たくむ」たくらむ。考へはかる。【法師ども】 これはもう大きくなつて居る法師等で、それが美少年を誘ひ出して遊びまわるといふのである。【能あるあそび法師どもなど】 「能ある」は、藝の達者な。「あそび法師」は、歌謡・音楽などを職業とする法師で、つまり見た所だけは法師であるが、その實遊藝を専門とせるものをいふ。(正徹本には「ども」なし。これはなくともよきさうである)。「かたらひて」事情を話して自分たちの仲間に引入れるをいふ。但し此所は雇うて来たことであらう。【風流の】 しゃれた。風雅な。【破子やうのもの】 「破子」は、「破籠」とも書く。中に隔があつて、それにいろ／＼の食物を入れるやうにした器。つまり重箱の類である。【念比にいとなみいでて】 「念比」は、當字。念入りに。「いとなみいでて」は、こしらへて。【箱ふぜいの物】 「ふぜい」は「風情」で、前の「破子やうのもの」の「やう」と同様、それに類するものといふ意を表はす。つまり「箱のやうなもの」である。(正徹本には「箱やうのもの」とある)。「したゝめ入れて」「したゝむ」は、とゝの(用意すること。ちゃんとうまく収め入れて)。「ならびの岡」 雙の岡。仁和寺の南にある岡。【便よき所】 都合のよい場所。眺もよく酒宴などをするにも都合のよい所である。(正徹本には假名で「びんよき所」とある)。「うづみおきて」 埋めておいて。(ウヅムは今日下二段に使うが、古くは四段であつた)。「紅葉ちらしかけなど」 土を掘つて埋めた跡のわからないやうに、その上へ紅葉の葉を散らしかけたりなどして、ごまかしたのである。【おもひよらぬさまにして】 そんな所に辨當などが埋めてあらうなどは、思ひもよらぬやうにして。【御所】 仁和寺の事である。但し「御所」の語は、もと所謂「御室」をいつたのであるが、「御室」即ち「仁和寺」となつてからは、「御所」も即ち「仁和寺」と同意に使はれるやうにな

いさうらしく振舞つて、さて木の葉を掻きのけたけれども、一向(イツカウ)何も見えな。場所が違つたのだからかといふので、その邊一帯に掘らぬ所もなく山をさがし廻つたが、遂になかつた。これは前に埋めたのを、人が見ておいて、皆が御所へ行つた間に盗んだのであつた。法師たちは何と言はう言葉もなく、互に閉苦しく言争ひ、腹を立てて歸つてしまつた。何でも餘りに面白くしようとすることは、却つてきつとつまらないものである。

つたのである。【参りて】 行きての意。「御所」といふから鄭重な語を使ったのである。【そゝのかしいでけり】 誘ひ出した。「そゝのかす」は、自ら進んでするやうに、他人に對しすゝめたること。【うれしと思ひて】 主格は誘ひ出した法師たちである。【有りつる苔のむしろ】 「有りつる」は、「かの」とか「例の」とかいふ意。前に破子を埋めておいた所をいふ。「苔のむしろ」は、苔の一面に生えて居る所。【なみみて】 並び居て。尤も一列に並んだやうなものではなく、ぐるりと圓くでも坐つたのであらう。【いたうこそうじにたれ】 「いたう」は、「いたく」の音便。「こそうず」は「困ず」。こまる意であるが、此所では疲れたことをいふ。【あはれ紅葉をたかむ人もな】 「あはれ」は、あゝといふ歎息の聲。白樂天の「林間暖酒燒紅葉」石上題「詩佛三教書」によつたのである。隨つて此所は、紅葉でも焼いて酒の燗をしてくれる人でもあればいゝがなあの意となる。【驗あらむ僧達】 「驗」は、佛道修行の功を積んで得た靈驗。さういふ僧達は、祈禱によつて超自然的の事をも爲し得るものとせられて居たからである。【いひしろひて】 互に言ひあつて。【数珠おしすり】 数珠を兩掌の間に入れておしむをいふ。佛を念ずるさま。【印こと／＼しくむすび出でなど】 「印」は、眞言宗で呪をする時、指で種々の形をすること。それを「印を結ぶ」といふのである。「こと／＼しく」は、仰々しく。印を結ぶさまのいかにも勿體ぶつて、たいさうらしくあるをいふ。【いらなくふるまひて】 「いらなく」は、たいさうらしくの意。但し上の「こと／＼しく」と同じ意と見てよからう。「ふるまひて」は、行ひて。即ち印を結ぶことをいふ。【つや／＼物もみえず】 「つや／＼」は、少しも。【ほらぬ所もなく山をあされども】 雙の岡中到處處廻つて尋ねさがしたがの意。【この葉なくて】 「この葉」は、言葉。言葉もなく。即ち一同あきれ返つて、暫くは何とも言ひやうのなかつた事をいふ。【聞きにくくいさかひ】 他の人が聞けば、聞きにくくいさかな言ひ方をして互に言ひあふの意。但し前に「この葉なくて」といひ、直その次に「聞きにくくいさかふ」では矛盾するが、「言の葉なくて」は、何もなことを發見した時暫くのこと、その沈黙がすむと、今度は反對にやかましく言つて、「君が悪い君が悪い」などと互に言争つたといふのである。(正徹本には「いとくまにく」とある)。「あまりに興あらむとする」 あまりに面白くしようとす。【あいなき】 つまらな。【五四】 御室にいみじき兒のありけるを



五五

家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にもすまる。あつき比、わろき住居はたへがたき事なり。ふかき水は涼しげなし。浅くてながれたる、遙にすゞし。こまかなる物を見るに、遣戸は葎の間よりもあかし。天井の高きは、冬さむく、燈くらし。造作は用なき所をつくりたる、見るも面白く、萬の用にもたちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

【五五】家の造りやうについての筆者の好みを述べたのである。

【家の作りやうは夏をむねとすべし】家の建方は、夏を主とするがよい。【冬はいかなる所にも住まる】冬の間はどんな悪い所にも住むことが出来るといふ意。但し此所の「よしあし」は、材料の良否ではなく、主としてその建方の良否である。【わろき住居】此所も右にいふ意の「わるき」で、建工合のよくない事をいつたのである。【ふかき水は涼しげなし】ちよつと考へると、水は深くてへたのが涼しさうな感じがするやうであるが、實はさうではない。池の水などの深いのは、見ても別に涼しい感じはしないといふのである。「涼しげなし」は、涼しさうな感じがしない。【浅くてながれたる遙にすゞし】「流れたる」は、「流れたる水は」の意。これは泉水などの浅い水が、ちよろ／＼と音を立てて流れて居るをいふ。前の「深い」方は見た感じ、この「浅い」方は、半ば聞いた感じであらう。いづれにしても、これは前からの關係で、夏についていつたのである。【こまかなる物を見るに】細字などのこまかい物を見るのに。【遣戸は葎の間よりもあかし】くはしく書けば、「遣戸のある間は葎のある間より

【五五】家の造り方は、夏を主とするがよい。冬はいかなる所にも住まる。あつき比、わろき住居はたへがたき事なり。ふかき水は涼しげなし。浅くてながれたる、遙にすゞし。こまかなる物を見るに、遣戸は葎の間よりもあかし。天井の高きは、冬さむく、燈くらし。造作は用なき所をつくりたる、見るも面白く、萬の用にもたちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

用といふ事ばかりを主眼とせず、無用な所を造つてあるのが、見た所も面白く、又何かの用にも立つてよいと、人々が評しあつた。

りも明るし」といふ意。「遣戸」は、今日の障子と同様、敷居の上を左右に動かして開閉する戸。これは上から下まで全部が開くから、開ければ光線が十分入る。ところが葎のある部屋は、たとひ葎を上げて、遣戸を開けたやうには明るくないといふのであらう。但し「葎」にはいろ／＼の種類があるが、多くは上下の二枚に分れ、上の方を釣上げるやうにしてある。下の方も外すやうになつて居るから、必要の場合にはこれも外すが、普通の場合には、上の方だけを釣上げるのである。此所に遣戸と比較したのは、多分上だけを釣上げた場合であらう。上を釣上げ、下を外してしまへば、遣戸をあけたよりは却つて明るいわけである。【天井の高きは云々】この意味は勿論誰にもわかる事であるが、當時は今日のやうな防寒の設備がなかつたから、全體として冬季における室内の寒さは、随分ひどかつたのであらう。燈の如きも、當時の燈の薄暗かつたことは、到底今日の吾々の想像も及ばぬくらいであつたのである。【造作】今いふ「造作」は、戸欄・畳などを取附けること、又その建具の類をいふのであるが、此所にいふのはそれではなく、家を建てることであらう。随つて「造作は」といふ意であらう。【用なき所をつくりたる】平生は何の用に使ふともきまらないやうな所を作つておくのはこの意。但しこれは空地をおくとか、裝飾を施すとかの事をいふのではない。手近い例でいふと、近頃の若い人達が郊外に文化住宅とかいふ類の家を建てるには、縁側は無用なものだから、直接壁にして窓を附けるとか、玄関の土間は廣くても何の役にも立たないから、出来るだけ狭くするとか、さういふ風に理窟から割出して、少しもむだのない家を建てようとする。さういふのはよくないといふのである。【見るもおもしろく】無用らしく見える場所のある家の方が、一見した所、趣もあるといふのである。【よろづの用にも立ちてよし】平生は何の役にも立たないと思つて居る所が、案外いろ／＼の用に立つものだといふのである。これは確に事實である。【人の定めあひ侍りし】「人」は、「或人々」の意。但しこの書に折々現れる筆法からいふと、恐らくは此所も兼好自身の考を述べることを、わざとかういふ書き方にしたのであらう。「さだめあふ」は、評定しあふ、即ち幾人かの人が寄つて評定しあふといふ意。【さだめあふ】は、最初の「家の作りやうは」から「立ちてよし」までを受けるのであらう。

【五五】家の作りやうは



久しぶりて逢つた人が、自分の方に起つた事ばかりを、いろ／＼と残りなく話しつづけるのは、面白くない事である。たとひ極親しい間柄の人でも、久しく別れて居て逢へば、多少氣のおけるやうな事になからうか、きつとさうあるべきである。それとは多少違ふが、一體下品な人間は、ちよつと何處かへ行つて来て、こんな面白い事があったなどと云つて、息を休める間もなく滔々と語り興ずる

五六

久しくへだたりてあひたる人の、我が方にありつる事かす／＼に残なく語りつゞくるこそあいなけれ。へだてなくなれぬる人も、ほどへて見るは、はづかしからぬかは。次さまの人は、あからさまにたち出でて、けふありつる事とて、いきもつぎあへすかたり興ずるぞかし。よき人の物がたりするは、人あまたあれど、ひとりむきていふを、おのづから人もきくにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出でて、見ることのやうにかたりなせば、皆おなじくわらひの、しる、いとらうがはし。をかしき事をいひても、いたく興せぬと、興なき事をいひても、よくわらふにぞ、しなのほど、はかられぬべき。人の見さまのよしあし、ざえある人は、其の事など定めあへるに、おのが身をひきかけていひ出でたる、いとわびし。

この段は、人と話をする場合の、話の仕方について書いたのであるが、大體三節に分けて見ると、分り易い。第一節は、久しぶりて逢つて居るのに、たゞ自分の方にあつた事ばかり話して、相手の事は少しも聞かうとしない人。第二節は、下品な人の話しぶりと、上品な人の振しぶりとは、かういふ風に違ふものと、例を以て兩者を比較したのである。次の第三節（「をかしき事」以下）は、文段抄にして居る通り、更に二節に分けてもよい。前半

ものである。上品な人が話をするのは、其所に澤山な人が居ても、その全體に話しかけなどはせず、たゞその中の一人に向つて話すのを、自然他の人々も聴くのである。ところがくだらない人間は、誰といふ相手もなく、澤山人の居る中へ出しやばつて、まるで見て居るやうに話したてる。すると、其所に居る者が皆一緒になつて、面白さうに笑ひさわぐ。實に騒々（サウ）しい。面白い事を言つても、あまり面白がつて笑はないのと、別に面白くない事を言つて

は、人の話の聞きぶりによつて、その人の上品・下品が分るをいひ、後半は、他人の批評などをして居る時に、自分の事を引合に出すのは、これ亦下品なものだといふのである。いづれも極めて普通の事だが、而もな／＼氣のつかぬこまかい點を、よく注意して描いた所が面白い。

【久しくへだたりてあひたる人】 長い間離れて居て、久しぶりて再び逢つた人。「人の」は、人が。【我が方にありつる事】 長く逢はずに居たその間に、自分の方に起つた事柄。【かす／＼に残りなく語りつゞくる】 いろ／＼と何もかも残らず、みんな話してしまふ意。これで相手の話は少しも聞かうとしない事がわかる。【あいなけれ】 面白くない。【つまらぬ】 くだらない。【へだてなくなれぬる人】 心に少しの隔てもなく、極親しくして居る人。【ほどへて見るは】 時がたつてから再び逢ふのは。【はづかしからぬかは】 恥づかしからぬからうや、恥づかしい意。「ほどへて見るは」、相手に對して何となく氣のおけること、氣がねのされること。【次さまの人】 第二位の人といふ意で、つまりぬ人間といふ意になる。此所は必ずしも身分の高下によつていふ。「下賤の人」ではない。なほ次の「よき人の項参照。【あからさまにたち出でて】 「あからさまに」は、かりそめにの意。「たち出づ」は、外出をいふ。即ち遠くへ旅行したとか何とかならば、又珍しく面白い事もあるが、たゞちよつと外へ出たといふだけで、たいさうらしく言ふことをいつたのである。【けふありつる事とて】 この「けふ」といふ語、大成には「けう」とし、諸抄兩説を記す、一説には今日（文段）、一説には興（句解）、山案、珍しき事を人のきかぬ先にと息もつぎあへず話るとあれば、前説勝れり、其上、下に語り興ずるとあれば、こゝも興に作れば重言に似たり」とある。一體「今日」はケフ、「興」はキョウで、假名遣が違ふのであるが、昔の人にはそれがわからなかつたのである。だからたゞ假名遣のみによつて判断することは出来ない。光廣本・維曉本・野拙・弘賢本など、比較的古い系統のものと思はれる本には「けふ」とあるが、これを「けふ」とし、次を「語り興ず」と漢字で書くと、この「けふ」がいかに「今日」とある。（辨慶物語に「基・雙六などをさせ、まことにけふある所へ」などある）。これでは却つて「けふありつる」が「興ありつる」ではないかといふ氣もする。「興に作れば重言に似たり」といふ大成の説は確に一理はあるが、ち

【五六】 久しくへだたりてあひたる人の



も、よく笑ふのと、この二つで、その人の人品の程度は推量される。他人の様子をよしあしを批評するとか、學問のある人について、その學問の事などを評しあつて居る場合に、自分を引合に出して言出したのは、實に厭な氣のするものだ。

よつと其所まで出て来た者が歸つて話をするのに、「今日あつた事」といふのではをかしいから、やはり上の「けふ」も「興」と見た方がよくはあるまいか。重言になるのは、書き方が悪いのである。「いきもつぎあへず」「息を續ぐ」は、休むこと。「あへず」は、能はずの意。休む間もなくぶつ續けにの意。「かたり興ず」得意になつて面白さうに話す。「よき人」「善人」の意ではない。「次さまの人」「下さまの人」に對していふので、第七三段に「下さまの人の物語は耳驚く事のみあり、よき人は怪しき事を語らず」とある、その「よき人」と同じ意味で、物のよくなかつた、身分あり上品な人といふ意。「物がたりする」所謂物語即ち小説風の話をするといふのではなく、たゞ話をするといふ事である。「人あまたあれど」その座には澤山居てもゝの意。「ひとりむきて」その中の誰か一人に向つて。「おのづから人もきくにこそあれ」自然他の人々もそれに耳を傾けて聽くやうになるのだといふ意。「よからぬ人」「よき人」の反對。「悪人」ではなく、「次さまの人」と同じ意味に使つたのである。「誰ともなく」誰を相手といふでもなくの意。「あまたの中にうち出でて」其所に居る澤山の人の中へ出しやばつて。「見ることのやうにかたりなせば」まるで今日の前に見て居るやうに話すといふのである。「皆おなじくわらひのよしする」「おなじく」は、其所に居る者が皆一様に。「わらひのよしする」は、大きな聲で笑ひさわぐ。「わらうがはし」「亂がはし」の音便で、騒々しい意。「をかしく事」面白い事。「いたく興ぜぬ」あまり面白がらない。「よくわらふにぞ」この「に」は、「によりて」の意の助詞。随つて、此所は正しく分りよく書けば、「……いたく興ぜぬと……よくわらふによりて」となるわけである。「しなのほどはかられぬべき」「しな」は「品」で、人品、人がら。「ほど」は程度。「はかられぬべき」は、「量り知り得べし」の意。「見さま」様子。「さえある人」「さえ」は「才」。學問をいふ。「其の事」「さえ」を承けていつたのである。此所はちよつとわかりにくい、結局次のやうな意味になるのであらう。——「人の見さまのよしあしを定めあふ時、又は才ある人については、その才の深淺などを定めあふ如き場合に」の意。「定めあへる」論評しあふ。「おのが身にひきかけて」自分の身を引合に出して。即ち自分に比較して。「わびし」いやな氣持のするものだ、面白くない事などの意。

五七

人のかたり出でたる歌物語の、うたのわろきこそほいなければ。少し其の道しらむ人は、いみじと思ひてはかたらじ。すべていともしらぬ道のものかたりしたる、かたはらいたく、聞きにくし。

すべて専門外の事はよく分らないものであるから、さういふ事については、かれこれ言はないがよい。よく分らない事を話して居るのは、聞きづらいいものだといふ事を、歌物語を例として言つたのである。

【歌物語】歌に關する話といふこと。即ち誰がどういふ場合にどんな歌を詠んだといふやうな話である。だからその中心になる歌がまづくては駄目になるわけである。【ほいなし】本意なし。がっかりする。【少し其の道しらむ人は】「其の道」は、和歌の道。多少和歌に心得のある人は。【いみじと思ひてはかたらじ】そんなものを立派なものだと思つては話すまい。但し歌の事がわからねばこそ、そんなものを得々として語り出すのだといふ意を含む。【いともしらぬ道】あまりよくも知らない道。「道」は勿論歌に限らぬ、何の道でもよい。【かたはらいたく】側で聞いて居ても馬鹿らしいの意。【聞きにくし】聞きづら。

五八

【五八】道心あらば住む所にしもよらじ

人が歌に關する物語をする時、その中に出て来る歌がまづいのは、全くがっかりするものである。多少ともその道に心得のある者ならば、そんなものを、立派な歌だと思つては話すまい。一體何でも、自分がよくも知らない道の事について話をして居るのは、側で聞いても、馬鹿らしく、聞きづらいいものである。



「道を求め悟を開かうとする心さへあつたならば、何處に住まうと構はないだらう。たとひ家に居り、人に交るとも、死後の安樂を願ふのに決してむづかしいことはない」と言ふ人もあるが、それは全く後世を願ふといふ意味のわからない人である。實際この世をはかないものと思ひ、必ず生死の境を出離しようと思ふならば、何の面白みがあつて、朝夕君に仕へ一家を顧みるといふやうな事に気が進まうや。一體人間の心といふものは、環繞の如何によつて移り變るも

「道心あらば住む所にしもよらじ。家にあり、人にまじはるとも、後世をねがはむに、かたかむと思はむに、何の興ありてか、朝夕君につかへ、家をかへりみるいとなみのいさましからむ。心は縁にひかれてうつる物なれば、閑ならでは、道は行じがたし。」

【道心】「道心さへあらば、どんな所に住んで居てもかまはない、境遇に支配されるなどといふのは、要するに確たる道心がないからだ、これはよく言ふことである。しかし筆者の考では、こんな事を言ふ人は本當の道心なるものを解しないのである。苟も本當に道心がある人ならば、出仕をしたり家庭を顧みたりするやうな考が起つて来る筈がない。道は修めむとすれば、どうしても世俗の縁を絶たなければ駄目だといふのである。」

【道心】「菩提心、即ち佛教にいふ所の正しい道求めむとする心。【住む所にしもよらじ】住む所、即ち境遇によつて修行の目的が完全に達せられるかどうかといふやうな區別はあるまいの意。つまり、どういふ處に住んで居てもかまはないだらうといふのである。【しも】は、意を強める助詞。【後世をねがはむにかたかむべきかは】「後世」は、「現世」に對し、來世即ち死後をいふ。「後世を願ふ」は、來世に於ける幸福を願ふ事で、所謂極樂往生を願ふのである。「かたかむべきかは」は、むづかしからうか、むづかしくはないの意。【いふは】世間にさういふ事を言ふ人があつて、さういふ人はの意。【さらに】全く。【少しも】「げには」「げに」に同じ。「は」「げに」といふ場合の「も」に同じく、たゞ意味を強めるもの。随つて「實は」といふ意ではない。(四四頁「げには」参照)【はかなみ】「はかなむ」といふ動詞。はかなしと思ふ。【必ず生死を出でむと思はむに】「生死」は、一切の衆生が各その因縁により、生れては死に、死んで生れること。「生死を出づ」は、所謂「出離生死」で、生死を出離し、解脱の域に達すること。「思はむに」は、思ふならば。「何の興ありてか】何の面白みがあつて。「か」は次

のであるから、世俗との關係を絶つて、閑寂な境地に居るのでなければ道を修めることはむづかしい。

【今】今の人間は、その器量、古人に及ばず、世を遁れて、山林に入つたところで、飢を凌ぎ寒さを防ぐ設備がなくては居られない事であるから、自然慾はつたやうに見えるやうな事も、場合によつては、ない

の「いさましからむ」までかゝり、「……や」の意味となる。【朝夕君に仕へ】「朝夕」は、たゞ「日々」といふ意。「君に仕へ」は、次の「家をかへりみる」に對し、外へ出て勤をするをいふ。【家をかへりみる】家の中の事——家業を勤めるとか妻子を養ふとか、さういふ事を全部含めていふ——を心にかけて考へる意。「かへりみる」は、上の「出でて仕へる」の意に對していつたのである。【いとなみ】仕事。但したゞ「こと」といふ意。【いさましからむ】「いさまし」は、氣が進むとか氣が乗るとかいふ意。前の「興ありてか」の「か」は此所へ關聯するのである。【心は縁にひかれてうつる】「縁」は、周囲の事情とか環境とかの意。方丈記に「必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らむ」とある。「境界」も、つまりこれである。「うつる」は、移り變る。人の心といふものは、その周囲の事情によつて左右せられ、いろ／＼と變化するものだといふ意。(第一五七段参照)【閑ならでは道は行じ難し】自分の精神を動搖させる外界の事情から離れて、一人閑寂な境界に居るのでなくては、本當に佛道の修行をすることは出来ないといふ意。

其のうつはもの、むかしの人におよばず、山林に入りても、餓をたすけ嵐をふせぐよすがなくては、あらぬわざなれば、おのづから世をむさばるににたる事も、たよりにふれば、などかなからむ。さればとて、そむけるかひなし。さばかりならば、なじかはすてしなどいはずは、無下の事なり。さすがに一度道に入りて、世をいとむ人、たとひ望ありとも、いきほひある人の貪欲おほきににるべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、あかざのあつ物、いくばくか人のつひえをなさむ。もとむる所はやすく、其の心はやく足りぬべし。かたちにはづる所も



「そんな事では、世を離れたかひがない。それほどなら、どうして世を捨てたのだ」と言ふのは、それはむちやだ。何といつてもや、一度佛道に入つて、世を捨てた人は、たとひ慾望があつたとしても、世に權勢ある人たちの、怒の多いのとは到底同日の論ではない。紙製の夜具や麻布の法衣、それから僅か一鉢の食物、藜(アカザ)の羹(アツモノ)といふくちの物なら、どれだけ世の費えに足らないもので

昔の人はえらかつたが、それに比べると、今の世の人はとても及ばないから、たとひ出家をしたとしても、昔の人のやうに行かない。随つて折にふれては、食の心も生じないとは限らないが、さうかといつて、そんな事なら世を離れた甲斐はない、何故世を捨てたなどと言ふのは、それはむちやな言分である。それらの人は、たとひ少々くらの慾望が起つたとしても、世間の威勢ある人たちが懸深いのとは、もとより同日の論でない。とにかく人と生れたからには、どうしても世を逃れるやうにしたものだといふのである。

と、求めた所は簡単な事、心は直に満足するであらう。又自分の形に對して恥ぢる所もあるから、さうはいふもの、悪い方には遠ざかり、善い方には近づき、善い方が多い。かういふわけであるから、人と生れた甲斐には、何とかして世を離れたたものである。ただ一途に懲ばつたことばかりをして、佛道の正しい悟に進まないやうなもの、畜生と變る所がないであ

ある。求めた所は簡単な事、心は直に満足するであらう。又自分の形に對して恥ぢる所もあるから、さうはいふもの、悪い方には遠ざかり、善い方には近づき、善い方が多い。かういふわけであるから、人と生れた甲斐には、何とかして世を離れたたものである。ただ一途に懲ばつたことばかりをして、佛道の正しい悟に進まないやうなもの、畜生と變る所がないであ

な事なら。世を逃れても直又慾心が起るやうでは。【なじかはすてし】「なじかは」は、「何かは」に同じ。どうしての意。但し此所の「かは」は、普通にいふ反語ではなく、たゞ「か」といふ疑問の助詞に「は」といふ助詞が附いたのである。【すてし】は、世を捨てし、即ちどうして世を離れたのかといふ意。【なごいはむは】などいふならばそれはの意。これは世を捨てた人に對する世人の批判詰問の様を寫したのである。【無下の事なり】むちやな事だ。お話にならない事だ。【さすがに】何といつてもやはり。【道に入りて】佛道に入りて。佛道の修行を始め。【世をいとむ人】「世をいとふ」は、世を捨てる、又世を通るといふと同意。【たとひ望ありとも】「望」は慾望。たとひ世を逃れても、腹がすけば、物が食ひたいし、寒ければ防寒具がほしいわけであるから、多少の慾望はあらうが、たとひあつてもの意。(正徹本には「ありといふとも」とある。【いきほひある人】權勢ある人。富貴の人などをいふ。方丈記にも、「勢ある者は食慾ふかく」の句がある。【食欲おほき】慾が深い。即ち立派な邸宅に住みたいとか美酒佳肴に飽きたいと思ふ類。【にるべからず】似るべからず。決して似てはゐない。【紙の衾】紙で作つた夜具である。粗末な夜具といふ意味で使つた言葉には違ひないが、昔は實際紙製の夜具を用いたのである。【麻の衣】麻布で作つた着物で、僧衣をいふ。【鉢のまうけ】ハチは梵語「鉢多羅」(Patra)の略。僧侶の食物を盛る器で、今でも托鉢の際携へて居るのは、この鉢である。僧侶は決して贅澤をしないのだから、食物といへば、僅にこの鉢に一杯の物があれば足るといふので、「一鉢の設」といつたのである。「まうけ」は、用意・支度。【あつ物】は、羹。アカザの葉でこしらへた吸物といふ事で、最も粗末な食物の意に使ふ語である。孔子家語に「藜藿不充」。【いくばくか人のつひえをなさむ】どれだけ世間の費とならう、たいした事はないといふ意。「人の」はたゞ「世間の」といふくちの意で、「人に迷惑を掛ける」といふ場合のやうに、はつきりした「人」ではない。【もとむる所はやすく】さういふ人の要求することは簡単な事といふ意。【其の心はやく足りぬべし】心は直に満足するであらう。【かたちにはづる】頭をまるめ法衣をまとうてゐる自分の形に對して恥づかしいと思ふ。【さはいへど】さうはいふものの。【悪にはうとく】悪の方には遠ざかりの意。【善にはちかづく事のみぞおほき】この「のみ」は普通の

【五八】 道心あらば住む所にしもよらじ



「それだけが」といふ意ではなく、既にあつた例と同じく、強める爲に置いた語である。「人と生れたらむしるしに  
は」人間に生れた甲斐には。「いかにもして」何とかして。「あらまほしけれ」ありがたい。望ましい。「ひとへに  
むさぼる事をつとめて」「ひとへに」は、一途に。たゞもう懲服ることばかりに一所懸命になつて。「菩提におもむ  
かざらむは」「菩提」は、眞の道、又は正しい悟。本當の悟を開かうとしない者はの意。「萬の畜類」すべての畜生。  
【かはる所有るまじくや】「有るまじくや」は、「有るまじくやあらむ」の略と見てよい。意味は大體「變る所はあ  
るまい」である。

五九

大事をおもひた、む人は、さがりたき心にかゝらむ事の本意をとげずして、さながら捨つべき  
なり。(しばし此の事はてて、おなじくはかの事沙汰しおきて、しかくの事、人の嘲やあらむ、  
ゆくすゑ難なくした、めまうけて、年來もあればこそあれ、其の事待たむ程あらじ、物さわが  
しからぬやうになど思はむには、えさらぬ事のみいとゞかさなりて、事をつくるかぎりもな  
く、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう人を見るに、少し心あるきはは、皆此のあらましに  
てぞ一期は過ぐめる。近き火などににぐる人は、しばしとやいふ。身をたすけむとすれば、恥  
をもかへり見ず、財をもすてて、のがれざるぞかし。命は人をまつものかは。無常の來る事

佛道の修行をして悟を開くと  
いふ一大事を思ひ  
立つ人は、たとひ  
巴むを得ぬ、氣に  
かゝる事があつて  
も、それは本望通  
りにしとげない  
で、そのまゝすつ  
かり棄ててしまふ  
がよい。「ちよつ  
とまあこれをやつ  
てしまつてから」  
とか、「同じ事な

は、水火の攻むるよりも速に、のがれがたきものを、其の時老いたる親、いとよなき子、君の  
恩、人の情、捨てがたしとて、捨てざらむや。

前段から引續いて、佛道の修行は決してさうのんきに考へて居られるやうなものでないといふ事を述べたので  
ある。修行を思ひ立つたものは、總べてを放擲して、直ちに其の目的に向つて邁進しなければならぬ。あれもすま  
せてから、これも片附けておいてからなどと思つて居ては、次々といろ／＼の事が起つて、何時までたつても決行  
することは出来ない。而も世間の人は大抵こんな事でその一生を終つてしまふ。火事の場合などには、ちよつと待  
つてくれなどと言ふ暇はない。無常の變來は水火のそれよりも更に急激なのであるから、ぐづ／＼して居ては駄目  
だといふのである。

【大事をおもひたむ人】「大事」は、佛敎に所謂「一大事」で、轉迷開悟、即ち三界生死の迷を捨てて、涅槃  
の悟に達すること。佛道に入つて、本當に悟を開かうとする人はの意。【さがりたき】「避り難き」で、巴むを得な  
いといふ意。即ち所謂のつびきならぬ事である。(正徹本・光廣本・鐵眼本・句解などには「さがりがたく」とある。  
これは「き」でも「く」でも差支はないが、かういふ場合は「く」とする方が普通のやうである)。「心にかゝらむ  
事」氣にかゝる事。【本意を遂げずして】たとひのつびきならぬ事や氣にかゝる事でも、それを自分の思つた通り  
になしとげずしての意。【さながら捨つべきなり】「さながら」は、そのまゝすつかり。そのまゝすつかり棄ててし  
まふがよい。【しばし此の事はてて】ちよつとまあ此事をしておいてから、その方(即ち一大事)へ取りかゝらう  
の意。但し「はつ」は、自動詞であるから、直譯すれば、「この事がすんでから」である。【おなじくはかの事沙汰  
しおきて】「かの事」は、上の「この事」に對していふだけ。「この」といふも「かの」といふも、要するに「某  
の事」といふだけの意である。「おなじくは」は、同じ事なら。即ち「どうせ一大事を思ひ立つのならば、多少早  
か遅いかの差があるに過ぎないから、それまでに先づ」の意である。「沙汰しおきて」は、處置しておいて。勿論此

【五九】 大事をおもひたむ人は



ないであらう。大體世間の人を見るのに、多少物の分つたといふ程度の連中は、皆かういふ豫想を以つて一生を過すやうである。しかしよく考へて見るがよい。近い所に火事などが起つて、逃げる人は、「ちよつと待つてくれ」などと言はうや、決してそんな事は言はない。我が身を助けようと思へば、恥もかまはず、財産も捨てて逃去るのである。命は人待つものではない。無常が押寄せて来るのは、水火の襲ひ来るよりも急で、逃去りにくいものであるが、その際、年とつた

所もこの次に「それからその方へ取りかゝらう」といふ意が略されて居ると見るべきである。「しかん」の事人の嘲やあらむ」。「しかん」の事は、かやう／＼の事。「人の嘲やあらむ」は、後に人が嘲笑をするかも知れないからよく始末をしておいて。「したむむ」は、よく調へる意。但しこれだけでまともな意味をなすので、「したむめまうけて年頃も」と續くのではない。「年頃もあればこそあれ云々」この句は分りにくい。従来の註釋書では、大抵「これまで永らくからして俗事にかゝづらつて来たのだから」といふやうな意味に取つてあるが、今徒然草に比較的近いものによつて、その用法を見るに、平家物語「文覺修行」の中に「彼の頼朝は云々、伊豆の北條經小鳥へ流されて、二十餘年の春秋を送り迎ふ。年頃もあればこそ有りけり、今年如何なる心にて、謀叛をば起されけるぞと云ふに云々。」思ふにこれはこの時代に特有の一種の言表はしなのであらう。さうしてその意味は、これまで年の間、別に何の事もなかつたのといふ事らしい。そこで此所はつまり、從來は別に佛道修行の事なんかは念頭にもおかずに来たのに、即ち從來は永い間俗世間の事にばかり没頭して来たのだから、今更急にそれ等の一切を棄ててしまふ必要もあるまい。まあ暫くはといふやうな意味になるのであらう。「其の事待たむ程あらじ」「其の事」は、それが出来るのを待つといふ意。「程あらじ」は、さして手間もかゝるまいの意。前の句から續くと、從來は別に佛道修行の事なんかは、少しも考へずに来たのだから、今更びつくりしたやうにして萬事を放棄するにも及ぶまい。あの事が出来るまで待つても、たいして手間もかゝるまいからといふやうな意であらう。「物さわがしからぬやうに」「やうに」は、「やうにてこそあらめ」とか「やうにこそ思ひ立ため」とかあるべき所。さうあわてたやうにしないで、ゆる／＼やればよいといふのである。「えさらぬ事」この「さる」は、前の「さりがたき」の「さる」と同じもので、漢字を書けば「避」である。即ち已むを得ない事。「いとどかさなりて」「いとど」は、いよいよ。いよ／＼多く起つて来ての意。「事の盡くるかぎりもなく」「事」は、いろ／＼起つて来る事柄を指して廣くいふ。しなければならぬ事柄が次から次といくらでも起つて、しまひになるといふ限度もなく。「思ひ立つ日」

親、幼い子、君の恩、人の情、たとひさういふものがあつたとしても、捨てにくいとて、捨てないで居られようや、さういふ際には、どうしたつて捨て去つてしまはなければならぬのである。

最初の句を承けて、いよ／＼大事を思ひ立ち、それを決行する日をいふ。「あるべからず」決してあり得ないといふ風に、やゝ強いつたのである。「おほやう」大體。概括的にいふ語。「人を見るに」世間の人について觀察するに。「少し心あるきは」「きは」(際)は、分際、身分などの意。多少物の分つたといふ程度の連中。「此のあらまし」「あらまし」は、「あらます」といふ動詞から来た名詞で、豫想とか豫想とかいふ意。即ち上にあつた。「この事はて、かの事沙汰しおきて」の類を指していつたのである。「一期は過ぐめる」「一期」は、一生。一生は過ぎるやうである。換言すれば、一生を過してしまふやうであるの意。「近き火などににぐる人は」近火などで逃げる人は。「などに」の「に」は、「にて」又は「の爲に」などの意。「しばしとやいふ」「や」は、「やは」に同じく反語。暫く待つてくれなどと言はうや、そんな事は言はない。(正徹本には「いふべき」とある)。「身をたすけむとすれば」我が身の安全をはからうとすれば。「命は人を待つものか」「かは」は、反語。人が暫く待つてくれといつたところで、命は人を待つものではない。命と人とを對立したものを見て、面白く書いたので、要するに人間は何時死ぬかも知れないといふだけのこと。「無常」此所は「死」をいふ。さうして人格化して「来る」といつたのである。「水火の攻むるよりも速に」洪水が忽ちに押寄せて来るとか、大火が見る／＼中に總べてを燒盡してしまふとか、さうした水や火の攻寄せて来る勢は恐しく速いものだが、無常の寄せくる速さは、それ以上だといふ意。「速に」は、速にしての意。「のがれがたきものを」此所に。を附けて文を切つたり、又中にはこの「を」を「よ」と同じものと見て、「通れ難いものであるよ」と譯し、特に「感歎の語だ」と説明した本もあるが、此所はやはり普通に「通れ難いものであるのに、さういふ場合に立到つて」と解して少しも差支はないやうである。「其の時」無常即ち「死」が襲ひ来た時。「いとなき子」幼き子。(正徹本には「いとけなき子」とある)。「捨てがたしとて捨てざらむや」「とて」は、「といひても」又は「といひたりとも」の意。いくら捨てるのが厭だといつても捨てないで居られようか、居られない。



六〇

眞乘院に盛親僧都といつて、えらい坊さんがあつた。この人は、芋頭といふものが好きで、澤山食つた。さうして談義の席でも、大きな鉢に山盛（ヤマモリ）盛つて膝許に置き、食ひながら本をも讀んだ。又病氣をした時には一週間とか二週間とか、療治と稱して引籠つて居て、思ふ存分上等の芋頭を選んで、特別澤山食つて、どんな病氣でも直した。但し他人に食はせることはなく、たゞ自分獨りで食つた。非常に貧乏であつたが、その師匠が死に

眞乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋がしらといふ物をこのみて、多く食ひけり。談義の座にても、大きな鉢にうづだかくもりて、膝もとに置きつゝ、食ひながら文をもよみけり。煩ふ事あるには、七日・二七日など、療治とて籠り居て、思ふやうによき芋がしらをえらびて、殊におほく食ひて、萬の病をいやしけり。人に食はする事なし、たゞひとりのみぞ食ひける。きはめてまづしかりけるに、師匠死にざまに、錢二百貫と坊一つをゆづりたりけるを、坊を百貫に賣りて、彼是三萬疋を芋がしらのあしと定めて、京なる人にあづけおきて、十貫づつとりよせて、芋がしらをともしからずめしけるほどに、又異用にもちゐることなくて、其のあしみななりにけり。三百貫の物をまづしき身にまうけて、かくはからひける、誠に有りがたき道心者なりとぞ人申しける。

盛親僧都といふ變りもの話である。先づその人が非常な芋頭好きであることを述べ、次にその師匠が死にけり、錢二百貫と坊一つを遺産として譲つてくれたのに、それさへ全部芋頭にして食つてしまつたといふ話を附け加へて、その好きさ加減が如何に甚だしかつたかを知らせて居る。而もこの一見不徳らしい行爲を目して特に「有りがたき道心者なり」と世人が評したと附記して居る所を見ると、筆者自身亦之に共鳴して居ることが分る。

はに、錢を二百貫と坊一つを譲つてくれたが、その坊を百貫に賣り、かの二百貫と合せて、都合三萬疋になるが、それを芋頭の代と定めて、京に居る人に預けておいて、十貫づつ取寄せては、芋頭を買つて、不足なく食つて居るうち、外の用に使ふことはなくて、その錢はすつかり無くなつてしまつた。三百貫のものを貧乏な身に備けて、それをかういふ風に使つてしまつたのは、實に珍しい道心者だといふが言つた。

【眞乘院】仁和寺院家の一。「院家」については、和漢三才圖會（七二末）、「本願寺十箇寺教許院家寺處々」の項に「宇多朱雀二帝落飾入仁和寺。御門跡、號始于此。其時相從出家貴族稱三院家。自此門跡寺必有二院家」とある。【盛親僧都】傳不詳。但し「僧都」は僧官。（二四四頁）「大納言法印」の項参照。【智者】たゞ智慧のある人といふだけではなく、知識のすぐれたえらい僧侶をいふ。【芋がしら】親芋、即ち里芋の根の一番大きな所。【談義の座】「談義」は、法義を談話するといふ意で、説法の事をいふ。「座」は、席、即ち説法の席といふこと。【膝もとに置きつゝ】「つゝ」は、普通「ながら」と同意に用ゐるが、此所などは寧ろ「て」の意である。くはしくいへば「いつも」といふ意が加はり、「いつも直側に置いて」といふ意味になる。【文をも讀みけり】上に「座にて」とあり、此所に「文をも」とあるので、ちよつと分りにくいだが、この方は「文を」としても分らないことはない。即ち「談義の座にても」は、さういふ席では、物を食つたりなどすべきでないのに、さういふ席に於てもである。さうして此所の「文をも」も、大體はそれと同じで、普通は物を食ひながら本を讀むといふやうなことはない筈であるが、この僧都はそんなことをもしたといふのである。「文」は、その談義に關係のある本である。【療治とて籠り居て】その病氣の療治をするといふので、自分の部屋にとちこもつて居て。【思ふやうに】思ふ存分。但しこの語は、次の「えらびて食ふ」の兩方にかゝる。【殊に多く食ひて】平生でも多く食ふのであるが、さういふ時には特別に多く食つたといふのである。【萬の病】どんな病氣でもといふ意。【師匠死にざまに】盛親の師であつた僧が死にざまに。【錢二百貫】「錢」といふ語は、今日普通に廣く貨幣といふ意味に用ゐられるが、此所にいふのは、それではなく、中央に穴のあいたものである。「貫」は、ツラメクといふ字で、もと穴のあいた錢を幾枚も合せて差通したより起つた語である。さうして千枚を貫くといふ意味から、一千錢即ち一文を一文といつたのである。但し後には九百六十文を一貫といふやうに變つた。【坊】僧侶の居住する建物。師匠がその所有者であつたので、死ぬ時それを遺産として弟子の盛親にくれたのである。【彼は三萬疋】「彼は」は、凡そとか大體とかいふ意。但しこゝでは「都合」といふ意に見ればよからう。「疋」は、錢十文をいふ。だから三萬疋は三百貫になるわけである。【あし】錢。料金。一五四頁を見よ。【ともしからず】不足なく。十分。【めしける程に】「めす」は、今日いふ

【六〇】 眞乘院に盛親僧都とて



「召上る」で、食ふの敬語である。此所だけかういふ言ひ方をしたのはをかしいが、意味はさうである。「程に」は、うちにて。【異用に用ゐることなくて】外の用に使ふことはなくて。【用】は、文段抄その他江戸時代に出来たものでは、すべて波行に活用させ、「用ふることなく」といふ風になつて居るが、正徹本・延徳本などには「もちゐる」となつて居る。よつてこの書では和行の動詞と見ることとした。【そのあしみになりけり】「そのあし」は、その錢。「みなになる」は、すつかり無くなる。「みなにする」は、すつかり無くなす。【三百貫の物を】「物」は、ただ軽く錢といふくらゐの意に使つたのである。【まうけて】今日「金をまうける」といふと同じ語。此所ではたゞ「得て」といへばよからう。【かくはからひける】「はからふ」は、處置する。「ける」は、「けるは」といふやうな意。【有りがたき】珍しい。【道心者】道心のある人（一七〇頁「道心」参照）。佛道に精進する人。【人申しける】「人」は、或一人の人と見ても、幾人かの人と見ても、それはどちらでもよい。さうむづかしく考へるべき事ではない。尤も兼好自身もさう思つたであらうけれども、わざ／＼他人に託して自分の感想を述べたと見るには及ばない。

この僧都、或法師を見て、「しろうるり」といふ名をつけたりけり。「とは何物ぞ」と人の問ひければ、「さるものを我も知らず。若しあらましかば、此の僧の顔に似てむ」とぞいひける。此の僧都、みめよく、力つよく、大食にて、能書・學匠・辯説、人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にもおもく思はれたりけれども、世をかく思ひたる曲者にて、萬自由にして、大方人にしたがふといふ事なし。出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前すゑわたすを待たず、我が前にすゑぬれば、やがてひとり打食ひて、歸りたければ、ひとりつい立ちて行きけり。と

【註】嘗てこの僧都が、或法師を見て、「しろうるり」といふ名を附けた。そのしろうるりといふのはどんな物か」と人が尋ねた所が、「そんなものは俺も知らない。若しさういふものがあつたとし

き・非時も、人にひとしく定めて食はず、我が食ひたき時、夜なかにも曉にも食ひて、ねぶたければ、晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふこと聞入れず、目ざめぬれば、幾夜もいねず、心をすまして、うそぶきありきなど、尋常ならぬさまなれども、人にいとほれず、よろづ許されけり。徳のいたれりけるにや。

【要】この僧都が奇人であることは前節でも十分わかるが、此所には更にその一般的奇行を擧げて、とても普通の人はないが、而も少しも嫌はれない、これはやはり徳の至れる爲であらうと、最後に筆者自身の感想を述べたのである。

【或法師】同じ寺中の法師であらう。【しろうるり】これは古來徒然草三箇大事の一として、最も難解とせられて来たものであるが、大體でたらめに言つた言葉と見てよからう。但しでたらめといつても、全然無意味といふわけではなく、無意味の中に一種の意味を持つた言葉と見てよからう。恐らくその僧の容貌を見ての感じを顯した語なのであらう。自ら「さるものを我も知らず云々」と言つて居るのだから、實在のものではない。【とは何物ぞ】上に「しろうるり」とあるから、それを承けて「とは」といつたのである。白うるりとは、どんな物か。【人の】人が。但し「人」は、誰か或人である。【さるものを我も知らず】「さるもの」は、然る物。さういふものは自分も知らない。【若しあらましかば】さういふもの、即ち白うるりといふものが若しあるとしたらこの意。【この僧の顔に似てむ】この僧の顔に似て居るだらう。シロウルリといふ物が若しありとすれば、彼奴の顔みたいな物だらうといふ意。（正徹本には「かの僧が顔に」とある。【みめよく】顔がよいこと。【大食にて】此所に並べた他の事は皆よい事であるが、この大食も「無藝大食」などいふ場合の、役にも立たぬ大飯食ひといふやうな意味ではなく、健康で飯もよく食ふといふやうな意味であらう。【能書】字が上手なこと。【學匠】佛學にすぐれた人といふ

【六〇】眞乘院に盛親僧都とて

たら、この坊主の顔に似て居るだらう」と言つた。この僧都は、顔もよく、力も強く、大食でもあり、手跡・學問・辯説等、いづれも人に勝れて、一宗の大立物であつたから、寺中の人々にも重く思はれて居たけれども、世間を眺とも思はぬ變り者で、萬事自分の氣まゝにして、少しも人の言ふ事に従ふといふことがない。佛事に呼ばれて膳部につく時などにも、一座の人の前にすつとお膳を並べてしまふのを待たず、自分の前にすゑると、早速ひとり食つて、歸りたけれ



ば、ひとりついでに立つて歸つた。平生(フダン)の日々も、とき・非時共に他の人々と同じやうに時を定めて食ふことをせず、自分が食ひたい時には、夜中でも明方でも構はず食つて、ねむたければ、晝でも部屋の中にとちこもつて寝て居り、どんな大事があつても、人の言ふことは聞入れず、又目が醒めると、幾晩も寝ず、心を澄まして悠々と歩き廻りなどして、萬事世間の普通とは違つた風であつたけれども、人に嫉はれず、何事をして、人から咎められるやうな事は

意味で、僧侶中の學者をいふ。「智者・學匠」などと續けていふが、「智識」を「智者」の意に用ゐるとちやうど反對に、此所では「學匠」を「學問」の意に用ゐたのである。尤も「學問」といつても、佛教に關する學問である。【辨説】僧侶は説教もするが、今いふ開論のやうな事もするので、雄辯といふ事は大に必要であつたのである。【宗の法燈】一宗中に最も重きをなす人の意。【寺中】仁和寺全體をいふ。但し仁和寺の僧徒の間に於ての意。【重く思はれたりけれども】重んぜられたけれども。【世を軽く思ひたる曲者】世間を屁とも思はない變り者。【よろづ自由にして】萬事氣まゝで。【大方人に従ふといふことなし】「大方」は、前にあつたと同じく、全く、少しもの意。「人に従ふ」は、人のする通りにする、世間の普通に從ふの意。全くさういふ風にはしなかつたといふのである。【出仕して】勤に出るといふ意で、法事などに呼ばれて行くことをいふ。【饗膳などにつく】「饗膳」は、饗應の膳部。「つく」は、「着席」の「着」と同じで、すわるとか身をおくとかの意。【昔人の前すまわす】「昔人の前」は、其所に居る人々皆の座席の前。「すまわす」は、すうつと全體に膳をすまををいふ。【やがてひとり打食ひて】「やがて」は、直。直自分だけ獨り食つて。【つい立ちて行きけり】「つい立つ」は、つと立つ、即ち無造作に立上ることをいふ。(一二九頁及び一四九頁「ついある」参照)。「行きけり」は、「歸りけり」と同意。(正徹本には「出にけり」とある)。「とき非時」「とき」は、「時」とも「齋」とも書く。出家の食事は一日一回とし、朝より正午までにするを正式として、之を「とき」といふ。これに對し、正午以後夜にかけてする食事を「非時」といふ。これは正式の食事でないといふ意味である。要するに「時非時」は、僧侶の食事をいふ。「人にひとしく定めて食はず」他の人たちがするやうに時刻を定めて食はずの意。【晝もかけこもりて】日中でも部屋の中に閉ぢこもつて。【いかなる大事あれども】どんな大事があつても。(此所の「あれども」は「ありとも」の意である)。「目ざめぬれば」ねぶたない場合にはの意。【幾夜もいねず】幾晩でも續けて眠らない。晝は晝で夜は寝ないといふ意にも取れるが、大體の意味としては、ねむくない時には幾晝夜も寝ずに居るといふ風に解してよからう。【心をすまして】雑念を去り、清淨な氣持になつて。【うそぶきありきなど】「うそぶく」は、口をすばめて息を吹くこと、又口笛を吹くことにいふ。しかし此所はさう限定した意味ではなく、平氣な様で、少しも物にかまはらず、悠々と歩き廻る

なかつた。これはこの僧が特に徳が高かつた爲であらうか。

ことをいつたのである。【尋常ならぬ様】その行爲が世間の普通でないをいふ。(光廣本・文段抄・大成等皆この通り「尋常」の字が書いてあるが、正徹本・嵯峨本などには「よのつね」と假名で書いてあり、文段抄・大成等にも振假名は「よのつね」とある)。「よろづ許されけり」「許す」は、差支なしとして許すことをいふ。どんな事をして少しも咎めだてをする者はなかつたといふ意。【徳の至れりけるにや】上に「それは」と附加して、よろづ許されたが、それはこの僧の徳が至極の程度に達して居た爲であらうかといつたのである。「至る」は、非常にすぐれて居るといふ意。(正徹本には「いたれりけるこそ」とある)。

六一

御産の時、飯おとすことは、定まれる事にはあらず。御胞衣とどこほる時のまじなひなり。とどこほらせ給はねば、此の事なし。下ざまより事おこりて、させる本説なし。大原の里の飯を召すなり。古き寶藏の繪に、賤しき人の子産みたる所に、飯おとしたるを書きたり。

當時皇子・皇女の御誕生の際に飯を落とすといふことが行はれた。それについてちよつと考證めたい事を書いたのである。普通は御誕生の時には何時でも行はれる事のやうに思つて居るが、さうではないことを言ひ、更にその風習が民間より起つた事であることを述べたのである。

【御産】皇后・女御等の御産をいふ。【飯おとすこと】「飯」は、和名鈔に「古之岐、炊飯器也」とあるものであるが、今日の釜ではなく、蒸籠である。今は強飯を作る場合の外、飯は必ず水を加へて煮るのであるが、昔は飯で蒸したのである。さてその飯を落とすといふのは、どういふ事をするかといふに、これは家の棟から轉し落すこ

【六一】 御産の時飯おとすことは

【皇后・女御】 皇后・女御などの御産の時には、飯を家の棟(ムネ)から落すことが行はれるが、これは何時でもさうすると定(キ)まつた事ではなく、御胞衣が滯つて下りない時にするまじなひである。隨つて胞衣が滯らなければ、この事は行はれない。これは



もと下々の方から起つた事で、これといふたいした據(ヨリ)はな。大原の里の飯をお取寄せになるのである。古い寶藏の繪に、賤しい身分の者が子を産んで居る所に、屋根の上から飯を落して居る様を書いたのがある。

とをいふので、それについては平家物語(三)、「公卿論」の所に、中宮(建禮門院)御産の事を記して、「今度の御産に笑止數多あり。先づ法皇の御産者、次に后御産の時、御殿の棟より飯を轉がすこと有りけり。皇子御誕生には南へ落し、皇女誕生には北へ落すを、是は北へ落されたりければ、如何にと殿ぎ取上げ、落し直されたりければ、猶惡しき事にぞ人申しける」とある。これを見ると、大體その様子が分るであらう。【定まれる事にあらす】御産の時は何時でも必ず飯を落とすときまつて居るのではない。【御胞衣とよこほる時のまじなひ】「胞衣」は、腹中で胎兒を包んで居る膜。産の時には、子供と一緒に下りるのが普通であるが、ともするとこれだけ後に残ることがある。「とよこほる」とは、即ちこれで、さういふ時には、まじなひとして、飯を落とすといふのである。(正徹本には「まじなひごと」とある)。「この事」飯を落とすこと。【下さまより事おこりて】「下さま」は、所謂しもく、即ち身分のない一般民をいふ。「事おこる」は、事が起るといふ意であるが、此所などでは「事」は殆ど無意味で、たゞ「起る」といふ意。即ちこの風習はもと下々の間に起つた事だといふのである。【させる本説なし】「させる」は、「さしたる」といふに同じく、特にこれと指していふ程の、即ちたいしたといふ意。「本説」は、根拠とすべき説。【大原の里の飯を召すなり】「大原」は、昔から大原女で知られる、あの大原である。この場合には慣例として、この里にある飯をお取寄せになるといふのである。但し何故大原の飯を用ゐられるかといふと、それは古人も言ふ通り、「大原」と「大腹」と音が通ずるからである。さうしてコシキは「子敷」で、胞衣を胎中で子が敷いて居るものと見て考へ出した事であらう。【古き寶藏の繪】「寶藏」は、寶物を入れる蔵。「古き」はこれにかゝる。古い寶藏の中にしまつてある繪の意。【賤しき人】これは前に「下さまより事おこりて」といつた證據として書いたのである。【書きたり】書いたのを見たことがあるといふくらゐの意。「書いた」といつては意味が違ふ。

六二二

延政門院いときなくおはしましける時、院へまゐる人にことづてとて申させ給ひける御歌、

ふたつもじ牛の角もじ直なもじゆがみもじとぞ君はおぼゆる

こひしく思ひまゐらせ給ふとなり。

延政門院の御幼少時代の逸話。「こひしい」といふ意味を面白く言表はされたことを書いたのである。假名遣の誤などは、勿論この場合にはかれこれいふべき問題ではない。

【延政門院】後醍醐院の皇女、悦子内親王。御母は慈助法親王と同じく大納言藤原公經の女。弘安七年(二十六年)二月十九日内親王となり、二十八日三宮に準じ、同日院號、翌八年八月尼となられ、法名を通照覺といつた。元弘二年二月薨去、御年七十四。なほ「参考」を見よ。【いとときなく】正徹本には「いとけなく」とある。【院へまゐる人】後醍醐院の御所へ行く人である。後醍醐院の御讓位は寛元四年である。さうして延政門院のお生れになつたのは、それから十四年後の正元元年で、この年院は四十歳、崩御になつたのは、それから十三年後の文永九年の事であるから、この逸話は恐らく女院六七歳くらゐの時の事なのであらう。尤も確な理由はないが、【ことづてとて】「ことづて」は、「ことづたへ」(言傳)の約で、「ことづけ」(言附)と同意。人に託して物事を言ひやること。此所は「これは私のことづけです、御所へ行つたら院にかう言つて下さい」と言つての意である。(正徹本には「御ことづけとて」とある)。「申させ給ひける御歌」次の歌を詠み上げられたといふのである。【ふたつもじ】「こ」の字を「ふ」。二の字と同様上下の二畫から出来て居るからである。【牛の角もじ】「し」の字をいふ。牛の角が左右相對して居る形に似て居るから。【直なもじ】今活字で用ゐる字は皆「し」のやうに鈎の形になつて居るが、上から下へ眞直に書く字もある。それをいつたのである。【ゆがみもじ】「く」の字をいふ。「し」の眞直なのに対

六二二 延政門院いときなくおはしましける時

延政門院が御幼少にあらせられた時、上皇の御所へ行く人に、ことづてと言つて、こんな御歌をお詠みになつた。ふたつもじ牛の角もじ直なもじゆがみもじとぞ君はおぼゆるこれは上皇を戀しく思はれるといふ意味である。



して、これは曲つて居るからである。【とぞ君はおぼゆる】上の「こひしく」を承けて、戀しいとあなたの事が思はれますといふ意になる。【こひしく思ひまゐらせ給ふとなり】戀しく思はれるといふ意味であるとの意。但し「まゐらせ」は、姫が院に對する尊敬の意を表はし、「給ふ」は、筆者が姫に對する尊敬を表はしたものである。

この延政門院の薨ぜられた元弘二年は、兼好五十歳の時であるが、兼好法師集を見ると、「堀河太政大臣を、いはくらの山莊にをさめたてまつりにし又の春、そのわたりのわらびをとりに、雨ふる日申しつかはし侍りし、さわらびのもゆる山邊を来てみればきえし煙の跡ぞ悲しき」といふ歌があり、それに對して、「返し、延政門院一條、みるまゝに涙の雨ぞ降りまさるきえし煙の跡のさわらび」といふのがある。この堀河太政大臣といふのは、源基具の事（第九九段参照）であつて、この人は永仁四年十一月に出家し、その翌年に薨じて居るから、薨去の翌年は即ち永仁六年で、この時兼好は十六歳である。さうしてこの一條といふ女は兼好愛人の一人であつたらしいから、この段の話なども、或はかういふ筋から傳はつたものかも知れない。

六三

後七日の阿闍梨武者を集むること、いつとかや盗人にあひにけるより、宿直人として、かくことごとしくなりにけり。一年の相は、この修中のありさまにこそ見ゆなれば、兵を用ゐむことおだやかならぬ事なり。

これも例の故實趣味のあらはれの一つであつて、當時は既に普通の事となつて居た後七日の阿闍梨が武者を集めることについて、その由来を述べ、併せてその事について簡単な批評をしたのである。

後七日の御修法が行はれる際には、阿闍梨が武人を集めて四門を警固せしめる事になつて居るが、これは何時か盗人に遇つたので、爾來宿直人と稱して、

仰山なこととなつたのである。しかし一年間の吉凶の様子には、この修法の中の有様に現れるのであるから、この場合に武人を用ゐるのは穩かならぬ事である。

【後七日】正しくは「後七日の御修法」といふ。正月八日から向ふ七日間宮中眞言院に於て行はれる佛事。塚

藁抄にいふ「自二元日一至白馬二神事多きに依りて、七日までは出家不參内一間、八日より始まる御修法なれば、後七日と云ふと云々。」「白馬」は所謂アヲウマノセチエで、七日に行はれるものである。【阿闍梨】梵語 Arhata 師範・教授などの意。もと弟子の行爲を矯正し、其の師範となるべき高僧をいふ敬稱であるが、此所は後七日の御修法を行ふ導師たる僧をいふ。【武者を集むること】この修法の時、武士を集めて警固せしめたことをいふ。【いつとかや盗人にあひにけるより】「いつとかや」は、何時の事であつたかの意。但し四季物語には、之を大治二年の事として居る。「盗人に云々」は、この修法の最中に盗人が来て、阿闍梨の法衣・佛具などを盗んだことをいふ。【あふ】の主語は見えないが阿闍梨である。【宿直人として】當直をする人といつての意。但しこの意は、最初は大々宿直人といふ名義で番人を置いたのが、だん／＼大袈裟になつたことをいふのであらう。【かくこと／＼しくなりけり】「かく」は、こんなに。即ち今日のやうに。「こと／＼しく」は、仰山らしく。（此所は、分りよく書けば、次のやうになるわけである。「もと宿直人として人を置きしが、遂にはかくこと／＼しくなりにけるなり。」「一年の相」「相」は、スガタ。吉凶の有様をいふ。【この修中の有様にこそ見ゆなれば】「修」は、「修法」を略していふ。「この修中の」は、この修法中の。その一箇年間に於ける吉凶禍福の有様は、一年の最初にあるこの修法中の様子によつてちやんと分るものだからの意。即ちその修法が行はれる七日間は、いはばその一箇年間の縮圖のやうなもので、その間に起る事柄によつて、一箇年間の事がトせられるといふのである。【兵】武士をいふ。

六四

車の五緒は、必ず人によらず、程につけて、きはむるつかさ位に至りぬれば、乗る物なりと

【六四】車の五緒は



は、必ずしもどういふ人が乗ると、人によつてきまつて居るのではなく、その身分々々に應じて、一番上の官位に進めば、乗るものであると、或人が仰せられた。

は、必ずしもどういふ人が乗ると、人によつてきまつて居るのではなく、その身分々々に應じて、一番上の官位に進めば、乗るものであると、或人が仰せられた。

【車】「五緒の車」をいふ。但し單に「車」といつても、それは勿論牛車ウシクルマの事で、それに用ゐる簾のの左右の縁とこれに平行した中央の革緒との間に、同じ革で風帯カゼオビを一筋づつ垂れたもの。左右の縁と併せて緒が五筋になるから、この種の簾を五緒といひ、轉じてこの種の簾を懸けた車を、「五緒の車」といふのである。【必ず人によらず】この「必ず」は今日「必ずしも」といふと同じ使ひ方になつて居る。即ち人によつてそれに乗れるとか乗れないとか定まつて居るのではないといふ意。但し此所の「人」は、身分をいふ。【程につけて】「程」は、身分。その身分に應じて。【きはむるつかさ位】昔は家柄によつて、出世の限度が定まつて居た。平治物語に「執柄の息、英才が輩も、此の職を先途とす」などある。「先途」は即ちこの限度で、例へば「攝家」といふ家柄は關白まで、「清華」といふ家柄は太政大臣まで、「羽林家」といふ家柄は大納言・參議まで、かういふ風に家柄によつて、上り得る極度の官位が定まつて居り、たとひ能力があつても、それ以上には進めなかつた。この先途が即ち此所にいふ「極むる官位」である。【至りぬれば】家柄は問題ではなく、どの家柄の人でも、その家柄として上り得る限度の官位に達すればの意。例へば清華の人ならば、太政大臣になつた時、羽林家ならば、參議になつた時といふやうなものである。【乗るものなり】五緒の車に乗るものなりの意。

【車】「五緒の車」をいふ。但し單に「車」といつても、それは勿論牛車ウシクルマの事で、それに用ゐる簾のの左右の縁とこれに平行した中央の革緒との間に、同じ革で風帯カゼオビを一筋づつ垂れたもの。左右の縁と併せて緒が五筋になるから、この種の簾を五緒といひ、轉じてこの種の簾を懸けた車を、「五緒の車」といふのである。【必ず人によらず】この「必ず」は今日「必ずしも」といふと同じ使ひ方になつて居る。即ち人によつてそれに乗れるとか乗れないとか定まつて居るのではないといふ意。但し此所の「人」は、身分をいふ。【程につけて】「程」は、身分。その身分に應じて。【きはむるつかさ位】昔は家柄によつて、出世の限度が定まつて居た。平治物語に「執柄の息、英才が輩も、此の職を先途とす」などある。「先途」は即ちこの限度で、例へば「攝家」といふ家柄は關白まで、「清華」といふ家柄は太政大臣まで、「羽林家」といふ家柄は大納言・參議まで、かういふ風に家柄によつて、上り得る極度の官位が定まつて居り、たとひ能力があつても、それ以上には進めなかつた。この先途が即ち此所にいふ「極むる官位」である。【至りぬれば】家柄は問題ではなく、どの家柄の人でも、その家柄として上り得る限度の官位に達すればの意。例へば清華の人ならば、太政大臣になつた時、羽林家ならば、參議になつた時といふやうなものである。【乗るものなり】五緒の車に乗るものなりの意。

六五

此の比ひの冠は、むかしよりはるかに高くなりたるなりとぞ、或人おほせられし。古代こたの冠桶かぶを

近頃の冠は

昔のよりははずつと背が高くなつて居るのだと或人が仰せられた。で、昔の冠桶かぶを持つて居る人は、その端はたを繼いで今は用ゐるのである。

持ちたる人は、はたをつぎて今用ゐるなり。

【要言】これも前段と同じく故實趣味から來たもので、當時の冠が昔に比べてずつと背が高くなつて居ることを述べたのである。(かういふ事は、その時代の人には却つて氣のつかぬ事である。例へば今日吾々の持つて居るシルクハットが三十年前のものに比してどう違つて居るかなどといふことでも、ちよつと氣のつく人はあるまい)。

【むかしよりはるかに高く】正しく書けば「昔のより云々」である。即ち昔の冠よりははずつとその背が高くなつたといふのである。(正徹本・光廣本・句解・大成等には「昔よりはるかに」とある)。「或人仰せられし」正徹本・光廣本・句解・大成等には「昔よりは賢本等には、この句なく、「高くなりたるなり」とのみある。これが寧ろ本の形ではあるまいか。【古代の冠桶】「古代の」は、昔の。「冠桶」は、冠のいれもの。普通は「冠筒」と書いてあるが、これを「冠桶」ともいつたのであらう。壽命院抄にいふ「冠桶とは、カモリバコとて、冠の入物を葉はを入れて、まげ物にして、よくぬりなし、地まき糸などをして、箱の内をにしきにて張りてもたるゝ也。【はたをつぎて】箱の背が低くて冠がよく入らないから、その箱の縁を繼ぎ足すといふのである。【今用ゐるなり】正徹本には「今は」とある。



冠桶

六六

岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に鳥一雙を添へて、この枝につけてまゐらすべきよし、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥つくるすべ知りさふらはす、一枝いちに二つつく

【六六】岡本關白殿

岡本關白殿が、満開の紅梅の枝に鳥二羽を添へて、「この枝に附



る事も存知候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問はせ給ひて、又武勝に、「さらばおのれが思はむやうにつけてまゐらせよ」と仰せられたりければ、花もなき梅の枝の一つをつけてまゐらせけり。

【武勝】 これもやはり例の故實に關するもの。岡本關白が満開の紅梅の枝と鳥二羽とを、武勝といふ者に渡して、この枝にこの鳥を附けると言はれた。ところが武勝は、花の枝に鳥を附けることは存じません。又一枝に二羽附けることも存じませんと言つて、命じた通りにしないので、關白も仕方がないから、それではお前の思ふ通りに附けるがよいと言はれると、花もない枝に一羽だけ附けて出したといふのである。それについての説明は次節にあるが、この武勝のやうな態度は、とにかく筆者の最も好む所であらう。

【岡本關白殿】 藤原(近衛)家平。家基の子。嘉元三年右大臣、延慶二年左大臣、正和二年七月關白氏長者となる。同四年九月關白を辭し、元亨四年三月出家、五月薨去、年四十三。【さかりなる紅梅の枝】 満開の紅梅の枝。【鳥一雙】 此所の「鳥」は、雉子をいふ。鷹狩に關して單に「鳥」といふ場合には、雉子をいふことになつて居る。「一雙」は、二羽で、雌雄の一番をいふ。【この枝につけて】 鳥を木の枝に附けるをいふ。但し鳥は勿論死んで居るものである。倭調菜「としば」の項にいふ「鳥柴と書けり。鷹の取りたる鳥をつくる木也。故實多しといへり。其木は長さ五尺にきりて、本は柴につけしが、後春秋冬にてかはる。大かたは梅・櫻・松・楓・楡・萩・薄などをを用ゐたり。」その附け方についてはいろ／＼説があつてよく分らないが、河海抄(一一、行幸)には「柴高さ七尺五寸、普通の柏木よりは葉せばく、圓くして、表裏にも毛おひたり。是を鳥付柴といふ也。一説曰、たもん柴といふ物也。年内は立枝をへだてて雄を左にあげて付け、雌鳥をさげて付けて、年あけては雌を左にあげて付け。春は雌を賞する故也(付縁口傳あり、略之)。」【まゐらせよ】 差出すべき旨、即ち差出せといふことを。【御鷹飼】 鷹飼に用ゐる鷹を飼ふ役人である。但し此所にいふ鷹飼は朝廷に仕へて居たものである。【下毛野武勝】

けてまゐらせよ」と、御鷹飼なる下毛野武勝に仰せられたところが、武勝は、「花のある枝に鳥を附ける方法は存じません。又一本の枝に二羽附けるといふことも存じません」と言つて、言ふやうにしないので、今度は膳部の者に尋ねられたが分らない。で、又外の人にも問はれたけれども、皆分らないと言ふので、再び又武勝に、「それでは、お前の思ふ通りに付けてまゐらせよ」と仰せられた。すると花もない梅の枝に鳥を一羽附けて差上げた。

當時有名な鷹匠である。尺素往來に鷹飼の事を述べて、「當道相傳練習之家々、園中將・坊門少將・楊梅侍從以下、並御隨身奏・下毛野等」とある。(正徹本には「下野武勝」とある)。「花に鳥つくるすべ云々」花の咲いて居る木の枝に鳥を附ける方法は存じません、又一つの枝に二羽附けるといふことも存じませんといふ意で、つまり故實によれば、さういふ方法はないといふのである。【存知候はず】 正徹本には「存知し候はず」、大成等には「存じ候はず」とある。【膳部に尋ねられ】 膳部は大膳職(宮内省の被官)の下級官吏。料理の事を掌る者であるから、先づこれに問はれたのである。【人々に問はせ給ひて】 膳部の者でも分らなかつたので、今度は又さういふ事をよく知つて居さうな人々に尋ねられたが、それでも分らなかつたのである。「問はせ」は、使役ではなく、尊敬の意をあらはすもの。【又武勝に】 誰に聞いても分らないから、仕方がなく再び又武勝に言はれたのである。【さらば】 そんなら。花の枝に附けること、二羽附けることを知らないといふのならばの意。【おのれが思はむやうに附けてまゐらせよ】 「おのれ」は、「お前」といふに同じ。お前の思ふ通りに附けて差出せの意。【一つをつけてまゐらせけり】 雉子一羽だけを附けて差上げた。

武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、つばみたると散りたるとにつく。五葉などにもつく。枝の長さ七尺、或は六尺、返し刀五分に切る。枝の半に鳥をつく。つくる枝、ふまする枝あり。しづら藤の割らぬにて二ところ附くべし。藤のさきは、火打羽の長にくらべて切りて、牛の角のやうにたむべし。初雪の朝、枝を肩にかけて、中門よりふるまひて参る。大砌の石をつたひて、雪に跡をつけず、あまおほひの毛を少しかなぐり散らして、二棟の御所の高欄によせかく。祿を出さるれば、肩にかけて拜して退く。初雪といへども、沓のはなのかくれぬ程の雪

【武勝が言つたのはかうであつた。柴の枝にも附ければ、梅の枝にも附けるが、梅の方、蕾のものか散つたのか、いづれかに附け、満開のものには附けない。又五葉の松などにも附ける。枝の長さは七尺或は